

落第騎士の師匠 《グランドマスター》

Wbook

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

降り立つは剣鬼。

その身は偽りの存在であれど、その技量たるや驚天動地。

伐刀者、何するものぞ。薄雪草、何するものぞ。

——我が秘剣、その身で味わうがいい。

目次

閑話

28話『鶴』アナザー

本編

prologue

山中の天

侍道楽

薄雪草

風

果てなき業

マリオロツソ

偽・秘剣

丑三つ時

剣聖

剣士

先達者

竜

人のチカラ

偶然の女神

夢舞台

邂逅

未来

剣神

剣鬼

月夜

1

8

14

24

37

47

55

64

74

84

92

100

113

123

134

150

160

168

175

188

200

210

眼	320
謎の……	311
しゅら	302
其々の……	293
進境	286
鶴	277
焼却	268
《魔人》	259
情	249
諸行無常	240
《七星剣王》	231
刀傷	221

閑話

28話 『鶴』 アナザー

「ふむ……私はそこらの居酒屋で構わんだが……」

「ははは、それは私も同じだよ。しかし、立場が許してくれない。世知辛い話だけどね」

場所は、首相公邸。現在月影が居を構えている場所だ。万全のセキユリテイと整った設備を兼ね備えた……しかし、下品にならない程度に豪華な屋敷。

そこにあるのは、湾岸ドームでの密会を終えた小次郎と月影の姿だ。

今日に限って言えば、護衛として配されている人員も最低限のそこは……それでも、世界有数の安全地帯であった。

世界一の剣士の存在は、それほどまでに大きい。そもそも護衛のような真似は、彼にとって十八番と言える。

「かけていてくれ。いま、酒と肴を持ってくるよ」

そう言つて月影はキッチンの方へと消えていく。

手持ち無沙汰の小次郎はソファーに腰掛けながら、辺りを見渡していた。

「……質素なものよな、一国の長にしては」

調度品の数々は、やはりこの豪邸に相応しい代物であったのだが……それ以外が余りにも足りな過ぎる。

決して、生活感がない訳ではなかった。にも関わらずこの家は、何処か侘しきを感じさせる。

「未来を知ってから、趣味とは無縁の生き方をしていたのでね……」

乾き物をテーブルに置き、月影は杯を日本酒で満たした。

「酒だけは置いていたが……それは、不安を紛らわせる為のもの。嗜好品として嗜むのは本当に久しぶりだ。今夜は、付き合っていたいただきますよ、佐々木さん」

「ふっ……そうか。ならばこちらも、胃もたれするぐらいに濃い肴を出させてもらおう。潰れるなよ、月影殿」

乾杯を交わし、二人は杯を傾ける。

小次郎にとつてはいつも通りの……月影にとつては久々の、美酒であつた。

「さて、英雄達について聞きたいのであつたな……」

「……なんで少し躊躇つてるんだい？」

小次郎が躊躇うのも無理はない。

連中は何かと話題に尽きない、とびつきりに個性的で濃厚な人物達だが——何事も、過ぎたるは及ばざるが如しと言う。

月影の目の輝きは、まるで子供のようでは無いか。期待に胸を躍らせているのが容易く理解できた。

これを裏切ることになるやもしれないと思うと……下手な奴は、口にすることも憚られる。

まず第一に、黒髭はダメだ。あれはあれで悪い男では無いし、紛う事なき英傑なのだが……ともかく、黒髭はダメだ。

「さ、佐々木さん……？ 随分と難しい顔をしているが……大丈夫なのか？」

「……無論だ。しかし何せ遠い記憶なのでな。時間をもらえるか」

「ああ、そういうことなら話は分かる。夜はまだ長い、存分に悩んでく

れて構わないとも」

　　楽しげな月影の顔を改めて見て、小次郎は黒髭を記憶から一時抹消した。

　　もつと……THE・英雄といった者達が居るはずだ。

　　どうしてもキャラクターの濃さで勝る連中が浮かんでしまうのは仕方ないことだが、そういう連中はもう少し酒が回ってから出すべきイロモノだ。

　　自身も偽物のイロモノ英雄であることを棚上げして、心の中で言いたい放題の小次郎であった。

　　記憶を巡らせ、英雄らしく……かつ、インパクトのある人物を懸命に探す小次郎。

　　そして、はたとひらめいた。

「ランスロット——」

　　いや待て。小次郎はどうにか踏みとどまった。

　　——円卓はダメだ。

　　何がダメつてもつれにもつれた人間関係がダメだ。

　　ベイヴィエール卿辺りはまだ良いのだが、彼の話をしたとしても他にも触れざるを得なくなる。それはいけない。

　　ほぼ全員が、何かしら致命的なことをやらかしている集団だ。少なくとも、このような明るい酒の席で話すことではないだろう。

（ならば誰だ……。誰ならば月影殿の興味を満足させ、かつ気落ちさせずに済むのだ……？）

　　……ふざけているように見えるが、本人は至極真面目であった。彼が言えることでも無いが、何かと問題のある人物が多いのは確かなのだから。

「……ギリシヤの大英雄、ヘラクレス殿などどうだろう?」

「おお、神話の英雄ヘラクレス! 実在していたのか!」

「英霊は非実在であつても知名度信仰さえあれば、存在できる可能性がある。あの御仁は確か、その口であつたはずだ」

彼は狂化していたために、自身を語る言葉を持たなかつたが……その有様は、実に雄弁であつた。

「まさしく天下無双の武人であつた。バーサーカーというクラスに収まつてしまつたがために狂い、技を失つていたが……それを差し引いても、白兵戦では最強クラスのサーヴァントと目されている」

「それは……貴方でも、ということだろうか?」

「おお、その通りよ。今でも一騎打ちでは勝てる気がせん。悔しいところだがな」

信じられないとばかりに目を見開く月影は、しかしそれまで以上に瞳を輝かせていた。

彼が聞きたかつたのは、まさにヘラクレスのような豪傑の真実なのだろう。それが、別世界の別人であつたとしてもだ。

「怪力無双、電光石火、類稀なる闘争本能……加えて、一級品の攻撃以外は弾き返すうえ、十二度殺さねば倒せぬと来ている。もつと言えば、一度受けた攻撃には耐性を持つ」

「いや無敵じゃないか!」

実際問題、ヘラクレスを単独で屠れる者など人類史を見渡してもそうは居ない。

「それでもなお、敗れる時は敗れるのだ。相性というものもある故な」
「なるほど……それは伐刀者ブレイザーの世界にも通ずるものがある。規模は違えど、道理は違わないということか」

「闘争の世界など、そんなものよ。無敵の存在などそうは居ない」
「しかし、そのような人物を倒せるとなると……相手もまた一角なの
だろう？ 一体どこの英雄なんだい？」

かの人物も中々に問題はあるが……肴としては楽しめるだろう。
いきなり出すには少々……いや、かなりパンチが効きすぎていたの
で避けていたが。

「世界最古の英雄。英雄王ギルガメッシュユダ」

「おお、知っているよ。ギルガメッシュ叙事詩の主人公のことだね。最
古の物語の一つとしても有名だが、なるほど。流石是最古の英雄、伊
達ではないということか」

「いや、本人自体はてんで弱いのだ」

「弱いのかい!？」

嘘は言っていない。実際剣一本持たせて戦ったなら、聖杯戦争に参
加するような英雄は、大抵彼に勝利できる。

起こり得ないことを言っても仕方がないのだが、ギルガメッシュ自
身の技量は小次郎から見たなら兎戯に等しいのも確かだ。

「弱いが……それを補って余りあり過ぎるほどのものを持っている。
ギルガメッシュはこの世の全てを手に入れた王だ。それ故の戦い方
がある」

「全てを見た人……確かに、そういう解釈もあるが……」

「ギルガメッシュは自身が収集した、のちに英雄が用いるであろう武
具の原典を己が宝物庫より呼び出し射出する戦法を好む。あれは
………なんと言ったか？ おお、そうだ。戦闘機の絨毯爆撃のようなも
のだな」

「………ちよつと待ってくれ………私のギルガメッシュ像がいま崩壊し
た。時間をくれ」

月影は杯の中身を一気に臓腑へ流し込むと、続けてくれとばかりにこちらを見た。

「加えて、騎士王の聖剣を上回るほどの一品を切り札として持っている。あれも私では勝てないサーヴァントの一人よ」

「……ギルガメッシュユ王はもつと肉体派だと思っていたんだがなあ……」

「かの者は戦士ではなく王だ。人柄には些か……かなり……すごく……。ともかく、少々問題はあつたが、あれはあれで英雄王と呼ばれるに相応しい度量を持っていた。……少々人間に対する好き嫌いはつきりし過ぎていて傍若無人なだけで、根っこは善性……の、はず」

「ところどころ怪しい言葉が混じっているんだが……」

擁護しようにもギルガメッシュユの普段の行いがそうはさせてくれなかつたため苦しいものとなつてしまった。

「……おお、そうだ。英雄王の財宝の話などは、かなり興味を惹かれる代物だぞ?」

「露骨に話を晒したね……まあ興味はあるから構わないよ……」

「あれの正体は、人類の知恵の原典であると、マスターに聞いた覚えがある。ありとあらゆる技術の雛形……それを収めたがために、現人類が作り出す全ての物が入っていると」

「なんと! それはつまり、何でも入っているということじゃないか!」

ついつい大きな声を出してしまう月影。その目の光は、また始めの頃と同じものに戻っている。

疲れや哀愁など微塵も感じさせないそれは……何処か、本人を若々しく見せていた。

恐らくはそれこそ、月影本来の姿なのだろう。

「と、私は聞いている。どのような危険食材であれ至高の料理へと変えるシユメールが誇る全自動調理器、念入りに下処理すれば食べられるらしいヒュドラの肉、あとは……望んだ料理が出てくるテーブルクロスなどを自慢しておったな」

「ははは、素晴らしいな、シユメール文明！……あれ、前述の二つ、要らなくないか？」

こうして夜はふけていった。

長々と続いたため割愛するが、二人は朝日が昇り始めるまで飲み交わした後に別れ……月影は、総理となって——いや、絶望の未来を見て以来初めての休みを取った。

頭痛には苦しむ羽目になったが……存外、気分は悪くなかったという。

本編

prologue

「——えっ!? イツキの師匠おおお!?!?!?」

学生騎士の頂点を決める戦い、七星剣武祭へ向けての強化合宿の最中。襲撃者たる、《風の剣帝》黒鉄王馬に敗れたことを機に、強さを模索していた時の話だ。

降って湧いた衝撃に《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンは驚嘆の声を響かせた。その大きさをたると、目の前に居る《落第騎士》ワーストワン黒鉄一輝が思わず耳を抑える程である。

しかし、ステラの気持ちも分からなくはない。

彼女の聞いていた話と、たった今彼が口にした台詞が異なるからだ。

「う、うん……そうだよ、僕の師匠」

「で……でも、イツキは誰にも指導を受けなかったって言ってたじゃない?」

事実として、一輝の剣には型が無い。

正式な師がいるのならば、剣筋はそのように寄るはずだ。

「ああ、手ほどきは受けていないんだ。何度か仕合って貰っただけだよ。僕が勝手に師匠なんて呼んでるだけなんだ」

「勝手に? どうして?」

「剣の極限——究極の一、その一端を垣間見たから……かな」

デタラメな身体操作と反則級の洞察力。およそ純粋な剣技に於いて、彼を上回る者などそうは居ない。

実際、合宿中には模擬戦でプロの魔導騎士すら下し、一流の伐刀者_{ブレイザー}

で、生ける伝説とまで呼ばれる南郷寅次郎の腕前を以つてしても剣技に限定したなら千日手だ。

その彼をして、『究極』とまで言わしめる人物の存在を知り、ステラは全身に酷い粟立ちを覚えた。

「限界というモノの無意味さを実感したよ。当の師匠は、さらなる上を目指すとまで言っている。勝負を挑み、そして敗れて以来、僕はあの人のことを師匠と呼んでいるんだ。憧憬と、全霊の畏怖を込めて……」

最愛にして最強のライバル、彼がここまで持ち上げる人物が居る。純粋な興味もあるが、ライバルを取られたような気分でもあり、なんだか面白く無い。だからこそ、ステラは問う。

「その人、強いのか？」
「強いよ」

ノータイムで返ってくる解答にますます苛立つ。
ならば……と、大人気ない、意地の悪い質問だと思いつつも。

「あの、エーデルワイスよりも？」

世界最強の剣士、《比翼》のエーデルワイス。現時点において、誰一人として届くことが出来ない頂点の一つ。

事実……合宿中に会った一輝は、圧倒的な実力を前に危うく命を取られかけている。

「……難しい質問だね。だけど、師匠なら或いは……彼女と相対した時、そう思ったよ」

その答えに、ステラは何故だか頭に来た。

ステラ自身も理不尽だとは分かっていたが、どうにも感情的になつてしまったのだ。

「だったらその師匠の剣を『模倣剣技』^{ブレイドスタイル}で真似れば、エーデルワイスにだって喰い下がれたんじゃないの？」

一輝の剣技である模倣剣技^{ブレイドスタイル}は、その名の通り相手の剣術流派そのものを盗むもの。しかも単に盗むだけでなく、あらゆる面でオリジナルを上回る即席の剣術を作り上げるのだ。

だというのに……エーデルワイスには歯が立たず敗れ去つたというのに……自分の師はソレに匹敵すると言う。それではステラは納得できない。

何度か仕合いをしたと言うのなら、たとえば実力差が大きいとしても一輝ならば見極められない道理は——。

「無理なんだ」

「え……」

断ずるが如き言葉に、ステラは思わず言葉を詰まらせた。

「師匠の剣は僕にも見切れない。全く同じ軌道のはずの太刀筋……それなのに、何度繰り返し返されても剣閃の一つすら見極められなかった。立ち合ったのも一度じゃない、三度戦い——三度とも同じように敗れた」

「そんな……」

剣を合わせただけで相手の動きどころか流派そのものを看破。あまつさえ人物そのものすらも見通し、一部では《無冠の剣王》^{アナザーワン}と謳われる黒鉄一輝に全く見切れない剣など、本当にあるものなのか。

「ステラ。僕はこれから師匠のところに行く。そこに君も来ないか。……君が求める強さの答えになるかは分からないけど……彼は間違いない、この世界の頂点の一人だよ」

“観察”という技術を一輝ほど習熟した人物をステラは知らない。彼の洞察力は照魔鏡とすら例えられる。

その一輝が見切ることすら不可能な斬撃。それを放てる剣士の存在。

世界の頂点。その言葉には、確かに興味を引かれている。

七星剣武祭まで残り十日。無駄には出来ない。強大な存在との出会いは、果たして自分にとってプラスとなるのかどうか。

「何者なの、その……師匠って……？」

エーデルワイスが、明確に世界最強と名乗りをあげる世界において。一輝一人の証言ではあるものの、彼女に匹敵し、また一輝にすら見切れない秘剣……否、或いは“魔剣”を使う剣士が居ると言うのだ。

それほど巨大な存在が埋もれるばかりでこの世界の何処かに潜んでいるというのは、不可解を超えて、ある意味不気味ですらあった。

しかも、よりにもよって自身の最愛がソレに魅了されている。気が気でないというのが、今のステラの心情だ。

たとえ強さを追い求めて迷走していても、一輝のことを頭から取り除くことは出来ない。手放しというのは不可能だった。

「……本当のところは分からないけど、彼は自分のことを何のこともない単なる世捨て人だと言っていたよ。実際、普段は人里離れた山奥の小屋で過ごしている。時折フラツと街に降りるようだけどね。戸籍も無いそうさ」

世捨て人どころではない。俗世から孤立している。

であれば、表の世界で知られていないのも理解は出来なくはない。甚だ怪しい話ではあるが。

「だから当然、^{ブレイザー}伐刀者ではあっても魔導騎士じゃない。ランクも恐らく、僕と同じFランク相当だ。それと……名前、なんだけどね。その……」

自身と同じ境遇でありながらエーデルワイスに匹敵するというのなら、確かに彼が憧れるのも分からないでは無い。納得は出来る。しかし、そこまで語っておきながら、名前程度で躓くのはどういうことなのか。

「——佐々木小次郎、らしいんだよね……」

「……はあああつ!？」

「——つくしゆん!!……やれやれ、何処ぞで噂でもされたのか……。まあ、私の噂をする者など限られるが……」

理屈は解らない。

七騎の英傑による凄絶なる殺し合い……その果てに、気づけば辿り着いていた、自身の知る浮き世ならざる浮き世。

人外の戦力が跋扈する、過剰なる強さを良しとする異なる世界。

間も無く、自身もそれら人外と同じ土俵に放り込まれていたことを知った侍は。

それもまた、良し。

まだ見ぬ強者を、まだ見ぬ剣戟の極致を。

再び与えられた機会。三度あるとは到底思えず。

——故に侍は、ただ一本の刀を以って。

山中の天

「ぐっ……!?!」

一輝は思わず膝をつく。
その手に握る固有^{デバイス}霊装《陰鉄》は、刀身を半ばほどで断たれていた。
如何に強固な精神力を持つ一輝と言えど、魂の具現たる固有^{デバイス}霊装を破壊されては揺るがぬはずもない。

直前まで発動していた……肉体のリミッターを外すことで少ない魔力でも一分間だけ身体能力を十数倍に跳ね上がる^{ノウハウアルーツ}伐刀絶技——《一刀修羅》が解けたことによる疲労までもが重なることとなり、現在の一輝は意識を保つことすら困難な状況であった。

「……その齢でよくここまで磨き上げたものよ。その劍筋は我流か？ 感服したぞ、良い劍だ。私もまた教えを授かつてはおらぬ身だが、そなたほどの多彩さは身に付かなかった」

手放しの賞賛。一輝は思わず齒噛みした。

感心したなどとよくも言う……と。

“三度戦い、三度に渡り刀を折られた”。

いずれも同じ状況であり、何の対策も講じることが出来なかったのだから、完敗という他ない。

どれほど讃えられたところで、一度たりとも五体を両断されていない以上、敵とすら見られていないのは明白であった。

その刀にしてもそうだ。折られた……と言うには、少し語弊がある。碎かれるでもなくへし折られるでもなく、斬り捨てられ、寸断されたと表現するのが正しい。

今の今までに幾多もの豪剣を捌いてきた一輝であったが、防ぐことすら満足に儘ならず、遂には立木を斬るが如き所業を見せつけられた。

悔しさを通り越し、怒りすら滲んでくる。

「どうやら類稀なる『眼』を持っているようだが……私の太刀筋はそう軽々に見切れるものではないであろう。コレはそういうモノ故に、な……」

その通り、事実……一輝には彼の剣を見極められなかった。

長刀から繰り出される神速の斬撃。その閃きを眼で追うことは出来ても、その術理を理解することは出来なかったのだから。

伐刀絶技……では、無いのだろう。そのような素振りは見受けられなかった。

そもそも、一輝と同じく彼はFランク相当の魔力しか持っていない。伐刀者としては、剣筋を完全に隠蔽するほどの能力は無いはずだ。

であれば、やはり敗れたのだ。——純粹なる剣技において。

「努々、腐らずに精進するのだな。お主の剣は天稟を持っている。生きるに難かった私などよりも、余程上達は早いであろうよ」

簡単に言ってくれる、と一輝は心中で悪態を吐く。

しかし同時に、血が滲む程の努力の先に、あまりに高い頂きが——先の見えぬ程の成長の余地が残っていることを思い知った。

一輝は、自身の口端が釣り上がり、好戦的に歪むのを感じた。たとえFランクであっても。落ちこぼれと罵倒されようとも。少なくとも、磨き続けたならばあの場所までは手が届く。

そう、自身が垣間見た——最強の、一端に。

「それにしても、まさか自身が痛めつけ、気を失ったまま放り捨てるのも忍びなしとウチで寝かせてやった小僧が、翌朝には朝食を準備して

私を師匠などと呼び始めるとは思わなんだ……」

「痛めつけられたなんて……。そんなことは思っていないませんでしたよ。一年前、山奥に隠れ住んでいるという剣豪の噂を聞いて訪ね、いきなり勝負を挑んだのは僕ですから」

小次郎と一輝は、ともに茶を啜り、息を吐く。

「それにしても幻想形態とは便利なものよな。斬らずに斬るか。強者が増えるのも領ける。技量を磨くには悪くないものよな」

「むしろ、知らなかった貴方に驚きましたよ」

相手の身体を傷つけることなく、精神ダメージを与える幻想形態。
プレイヤー
伐刀者にとっては知っていて当然の常識であった。

ところで。

「一輝よ。お主、何故ここへ？ 七星剣武祭はどうした？」

「はい、無事、代表に選ばれました。強化合宿も終えて少しだけ時間もできたので、今日はその報告に……」

「知っているとも。そんなもの、いつもなら電話で済ましているであろうに？」

驚くことなかれ。世捨て人など名ばかりである。

如何なる手段を用いたのかはのらりくらりと躲されるものの、戸籍も持たなくせに彼はスマートフォンを持つていた。

そもそも金はどうしているのか……疑問は尽きないが、一定量の資産も所有しているようだ。

それどころか、小屋のわびさびとした風情を壊さぬ範囲でテレビや冷蔵庫程度の文明の利器まで備えている。電力は発電機頼りだが、山中であっても電波は届くようだ。なんならパソコンだってある。

生活と、ある程度の娯楽を補償するための電子機器。

それらを否定するほど男は頑迷では無かった。肉の身体を持つに

至った今では食事や睡眠を当然のように必要とする。

無いなら無いでどうとでも出来るが、あるモノを使わないのは愚かしい。

「それと、その美しい女子よ。先ほどから拙者に睨みを利かせて今にも噛み付いてきそうな有様だが……はて、とんと心当たりが無いのでござるが……」

「は、はは、ははは…」

男が「拙者」だの「ござる」だのと言い出すときは、おふぎけか挑発と相場が決まっている。

その証拠に、男の顔には軽薄な笑みが浮かんでいる。

前述の通りここにはテレビだってパソコンだってある。目の前の人物が誰なのかなど承知の上なのだ。

そもそも、テレビやパソコンはメディアに露出のある強者の動向を探るため。

将来有望な《紅蓮の皇女》という逸材を見逃すはずがないのである。なんなら、一輝とステラの関係だって知っているであろうに。

「いくら一輝が付いているとはいえ、こんな山中に「弱い」女子が来るものではないぞ。転んで怪我でもしたら大変でござるからなあ、はっはっは」

そして当然、煽られているのは「あの」ステラ・ヴァーミリオンであって。

「上等じゃない……その喧嘩、買ってあげるわよ!! か弱いかどうか、試してみなさいよ!!」

頭に来て勢いに任せて言ってしまったステラだが、そもそもの目的は手合わせなのだから問題ない。

直情径行を若干反省しつつ、林の中、開けた場所まで移動すると、件の自称「佐々木小次郎」と相対する。

一輝はここには来ていない。彼は最愛の人ではあるが、いずれは戦うことになる最強の好敵手でもあるのだ。

この場で手の内を明かすのは愚の骨頂。それを理解しているからこそ一輝本人も小屋から出ようとはしなかった。

とりあえず、少し関わっただけでも食えない男だというのは理解できた。

一輝が気を許している以上、悪人でもないのだろう。

色々とふざけた人物ではあるが、自身を《紅蓮の皇女》と認識した途端に眼の色を変えた点を見るに、根っからの武人であるのは間違いないさそうだ。

ステラは気を引き締め直す。

(相手はエーデルワイス級の埒外の剣士。一輝がそう言うなら、きつと間違いない……)

勝機はないと考えていいだろう。

だが、一矢報いる。一輝とてエーデルワイスに僅かとはいえ届かせてみせたのだ。

ならば自分も……そう思わなければ嘘だろう。

「準備は出来たか、皇女殿？」

「ふん、やっぱり知ってたんじゃない……」

「うむ。ニユースでな」

和装に長髪。まるで時代劇から飛び出して来たかのような風体で

あるくせに俗っぽいことを言う。

「準備ならとつくに出来てるわよ。傳きなさい！ 《妃竜の罪剣》！」
「おお、それはすまなかつた。待っていたつもりが待たせていたとは。
——落とせ。《物干し竿》」

幻想形態の固有靈装デバイスを呼び起こす。

男の手に現れたのは長大な日本刀。やはりと言うべきか、名を物干し竿。

ここまで来れば予想も付いていたが、こうまで佐々木小次郎をなぞるのはどういう訳か。

構えはしない。否、無形こそが実体なのだろう。

「一輝もそうだが、そなたも躊躇デバイスが無いな。学生騎士とやらは許可なく靈装を抜けないのでは無かつたか？」

「違反者がよく言うわ。アタシなんかより貴方の方が余程問題よ」

なにせ、完全未登録の伐刀者ブレイザーだ。

その力を軍事力の一つとして数えられている以上、見つければ国が黙ってはいない。

「くくつ。いやまさにその通りよな。しかしそんなものはこの場では些事に過ぎん」

「ええ、貴方を叩き潰すこととは——一切関係ないわねっ!!」

言うが早いか、ステラは侍に斬りかかる。

読み合いにおいて自身の遥か上をいく剣士である一輝ですら見切れない剣技に、待ちの戦法など通じるはずもなく、そもそもソレは、ステラ・ヴァーミリオン”の戦い方ではないのだから。

開幕直後、全速全力での初撃。

策などとは到底言えない特攻だが、下手な小細工など弄するつもり

はない。

しかし、一撃で決める決意で打ち込む最高の一打である。臂力に優れる自分が取れる唯一の手段——その筈だった。

「なっ!?!」

ステラの振るう大剣……正しくは振るおうとしていた大剣は力の乗り切る以前に、大上段の位置で堰き止められていた。

知覚することも儘ならない神速にして理解不能の斬撃。

先に踏み込んだはずの自身を軽々と追い抜き、出鼻を挫かれてしまう。

身体強化の兆しは見受けられなかった。素の能力でこれほどの速度を実現するなどまさに人外。

一体どのような技術、身体能力を以つてすれば可能だと言うのか。

先の先である自身の「初め」の一撃が後の先である男の一撃に潰される異常事態。

しかし、問題なのはそこではない。状況を理解するまでに要した数瞬こそが致命的であり。

「――」

気づけば、首が落ちていた。

「……………」は……………」

見慣れない天井。

朧げな意識を目覚めさせ、記憶を辿り、ようやく理解する。

ここは、あの男の住む山小屋だ。

「……これほど、差があるのね……」

何が一矢報いるだ。

蓋を開けてみれば、剣を振ることすらさせてもらえなかった。

訳も分からないうちに放たれた二の太刀によって首を断ち切られ、容易く意識を奪われていた。

そして、ステラは無意識のうちに首を撫でていたことに気づく。

幻想形態であったというのに、実際に斬り落とされたかのように錯覚していた。あの瞬間には、身体を置き去りにして首が落ちていくような光景さえ幻視してしまった程。

佐々木小次郎の斬撃は、それほどに神がかった。

「ステラ。気がついたんだね」

振り向くと、いつも通りの優しげな微笑を浮かべる好敵手が立っていた。

「……コジロウは？」

「師匠なら修行だよ。戻るのは夜になるから、目を覚ましたら勝手に帰れっさ。七星剣武祭にも顔を出すって言ってたよ」

「そう……」

あまりにそっけない。

自身に対する興味を失ってしまったのだろうか。

「悔しい……！」

あの侍を失望させてしまったのなら、これほど悔しいものはない。ステラは再び自身の弱さを恥じ入った。

Aランク騎士……最大級の魔力量という最高のアドバンテージを持っていながら、この体たらく。情けなさの余り涙すら滲んでくる。

「ステラ。師匠からの伝言がある」

一輝に手紙を渡されるが、開く気にはならなかった。

しかし、だと言うのに、一輝はおもむろに手紙を広げると、中身を読み上げ始めた。

「そなたの剣は本質を違えている。故にそれほどまで小さく収まっているのだ。それを理解したならば、また挑むがいい。……次こそは、拙者を驚かせてくれることを祈っているでござる」

……上から目線も甚だしい。それにまたござるござると、全く舐め腐っている。

「追伸、帰り道で転ばぬよう気をつけるでござるよ」

「あんのゴザルううううう!!!」

「ちよ、ステラ、僕じゃない！ 僕じゃ——ぐえっ?!」

一輝の首をキュツとしていることにも気づかず、ステラは闘志を燃やす。

見返してやる。世界最強何するもので。そうと決まれば《風の剣帝》など踏み台でしかない、易々と超えてやろうではないか。

「イツキ！ アタシ、先に帰るわ！ 腹が決まった、七星剣武祭で会いましょう!!」

あの不愉快な侍との出会いが刺激になったかはともかくとして。ただ少なくとも、元気だけは戻ってきた。身体中に漲ってくる程に。

「ありがとう、イツキ。……あと、ついでにゴザルも……」

そうしてステラは、全速力で山を駆け下りて行くのであった。

「む？　なんだ一輝。まだ降りていなかったのだな、今日は泊まっていくのか？」

「……………」

“不慮の事故”で恋人に絞め落とされた《落第騎士》ワーストワンは、山中の小屋で一夜を明かすこととなった。

侍道楽

「いやあ……美味でござるなあ……。流石は本場と言ったところか」「おう、そうやる兄ちゃん！ 大阪のたこ焼きは世界一やで！」「いやいや全く。感服いたした、親父殿のたこ焼きは正しく世界一であらう」

「かかかっ！ 何言うтонのや、そんな当たり前のこと言うても何もでえへんで！」

現代を生きる侍、大阪へ降り立つ。ちなみに和服は置いてきた。

新大阪まで徒歩三十分、バス三十分、電車一時間、新幹線二時間の計四時間の道のりである。

もつとも最初の徒歩に関しては、額面上に限って言えば人類史上最速たる大英雄に匹敵する敏捷ステータスを有する彼にとつての「三十分」であるため、大してアテにはならないが。

宣言通り、小次郎は七星剣武祭の会場たるここ大阪を訪れていた。何の教えも授けてない以上、弟子だなどとは到底言えないが、それでも根無し草の自分を師と呼んで慕う少年を無視できるほど薄情でもいられなかった。

可能ならば極意の一つでもくれてやりたいところだが、我流たるこの身ではそれも叶わない。ならば、せめて見届けてやるのが人情というものだ。

そうでなくとも、たまには世捨て人気分を捨てて山を降りなければ、そのまま森の一部になりかねない。

縁や巡り合わせは大事にしなければ。

「なあ、兄ちゃんも、七星剣武祭の観戦に来たんやろ？」

「うむ。その通りだ、親父殿。弟子が出るのでな」

「なんや、兄ちゃんも伐刀者ブレイザーか！ しかしまあ残念やったのお、今年も優勝は大阪の諸星雄大で決まりやで！」

《セブンスワン七星劍王》、《浪速の星》諸星雄大。小次郎も当然知っている。事故による再起不能の大負傷から復活し、七星劍武祭を制した不屈の男。

《巖流》の名に相応しいと殻を与えられた小次郎から見れば荒削りもいいところだが、その槍捌きは潜在能力の高さを感じさせる素晴らしいものであった。

「確かに諸星雄大は素晴らしい槍使いだが……我が弟子も捨てたものではないぞ。アレは良い劍士だ」

未だ道半ばではあるが、一輝はあの年齢で至れる最上に近い技量を持っている。

確かに魔力では劣るのだろう。落ちこぼれというのは妥当な評価なのだろう。

しかし、積み重ねた鍛錬は決して自分を見放さない。

一念鬼神に通じる。小次郎は身を以てソレを知っていた。

死の瞬間まで磨き上げた技量は——人類を超越した、最高峰の英雄達にすら通用したのだから。

七星劍武祭参加選手を集めたパーティの翌日。

待ち合わせていたホテルの入り口で、一輝は諸星に尋ねた。

『あの……諸星さん。夕食の件なんですが……』

『なんや、心配せんでも世界一のお好み焼きを食わせたるで?』

『それは疑ってないんですけど、出来ればもう一人招きたい人が居るんですけど……その人、選手じゃなくて……』

『あく、そんなことか。構わん構わん! オールオーケーや、遠慮はい

らんで!』

「で、黒鉄。これから来るつちゆう客人は誰のことなんや? 選手やないってことは《紅蓮の皇女》ではないんやろ?」

「お好み焼き屋、『一番星』。諸星の実家にして本日、一輝たちが招かれた『世界一のお好み焼き屋』だ。」

招く立場にいる諸星からすれば、当然の疑問と言えるだろう。

一輝がメールで諸星から指定された住所を送信すると、自力で行くから気にするなどの返答が返ってきたため、彼はまだ一輝が招きたい人物に会えていないのだから。

「ええ、ステラではないですよ。今日は、七星剣武祭の開催に合わせて大阪まで足を運んでいる師匠を呼ばせて頂きました」

「なあんや黒鉄の師匠かあ、それならそうと……って、はああ!?

《無冠の剣王》の師匠やお?!?!」

何も、この驚愕は諸星だけのものではなかった。

「お兄様!?! 師匠が居るなんて私そんな話聞いたことないですけど?!」

珠雫が知らない以上、当然ながら有栖院も知らない。

これには張本人である一輝も悪いと思っただが、別段隠していた訳でもなかった……とも、言い切れない。

何をどう言い繕っても師匠である佐々木小次郎は未登録にして正体不明、出自不明の伐刀者だ。

一輝自身、無意識に話題に出さなかったのではないかと思わないでもない。

「ああ……いや……師匠と言っても、お互いに我流だから何か技術を教わった訳でもなくてね。僕が勝手に呼んでいるだけって面もあるから……」

一輝の言い訳に、ジトつとした目を向けて来る実妹を意図して視界から外しつつ。

「し、しかし……師匠か……。勝手に弟子入りしたくなるくらい強いんか、その人？」

「もちろんですよ。初めて会った時も立ち合って頂いたんですが……僕の剣は歯牙にもかけられませんでした」

技量において常に他者を戦慄させてきた《無冠の剣王》。

その彼をして歯牙にもかけられないと言わせるほどの剣豪の存在に、一同は息を呑む。

諸星など、口元に凶暴そうな笑みを浮かべており、どのような魑魅魍魎が現れるのか、好奇心を隠せずにいた。

一方の珠雫はといえば、何処かで見たとような釈然としない顔をしている。まるで何処かの国のお姫様のようだ。

「《無冠の剣王》黒鉄一輝の師匠か……一体どんなお人なんやろうなあ……！」

「——こんな人でござるよ」

自身の隣に突然現れた気配に、諸星は思わず飛び退いた。臨戦態勢である。

珠雫や有栖院にしても同じこと。

この場の誰一人として悟らせることなく間合いの内側に出現した

得体の知れない存在に、最大限の警戒を示したのだ。
そう——やせいの こじろう が あらわれた。

「ふむ。どうやら……ファーストコンタクトは失敗したようだな。いや、失敬。どうにも若者たちに噂されるのはこそばゆくてな。つい、要らぬちよつかいを掛けてしまった」

一見するならば、ソレは単なる長髪の優男。

しかし、実態は遥かに異なる。

敵意もなければ殺気も無い。笑顔すら見せているこの男がどれほど異質かなど、戦場に身を置き、頂を目指す才気溢るる彼らには容易く看破できた。

黒鉄家の才女たる《ローレライ深海の魔女》が。

隠密に特化した《ブラックソニア黒の茨》が。

絶対的な間合いを誇る《ブレイザー浪速の星》が。

いずれも優れた伐刀者である彼らが、間合いの内側に入られるまで誰一人として感知できなかった。

恐らくは、自ら気配を現さなければ対応する間も無く首を断つことすら可能であっただろう。

「お疲れ様です、師匠」

張り詰めた緊張の糸を解いたのは、この場で唯一平然とした様子を見せる《アナザーワン無冠の剣王》。

彼の一言により、一同は落ち着きを取り戻し、状況を正しく把握する。

「……なるほど……ハンパやないな。アンタが《無冠の剣王》^{アナザーワン}のお師匠様つちゆう訳か」

挑戦的に口元を歪める諸星だが、背中を伝う冷たい汗に内心では激しく動じていた。

目の前の人物は、まさしく「絶対強者」というべき存在であると認識してしまったが故に。

「やれやれ、ほんの少し脅かすだけのつもりだったのだが……少々やり過ぎてしまったようだ」

「師匠の隠密技術は人外的なんですから、気をつけて下さいよ」

「いやいや、拙者の隠密など明鏡止水からの派生……単なる透化に過ぎんと申したであろう。本物のアサシンであるなら、極まれば言葉を交わせる程の間近であっても尚、簡単には気配は悟らせぬであろうよ」

「ソレどんな化け物アサシンよ……」

サラツと口にした明鏡止水などという極みに居ることを無視しても、暗殺者という存在を高く見過ぎだろうと有栖院は項垂れる。

まさか彼女も暗殺者の語源たる歴代の「山の翁」達を例に挙げられているとは思ってもよらなかったが。

「へっ、まあええわ。ふざけた兄ちゃんやけど、実力は期待しとった以上みたいやしな。ワイは諸星雄大言うもんですわ、よろしゅう頼みます」

「有栖院風です、よろしくお願いします。それにしてもお師匠様も良い男なのねえ」

「……黒鉄珠雫です」

当然、小次郎は彼らの名前を心得ていた。

今はまだ雛であれど、いつの日かはあの日の「燕」に匹敵する猛者

となるやも知れない若鳥達だ。

未来のことは、少なくとも小次郎には見通せない。故に、才能ある者に目をつけるのは必然であった。

「丁寧な挨拶、痛み入る。こちらも名乗らぬ訳にはいかぬな。私は佐々木小次郎。肩書きなど特には無いが、よろしく頼むぞ、若人達よ」

小次郎の名乗りにも、まず珠雫がブチ切れた。

小次郎からすれば筋違い……とも言い切れないか。

ともかく不当な怒りでない訳でもないのだが、現代日本人に「私は佐々木小次郎です」などと名乗れば、大概ふざけていると思われるだろう。

百歩譲って何かの間違いで本名だったとしても、たった今見せつけた技量の高さを加味するとタチの悪さが跳ね上がるというもの。

諸星と有栖院は気にせず声を上げて笑っていたが。

「そうは言われても某は間違いなく佐々木小次郎、まごう事なき事実でござる」

……とも言い切れないが。

小次郎のそんな心の声が聞こえたのか、珠雫はますます目尻を釣り上げる。

「……ともかく……少なくとも佐々木小次郎という名以外に私には名乗る名など無いのでな。そうであるものと納得してもらわねば……」

懐かない、近づかない、それでいて視線は外さない。そんな子猫を

目の前に置かれたような気分で、なんだか参ってきた小次郎。
そんな場面を苦笑気味に見物していた一輝の肩を後ろから押すよ
うな形で。

「皆の者、某の名前などさしたる問題では無い。それ以外に名乗らな
いなら本名も同じ、これにて解決よ。さあ、お好み焼きとビールが
待っているでござる！」

一輝をお好み焼きに押し込みながら、自身もそそくさと退散するの
であった。

「おお……昨日食べたたこ焼きも美味であったがコレも中々……。い
や、酒が進む進む。女将、生中もう一杯！」

「兄ちゃん、顔がええだけやないで飲みっぷりも中々やな！ おぼ
ちゃん気に入ったで！」

生前は農家に生まれ、娯楽の類に傾倒することの無かった小次郎に
とって、消費社会である現代日本は興味の尽きない代物であった。

こうして美食に興じ、思う様に酒を飲むような日が来るとは思いも
よらなかつた。

無論、剣の道を疎かにするつもりはないが、独りひたすらに剣を振
るに続ける日々は一生涯やり通した。

第二の生は、人生を謳歌するとともに、強敵と腕を競い、高め合う
ことに捧げよう。

こうと決めた以上、小次郎の道は逸れることはない。

ともかく、今はこのお好み焼きに舌鼓を打ちつむ、命の源たるビー
ルを楽しむのみだ。

「師匠、飲み過ぎじゃないですか……」

「何を言うでござる、我が弟子よ。拙者酔ってなどござらん、ござらん
でござる。まだまだこれからでござるよ」

「うわあ……」

途中、《白衣の騎士》薬師キリコや武曲学園新聞部の八心と合流する
というハプニングもあったが、〃その時間帯〃の小次郎はまだ冷静さ
を保っており、連盟に周囲を探られることを煩わしく思い、八心に自
身の記事を書かせないよう上手く誘導していた。

しかし、いかな神域の達人と言えど、受肉した身で胃袋に次から次
へとアルコールを注ぎ続けられ、酔っ払うのが道理である。

なんとこの男、前日から飲み歩いていたようで。

来る前に多少の仮眠は取ったようだが、アルコールは抜けきってお
らず、ビールが呼び水となったようだ。

それでいて技の冴えには然程大きな影響は出ない辺り、自制が効か
なくなっているという点では危険物にも等しい。

仮にも弟子を名乗っている一輝には重々承知されており。

「ほら師匠、もう人も少なくなってきましたし。そのうちまた来れば
いいじゃないですか。今日のところは……」

万が一にも帰り道で私闘に躊躇いのない喧嘩っ早い伐刀者などに
絡まれては敵わない。

そうでなくとも、今の大阪は危険だ。七星剣武祭を目的に、プロや
裏世界の強者たる伐刀者ブレイザーが集まっている。

そう、大変に危険なのだ。

主に、相手の命が……。

故に一輝も割りとは本気である。

翌朝になると、大阪の街に首を落とされた惨殺死体が転がっている
……という事にならないためにも。

「む……。まあ、良かろう。確かにそろそろ良い時間だ。明日はお主の試合もある。これ以上長々と付き合わせるのも忍びなし……か」

酔って自制心が破綻しているとはいえ、そこは小次郎。淀みない動きで椅子から立ち上がると、財布から金を出して、カウンターに置いていく。

「兄ちゃん、ウチのバカ息子に無理に引つ張ってこられたんやろ。お代なんか気にせんときや!」

「いやいや、そういうわけにもいかぬ。これだけ飲んで食っておいでただで帰るのは私としても居心地が悪いのだ、女将よ。次もまた美味いお好み焼きを出して貰えればそれで良い」

ひらひらと手を振って諸星の母に断りを入れると、厨房から自分たちを見送りに出てきた諸星に。

「諸星よ、今日は良い店を紹介してくれたな。礼を言おう。私に興味があるなら、七星剣武祭の後にも挑むがいい」

「ほお、ええんでつか? 言質もらいましたで?」

「無論、お主の五体が満足であればの話だがな。怪我人など相手にはせぬぞ?」

諸星の眼光が、獲物を追う猛虎のモノへと変貌する。

張り付いたような凶暴な嗤い。並みの人間であればそれだけで指一本動かせないだろう。

「心配は無用や。《七星剣王》^{セブンスワン}のままアンタに挑ませて頂きますわ」

とはいえ、コレは明らかな挑発である。

当然それを向けられたのは、高みから見下ろす天剣などでは無く、

目先の好敵手。

「だ、そうだぞ。どうだ、一輝よ？」

「どうだ、と言われても——望むところですよ」

それでこそ、というのが一輝の正直な感想だ。

降って湧いた頂の達人ではなく、諸星が常に狙い澄ましていたのは立ちはだかる《無冠アナザークラウンの剣王》であった。

光栄という思いとともに、確かな戦意の向上を、一輝は胸に抱いていた。

「《落第騎士フリストワン》。一つ聞きたいことがあったんやけど……」

「なんですか、改まって？」

一輝たち一同とともに『一番星』を出たキリコと八心。

その八心が、思い出したように一輝に尋ねたのだ。

「あんな……突拍子も無い噂なんやけど……裏はとっておきどうてな。その……アンタが《比翼》と戦って勝った……言う話はホンマなん？」

「——ッ」

一体どこから漏れ出した情報なのか、突然のことに一輝は動揺を露わにした。

《比翼》のエーデルワイスとの決闘は、無人の校庭にて行われたもの。誰かにそれを聞かれるとは思ってもよらなかったからだ。

「え、ちょ……まさかホンマにホンマなん?！」

「いやいや! 落ち着いてください! 確かに彼女とは剣を交えましたけど——」

「ホンマか!？」

「だから落ち着いて下さいって!」

興奮気味の彼女を落ち着かせて、一輝は改める。

「確かに戦いましたが、正しいのはそこまでです。勝ってはいません。戦いの途中で気絶して、目覚めると病院のベッドにいました。つまり、情けをかけられて生き残ったんですよ。……あ、記憶が曖昧になるほどの惨敗で、ボロボロにされたことくらいしかお話しできませんから記事にもなりませんよ?」

二の句を繋げないように、釘も打っておくことにした。

何せ覚えていないものは聞かれても答えられない。それに、負けたというだけの情報では彼女のお眼鏡にも叶わないだろう。

「……妄想で補完すればワンチャン……」

「無いです」

「うー、ケチー」

ならば、と彼女が問うたのは何とも日が悪いという言葉に尽きる一言で。

「なら、これだけ教えて! 記事にはせんけど知的好奇心ってヤツ!

——《比翼》とお師匠さんって、《落第騎士》ワーストワンから見てどつちが強いん?」

本当になんてことを聞いてくれるのか。

「ほう……それは私としても興味がある。遠慮せずに断じて良いぞ、一輝よ。私よりも強いというならそれはそれで楽しみが増えるというもの……」

どうやら例によって火がついてしまったようだ。

もし仮に会場にエーデルワイスが現れたのなら、天下分け目の決戦が始まるであろう。

湾岸ドーム周辺は一刀と二刀の新たな伝説の舞台となる。具体的に言うと言くつきの廃墟となる。

「……その、どちらも本領を見た訳ではないので何とも言えませんが……『互角』と思つて良いかと……」

「おおっ！」

「ふっ……」

期待と興奮の入り混じるような八心の声の裏で、意味深な笑みを浮かべた小次郎に対して不吉なものを感じてしまった一輝。

帰らぬ帰らぬとゴネていたのがどういう訳か、素直にホテルに戻るという。

気が気でないと思いつつ、自身の『用事』を済ませるために、徒歩での帰路につく一輝であった。

薄雪草

「……ふっ、《比翼》よ。私はいま、どうしようもなくそなたに焦がれているぞ……。この目に映る夜景が霞むほどにな……」

ホテルの上層に位置する、夜景が美しいという以外に取り立てて長所のない一室。

小次郎にはそれで十分であったが、その華やかさも今の彼を慰めることは出来なかった。

——自身と互角。

なんと胸の高鳴ることか。

死合うならばやはり、拮抗する者でなくてはならない。

才能豊かな、道半ばの者達を相手取るのも感慨深いことではあるが、やはり自分は指導者ではなく闘技者だ。

強敵と交わす刃にこそ——己が本性は顕れる。

「……いかな。これではどうにも寝つきが悪い……。無作法ではあるが、〃つまみ食い〃でもするとしよう。明日の試合、万が一邪魔にでも入られては、つまらぬしな……」

——その夜、解放軍^{リベリオン}の部隊の一つが何者かの手によって壊滅に追い込まれた。

全員、息はあるものの、逃亡を封じるためか両手足の骨を折られた状態で警察署の前に無造作に転がされていた。

俄かには信じ難いが、抵抗の痕跡が一切見られないことから、おそらく幻想形態の霊装によって気絶させられた後痛みを感じる間も無く——刹那のうちに四肢を叩き折られたものであると推察された。

逮捕された解放軍の面々に尋問を掛けたところ、全員が揃って敵の姿を確認しておらず、気づけば警察署の前に居た……という類の供述をしているため、捜査は難航。

捕縛された部隊の半数近くは伐刀者であったということもあり、警

戒は厳に行われた。

少なくともこの大阪に——それを一方的に蹂躪できるだけの存在が潜んでいると判明したからだ。

「……そなたとて、何の感慨も抱かず一輝を生かした訳では無いのであろう、《比翼》よ？ 興味を持ったならば、先を見たくなるのが人の性……。それまで私は、こうして露払いでもして暇を潰しておくでしょう。あまり、待たせてくれるなよ……」

まあ、しかし。

「手加減の鍛錬にはなったか……。 “斬れぬ” 斬撃——もはや打撃でしか無いが、やってみるものよな」

「……ほう。流石だな、諸星よ。槍という間合いの優位を加味しても、一輝を相手によく立ち回る」

小次郎は二人の試合を俯瞰する。

会場を包む大歓声、それを上げる人々の中に紛れる。

気配を消せばそこに『虚無』という矛盾が生まれてしまう。故に、違和感なく。過剰でも過少でもなく平均的な気配を洩らし、一体となる。

この場において、小次郎という “異分子” は存在しない。少なくとも、尋常の者ではその異常を認識できないだろう。

「やはり、中々の槍捌きだ」

無論、未だ成熟には遠く、聖杯戦争にて立ち合ったランサーほどでは無いにしろ。

その槍の冴えは彼らの世代では並ぶ者がいない程の代物だ。

「そら、一輝よ。忘れてはいないか、そこは——『虎穴』だぞ?」

選りすぐりの槍術、《三連星》を囷とした《ほうき星》。

それらを伏線として、霊装すら食い破る伐刀絶技《暴喰》を放つ戦略眼。

その強さを支える強靱な精神力は何処から湧き上がるモノなのか。甚だ興味が尽きないが、《七星劍王》が学生騎士としての高みに居るのは明らかであった。

一輝の照魔鏡の如き観察眼を以つてしてもその懐は果てなく遠い。だが、それを考慮したとしても。

「……………どうしたというのだ?」

一輝の動きは目に見えて精彩を欠いていた。

意識と動作がまるで噛み合っていない。しかし未熟によるものは無いだろう。

身体制御において他の追隨を許さない、あの《無冠の劍王》に限って、それは無いと断言できる。

頭の回る者であれば、《比翼》と立ち合ったという情報を元に推理し、その極まった剣技を受けたことよってボクシングにおける『パンチ・アイ』のような症状に罹ったのでは無いか、と疑うところだが、小次郎は違う。

実際、医師である薬師キリコなどは真つ先にその可能性を視野に入

れていた。

——ここにきて、小次郎の経験の少なさが浮き彫りとなる。

名のある英雄達にも劣らぬ破格の才覚、魔技とまで称される人外魔鏡の剣術。

二つを兼ね備え、尚且つ。死後、亡霊として実戦経験も皆無のままに参戦した聖杯戦争において、何の躊躇もなく斬り合いを演じてみせた精神性。

身体が硬直するほどの「恐怖」など、経験則として持ち合わせておらず。

故に、たとえ「パンチ・アイ」という単語自体は知っていても、結びつくことはあり得なかった。

ただ……それも幸いと言うべきか。

一輝を苦しめる「異常」はソレとは違う。

余計……否、深い知識、経験を持っていなかった為に結果として小次郎は、不純を排し、真実の一部を掴もうとしていた。

「……心身共に万全。で、ありながら、思考と身体は噛み合わず……か」

だとすれば、「ズレている」のはどちらだ。

鍛錬や肉体の成長によって身体能力は向上しているのだろうが、ここ数ヶ月で起こる小さな変化程度ではあの一輝が見誤るとは思えない。

何より、先ほどまでは十全に戦っていた以上、有り得ない可能性だ。

「……ならば——「頭」か？」

単純な消去法でしか無いが、馬鹿には出来ない。

正しく、一輝の不調の原因は頭——「脳」にある。

しかし、前情報の一つも無い小次郎には確信など持てない。その正否を確かめる術が、手元に無かったのだから。

一輝の狂った歯車が噛み合った瞬間、勝負は一方的なモノとなった。

小次郎ですら思わず眼を見張る。

一輝の剣は、それほどまでに大きく飛躍した。この一瞬で、別物と呼べるほどの太刀筋を見せつけたのだ。

「《比翼》の剣技……か。くくっ、一輝の奴め……楽しませてくれる……！」

解説者が博識で助かった。アレが《比翼》の剣技であるなら、見て生き残っている者も少ない筈だというのに、よくよく縁に恵まれた。何せ、小次郎にはその剣の“理”を理解することが出来ても、正体までは分からなかったのだから。

零から全速に至るまで、加速というモノが一切存在しない異形の剣術。

「なるほど。些か雅さに欠ける剣ではあるが……なるほど、理には適っている」

とはいえ、ただ一輝の剣を眺めているだけではこれ以上の詮索は不可能だ。

小次郎はエーデルワイスのことを知らな過ぎた。調べて分かることでもない為に、仕方のないことではあったが。

「ここはてっとり早く、〃知っている者〃に語らせるのが吉……か」

「——エーデルワイスの剣技は普通じゃないんだ。0から1000への極限の静動を生み出すには、連動する筋肉を瞬時に全て同時に動かし、刹那のうちに全筋力を集約させる必要がある。そして、それを成すには通常の人間の発する脳の信号量では足りないのだ」

「ほう、なるほど。つまり一輝はその信号を変えたという訳か。存在しない物は作る他ないからな……」

「ああ、通常の脳信号とは別に瞬発力と情報密度に優れた『戦闘用の信号』を奴は生み出したんだろう」

「しかし……それならば、何故今まで正常に機能していなかったのか……」

当然、それにも納得のいく理由が存在した。

「一輝はエーデルワイスとの戦闘の記憶を失っていた。身体も同様だ。しかし脳は別。勝負所で高まった集中力が要因となり——『戦闘用の信号』を発信してしまったんだ。当然、一輝の身体はそれを忘れていたが故に、通常とは異なる信号を理解できなかった」

「合点がいった、噛み合わせぬ訳よ……。やはり原因は頭にあつたか」

「ああ。………とところで、お前は誰だ」

観客に紛れてしれっと黒乃に近づき、素知らぬ顔で会話に侵入して来たこの男。

敵意も悪意も感じなかったために放置していたのだが、いつまでも知らないふりもしていられない。

「ああ、これは失礼した。拙者は単なる観客故、気に召されることはない。なにやら興味深い話が聞こえてきたので、好奇心を抑えられなく

てな」

これほど分かりやすい嘘というのも珍しい。

何せ、話を聞いていたらしい珠雫と有栖院が凄まじく微妙な顔をしている。

どう見ても顔見知りだが、正体を話す気は無いらしい。その上で、「単なる観客」という言葉にこうもあっさり表情を崩してしまうような存在なのは理解できたが。

とりあえず、「疚しい」ことがあるのは間違いない。

「まあ、一応捕らえておくか……」

黒乃は自身の霊装である白と黒の二丁拳銃を顕現させ、小次郎に突きつける。

実際問題、この侍は一般的に伐刀者として認識されないFランクでありながら、Aランクのステラをノーリスクで一蹴するという、魔導騎士制度に真っ向から喧嘩を売っているような存在であり、尚且つ無資格で躊躇なく固有霊装を振るっている完全無欠の犯罪者だ。

少々強引ではあるものの、魔導騎士として正しい行為だ。ほぼ確信に近いレベルで疑いに掛かっている辺り、黒乃も只者ではない。

現行制度を鑑みると、九割九分の割合で小次郎が悪いため、不当とは到底言えなかった。

「ふむ、それは困る。おかげで疑問も晴れたのだ——さっさと退散するでしょう」

「なにを——チッ！」

しかしそれも、捕まらなければ何のこともない。

小次郎の姿は黒乃の視界から消え去っていた。が、そこは仮にも元世界三位。

すぐさま自身の後方へと照準を合わせ、《クイックドロウ》を放とう

とするが。

「やめよ、《世界時計》。ここで騒げば試合の邪魔となる」
「……………」

「ふっ、そう疑ぐるな。私とてあの《世界時計》と死合う機会とあつては捨てるのも惜しい……。が、それは今でなくとも良いこと故」

男の言葉を鵜呑みにするつもりは黒乃には毛頭なかったが、一理あるのも事実。

しばし思考を巡らせた後。

小さなため息とともに黒乃は銃を納めた。

「いいだろう……七星剣武祭の間は貴様の正体は詮索せずにおいてやる……」

「おお、それはかたじけない。ご配慮、感謝する。祭りの後であれば――むしろこちらから願いたい程だ」

小次郎の余裕とも取れる台詞に、黒乃は眉間のシワを深くする。

「おっと……どうやら敵意までは納めてくれぬようだな……。では、宣言通り私は退散しよう。さらばだ、《世界時計》」

小次郎の姿は文字通り影も形もなく掻き消える。或いは自身と同じ時や空間を操る類の能力か……と、黒乃は熟考に入りかけるが、すぐさま正気に戻る。

（アレはまた来るなどと吐かしていたな……。なら、いま考えることではない）

今は自らの教え子の趨勢が決まる大事な試合の最中だ。

あんな男に、いつまでも構っているわけにはいかないのだから。

——それはそれとして。

「……お前達、あとで話はしつっつかりと聞かせてもらおうからな」

それはそれとして、理事長に下手な隠し事をするような生徒の躰は——十二分におかなくてはならない。

今の、瞬間移動の如き小次郎の所業は、極めて優れた体技と、明鏡止水による気配遮断の合わせ技に近い。

タネも仕掛けもあるまやかしだ。

同じような真似をしてみせる有史以来最速の英雄、アキレウスのソレとは異なり、純粋な速度のみによるモノではなく、また移動距離も劣る。

とはいえ、A+の敏捷ステータスは決して伊達ではなく、数値上は冬木の聖杯戦争で最速のサーヴァントとして、召喚されたランサーたるクー・フリーンすらも上回っていた。

しかし同等のステータスを誇るアキレウスとは異なり、小次郎には俊足の逸話など無い。得意とする分野が異なるため、比べること自体が間違っているのだが。

やはり——その真髄は剣技にある。

試合は《無冠の剣王》の勝利に終わった。

一時はエーデルワイスの剣技を思い起こした一輝の圧倒的な優位

と思われたが、蓋を開けてみれば勝負は決着の瞬間まで定まっていなかった。

しかし結果として、一輝は《七星剣王》の幾十にも及ぶ罫を突破し、勝利を掴み取ったのだ。

「一輝よ。もはや初めて出逢ったあの日は別人と成り果ててしまったな……。しかし、それは私にとっても喜ばしい。確信しているとも、お主なら必ず——我が剣を振るうに相応しい武士となることを」

風

「さて……お前達、何か納得の行く説明が成されるものと私は期待しているしお前達を信じている。当然だ、何せ我が校が誇る極めて優秀かつ『賢明』な生徒なのだからな」

それは、バトルロイヤルにてステラが圧倒的な力を見せつけて勝利した夜のことだ。

破軍学園理事長、新宮寺黒乃は一輝の試合中隣に居た二名をホテルの部屋に呼び出し、部屋に招き入れるとそのまま後ろ手に『扉に鍵をかけた』。

「……………」

——身の危険というには余りにあからさまな不信感。隠すつもりもないのだろう。

窓は開閉しない仕様で、尚且つベランダは無く。

またあったとしても飛び降りるには少しばかり高すぎる。

一瞬、力づくでの逃亡も画策した二人だが、現実的では無いと諦める。相手は元世界三位の『世界時計』だ。その上、破軍学園理事長でもある。

「…………理事長。私には何のことだか——」

パンツ——！

「安心しろ。この部屋は防音だ」

「いや何を安心しろと!?!」

流星に兄妹というだけのこととはあり、珠雫のツツコミには切れ味があつた。

……もつともそんなものあったところでどうにかなる訳ではないのだが。

「そして、安心しろ黒鉄珠雫。『今日のところ』はお前をどうこうする気はない。有栖院はその限りではないが」

「えっ」

「お前には試合があるからな。疲労を残す訳にはいかない。まあ、素直に喋るのなら関係のない話だ。もちろん私は、お前達が話してくれると信じている。生徒を信じるのは教育者として当然だからな」

——珠雫は兄のためと、早々に有栖院を切り捨てた。尊い犠牲である。

齒の浮くような台詞の数々。

正直なところ不安を煽るものにしかなくていいが、黒乃なりに穏便にことを済ませようとしているのは理解できた。

しかし、理解できたからと言って受け入れられるかは別の話だ。

「話すも何も……私たちは何のことだかさっぱりで……」

——その選択は致命的な間違いであったと後日、珠雫は思い知る。

「……ねえ、珠雫？ もういいじゃない、理事長は分かってくれるわ。話しましょうよ、ねえ？」

「ダメよ、アリス。お兄様のためなもの」

「でももうアタシ……」

「ごめんなさい、私も辛い。でも——耐えてね、アリス」

「いやでもアイータタタタタタタ!? ちよ、やめて、やめて痛いっ!？」

痛いから!？」

「最近旦那が足ツボにハマっていてなあ……。すっかり覚えてしまった」

ベッドに固定された有栖院は理事長の容赦ない責め苦に痛めつけられつつ、心身を強制リフレッシュさせられていた。

かれこれ二十分と行ったところか。かなり豪華なマッサージと言えないこともない。

「こ、これ虐待だわ!バイオレンスよおいいだだだだだだだ!?!」

「何を言う。日頃の疲れを労つてのマッサージだ。虐待などと人聞きの悪い」

ぐにっ!

「いぎいいいだいい痛い痛い痛い! 私知ってる足ツボと違うわナニコレ!？」

「さて、有栖院。これ以上心身を健康にされたくなければ……。まあ答えろとは言わんが、どうしても言うなら聞いてやる」

「ぜひ言わせてくだ——」

「ダメよアリス」

ノータイムでストップを掛けてくる悪魔がそこにいた。

「だ、だってえ! これすっごく痛いのはワカル!？」

「分かるわアリス。私も見ていて辛いもの……」

あまり見たことないぐらい綺麗な笑顔を向けてくるルームメイトに有栖院は戦慄した。が、割りと頻繁にしている気もするので取り立てて珍しくもない。

「魔導騎士たる者、この程度で根を上げてはダメよ。ふふっ、何も拷問という訳でもないのよ？ 大袈裟に騒ぐほどのことじゃ——」

「言っておくが剣武祭の後でお前も受けるんだからな？」

ピタリ、と動きを止める珠雫。

しかしそれも一瞬のことだ。すぐさま先ほどと同じ笑顔で黒乃の方に向き直ると。

「——お話しします、理事長」

「あらやだこの子ったら変わり身早すぎやしな……!?」

有栖院、本日二度目の戦慄。

「冷静になって考えればあの男がどうなろうとお兄様に不利益はありませんし、隠すのも馬鹿らしくなったので……」

「……もうちよつと早く冷静になれなかったのかしら……」

「……我が生徒ながら怖ろしい女の片鱗を持っているな……」

こうして、佐々木小次郎の存在は《世界時計》へと伝わることとなった。

とはいえ珠雫と有栖院の知る情報は少なく、悪く言えば眉唾モノだ。

如何に黒鉄一輝が抜きん出た洞察力を持っているからと言って、エーデルワイスに匹敵する剣士の存在など……あまつさえ、そんな強大な存在が今の今までこの世に潜んでいたなどと誰が信じる。

その上、男の魔力量は——Fランク。

《落第騎士》の師匠としては正しいのかもしれないが、現行の魔導騎士制度の根底を覆すこととなる。

「やれやれ……厄介なことになった……。これでは、剣武祭が終わってからなどと悠長なことは言っていられないか」

手出しはしない。が、しかし放置するのは不安要素が多い。情報を集めなければならぬ。当事者の一輝にも詳しく話を掘り下げさせる。

そして仮に……仮にエーデルワイスと同等の剣士だというのなら、その時は別だ。

「全力で見逃す他、ないだろうな……」

なにせ、捕らえることなど不可能なのだから。

「今日は《剣士殺し》と《血塗れのダ・ヴィンチ》との試合。《剣士殺し》は文字通り剣士の天敵であると聞く。果たして、如何程のものか……」

一方の《血塗れのダ・ヴィンチ》の方はまるで素人。

確かに戦えば伐刀者としては強いのだろうが、それだけだ。武勇を競う相手としては相応しいとは思えない。

直接戦闘を得意としない点などは問題ではない。単純に人種が違うのだ。

アレは武人ではない。戦う者ではない。

——事実として小次郎の感覚は正しく、彼女は画家であり、それ以外の何者でもなかった。

「なんと……興味の湧かぬ相手であったが……。なんと面妖な、やはり私は女を見る目がない」

確かに画家には違いなかったが、色の概念を操るだけなどと謙遜も甚だしい。

色の概念どころか「描いた存在」そのものを操ってみせるとは。小次郎が思う以上に彼女は画家であった。

蔵人優位で進んでいた試合が一気にひっくり返された。

ドラムマシンガンを創造する以前までの劣勢がまるで嘘のように。ミサイルが創造された時点でも《神速反射》を前提とした奇策が無ければ試合は終了していた。

「何より人物の創造よ……。何処まで再現できるのかにもよるが、夢の膨らむ——まるで宝箱よ」

決め手は《無冠の剣王》を都合三人創造してみせたあの瞬間だ。

果たして何処まで再現出来るのか、もし絵描きの知識以上のことが可能ならば、人物を呼び出すかのような神の如き再現率ならば。

消えかけた無様な身体ではなく、全力を以ってして一度は自身を破ったセイバーと。

あの清廉な二刀を振るうアーチャーと、しがらみなく刃を交わし。獣の如き身のこなし、卓越した技量で魔槍を操るランサー。次こそは加減など許しはしない。

強力過ぎる豪剣を縦横無尽に振り回す、あの無双の大英雄たるバーサーカーと。

ライダーとも死合ってみたいものだがアレはマスターが悪かった。果たして本領はどれ程のものか。

キャストを描かせるのも良い。大魔術による飽和攻撃は驚異的だが、必ずや掻い潜ってみせよう。

「剣武祭の後の楽しみが増えたか。いや、仮に取るに足らぬ偽物であったとしてもあの女狐は描かせるか。鬱憤は多少晴れるというものの」

呼び出されたこと自体には感謝の念もあるのだが、こちらは腹に呪いまで仕込まれていたのだ。

今までの仕打ちを考えれば、贖物に対する意趣返しの一つや二つは許されるだろう。

まあ、どちらにせよ面白い。

敗れたとはいえ《剣士殺し》とて相当の使い手だ。

多数の斬撃を放つという発想は小次郎にとつても好ましい——というより、気が合うと言った感覚であったが、自身と近いモノを感じる。

「いや、今日もまた素晴らしい日よな。今夜の酒も格別に美味である」

気分が良ければそれだけ晩酌も良いものとなる。

昼は戦い、夜は酒。風流とは呼び難いが、これもまた悪くはない。

「さて、次は一輝と《天眼》の試合か。どちらも洞察力に優れる伐刀者……興味の尽きぬ試合よな。——そこのお主も、そうは思わぬか？」

「——気づいていたか」

「当然よ、《童》如きの気配も探れぬほど落ちぶれてはおらん」

小次郎の立つそこは、単なる観客席の一角だ。

見つけるだけなら造作もないこと。だが、常に周囲の人間の気配に紛れている彼を注視するのは難しい。

誰であれ——一定以上の実力を要求される。

「して、私に何のようだ？ 縁もゆかりもない……などと言うつもりはないが、お主が私に興味を示すとは思えぬが」

「……」最近、《大同同盟》や《解放軍》の連中が片端から潰されて警察署の前に置き去られるという事件が頻発している。アレは貴様の仕業だろうか？」

つけられた覚えはなかったが、どうやら何処かで見られたか。

「貴様もまた『騎士の力』と言うものを履き違えたペテン師だ。愚弟よりも多少は先の地点に居るといっただけで大差はない。そのくせ場を引つ掻き回す。——目障りだ」

隠す気もない殺気に向けてくるその人物は。

「ふっ、やはりお前には余裕というものが欠けているな。——何をそんなに怯えている」のだ、《風の剣帝》」

果てなき業

「……そろそろ、良いのではないか？　あまり離れると会場に戻るのも面倒だ」

「おめでたいな。——まだ、戻れるつもりでいるのか？」

そこは湾岸ドームから離れ、七星剣武祭の最中であっても人通りの少ない港湾施設だ。

需要に欠けるため、停泊する船舶が入ることも稀なそこは、なるほど確かに——荒事には向いている。

「なに、狭い世界で生きる頑なな『童』に『手解き』をするだけならば、それほど時間はかかるまいて……」

「弱者がよくほごく……」

《龍爪》を。《物干し竿》を。

二人は自身の霊装をほぼ同時に顕現させた。

共に刀剣であり、分類もまた大太刀、または野太刀と呼ばれる代物だ。

であるにも関わらず、リーチの差は約50cmにも及ぶ。

小次郎の《物干し竿》は世で知られているソレよりもさらに長く、五尺余という長大なものであるためだ。

「もしや……と思いましたが、やはり貴様の魔力量はFランク以上の何者でもない。あの愚弟の審美眼も当てにならないな。《比翼》と互角だなどと——馬鹿にするにも程がある」

剣武祭の開催前日、一輝の後を追っていた際にそれを聞いた王馬は、僅かなり興味を抱いていた。

或いは、何か『力』を隠しているのでは無いかと。しかし、それも彼は杞憂と判断した。

それ故の無礼千万。侮りとは違う嫌悪だ。

「御託が多いな、《風の剣帝》よ。そんなにも語らいを好むとは……ふむ、意外と可愛げがあるではないか」

王馬が《真空波》を放ったのはその直後だ。

苛立ちからか、それを隙と見たためかは分からないが、風の刃は真っ直ぐに小次郎に襲いかかり。

「」

そして、《断ち切られる》。

「……貴様、何をした？」

「見てわからぬのか。——斬り捨てたまでのことよ。私とて《空》は斬れぬが、押し込められ形を与えられたソレならば、その限りでは無い」

王馬は思わず目を見開いた。

言葉通りに受け取るならば、この男は何の能力も用いずして——単なる剣技によって真空を切り裂いたというのだ。

確かにFランクの能力にそのような対応力があるとは思えず、今はそれを受け入れる他ない。

しかし、如何なる《業》を以ってすればそのような行為が可能なのか。

理屈すら理解できない《理合》に、ふと冷たいモノが頬を伝う。

(……冷や汗？ 俺が、このペテン師を相手にか……)

——王馬は自らを解放した。

「おお、コレがお前の真実か。なるほど面白い！ 鍛錬のためにここまで身体を苛め抜くか。聞き分けのない童と侮ったことは非礼であつたな、黒鉄王馬よ」

《天龍具足》。それは王馬の身体を押し込め、引き千切り、潰し、碎かんとする王馬自身がかけた枷だ。

早々に解放してみせたのは、弱者と断じた相手を一瞬でも「畏れ」てしまった自身への憤怒から。

そして——その「畏怖」を、正しいものと認めてしまったためだ。

「俺を惑わすな、妖怪……!!」

「妖怪とは散々な言われようだ。生まれは単なる農家の餓鬼に過ぎぬのだがな」

人外の膂力を存分に発揮する王馬は目の前の侍を叩き斬らんとして、豪剣を振るう。

並の伐刀者であれば一つ一つが必殺となり。

受けたところで霊装ごと斬り捨てられるのが必然である恐るべき暴力を——小次郎はこと無さげに、正面から打ち払う。

「大した膂力よ。『こちら』に来てから、ここまでの豪剣を受けるのは初めてだ」

「何を訳の分からんことを……!!」

時に空を切り、時に刃に流され、或いは受け止められる。

罅迫り合いなど、膂力の差一つ取ってみても有り得ないというのに、事実として目前でそれは起きていた。

その動作——どういう訳か一切が判別できず。しかし王馬に解る範囲でも余裕が見て取れた。

(……手を、抜かれている……?)

これだけ軽々とあしらわれているにも関わらず、小次郎からは反撃の一つも飛んで来ない。

警戒しているのだと判断できないこともないが、仮にも《風の剣帝》だ。それは違うと、明確に理解できる。

「力を信奉するばかりの童かと思っていたが……存外、見れる剣ではないか」

王馬の繰り出す黒鉄の剣の数々を吟味するかのように律儀に受けて立つところが、彼のプライドを激しく傷つけた。

身を焦がす激情を、然して内側に押し留め、ますます太刀筋を鋭く研ぎ澄ます。

「しかしまだ序の口……あの ツツモノ 英霊どもには遠く及ばぬ」

通常の人類の規格を超えた王馬の肉体は確かに並外れているが、神代に於いても最強と称される豪打をキャスターの援護があつたとはいえ、単なる刀一本で受け切った小次郎にとってはまだ不足だ。

小次郎は知らないことだが、神代と人の世では人類の肉体性能は大きく異なる。現代人は神代の人々に比べ、余りに「弱過ぎた」。

相手が大英雄ともなれば、その隔絶した性能差は最高峰の天賦を有する王馬であつても易々と埋められるものではなく。

故に、小次郎から見れば——彼は未だ未熟でしかなかった。

「頑ななだけのお前では、我が間合いに踏み込むのは至難であろうよ」
「黙れ、《月輪割り断つ天龍の——」

——閃き。

「ッ!？」

幻想形態の《物干し竿》が王馬の首を断ち切った。

本来、王馬ほどの実力者の首を唐突に斬り捨てることなど不可能と言える。

だがしかし、今回に限っていえば相手が悪い。

どのような達人であっても見切ることの出来ないときれる小次郎の剣技。

それは間違いなく人類最高峰と言えるものであり、本来であれば膂力に加え、英雄の技量を以って相対するものだ。たかだか十数年の人生で追い継れる者など、人類史を見渡してもそうはいない。

「——ほう、まだ立つか」

「ぐっ……何故、殺さなかった……」

小次郎にその気があれば今の瞬間にも、王馬を仕留める事ができた。

王馬として自身の肉体を無敵とは思っていない。

何も幻想形態で精神ダメージを与えるだけに留める必要はない。彼の肉体を傷つけることは不可能ではないのだから。

鋼の如き肉体も、鋼を斬り捨てる剣客相手には不足であり。そうではなくとも、筋繊維の間をすり抜けるように肉体を貫けば、心臓に手が届く。

彼の前に立つ侍は、恐らくそれを容易くやってのける。

「なに、仮にも出場選手であるお前をこんな野良試合で退場させるのは忍びなかった故だ。そうでなくとも、《後に強者となり得る》であろう若人だ。ここで仕留める道理は無かろうよ」

「……この俺は、強者ではないと言うのか」

無論。答えるまでもないとばかりに小次郎は王馬を一瞥する。

「没頭せよ。お前の剣は——あまりに底が浅い。『究極の一』と呼べるまで磨き上げ、出直すが良い」

晩年まで独力で鍛え上げたとはいえ、ただ一度の果たし合いも経験する事なく神の領域に踏み込んだ桁外れの天稟を相手取るには、単純に『鍛錬』が足りていない。

如何に膂力と魔力で優つていようとも、埋め難いほどの技量の差がそれらを覆してしまう。

剣技を蔑ろにしている訳ではない。

事実、『比翼』の剣技を手にするまでの一輝とは拮抗していたのだから。

故に、圧倒的に足りていないのだ。

この『魔剣士』を相手取るには。——王馬の短い人生で積み重ねた研鑽では、切り崩せない。

『騎士の力』に拘る余りに、道を狭めていた。伐刀者である以前に、自身が人であることを忘れていた。

最も重要な——『人間の力』を軽んじていた。

佐々木小次郎と黒鉄王馬では初めから、人類としての位階が異なっていたのだ。

「……………」

自身の肉体を死を厭わず鍛え上げ、『進化』したとすら思っていた王馬であったが。

それは驕りに過ぎず、未だ人類の枠組みを外れていなかったことに愕然とする。

「肉体を如何に鍛えたところで所詮は人間よ。それを上回る強大な獣が相手であれば歯牙にもかけまい。故に、我らは戦う術を磨くのだ」

生半な獣であればその限りでなくとも、『幻想種』と謳われたモノ

たちならば話は変わってくる。

王馬同様、人外の膂力を秘めた英霊達ですら、その鍛え上げた“技量”を以ってようやく打ち破ることの出来た最強の獣達だ。

力及ばず、それらに蹂躪された英傑も少なくはない。

今の世には存在しない彼らだが、それ故に王馬は力を履き違えた。

「——今のお前に、斬る価値などない」

『強さ』を絶対の価値観とする《風の剣帝》。

彼にとつては、これ以上ない程の侮辱の刃。それを以ってして小次郎は王馬を斬り捨てた。

「ふむ、間に合わなかったか……。一輝の妹の試合くらいには間に合うと思っていたのだが」

港から会場まで戻ってきた小次郎であったのだが、一輝が0コンマ8秒という大会最速勝利記録を打ち立てたことということも相まって一歩遅れる形となった。

実際のところ、小次郎が王馬を降した時点で珠雫の試合は決着が付いており、幾ら急いだところで間に合いはしなかったのだが。

「やれやれ……。しかしまあ、あの“求道者”もこれで少しは柔軟さを得ることが出来たなら良いのだが……」

王馬のひたすらに強さを追い求める様は、勝利を求め兵法を操る武芸者とは異なり、差し詰め“僧侶”の如きものだ。

純粹過ぎるが故に、厳し過ぎるが故にこれ一つと決めてしまった道

から外れることが出来ずにいる。

それは勿体無い。兵法とは彼の言う小手先の技術である以前に、小手先の技術に惑わされないための対抗策でもあると言うのに。

「しかしまあ、それでも道を変えないと言うのなら……」

それはそれで興味がある。

あの男が傑物たり得るのは小次郎としても認めるところだ。それだけの空気を纏っている。

王馬が王馬として、その道を極めきったとしたなら。

「私の思いもよらない——未開の境地を見ることになるやもしれぬな」

小次郎が示した以外の、王馬自身の究極。

仮にそれが存在するならば、見てみたいと思うのが、武人たる小次郎の率直な望みであった。

「《紅蓮の皇女》、《風の剣帝》、《剣士殺し》、《浪速の星》、《雷切》。それに《無冠の剣王》か」

無論、いま上げた以外の戦士達もまた、先の見えない未完の利器だ。

完成していないが故に、その絵の全貌が見えない。ある意味において、これほど面白いものはない。

先人たる小次郎にとってそれは、見切っても見切ってもそれを超えてくる——そんな剣戟に等しい興味の塊だ。

「私もそう落ち落ちとはしていられぬな。私には、この剣以外の何物も与えられてはいないのだ。——故に、この道において……私の先を行かせるつもりは到底無い」

受肉したこの身は、成長を赦されないサーヴァントのそれではない。
い。

——若人達よ、来るなら来るがいい。

——しかし忘れるなかれ。進歩は諸君らだけの特権ではない。

「——我が剣技、未だその最果てに在らず」

マリオⅡロツソ

「——あああああ!! もう、どうすれば泣き止むのよツ!!」
「ス、ステラ、落ち着いて!!——って、あっ!!」

ステラがデパートのトイレで偶然にも発見し保護した伐刀者の赤ん坊。

どうやら《空間移動》系の能力者のようで、それをコントロール出来ず、女子トイレに居合わせたステラの前に転移してしまったようだ。

事態を把握し、迷子センターへと赤ん坊を連れ立って居た一輝、ステラ、サラの三人であったのだが、突然赤ん坊が泣き始めたのだ。

どうやら周囲に母親がいないことに気がついてしまったようである。

「ちよ、あの子どこに!?!」

パニックになった赤ん坊はまたもや転移してしまった。

それも、場所は最悪。さらに発見も遅れてしまい。

「ステラ、あそこだッ!!」

「へっ、ああああ?! なんだってそんなところに!?!」

よりにもよってこの大型デパートの吹き抜けのド真ん中。

既に落下を始めており、一輝の速度を以ってしてもギリギリ間に合わない。或いは《一刀修羅》を使えたなら話は別だが。

《一刀修羅》を使える一輝を複数創り出せるサラならどうにかなるとも考えたが、その為には《幻想戯画》を描き上げるだけの時間が必要なため不可能だ。

万事休すではあるが、行動しない訳にはいかない、そう思い立ち、手すりに足を掛けて飛び降りようとした一輝は。

「——奇妙なこともあるものよな。よもや赤子が降ってくるとは」

自身の隣をすり抜けた後に、背後からかけられた声に振り返った。

「……で、この赤子はお主の子か、一輝？」

「いや違いますからね」

美しい容貌を備えた長髪の侍、佐々木小次郎。

小脇に一升瓶とツマミ、加えて赤子を抱えて参上する。

「どうやら、間一髪といったところか。やれやれ冷や汗モノよな。……これ、お主そろそろ泣き止まぬか」

どうにかこうにか迷子センターに辿り着いた一行は、事務所の奥にある預かり所に居た。

赤ん坊はといえば、小次郎の手の中に収まっているが。

まるで泣き止む気配はない。

子供を育てた経験はおろか、子守りの経験すらない小次郎だ。少しばかり堪えるものがあるらしい。

せめてもう少し分別のつく齡ならば、などと考えもしたが是非もなかった。

「泣く子には勝てぬか、いや。子でもこきえたならば或いは……まあ、詮無きことよな」

格好つけたところで腕の中で騒ぐ赤子には手も足も出ない。

内心の冷や汗をひた隠しにするので精一杯。余力も雅さを保てるほどでは無かった。

「みてられない。かして」

「あつ」

「サラ!？」

任せておけないとばかりに、小次郎の腕に抱えられていた赤ん坊がサラの手により素早く取り上げられた。

「アンタ非力なんだから危ないって！ 落つことしたらどうすんの！」

「だまってて。貴女は少し声が大きい」
「うっ」

至極真つ当な諫言とサラの今までに無い強い眼光で牽制されて小さく呻くステラ。

サラは赤ん坊を優しく抱え直すと、ソファアに腰掛けた。

「だいじょうぶ。貴方のマンマはすぐにもどつてくるから」
「……あう、あう?？」

頭を撫でながら落ち着いた口調で語りかけると、赤ん坊は嘘のように泣き止んでしまった。

「泣き止んだ……」

「サラさん、すごいな。慣れてるの?」

「別に。……ただ、世界を回りながらいろんなものを観察してきたから。言葉がわからなくても、なんとなく考えてることがわかるだけ。この子は自分の親が居なくて不安だった。そんなときに周りが取り乱したら余計不安になる。落ち着かなきゃだめ。騒がなかつたぶん

そこの人の方がマシ」

「……ふむ。そういうもの、か」

「ご、ごめんなさい」

マシとは言われたものの特に何も出来なかった小次郎は素直にそれを学び、ダメ出しを食らった二人はたじたじといった様子で頭を下げた。

一輝と小次郎はともかくとして、ステラの方は複雑である。

子守りという母性の象徴のような行為において、後塵を拝するどころか邪魔者にしかなくなっていないという状況だ。

よりにもよってアトリエで『致す』ことも辞さないと言るサラ・ブラッドリリーに、バストサイズ以外でも敗北を喫することとなったステラの女としての悔しさは相当なものである。

しかしまあ、どうしようもないので赤ん坊はサラに任せるしかない。腕力には一抹の不安が残るが、自分や他の二人が抱えているよりは安心できるし、万が一落としてしまったなら誰かしらがフォローするはずだ。

「……そういえば。貴方は誰？」

そう、この二人が出会うのはコレが初めてのこと。

小次郎の方は一方的に知り、興味を持ってもらったが、サラが暁学園の側に立っていることもあって顔を合わせる機会がなかったのだ。

「おお、これはすまん。礼を欠いていたな。私は佐々木小次郎という者だ、サラ・ブラッドリリー殿」

「私のこと、知ってるの？」

「私は単なる剣武祭の観客だが、そなたは有名人故。顔を知っているもおかしくはあるまい？」

……決して嘘ではないが、単なる観客というだけでは説明不足にも

程がある。

一輝は苦笑するだけで済ませていたが、ステラの方は苦虫を口いっぱい噛み潰したような顔をしていた。

「……たしかに。でも、単なる観客っていうのは嘘」

「ほう？ 何故そう思うのだ、ブラッドリリー殿」

サラは武人ではない。本来なら、荒事に関わるような人種ではない。

彼女は何処までも「画家」というある種の文化人でしかないのだ。

しかしそれ故に、小次郎は興味を持っていた。戦う者ではない彼女が、自身を一体どういう存在だと定めたのか。

その審美眼に、一定以上の好奇心を抱いていた。

「貴方からは——《比翼》と同じモノを感じる」

一輝とステラは、その言葉に思わず目を見張り。

「でも、少しちがう気もする。にてる。けど、エーデルワイスの方が慈悲深い」

一輝も彼女が世間で最悪の犯罪者と語られている一方で、立ちはだかった明らかな格下である一輝を見逃そうとするだけの情けを持つことを知っている。

しかしだからこそ、納得のいく評価である。自身の師は、穏やかなばかりの男ではない。

「ちよつと。確かにゴザルはムカつく奴だけど、悪い奴じゃないわよ？」

「うん、私もそう思う。……でも、彼はなんだか達観し過ぎてる」

その通りだ。一輝も逡巡なく同意できる。

小次郎は一輝ですら見通せない高みにいる剣士だ。既にそれは明鏡止水の境地を迎えている。それは一種の悟りに近いものだ。

温厚なのはそのためであり、しかし真実の姿は武人そのもの。

もし仮に一輝やステラが「手合わせ」ではなく「果たし合い」を挑んだならば、いまの彼らの首と胴体が繋がっていたかは怪しいと一輝は読んでいた。

もつとも実際のところは将来性を惜しんで生かして返す可能性が高いのだが、それは一輝の知らぬところだ。

故に、本人の口から言わせるならば。

「ブラッドリリー殿の見る目は実に正しい。——人を斬る以上、何者であれ悪であろうよ」

他ならぬ世界そのものによって最強と定められ、本人の望む望まざるを問わず、「絶対者」として君臨しているエーデルワイスとは異なるスタンス。

小次郎は、常に自身を「一個の人間」以上には見ていない。

人斬りは悪である——両者ともに心身が正しく極まった人物故に、それを罪だと認めている。

君臨者であるエーデルワイスは上位者であるため、真に寛大で、ヒトである小次郎は同等であるが故に相応の容赦しか持ち得ない。

ただ、それだけのことなのだろう。

「エーデルワイスさんを「剣神」とするなら、師匠は「剣鬼」。同等であつても立ち位置が違う。……こんなところかな？」

「ん、そのたとえば私の感性と一致する。……師匠？」

初めから名乗ればすぐ済む話であつて、壮大な思考の果てに辿り着くような難題ではないのだが。

サラの本質を見抜く力が優れていたためにややこしい話になって

しまった。

一輝は苦笑いを隠せずにいた。

「ああ、うん。彼は僕の師匠でもあるんだ」

「……………つよいの?」

「どうやら本質は見抜けても巧妙に擬態する小次郎の実力までは見通せなかったようだ。」

「エーデルワイスさんに匹敵すると、僕は考えてるんだけどね」

「知らず知らずのうちに真相を掴んでいたことに気づいていなかったらしい。」

「しかしどうやら一輝を高く評価している様子のサラはその言葉を信用し、あまつさえこんな事を。」

「……………《無冠の剣王》とは別の意味でモデルになってほしいかもしれない。《比翼》と向かいあった状態で」

「それは少々、いやかなり難しいであろうな……………」

「何せ——どちらか片方は首だけになっている可能性が高いのだから。」

「は、ははは……………。そ、そうだよサラさん。無茶言っちゃいけないよ」

「いや私は一向に構わ——」

「そ、そうよ！ 良くないわ、無茶を言うのは!」

「むう、残念。でも一人ずつでもいい」

「後に続くであろう言葉を予想、出来てしまった」一輝とステラは顔を青くしながらサラを抑え、小次郎に二の句を言わせないように専念した。

爆弾というか核弾頭を撃ち込んだ当の本人は事態に気づいていないようで、釈然としないステラではあったが。

努力の甲斐あって、サラのアトリエで血みどろの惨劇が起こる可能性を未然に防ぐことには成功したのでヨシとする。

と、ホッと一息ついたところで。

「うー、ぱい！ ぱいっー！」

サラに抱かれていた赤ん坊が、彼女の胸をさすり始めた。

「あはは。これはアタシでもわかるわ」

「ふむ……どうやら乳が欲しいようだな」

「じゃあ、係の人にミルクを作って貰おうか」

当たり前だが、ステラもサラも母乳は出せない。

そのため、一輝が粉ミルクを貰いに行ったのは正しい行為なのだ
が。

あろうことか、サラは自身の乳房を片方だけ露出させたのだ。

「なんと!？」

「ちよ、サラ!? アンタなにを——」

「うるさい」

再び黙らされたステラは三度は繰り返すまいと口を押さえた。

「……お乳はでないけど、こうしてるだけで安心すると思うから」

赤ん坊は腹を空かせていた訳ではなく、温もりを求めていたのだ。

サラはその優れた観察眼で理解していた。

サラは赤ん坊に授乳の真似事をしながら歌を歌い始める。

高度な英才教育を受けた皇女であるステラにしか分からなかった

が、それはイタリア語のようで。

いわゆる、子守唄であった。

小次郎と、もちろん一輝にもその意味は分かりはしなかった。

しかしその旋律が、全ての世界に共通する……言語を超えて伝わる感情が込められており。

その温かみを感じ取ることは出来た。

それはおそらく——母性、と言うのだろう。

「……寝ている、ようだな？」

赤ん坊が寝息を立てる頃には、サラの腕力に限界が来たようで小次郎に預けていた。

これで小次郎が和装などしていようものなら、さぞや絵になったことだろう。

まあ、少々雅すぎる子連れ狼だが。

「……しかし皇女殿。そなたが寝るのは論外ではないかと、拙者は思うのだがなあ」

「あ、はは……」

あろうことかこの皇女、ステラ・ヴァーミリオンは赤ん坊につられて眠りについてしまったのだ。

今は一輝の膝の上ですやすやと寝息を立てている。

「一輝、ブラッドリリー殿。私は一旦ホテルへ帰る。荷物を置いて来ねばならぬのでな」

小次郎は一輝に赤ん坊を渡すと、ソファアールから立ち上がった。

「……ああ、そうそう。今回もまた伝言を頼むとしよう」
「えっ」

——それを聞いたステラが荒れ狂い絶叫するのは、この時から分かりきっていたことであつた。

『皇女殿もブラッドリリー殿を見習つて、少しは剣筋以外も磨くのだな。——“びよんぴよん”などと言っている場合ではないでござるよ』

『聞いてやがったわねあのゴザルううううう!!!』

偽・秘剣

「……《幻想戯画》。紛い物と分かってはいたが。……分かっていたつもりであったのだが、些か期待外れではあるな」

サラ・ブラッドリリーは、その能力を以って《比翼》のエーデルワイスを創造してみせた。

しかし——見た目こそ、身体能力こそ、剣技こそ再現できているのだろうが、言ってしまうえばそれだけだ。

エーデルワイスが持ち合わせているであろう数多の“手札”を、画家である彼女には想像することが出来なかったのだ。

だからソレは、外見だけを埋めた空っぽの“贋作”に過ぎなかった。

一輝はその欠点を見逃す男ではない。

戦力差をひっくり返すのは、謂わば《無冠の剣王》の十八番だ。

仮にも“最強”を目指す修羅にとっては、半端な偽物など強敵足り得ない。

「しかし最後のあれは中々であった。如何に幻であれど馬鹿には出来ん。まさしく——真に迫った魂の具現」

《幻想戯画》——マリオロツソ。

身の丈であればバーサーカーを上回るほどの巨躯を有した、壮年の闘士。

言うなれば、《血塗れのダ・ヴィンチ》にとつての最強の幻想だ。

であれば、出来の悪い《比翼》の贋作など軽々と飛び越える。

事実として一輝は両腕を碎かれ、満身創痍と化した。

そうまで傷つくほど自身を振り絞り、ようやく拾った勝利であった。

「いや、まこと……天晴れな絵描きよ、サラ・ブラッドリリー。かの”

強敵達”との再会が叶わぬのは残念ではあるが——あの“達人”に駄作を描かせるのは、無粋よな」

それは小次郎にとっての最大の敬意であった。

武人である小次郎はそれ以上の賞賛の言葉を知らない。

サラ・ブラッドリリーの描く絵画には魂が宿る、それを目の前で見せつけられたのだ。

——一流と呼ばずして、何と称すれば良いというのか。

「そなたがああの山門の月を描いたならば、さぞや風流であろう。……が、ここは異界。叶わぬ願いか」

忌々しい縛りもあったが、それでも柳洞寺から望む月は美しかった。

あそこから動けなかった小次郎にとっては、強敵との果たし合いを除けば唯一の慰めであった。

「——唯一？」

それが唯一——では、無かった。

小次郎には、記憶の混濁がある。記憶を辿っていけば、必ず矛盾にぶつかるのだ。並行する時間軸に、幾つかの道筋。

どの道を辿ろうとも、ただの亡霊でしかない小次郎は一流たる英雄達に敗れ去るのだが——続きが見つかるのだ。それどころか、全く別の記憶までもが、ふと過ぎることがある。

今はまだはつきりとは思いつきせない。

どう紐解いていこうと矛盾するそれらを、正しく内包することが出来ないために。

何しろ受肉を果たすほどの異常事態だ。何かをキツカケに英霊と成って以降の“記録”を呼び起こし、それが混じりあっている可能性もあるが、それは正規のサーヴァントに限る。

亡霊たる小次郎に、あの聖杯戦争以外の記憶は有り得ないのだから。

「……まあ、学のない私が知恵を巡らせたところで、答えは分かるまいて。手の届く今を、謳歌するまでよ」

どうであれ、小次郎の進む道が変わることはない。

一輝が修羅であるなら、この無名の剣士もまた修羅。

求めるのは不確かな記憶ではなく、斬り合いである

冬木の聖杯戦争、並びにアヴェンジャーにより夢の中で繰り返された偽りの四日間。

いま現在、彼の中で渦巻く記憶の数々は幾つもの結末を迎えた聖杯戦争……そしてその先にある幻想の記憶だ。

それら全てを抱えてしまっている彼は特殊という他に無いが、彼がそこに存在したこと自体に不自然はない。

それどころか、本来であれば、この「無名の剣士」はそれ以外には現れない亡霊であった。

だが、それでも彼は……どんなに希薄であつても、存在を確立していた。

彼は正しい「佐々木小次郎」ではない。故に、冬木の聖杯戦争のシステムではイレギュラーでもない限り彼が現れることはない。

だからこそ、触媒により安定してサーヴァントを召喚することが出来るのだが。

もし仮に——不完全な、曖昧な召喚システムが何処かに存在していたとしたなら。

一度被った「佐々木小次郎」という名の殻。

再び彼が纏ったとしても、不思議なことではないだろう。

「——まさしく凶星よな。歪みきっておるわ」

《深海の魔女》黒鉄珠雫と《凶運》紫乃宮天音。彼らの試合は、始まる前から終わっていた。

試合の時間となっても会場に現れなかった二人の様子を確認するために、会場の大型モニターに映し出された控え室。

鮮血に塗れたそこには——無数の剣で磔にされた珠雫と、返り血を浴び、狂ったように噛み続ける天音の姿が映し出されていた。

小次郎の審美眼には、《凶運》が《戦う者》ではない事が一目で理解できた。

戦士たる《深海の魔女》を相手にまともに立ちあえるはずもない。そう考えていたのだが。

「——真に恐ろしきは、あの《過剰なる女神の寵愛》か」

彼も一輝から、天音の能力の詳細は聞いていた。

或いは一定以上の実力者であれば破れるのではないかと侮ってしまった。

経験不足と言えばそこまでだが、油断にも等しい読みであった。

しかし、今の状況を理解できないほど鈍くはない。

珠雫は恐らく、天音を襲撃して試合が始まる前に仕留め、反則負けという形で《勝ち》を拾おうとしたのだ。

それはあくまで珠雫にとっての勝利であったが……それを得るには至らなかった。

悔いもあるだろう。ひとえに彼女は——。

『——あ、イツキ君もこの放送聞いてると思うんだけどさ。被害者の僕が言うのもヘンだけどシズクちゃんを責めないで欲しいんだ！だってシズクちゃんはイツキ君のために反則を犯したんだから！』

『彼女と戦った僕には分かる。イツキ君、シズクちゃんは君のことを愛しているんだよ。家族としてじゃなく、異性として君のことが好きなんだ！だから君がステラちゃんと付き合いだして、ずっと辛かったんだと思う。ずっとずっと、君に振り向いて欲しいって想い続けていたんだと思うんだ！』

天音は声高に、訴えかけるように珠雫の心情を、“自分勝手”に叫んでいた。

「——聞くに堪えん」

人の心を勝手に理解した気になって、語り続けていた。

否、言い直すならば、この“下郎”はいま、黒鉄珠雫という少女の精神を大勢の観客と、何より聞かれたくないであろう兄の目の前で玩具のように弄んでいるのだ。

まるで善意であるかのように、気遣っているかのように装ってはいるが——その真実は悪意そのものだ。

『そしてそんな気持ちで彼女を凶行に走らせた。君の目標の邪魔になる僕を排除して、君の夢に貢献することで……君に愛されたいという間違った欲望を抱いてしまったんだ！』

その場には——既に、かの魔剣士の姿は無かった。

「確かにシズクちゃんのしたことは間違った事だけど、好きな人に愛されたいって気持ちは当然のものだと思う。だからイツキ君には彼女の気持ちを汲み取って欲しいんだ。どうだろう、君さえ良ければ彼女を女として愛して——」
「うえ……………えぐつ……………」

身体ではなく、心を犯された少女は、ついには限界を迎えた。さも彼女の想いを理解したかのように、自分の解釈を真に正しいものかのように「騙る」。それを、よりにもよって世界一愛している兄に向かって。

「——全く外道よな。それ以上は口を開いてくれるな、貴様は弟子の獲物ゆえ、我が手で首を落としたくはない」

だが、その台詞を続けることを許す気はない。

少女の心を土足で踏み躪り、あまつさえ大衆の前で暴露した。

陵辱にも等しいその行為——花鳥風月を愛で、雅な振る舞いを良しとするこの侍は、弟子の身内を辱められて黙っていられるほど薄情ではいらなかった。

侍は既に、控え室に踏み込むと同時にカメラを切り捨て、珠雫を縫い付けている剣の数々を残らず砕き、彼女を助け出していた。

——無論、愛刀の刃を天に逆立て、「構えた」うえで…………だ。

「お兄さん、誰？ 弟子って誰のことかな？ 一応ここは関係者以外立ち入り禁止だと思うんだけど…………」
「それ以上口を開くな、そう言ったのが聞こえなかった訳ではあるまい、悪童よ。この場で散りたくはなからう」

その言葉を聞いた天音は、ニイっと口元を歪めていた。

天音は小次郎を舐めきっていた。

戦士で無いが故に、彼には小次郎の異質さが伝わらない。実力の一切を悟らせないこの魔剣士の実態を理解できないのだ。

「出来るの？ ふふっ、お兄さんに？」

「——ほう、試してみるか？」

しかしそれは実行されず。直後——控え室の壁が爆散した。

「……コジロウ。下がってくれるかしら、そいつを斬り捨てるのはアタシじゃない」

「だ、誰かと思えばステラさんか！ びっくりしたなあ、もう。壁を壊して入ってくるなんて非常識——」

「だまれ」

絶対的な拒絶。込められた感情はそれだけだ。

「もつとも、これ以上シズクの心を穢そうって言うのなら話は別よ。死に方くらいは選ばせてあげるけど。コジロウに首を落とされるか、アタシに消し炭にされるか……ね」

ステラは小次郎とシズクの方へ視線をやったまま、天音を見ようともしない。——否、出来ない。

今でさえ、血が滲み出るほどに食いしばって怒りを抑えているのだ。

顔など見てしまえば、殺さない自信はない。

「——もう、怖いなあ、ステラさんは。分かったよ、僕だってシズクちゃんを傷つけるつもりなんて無いんだ。ただ、彼女のことをイツキ君に分かって——」

——刃が閃く。

「——えっ?」

あまりに唐突に瞬いたために、ステラはともかく、天音には反応で
きなかつた。

気がついたのは、既に刀が振り抜かれた後。

「……………っ!」

「口を開くな……………そう言った筈だが?」

その刃は奇跡的に——しかし、必然的にその身を切り裂く事はな
かつた。

“幸運”にもステラが砕いた壁の破片を小次郎が踏みつけたため
に、ほんの少しだけ狙いが逸れたのだ。

そもそもが最後通告……………掠らせるためだけの一撃であったが、超人
たる小次郎が狙いを外すという有り得ない奇跡。

《過剰なる女神の寵愛》は、超絶技巧の魔剣士の一撃をも斥けたの
だ。

「ほらね、やっぱりお兄さんには無理だよ。僕を傷つけるのは」

「——それは如何であろうな。貴様の凶運も底が知れた。その程度で
あれば、一輝には敵うまい。……………皇女殿。珠雫は任せたぞ」

霊装を納めた小次郎は、一瞥もくれることなく立ち去った。

彼にしては余裕のない立ち振る舞いではあったが、穏やかさにも限
度はある。

紫乃宮天音は、明確にその限りを越えていた。

「……………何あれ、負け惜しみかな?」

「ふん、気楽なものね。アンタ、気づいてないの?」

「気づくって何に——っ!？」

指摘され、ようやく気づいたソレは——頬に出来た、浅い傷。

《過剰なる女神の寵愛》によって、文字通り過剰に保護された天音は、それこそ自身が望まない限りは擦り傷一つ負うことはない。

そのためにこれは——はつきりと、異常事態であると言い切れる。そして天音にとってそれは、戦慄するに相応しい異常だ。

「……何者なの、あのお兄さん」

「答える義理はないわ」

ステラは、ついに一度として天音を視界に収めることなく。

徹底して拒絶しながらシズクと有栖院を抱き上げ、そのまま控え室を後にするのであった。

ステラが最後の最後まで天音を振り返らなかったのには、怒りを抑える以外にも理由があった。

俄かには信じがたい、怪奇にも属する類の話だ。

実際に目撃したステラ本人ですら、何度も自らの目を疑った。

それは彼女の見間違いであったなら、それまでの話なのだから。

「イツキ。あのとき、コジロウはアマネに傷をつけた」

「……師匠なら不思議はないさ。でも、一太刀でやってのけるとは思ってもいなかったけどね」

一輝にも天音を斬り捨てる策はある。しかしそれは一太刀で出来ることではなく——。

「違うの、イツキ。一太刀じゃない」

「二太刀じゃ、ない？ でもキミは、師匠が刀を振ったのは一度だけだって——」

「そう、その筈なの。——でも、あるとき私は確かに見た」

それは、《剣士殺し》の一度に複数の斬撃を “放っているように見える” ソレとは訳が違う。

「あるとき、魔力は感じなかった。だから、間違っても伐刀絶技なんかじゃない。それなのに、確かに——刀身は二つ存在していた」

《過剰なる女神の寵愛》。それは確かに、その世界における全てに影響し、因果を都合良く書き換える埒外の権能なのだろう。

しかし、だからこそ小次郎は試みたのだ。

——果たしてそれは、異次元から呼び込まれる “ソレ” すらも変えうるものなのか……と。

丑三つ時

「……あの男。一体何のつもりだ……？」

黒乃は先日遭遇した正体不明の伐刀者——佐々木小次郎について調査を続けていた。

剣武祭の傍らという形になる為、完全とは言えない結果ではあったが、それなりの収穫は得る事が出来た。

断片的ではあるが、小次郎の軌跡を追う事は可能であった。

そもそも積極的に隠された形跡も無く、しかし行動の規模自体が小さなものであった為に表に出る事が無かったただけだ。

個人情報は全て偽造。一つとして参考になるものは無かった。

主だった収入源は要人警護。……というには語弊があるが、資産家や暴力組織の護衛——古い言い方をすれば用心棒として雇われ、まとまった金銭を得ているようだ。ここ最近も活動していた痕跡が随所に見られる。

雇っていた者たちも小次郎が身分を偽っていることは気づいていたようだが、一部のものは彼の人外の技量による報復を恐れて、また一部のものは彼の剣技に心酔して、はつきりとした証言を口にする者は居なかった。

しかし少なくとも、佐々木小次郎と名乗る男がこの世界に存在するのは確かなことだ。

……とはいえ、素性の一切は不明。

足取りを辿っていけばいくほど不可解になる。

何処をどう突き詰めても、ある地点から以前が空白となるのだ。

まるで、「突然この世界に現れた」かのような有様だ。

「いや……何を馬鹿な。ともかく、今は目先の問題だ」

佐々木小次郎はここ数日の間に、他勢力の工作員をこの大阪から一掃——と言っても、政治的な問題で投獄し続けることは叶わず、本国

へ強制送還という形を取っているのだが——しつつある。カメラ映像や写真のような決定的な証拠こそ無いものの、現場周辺で度々彼が目撃されている点を見ても、ほぼ間違いない。

血気に逸った危険分子から順を追うように叩き潰されていく。

その様子を見て慌てふためき、不用意な動きを見せた者たちをさらに追い落とす。

結果としてこの状況だ。

各勢力は蹴散らされた人員を上回る手練れを送り込み、それをまた小次郎が狩り尽くす。

この連鎖がもたらしたのは、尋常ならざる腕前の戦士が闊歩する“魔境”と化した大阪だ。

人の絶えない表の剣武祭が終わり、誰もが寝静まった頃に始まるもう一つの闘争。

しかしそちらは、たった一人の男を相手取る“防衛戦”だ。加えてルール無用、裁くものが居ない以上反則などあろうはずもない。

敵は常に単独。拠点についても便宜上のもので、破棄するのは容易い。守りに回る必要は無い。——にも関わらず、どの勢力も後手に回らざるを得ないでいる。

「日に日に手際が良くなっていく……。事を起こす際には、もはや姿すら見せないか……」

成長している……と、分析するのは簡単だが、それはあまりに歪な話だ。

「《比翼》と互角というのは眉唾としても……これだけの事をやってみせる男が、今更“成長”だど？」

鍛錬を重ねて、時間を掛けての成長ならばそれは必然だ。

しかしこの短時間……たった数日のうちに技量を上げることなど有り得ない。

あるいは、劍武祭に出場するような若者達をならばそれも起こり得るが、小次郎はどう低く見積もっても二十代半ばと言ったところ。今になって急速に磨きをかけるというのは、歪という他にない。

「全く……いざとなれば有無を言わず捕らえればいいと思っていたが……」

この力量から察するに、それも簡単にはいきそうもない。

「先日には《風の劍帝》を歯牙にも掛けず返り討ち……黒鉄が師と仰ぐだけはある……」

しかし、一度は相対せねばならないだろう。

こうなってくると《無冠の劍王》の読みに現実味が帯びてくるからだ。

仮に読み通りなら、無警戒は余りに危険極まりない。

既に日が沈み、辺りが暗くなった頃。

ホテル側の公園でトレーニングを行っていた一輝とステラが合流した後、その男もふらりと現れた。

「……相も変わらず、変わった鍛錬よな」

「それ、さつきステラにも言われました」

角材や鉄パイプをコピー用紙で斬り捨てたり、投げたコピー用紙が鉄パイプに突き刺さったりするトレーニングは、確かに変わっていると称する以外に無いだろう。

「そういうアンタは、どういうトレーニングしたら“そう”なるのよ？」

エーデルワイスもまた底知れぬ剣客だが、目の前の男は得体の知れなさという意味ではその上をいく。何しろ、その剣技の一切を見切ることが叶わないのだから。

今日、天音と相対した際にステラが目撃し、一輝に伝わった不可思議な“現象”のことも含めて考えれば、不気味とすら言える。

「なに、特別な事はしておらぬとも。ただ、棒振りよろしく刀を振るっていただけのことよ」

恐らくそれは事実なのだろう。だからこそ凄まじい才としか言いようがない。

本人が我流であり、その理合を説明することも出来ないがために一輝ですら模することは不可能。

まさに、完全なる“無形”の剣なのだ。

仮にそれを習得できていたなら、一輝の剣技はステラと出会った時点で今現在のレベルに近い場所に至っていた可能性もあるのだが。

「師匠、さつきはありがとうございます」

珠雫を天音から助けたことに対してだろう。それに気づかぬほど鈍感ではない。

「ステラから聞きました。最初に割って入ったのは師匠だと」

「気にするほどのことではない。優勝劣敗、弱肉強食は勝負の常ではあるが……あの悪童の行いは下郎のそれであった」

敗者をどう扱おうと勝者の自由。それは確かに勝負事に付き纏う

摂理の一つだろう。

それが間違いだとは口が裂けても言い切れない。しかし、それは決して“外道”を許す理由にはならないのだ。

「純粹に、私が気に食わなかったただけの話……お主に頭を下げさせるような真似はしておらぬよ」

自身を師として慕う一輝は小次郎にとってはこの世界で唯一の“身内”と言えた。人斬りである自分を悪人と断じる小次郎ではあるが、悪党であつても彼には良心がある。

身内が大切に想うものを不必要に踏み躪る行為は、黙って見ているには余りある行いだ。

小次郎にとって珠雫を助ける理由は、それで十分であつた。

「それよりも、せっかくあの首を落とさずに残しておいてやったのだ。お主の手で斬り捨てるがいい、一輝よ」

「ええ、もちろんです。いくら師匠でもその役目は譲れません。このケジメは必ずつけさせます。僕の手で、必ず……!」

静かに闘志を燃え上がらせる。

黒鉄一輝という騎士は激情で闘う男ではない。あるいは、激しい感情をキツカケに強さを発揮する者も居るが、彼は違う。

彼の強さは、常に内に秘められたものであつた。

「さて……そなたらは二人とも、明日の試合があるだろう。ここらで開くでしょう。どちらの相手も一筋縄では行くまい」

「ええ、言われなくとも」

「承知の上に決まつてるじゃないっ」

一輝とステラの誓い。

それを小次郎は知らないが、その瞳の奥……準決勝の先に待つ最強

の好敵手に対する戦意を以って理解する。

なるほど、この二人は出会うべくして出会ったのだろう。

——終生の天敵にして、最愛の人物と。

立ち会うことなく、競い合うことなく。

ただただ剣だけを振るって生き、そして死んだ小次郎から見る二人は、なんとも羨ましく。

そして、目がくらむほどに眩しく輝いていた。

「皇女殿。《風の剣帝》……あの求道者は強かつたぞ。少なくとも、以前のそなたであれば相手にもならぬ程に」

「そんなの、もちろん知ってるわよ。でもね——」

ステラは一輝の足元にあるコピー用紙を数枚、無造作に鷲掴みにして手の内でくしゃりと丸めると。

「アタシは、それ以上に強くなった」

全身の魔力を滾らせ燐光を撒き散らす。

ステラの背に映し出された竜の幻影は、小次郎にとっては何とも懐かしい“騎士”を思い起こさせ。

「とんでもない、な……」

鉄パイプに投げつけられた紙のボールは、それを引き千切るように両断し、奥にあった公園のコンクリート壁にめり込んだ。

凄まじい膂力としか言いようがない。明らかに最初に出会った頃を超えていた。

これでまだまるで底を見せてはいないのだから、期待も膨らむというものだ。

「明日の試合は私が先。一足早く決勝で待っているわよ、イツキ」

ステラの身につけた力の正体。それは明日になれば嫌でも分かることだろう。

現時点で見せただけの力では王馬を破ることは叶わない。だとすれば、さらなる力を見せるのは必然だ。

「あの……ステラ」

しかし。

「格好良く立ち去ろうとしてるところ言いくいんだけど……(こっ)、公共の公園だから……勝手に破壊するのは不味いと思うんだけど……」

「あ、明日市役所に電話して自首するわ……」

この皇女は、どうにもこういう場面でやかさずにはいられないらしく。

「拙者はなんだか、哀しくて涙が出てくるでござるよ……」

「う、うるさいわね！ わざとじゃないってば、しかもアンタ泣いてな(っ)！」

「ではな、一輝。明日の試合……楽しみにしているぞ」

「聞きなさいよおっ!!」

小次郎は公園を立ち去ると、ここ数日で日課となり、夜の住人たちにまことしやかに囁かれる祭りへと赴いて行く。

学生騎士たちの競い合いを観るべく集まっていた人々の往来は収まり、辺りは静寂に包まれた。

湾岸ドーム周辺、その一画に限つての話ではあるが、その時間だけは正しくゴーストタウンとしての様相を取り戻す。

そこを舞台として行われるルール無用の殺し合い。即ちそれは――

―夜の七星剣武祭だ。

「いくら待っても雑魚ばかりかと退屈していたところであつたが……その甲斐はあつたと見える」

幻想形態によつて仕留められ、積み上げられた者たちの……文字通りの“人山”がそこにはあつた。

初めの頃とは違い、全滅とまではいかない。

逃走するものまで斬るつもりは小次郎にはなく、捕らえたものを一纏めにして、気配を殺して獲物を待ち受けていた。

とはいえ、普段はそれに釣られてのこのこと顔を出す雑魚ばかりが掛かるのだが。

――今日だけは違つたようだ。

「佐々木小次郎。手練れとお見受けして――尋常な立ち会いを所望する」

「《解放軍》のヴァレンシユタイン」

《隻腕の剣聖》、ヴァレンシユタイン。

彼はまさしく小次郎が長らく待ち望んでいた人物。

――最上級の強者と言えるだろう。

劍聖

「随分と、好き勝手をしてくれたらしいな……」

《隻腕の劍聖》は、自身が有する巨大な剣を顕現させながら小次郎の間合いまで踏み込んだ。

それは真つ当な劍士の物と比べれば遙かな広大さを誇っているが、小次郎であればその距離を詰めるのは容易い。並の者であれば一瞬のうちに首を刈り取られるだろう。

無論、ヴァレンシユタインとてそれは承知している。珠雫に敗れたとはいえ、それは相性の悪さ故。

彼は劍聖と呼ばれるに相応しい技量と観察眼で、目の前の侍が極まった劍士であることを理解していた。

小次郎は、それを理解した上で迷いなく自身の手の内に入り込んできたヴァレンシユタインに応えるように、物干し竿を構える。

「なに、若人たちの邪魔になりそうな『きな臭い』輩を見掛けたのである。早々に退場願ったまでのことよ」

「吐かせ。貴様は鬪争を愉しんでいる。我々が精銳を送る度に、喜び勇んでいたのだろうか？」

小次郎はその整った相貌に笑みを浮かべる。

実際、その通りと言う他にない。

「初めこそ、露払いなどという建前を使っていたが、今では『ついででしかない話だ。』

見抜かれた……というのは正しくない。元より小次郎に隠す意図などないのだから。」

「返答は不要だ。答えずとも分かる」

ヴァレンシユタインは大剣を構えると、小次郎へと斬りかかる。

片腕とはいえ、その剣戟一つ見ても彼が一線級の剣士であるのは一目瞭然だ。

豪剣と呼ぶに相応しいそれは、彼我の体格差、得物の重量差を第三者の目から見たなら、とても受け切れるものではない。

ならば、躲す以外の選択肢は無くなるどころだが。

あろうことか、小次郎は正面から受け止める。

魔力量で小次郎がヴァレンシュタインと互角以上ならばそれも不思議なことではないが、そもそもその魔力において小次郎は大きく劣っている。

故に、それは純然たる技量によるもの。しかしそれは、ヴァレンシュタインにとっても今更不思議なことではない。

「やはりか。その魔力量はFランク相当だ。貴様、あの《落第騎士》と同じタイプの伐刀者だな。——その剣技、私としても興味がある」
「《隻腕の剣聖》殿に関心を持たれるとはな、恐悦至極とはまさにこの事よ」

小次郎はヴァレンシュタインの大剣を苦もなく受け流すと、返す刀で首筋に斬りかかる。

跳ねるように振るわれた長刀は、しかし敢え無く防がれた。

滑らせるように逸らされた刀身、ヴァレンシュタインは半ば強制的に剣を振り切った形へと持っていかれていた。

刃渡こそ近い両者の得物だが、軽さという面でのアドバンテージは日本刀にこそある。打ち合う際とは異なり、このとき武器の重さはハンデに変わる。

取り回しで劣る大剣では追いつくのは不可能と思われたが、剣聖は当然、己の武器を熟知していた。

大剣を手元に引き、刀身を「担ぐ」ように身体を回転させ、剣の腹で小次郎の一刀を跳ね上げる。

都合、敵に背を向けるような体勢になるが、身体を回した勢いで合間に蹴りを放って牽制。無論、小次郎は難なくそれを躲してみせた

が、致命的な隙を潰すことには成功した。

ヴァレンシユタインは剣を持った右手……右半身を極端に前面に出した構えを取る。隻腕はどう言い繕ったところで弱点だ。

ヴァレンシユタインの腕前を以ってしても、どんなに素早く反応しようとも、左への対応は右のソレに比べてほんの「半瞬」遅れてしまう。

達人を相手にしてその遅れは命取りとなる。

ヴァレンシユタインは未だに小次郎の間合いのうちに留まっっている。否、留まらざるを得ない。

ここで距離を置けば、彼よりも間合いの狭い自身がそのまま捌られることになるのを承知しているからだ。

「」

裂帛の気合いを込めて斬りかかった。

小次郎を相手に生半可な一撃を放つのは即ち、敗北を意味する。塩をくれてやるのと変わらない。

一合、二合と、次々に斬り結ぶ両者の動きは、もはや素人では目で追うことも不可能だろう。

この様子だけ見るならば、彼我に戦力差はなく。

互角の勝負をしているかのように思えるが、その正体はあまりに一方的なもの。

「——なんとふざけた技量だ……！」

実状、斬り合いになっていることこそが奇跡。

剣聖は一太刀合わせる度に命の危機に瀕していた。

己が持つ長い戦闘経験を総動員させ……半ば「勘」にも等しい、しかし確かな洞察眼で補強されたそれにより持ち堪えていた。

現在、ヴァレンシユタインは自身の全魔力を身体強化に当てて何とか対応している状態だ。

そうでなければ小次郎の動きには追いつけない。

小次郎の身体能力は魔力の強化無しに英雄に匹敵する程のものだ。そもそもそのスペックに大差があるために、それ無くしては対応できない。

彼と魔力を使わずに僅かでも立ち会いが出来たのは、今現在のところ誰一人としていない。

あるいは、剣武祭で急成長した一輝や現世界最強の剣士であるエーデルワイズならばその限りではないが。

そのうえ、この侍は。

(この期に及んで本気を見せない気か)

全力であればとつくにヴァレンシユタインは追い込まれている。

ヴァレンシユタインの剣技ではエーデルワイズに迫れないのと同じで、彼の剣技では小次郎には遠く及ばない。

埋めがたい程の隔絶した実力差が、そこにはある。

本気を出さないというのは間違いで、出す必要が無いというのが正しいのだろう。

しかしそれほどの力量、思わず《比翼》を比較に出してしまうほどの大きな力を持ちながら、ヴァレンシユタインの目に映るこの侍は歪であった。

ヴァレンシユタインの審美眼が確かならば、こと経験において言えば、自身が格段に優っていた。

力に見合わない経験値、素直に受け取るならば、驚くべきことにこの剣士は。

(まるで——実戦を経ないままでここまで至ったかのような)

不意に、刃が閃いた。

小次郎は雑念の混じったヴァレンシユタインの剣を隙と見るや、刀で払いのけ、首筋を狙い澄ます。

今や劍聖の手札全てを使ってようやく追いつける程に引き出された劍筋を前にして、余所見をする余裕などなかった。

ヴァレンシユタインは自身の考察を迂闊と断じる。

先の油断以上に、小次郎を試そうなどと考えたそのときこそを、だ。既に対応するには遅く、物干し竿はヴァレンシユタインの首を両断せんと迫り。

「――！」

しかし――劍聖の首が落ちることはなかった。

「……全く私は愚かだった。敵の力を過小に見誤るとは」

かの劍士の力を試すのに、自身の「劍士としての技量」では遠く及ばない。

小次郎が本気であれば、刀を合わせることにすら叶わず、一刀のもとに斬り伏せられていたはずだ。

――故に、全力を以ってして挑む他ない。

「加減はお互いさままだ、無礼とは思わん。しかし、私と純粋な劍士である貴様では相性が悪すぎる。『試す間も無く』殺してしまっただけは我ら《解放軍》に引き込むべき手練れかどうかとも判断できないのでな」
「なるほど、そのような意図であったか。聞き及んでいた劍聖殿の能力を、いつになっても使おうとしなかったのは……」

《隻腕の劍聖》ヴァレンシユタインは、劍士である以前に伐刀者であり。

その能力こそが、彼の戦士としての本質だ。

「貴様の斬撃がどれほど鋭かろうと、私には傷一つ付きはしない」

「……っ」

次の瞬間、小次郎の足元がどうしようもなく不確かなものとなる。

「ほう、堪えたか。それだけでも貴様の異常さが理解できる」

「……面妖な力よな。『摩擦』を操るといふ言葉の意味は解っていたつもりであつたが……中々に厄介なものだ」

摩擦係数ゼロ。

それは通常であれば立つことすらもままならないものだ。

理論上、地面に完全に垂直に力を掛けたならば滑ることはないが、言うは易しとはまさにこのこと。

小次郎はその超人的な体感覚によつて、どうにかそれを保つていた。

涼しげな外見とは裏腹に、内心には確かな焦りがある。

「或いは貴様の能力次第ではそれも覆されていたが……貴様はフランクだ。身体能力強化以外には有り得ない」

物理的な接触の伴う戦闘において、ヴァレンシユタインの能力は最強に近い。

剣技を極め、しかしその為に剣技以外の『何か』を持ち得ない小次郎と彼の相性は——最悪に等しい。

「さあ、どうする『魔剣士』？ この状況、打破できるというならやってみせるがいい！」

もはやヴァレンシユタインに侮りはない。

小次郎がこの悪状況を覆す可能性すら視野に入れて、最大限の警戒を示す。

甘く見ることは出来ない。常識を超越した技術は、高度に整備された現代世界すらも脅かすのだから。

既に《比翼》のイーデルワイスという存在が君臨している以上、他に居ないとは言いい切れない。

「知らぬ間に、随分と買われていたようだな……。しかし、そうか」

正面からの白兵戦において、小次郎は“あの戦争”の中であつても、かの不死身の大英雄を除けば最強に近い存在であつた。

しかし、その誰も彼もが彼を打倒する手段を持ち得ていた。

この無名の剣士は、無名であつたがために弱点が多い。

遠距離からの襲撃には躲し、斬り払う以外の対応策はなく。距離を詰めることができなければ、敗北は必至となる。

搦め手に通じる相手には抵抗することすら危うい。

それは、素直に、根底の感情を語るならば——屈辱にも等しいことであつた。

苦汁を舐め、辛酸を飲み、唇を噛み締めた。

自身の一生では、それ等に及ばなかつたのか……。と。

であれば、さらなる修練を。さらなる苦難を乗り越え。

超えるしかない。上回るより他ない。

サーヴァントであつた以前ならともかく、受肉した今ならば話は別だ。

言い換えれば、“欲”が湧いた。

——自身はまだ、“天下一”になれるのではないか。

超えられなかつた障害を乗り越え、より高い次元へと駆けることも出来るのではないか。

それは、この世界に降り立った小次郎にとっての最初の感情だ。

「打ち破れぬか。——試させてもらおうとしようか」

《隻腕の剣聖》の警戒は正しい。

その強者を見分ける嗅覚は、長きに渡って戦いの場に身を置いた彼のような戦士が持つ、特有のものだ。

この侍は、未だ諦めてはいない。

逆転の一手を秘めている——いや、手繰り寄せようとしている。

それ故に劍聖は全力を尽くし、侍を殺しに掛かる。

劍鬼が追いつくか、劍聖が突き放すか。

この勝負はそういつた追走劇に他ならない。

二人の戦いは詰まるところ——その一点に集約される。

剣士

ヴァレンシユタインの能力は、こと物理的なものに限定すれば攻守ともに万全であり、常識的な価値観で評価したなら——ほぼ、最強に近い。

摩擦を無くせば、銃弾であれ刃であれ、彼の表面をただ滑り抜けるだけに終わり。

大剣が繰り出す斬撃はあらゆる物質の分子の隙間をすり抜け、対象を抵抗なく両断する。

これを破るには本来、自然干渉や概念干渉、因果干渉系の能力が必要となる。

如何に物理的なダメージを防ごうとも、火炎を浴びせられればその高熱に焼かれてしまう。空間ごと破壊するような常識外の一撃ならば物理的な接触を断つ意味もない。

如何に強力な物理攻撃を放とうと、概念的な守りであればそれを通さないだろう。そして因果に干渉する者が相手ならば、必ずしも必殺とは言い難い。

しかし小次郎は、その一つたりとも持ち合わせてはいなかった。

それ故に、選択肢は初めから限られていた。

その一つは撤退である。そして、これは恥じるべき行為ではない。まともに考えれば、実力の上下を無意味にするほどに相性の悪い相手と戦うのは愚行と言える。

通常、相手がヴァレンシユタインであればそれすらも難しいところだが。

「……些か不自由ではあるな。空でも飛べたならともかく、翼も持たぬ我が身では叶わぬか」

二歩三步と感触を確かめるように足を進めると。

無造作に、刀を一振りする。

「不自由だと、よくもぬけぬけと……。軽々しく適応しておきながら白々しい」

摩擦ゼロという極地で刀など振るえば、当然その反動で身体は滑り出し、何かにぶつかるとまで止まることはない。

しかしこの男は、その反動を“地面に対して垂直に逃す”ことによつて容易く克服してみせた。

同じ原理で垂直方向に発生させた力の流れを推力へと変換して歩いたのだろう。傍目にはただ何気無く歩いているようにしか見えなほほど自然に。

理屈だけは解る。どのような膂力であれ受け流す小次郎であれば、その程度の力の流れを操ることなど造作も無いのだろう。

如何なる技術を用いてそれを成し遂げているのかは理解し難いが。なんであれ、小次郎は地面の摩擦係数の有無など、“不自由”と感じる程度の障害としか見ていない。

ただ逃走するだけならば今すぐにでも可能であった。しかし。

「だが、それが出来たところで貴様には私を斬ることは出来んぞ」

元より、強者との果たし合いを求めるこの侍に——そんな“無粋”な選択など出来るわけもない。

小次郎がこの場を去るのは、《隻腕の劍聖》を上回ったその時か……もしくは、力及ばず斬り捨てられた場合のみだ。

劍聖は人として見たなら犯罪者であり、異端者だ。しかし武人として見るならば、やはり一角。

「私には、お前が倒せぬ……か。果たしてそれが真実か、それは決着の暁にはつきりすること」

完成された武人、それこそがヴァレンシユタインだ。

彼は、彼の人生において最強に近しい姿を現時点で曝している。若者達とは異なり——今こそが、この剣聖と斬り合うに相応しい時なのだ。

退くことなど到底有り得ない。

打ち倒し、その屍を乗り越えずしてなんとする。

「困難とは挑むものよ。——なあ、剣聖殿」

摩擦が無効である以上、刃物は刃物としての役割を果たしようがない。

しかし、忘れてはならない。今の小次郎はサーヴァントではなく、伐刀者なのだ。

それを加味すれば、手が無い訳ではない。

「がっ——」

その瞬発力はこの期に及んでさしたる衰えを見せず。

駆け抜け様、物干し竿はヴァレンシュタインの首を斬り裂いた。

しかし、そこには血の一滴足りとも流れておらず。

——ソレと同色の光が、僅かに飛び散っただけであった。

「……ふん、そう簡単に倒れてくれる筈はないと思っていた。易々と決まってしまうては拍子抜けというものよ」

「貴様と同じような考えの者など、これまでごまんと居た。〃幻想形態〃とは姑息な真似を」

「兵法とは、元来姑息なもの。褒め言葉として受け取っておこう」

幻想形態の霊装により精神ダメージを与えて意識を奪う。これならば摩擦の有無は関係ない。そもそも敵対者との〃物理的な接触は無く〃、肉体自体は傷つけずに通り抜けるのだから。

あるいは、能力の性質によっては幻想形態すらも無効化されかねな

いが、劍聖の力はその類ではなかった。

そして、如何に魔力で大幅に負けていようとも身体能力、何よりその技量は人類の規格からかけ離れている。その鋭過ぎる斬撃は、ステラ・ヴァーミリオンの魔力防御すら突破した。

その一刀が、ヴァレンシユタインに通らない筈もない。

単純ながらも、確かな効果を持つ選択肢の一つであったが、ヴァレンシユタインは当然それを見越していた。

彼の長い人生において、それを試みた伐刀者は何人も存在した。命を奪わないことを主目的とした幻想形態を攻性に応用するといふもの。それには事実として効果がある。

手痛い反撃を食らった苦い記憶を糧に、決して意識を手放さないために、決死の覚悟以上の強靱なる意思の力を得るために、半ば拷問じみた精神鍛錬を自身に義務付けた。

しかし、そもそも常人ではヴァレンシユタインに斬りかかることから難しい。

そんな……弱点とすら言えない、僅かな突破口。

強さを至上とするヴァレンシユタインにはそれすらも認められなかった。

どのような苦しみを味わおうとも、その抜け道を潰さずにはいられなかった。

「まさかこの程度の策が貴様の切り札ではないだろうな。だとすれば期待外れもいい所だ」

「なに、小手調べといったところよ」

「それを聞いて安心したぞ。——遠慮する理由が無くなった」

その構えは、ヴァレンシユタインにとって必殺たるもの。

「《山斬り》」

背筋に走る悪寒。小次郎の判断は早かった。

全力での回避。すなわち、形振り構わぬ逃げの一手。目に見えぬソレは、しかし恐ろしいほどの脅威である。

小次郎が直前まで立っていた地面は底が見えないほど深く、そして驚くほど鋭利な斬撃痕が刻まれていた。

「これがお前の……《隻腕の劍聖》の秘剣か。なんと凄まじい斬れ味よ。これならば文字通り、山すらも切断出来よう」

その想定は実に正しく。

《山斬り》は現実に“山”を斬り飛ばした実績がある。

この伐刀絶技に掛かったならば、硬度も規模も全くの無意味。ヴァレンシユタインの能力が届き得る範囲であれば、射程すらも自由に操る。

自身の能力を最大限に活かし、長きに渡る鍛錬によって磨き上げられた必殺の斬撃。

ヴァレンシユタインという武人が完成させた奥義。

謂わば、彼にとつての——究極の斬撃。

「やはり躲すか。Fランクで大した防御を持たない貴様を仕留めるのに、大振りには要らない。細かく、丁寧に——確実に両断する」

一太刀でも避け損なえば、彼の言う通り小次郎の身体はいとも容易く斬り裂かれるだろう。

むしろ、大仰な一撃こそ無用な隙を生む原因となる。

《山斬り》が広範囲攻撃を可能としているとはいえ、それは“線”で話だ。簡単とは言えないが、回避は可能である。

ヴァレンシユタインは小次郎を高く評価しているために、少しでも隙を作るのを嫌ったのだ。

一撃では追い切れない。

だからこそ、いくつもの斬撃を重ね、追い詰める。

「今の私は、《解放軍》のヴァレンシユタインではない。貴様という個人を斬らんとする——『剣士』、ヴァレンシユタインだ」

……或いはそれは、力以外の何物も信じようとはしなかった男の、最期に残った『情念』であつたのかもしれない。

老成に入つた彼の精神は既に凝り固まつていた。

もはやどのように解きほぐそうとも、その偏つた信念とも言えない妄執は振り払えないだろう。それほどまでに腐り果てていた。

今この時、俄かに『人道』に立ち戻つたことすら奇跡と言える。……些か、血生臭い人道ではあるが。

小次郎という異端の剣士を前にして、実力を試すためとはいえ、『剣士』として彼と立ち会つたが故に起こつた、二度とは無い偶然。

「佐々木小次郎を名乗る貴様の正体には、既に興味はない。用があるのは剣の腕だけだ。さあ見せてみる、貴様の本領をな……！」

今この時、彼は《解放軍》の中核たる《十二使徒》ではなく、一介の剣士である。

故に目の前の侍を斬り捨てるべく、純粹な力だけで押し切る道を捨て、先ほど小次郎に言い放つたような『姑息とも言える戦術』すら用いるだろう。

——その戦力は変わらずとも、勝利を手繰り寄せるため執念が違ふ。

必殺の威力を持つ《山斬り》を次々と小次郎に向かつて放ち続ける。その嵐の中を神がかった足捌きで躲す小次郎だが、それは綱渡りにも等しい真似だ。

一度でも身体操作を誤り、態勢を崩したならば、それを復帰させる前にヴァレンシユタインによって細切れにされるのは必然だ。

加えて、決め手に欠ける小次郎には、接敵したとしてもヴァレンシユタインを倒すことができない。

「どうした、佐々木小次郎！ 逃げるばかりで芸が無いぞ！」

ヴァレンシユタインの挑発を気にも留めず、小次郎はひたすらに斬撃を回避し続ける。

迂闊な動きを見せれば、すぐさまヴァレンシユタインは小次郎にトドメを刺すだろう。

しかし、小次郎が逃げの一手を取り続ける限りは、彼も勝負に出ることは出来ない。まかり間違つて反撃を受けたとしてもヴァレンシユタインの能力であれば問題は無いように思えるが、彼は決して楽観視はしない。

一度目、二度目は無事だったとしても、三度目も同じだという保証はない。

予感にも等しい、不確かな危機感ではあるが、無視は出来ない。

この剣士ならばその方が一も有り得る……ヴァレンシユタインはそう考えていた。

「……『振り』を見るだけでは測れぬな。同じ剣筋であっても射程は変幻自在か」

——そして、その予感は実に正しい。

「しかし範囲こそ自在だが……『厚み』はその剣の重ねと変わらぬようだな」

ヴァレンシユタインは未だ剣を納めてはいない。

彼の斬撃は確実に小次郎に狙いを定め、両断せんと迫っている。だというのに、小次郎は足を止め。

「《山斬り》——ここに破れたり」

瞬く斬閃。しかしその軌跡は目では追い切れず。

とはいえ、その現象が如何に不可思議か。

それは《山斬り》の使い手たるヴァレンシユタインこそが、最も正しく理解していた。

「きさ、ま……！　　“受け流した”のか。私が放った、斬撃そのものを……！」

「縁あって不可視の剣を相手取ったことはあったが、飛ぶ斬撃を捌いた覚えは無かったのだな。些か手古摺ったがそれもここまで——もはやその剣、私に届くことはあるまい」

小次郎はただ逃げ回っていた訳ではない。

目視することは叶わず、刀で受ける訳にもいかない……そんな《山斬り》という伐刀絶技の特性のために、小次郎は回避に徹する他なかった。

故に彼は、発想を変えることにしたのだ。

斬撃そのものは見えずとも、《山斬り》によつて“地面や壁、周囲の構造物に付けられた傷跡”は違う。

ヴァレンシユタインの大剣と、《山斬り》が付けた傷跡。

彼の剣が振るわれた時から傷跡が付くまでの時間を測り、斬撃の速度を算出。

それらの情報を元に、《山斬り》のスペックを把握した。

そして、見極められた剣戟など小次郎にとって障害足り得ない。

決して切っ先には触れず。

斬撃の“腹”に剣を滑らせ、逸らし、上空へと打ち上げたのだ。

「……妖怪か、貴様は」

その技量——まさに神域。

人の身に余る行いは、それすなわち怪異に他ならない。

《山斬り》を攻略されたこと自体は、ヴァレンシユタインにとってやはりとも言える出来事。

しかし、まさかこのような人外じみた方法で突破されるとは思いませんよ。

「やれやれ、誰も彼も人を化物の如く……。私は人でしかないのだがな」

「怪しいものだ。怪異の類に“化かされている”と言われた方がまだマシだろう」

ヴァレンシユタインは小次郎へと斬りかかる。彼の判断は早かった。

《山斬り》が効かない以上、今の距離を保ったところで事態が膠着するだけだ。であるならば、大剣本体が届く間合いにまで踏み込まなければならぬ。

かの伐刀絶技は大雑把に言えば剣そのものの延長線ではない。だから、その斬れ味は彼の持つ剣にも宿っている。

単なる直線ではない《山斬り》では届かずとも、手元で操れるクロスレンジでの戦いならば話は違う。

「ぐが……っ!？」

——はずだった。

「技とも言えぬ無様な剣だが、効果は靦面か。しかしやはり……。これでは単なる“棒振り”よな。皮肉ですらないときている」

小次郎の剣は、ヴァレンシユタインの左肩を強かに打ち据えていた。

普段であれば斬撃に回されるはずのエネルギーが、打撃に集約されたその威力は凄まじく、ヴァレンシユタインの身体は半ば陥没していた。

「斬れぬというなら、〃斬らなければよいだけ〃のこと。幸いにも〃
動酷的〃は幾らでもあつたのでな。鍛錬には不自由しなかつたとも」

その言葉を聞いたヴァレンシユタインは即座に理解する。

「寸分変わらず完全なる垂直で打ち込まれる刀……やけに手慣れた一撃
だと思えば——貴様、〃実験台〃にしていたのか。我々《解放軍》と
《大同盟》の工作員を……！」

「《隻腕の劍聖》の話は黒鉄珠雫から聞いていたのでな。あるいはと思
い、丁度良くそこらをウロついていた不審者相手に試してはいたが——
何とも幸運なことよ。待ち望んだ劍聖自身が私の前に現れたのだ
からな」

絶句。しかし、それならば疑問が残る。

「ならば何故、あの一太刀で勝負を決めなかつた……。幻想形態で無
くともあの瞬間であれば、容易く私の首をへし折ることが出来たはず
だ……」

「いや何、お前を倒すのはあの《山斬り》を破つた後と決めていた。も
し仮にあの一撃で決着がついたならば……それはそれで、期待外れと
捨て置くだけのことだったのでな」

あの時、ヴァレンシユタインには僅かな隙があつた。

劍戟のみで遙か格上の小次郎と死合い、精神を疲弊させた後の能力
発動。それは安心から来るほんの短い時間ではあるが、確かに彼の警
戒心は薄れていた。

それを見逃す小次郎ではない。故に、即座に首を断ちに来た。

幻想形態ではなく、たつた今用いた妙技を以つてすれば、確実に息
の根を絶てていただろう。

それをやらなかつた理由は……しかし何とも小次郎らしい。

「く、くく……馬鹿か、貴様は」

罵倒しながらも、ヴァレンシユタインが浮かべるのは笑みである。それを愉快と感じる自身の感情を堪えきれなかった。

「なんと非効率な！ 一方では兵法を語っておきながら、その実、本来であれば最も潰しておかねばならない切り札を正面から打倒するのは！」

「それはそうとも。剣士であれ、槍兵であれ、戦いを楽しむものなど等しく大馬鹿者ばかりであろうよ」

「ふっ、違ういな。しかしこれで決着とは思うな。そう簡単に負けてはやれんぞ」

果たして、それはどうか……そう告げるかのように剣戟を放つ小次郎。

次々と放たれるそれらを、剣で受け、時には躲し。ヴァレンシユタインは——それでも守り切れずにいた。

刃が閃く度に傷は増えていき、小次郎の剣が平時よりも少しばかり鈍つてある上に多少読みやすくなっているために致命的な一打こそ避けてはいるが、それも時間の問題。

剣聖は徐々にその動きに精彩を欠いていき。そしてやがては——。

「楽しいひと時であったぞ、剣聖殿。——これで逝くがいい」

脳天へと吸い込まれるように迫る一閃。

既に防御は間に合わず、回避も不可能。そのタイミングは、実に致命的だ。

だというのに、剣聖の口元は……俄かに歪んでいた。

「——待っていたぞ。この瞬間を……！」

ヴァレンシユタイン、存命。

しかしどうしてそのようなことが起こり得るのか。

その答えは小次郎の手元にある。

「——ッ!？」

冬木の聖杯戦争において。

戦いの場で、ついで小次郎の手から離れることのなかったはずの物干し竿。

それは今やヴァレンシユタインの遥か後方に打ち捨てられており。

「時間を掛けたならば——貴様は恐らく、コレにすら“適応”する!」

故に必殺の一打が放たれるその時まで使わずにおいた。

つまり、ヴァレンシユタインは——自身が追い詰められるこの瞬間すら予感していた。

「霊装自体の摩擦係数をゼロ」にする。

《山斬り》すらも囷として隠し持っていた、ヴァレンシユタインの真実の切り札。

それは小次郎がFランクであり、魔力的な防御が脆弱であったがために可能だった限定的な絶技である。

恐ろしきは、その戦闘勘。

経験を積み重ねてきた彼が、剣士に立ち戻ることで発揮することが出来た危機察知能力だ。

「さらばだ、魔剣士。貴様は終生——最強の敵であった!」

ヴァレンシユタインの身体も既に満身創痍。

故に最後にして、渾身の一撃である。小次郎の疾さを以ってしても既に回避するには遅過ぎる。

それを前に、小次郎は――。

構える。

その手は“空”であり、しかし何かを握っているかのような形を作っている。

侍は常々考えていた。

彼の秘剣はかつての強敵が語った現象に当てはめるなら、一息に斬り払っている訳でもなく。

厳密に言えば、彼の持つ刀が分裂している訳でもない。

――並行世界から呼び込んでいるのだ。自身の太刀筋自体を。

だとすれば、いま彼の考えている真似は不可能なことではなく。現象そのものを客観的に見たとすれば。剣筋を描く軌跡さえ再現したならば。

“この世界の彼自身が刀を持っている必要性はどこにある”？

「秘剣――《燕返し》」

かくして、剣聖の五体は砕かれた。

一の太刀は存在せずとも、二の太刀三の太刀は最速を以って彼の大剣を追い越し、強かに総身を打ち抜いた。

剣聖は完全ではないが故に、平時以上に理解を超えた剣技のカラークを見抜くことは出来なかったが。

自身の敗北だけは確かなことと、理解していた。

「――やはり貴様は、バケモノだ……」

剣聖は血溜まりへと沈み――侍は、闇へと消え失せた。

先達者

「あーあ。せっかく面白そうなことやってると思って来てみたのに……。ヴァレンシユタイン先生もうやられてるじゃん」

フードを目深に被った人影。

僅かに覗く童顔から、それが少年であることが見て取れる。

少年は素足のまま、雨の日にはしやぐ子供のように……しかし、水たまりではなく「血溜まり」へと躊躇なく飛び込んだ。

赤い雫が、ぴしやりと飛び散る。

「わお、グツシヤグシヤ。アハ アハ アハ。胴体なんて半分千切れてるし。いい気味だね、先生！」

死に体の剣聖の姿を見て、少年は声を上げて嗤っていた。

「……でも、なんか気に入らないなあ。満足そうな顔しちゃって」

剣聖の表情は無念に沈んだ人間が浮かべたモノではなく。

実に満ち足りた、憑き物が取れたかのような貌をしていた。

「ムカつくし、とりあえずバラバラにしとこうかな……って、ん？」

少年は顔が血塗れになるのにも構わず、剣聖の胸に耳を当てると。

「……アハ」

次の瞬間、突如剣聖の身体が浮かび上がる。

少年が操る糸の固有霊装。

それが剣聖の身体を、臓物が溢れ出ないように丁寧に、細やかな操作で持ち上げたのだ。

同時に、少年は自らの身体も糸によって浮かび上がらせ、夜のゴーストタウンへと跳ね上がる。

「なあんだ、先生まだ生きてたんだね」

剣聖の心臓は動いていた。

その鼓動は弱々しく、今にも消えてしまいそうなほど微かではあったが。

早急に治療を施せば、まだ助かる見込みはあると少年は判断した。故に速やかに、彼は剣聖の身体を運び出す。しかし、勘違いしてはならない。

この少年は、決して善意で彼を救おうとしている訳ではない。

——この少年が、善意で他人を助けることなど有り得ない。

「このまま死んじゃうよりもさあ。先生は——『ボクに命を救われる方が、よっぽど屈辱的だと思うんだよねえ』！」

悔いもなく死んでいく姿など『面白くもなんともない』。

少年が彼を助ける理由はそれだけだ。

この少年は、およそ良心と呼べるものを持ち合わせてなどいなかった。

「正々堂々の決闘の末に……とかじゃなくてさ。もつと無様に！もつと残酷に！もつと愉快に死んで欲しいんだ、先生にはさ!!」

少年は、誰に語るでもなく垂れ流す。

——自身の胸に宿る、醜悪な悪意の発露を。

「陽気に、愉快に、痛快に！ どうせなら、もつとボクを楽しませてから死んでよね、先生！ アハ アハ アハ!!」

「——さて、これは何の真似だ、御兩人。今から我が弟子の好敵手たる皇女殿の試合が始まる……私としては、無闇に騒ぐつもりもないのだが……」

七星剣武祭準決勝第一試合。

《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンと《風の劍聖》黒鉄王馬の戦い。

ステラにとっては、自身に土を付けた王馬に対する雪辱戦。

世間的には、〴〵いま小次郎の両脇を固めている《夜叉姫》西京寧音と《世界時計》新宮寺黒乃〴〵以来の学生Aランク騎士同士の決戦だ。

小次郎はいつものように会場で試合開始を待っていたのだが。

「そう言うなよ、色男。ウチなんて解説返上して来たんだぜえ？」

「貴様は放置しておくには危険と判断した。——《十二使徒》を打倒できる戦力が連盟の首輪も無しに近所をウロチョロしているような状況では、おちおち観戦もしてられん」

寧音も黒乃も、霊装こそ顕現していないが、警戒心を隠すそぶりすら見せない。

真夜中に行われた二人の剣士の殺し合いは、邪魔こそ入らなかったものの、小次郎が考えているよりも多くの場所で把握されている出来事であった。もつとも、その詳細を知る者は居らず。劍聖の“遺体”も回収されてはいないのだが。

もはや、小次郎は無名の剣士ではない。

《隻腕の劍聖》という世界的に見ても強力な伐刀者。

彼を下したことにより、侍の存在は日の目を見ることとなった。

「剣武祭が終わるまで、私達 “三人” が貴様を見張る。妙な真似は出来ないと見え。 “夜の散歩” も禁止だ」

そう、三人だ。小次郎を見張るのは彼女達だけではない。

「なるほど、やはり通りすがりという訳ではないのだな。——南郷殿」

小次郎達が居る場所から離れた位置。

辛うじて声が届く程度の距離を保ち、《闘神》南郷寅次郎が佇んでいた。

「……つーか、じじい遠くね？ 何してんだよ？」

「むしろ、それはこちらの台詞じゃよ」

そう言つて南郷は、これ以上小次郎に近寄ろうとはしなかった。

彼はその場から動かずに生徒であつた二人の騎士を見やると。

「ワシはここで良い。その男が可笑しな真似をしたら斬り合わねばならんのだろうか？ ワシとしては、平然とそこに居るお前さん達二人の方が信じられんがの」

日本最高齢にして、生ける伝説たる魔導騎士。

彼の眼は、侍が巧妙に偽っている實力を見抜いていた。

否、正しくはこれほどまでに近くで向き合っておきながら正確な實力を悟らせず。尚且つ驚くほど付け入る隙を見せない小次郎の立ち姿から、 “最低限それが実行出来るだけの實力” を導き出したのだ。戦技に長けた南郷だからこそ、とも言えるが……彼からすれば、それを加味しても寧音と黒乃は迂闊過ぎた。

一輝の師匠という肩書き。

並外れて優れた審美眼を持つ《無冠の剣王》が信用できると判断し

た人物。

便宜上見張ってはいるが、本当に事を起こすとは考えていなかったが故の隙であった。

しかし南郷からすれば、彼は全くの他人。得体の知れない、正体不明の伐刀者だ。

恐らくは、真に「明鏡止水」の境地に辿り着いている剣士を前にして、僅かでも油断など見せられはしない。

「その男の間合いの中には、先に得物を抜いたとしても手遅れだろうて。気づいたときには首と胴体が泣き別れとる」

南郷の言葉に、うすら寒いものを感じる二人。

だが、その警告はこの上なく正しいのだろう。

佐々木小次郎は《比翼》のエーデルワイスと同じ種類の伐刀者だ。

——決して、クロスレンジで戦ってはならない相手。

いま南郷が立っている位置にしても、そこは彼が小次郎に奇襲を受けたとしてギリギリ対応出来ると判断した場所だ。

摩擦を操り、物理攻撃を無効化する《隻腕の剣聖》を、あろう事か剣技で倒したと思われる怪人物だ。Fランクの魔力しか持っていない以上、それは間違いなく事実と考えられる。

ならば、技量は比べようもなく劣っていると推測出来る。

故に争うならば自身の伐刀者としての能力を行使しなければならぬが……寧音と黒乃が居る位置では、その前に斬り捨てられるだろう。

彼女らと小次郎の実力に、覆せないというほどの隔絶した差はない。

しかし、この間合いで問答無用の殺し合いを始めたならば勝負は一瞬で決まるだろう。

強者との熾烈な死合いを望む小次郎が、それを実行するかどうかはともかくとして……だ。

「大体お前さん……一体どういう存在じゃ？ お前さんみたいなのが『生きていて良い』のは戦国時代とか、せいぜい明治の初めくらいまでじゃろう？」

小次郎の放つ雰囲気は、この強きを良しとする世界においても異質なものだ。

南郷は、その『違和感』を注意深く拾っていた。

倫理観に多少の差はあれど、ここが現代世界である以上、近代にも届かない時代を生きた人間である小次郎が持つソレとは比べられない。

彼の生きた時代は、今よりずっと命が軽かった。

たとえ立ち合いの経験は無かったとしても、小次郎は本来……そのような時代の剣豪だ。

「——お前さん、まさか……本物の『佐々木小次郎』ではあるまいな？」

もちろん南郷とて冗談のつもりではあるが。

それでも、三割くらいは本気で口にした言葉だ。

それが分かったからこそ、小次郎は思わずといった具合に笑みを漏らした。

「く……くくつ。いや、南郷殿は実に鋭い。当たらずとも遠からずというところか。しかし少なくとも、『本物』の佐々木小次郎で無いのは確かなことだ」

「ひよっひよっ。いい線いっと思っただがなあ」

何を馬鹿なことを……と、女性二人は白けたような視線を向けているが、逆に小次郎にはそれが不思議でならない。

「伐刀者の能力というものは、実に多彩だ。変幻自在にして荒唐無稽。

であるならば、時を超える能力があつても不思議はあるまい。新宮寺殿とて、時を操るであろう？ それと何が違う？」

監視対象であることも忘れて、三人の魔導騎士はつい聞き入つてしまふ。

彼らには長い年月を伐刀者として過ごしているが故の先入観があり、小次郎のように柔軟な思考は出来ない。

だからこそ、少なくとも見た目では二十代半ばから後半であるこの男が、その歳月だけ伐刀者として過ごしてきたはずの男が……自分達とは違い、先入観を欠片も持っていないことを訝しんだのだ。

「まあ、少なくとも私はこの時代へ時間旅行に来ている訳では無いのだがな」

もつとも、〃似たような真似〃を意図せずしてしまったのも確かなことだが、それこそ彼以外には知りようも無い事だ。

「私はこの場を引つ掻き回そうなどと考えるはおらぬよ。そのような無粋は、私の主義に反するのでな」

彼にとって、それは忌むべき行為だ。

正々堂々、尋常な勝負を好む彼は、他人のそれに対しても一定の敬意を持っている。

横槍を入れるなどというのは以ての外だ。

「しかし、そなた達がここで私を見張るといふならそれはそれで構わぬとも。美しい女が二人も侍っているのだ、不満などあろうはずもなかろう」

などと格好はつけたものの、片やは人妻で片やは見た目少女だ。

不満というならその辺りだが、口にすれば人妻の方はともかく少女

の方とは拗れるだろう。

「おっ。なんだよ、中々分かつてるじゃねえか色男」

「おい、分かつてると思うが……美形だからといって間違っても監視対象に入れ込むんじゃないぞ」

「大丈夫大丈夫。ちよつと今晚ウチの泊まつてる部屋でしつぱりとするだけ——」

「それをやめろと言っているんだこの大馬鹿者」

面々は高まつた緊張感を解すために、意図して軽口を叩き合う。

今日この場で強さを競うのは彼らではなく、彼らの辿つた武の道……その後ろに続く若者達だ。

主役である学生騎士達を差し押しして、先達たる彼らが年甲斐もなく逸つていい場面ではない。

「心惹かれる誘いではあるが、今は遠慮しておこう。西京殿は私には勿体無いほどの大輪だが……いまこの時ばかりは、若人達の晴れ舞台故」

小次郎も彼女らの思惑に同調し、声音を穏やかにする。

まあ、とは言つても要するに断り文句な訳だが、風流を良しとする小次郎はストレートな表現を避けた。

「素直に『ガキには興味が無い』と言つてやるのが本人のためだぞ、佐々木」

「寧音は可愛いヤツなんじゃが……如何せん色気はのう……」

しかし気心の知れた仲である二人は、そんな気遣いなどするはずも無く。

寧音の眉間にシワが寄るのは避けられないことであつた。

「だから！　ウチはガキじゃねえつつつてんだろぅがいつもいつも……!!」

険悪な空気が吹き飛ぶ程度には雰囲気や和らいだ面々に、小次郎は苦笑する。

こここのところ、彼の周囲は実に騒がしい。

まだ十代の少年少女を相手にしていたからこそそのモノだと思っていたが、そうでもないようだ。

ここ最近、彼の周囲には急に人が増え始めていた。

この世界を訪れてから数年の時間が経つが、これまで深く関わった人間は一輝一人だけであったというのに……だ。

「いや……何の不思議もない……」

全ては『弟子』のおかげだ。

一輝を中心に、物事は動き始めたのだ。

彼と関わらねば、小次郎はこの舞台に来ることもなかった。

彼と関わらねば、強敵達とこのように穏やかなひと時を過ごすこともなかった。

——彼と関わらねば、『他人の成長』に喜びを感じることもなかった。

「お三方。そろそろ始まるぞ。若人達の決戦の幕開けだ」

自身の脅威に成り得るといっただけの興味ではない。

確かに小次郎は、彼ら彼女らの上達を本心から祝っていた。

それは、いずれ相対する相手に向けただけの味気ないものではなかった。

でなければ……そもそも、『一輝に指導できない自分を悔いる』ことなどあり得なかっただろう。

「……ああ、邪魔など出来るものか」

か細い呟きに、黒乃だけが反応できた。

そんな彼が見せる横顔は、彼女にとって見覚えがあるもので。

(破綻者かと思えば……存外、悪くない顔をするものだな)

まさしく、教え子を見守る——「師」、そのものであった。

竜

程なくして、《風の剣帝》と《紅蓮の皇女》の戦いの幕が上がった。注目のカードではあったものの、その片割れは前回の試合で《鋼鉄の荒熊》加我恋司を、黒乃の能力のおかげで助かったとはいえ——一時は心臓を潰して、殺してみせた王馬だ。

無論、王馬が加我の命を奪おうとまでしたのには理由があり。加我が、王馬にそこまでさせるだけの価値がある騎士であった……というだけの話だ。魔導騎士達の中にはそれを理解し、認めている者も多かった。

一般人である非伐刀者の観客からみれば、ショッキングな光景であったのもまた事実。

立ち上がりも歓声ではなく、沈黙によって迎えられる形となった。

「佐々木。そういえば貴様にはヴァーミリオンが世話になったらしいな」

これも珠雫と有栖川から聞き出した話だ。

なんであれ、黒乃にしてみれば教え子が立ち直る切っ掛けを与えてもらったことになる。

礼の一つくらいは……と、彼女は常々から思っていた。

「ああ、なんかウチも聞いた覚えあるねえ。あれ、アンタのことだったのか」

「どのようにつけていたか……ふっ、それなりに予想はつくな。しかしまあ、感謝されるような謂れはなからうよ。皇女殿には前から興味があった。立ち合いの機会に恵まれた故、それを活かしたまで……」

ステラの成長を望んでいたのは確かだが、それは駄目で元々程度のものではあった。

自身の中に武人としてのものとは「異なる感情」を見つけた今であればともかく、ステラと出会った当初はそのような自覚など無かった。無意識に行っていた可能性も無くはないが……やはりそれは不確かだ。

「あの娘は間違いなく傑物たる器。私などの助言は、必要なかったであらうよ」

ステラ・ヴァーミリオンは、そもそもの有り様が違う。

世界最強の魔力を持ち、尚且つ一国を統べる皇族の一人である彼女は、それ故に誕生した瞬間から常人と同じようには生きられなかった。

しかし、それにより磨かれた精神こそが彼女を支えている。

そう有ったからこそ、高みを目指すために日本へと移り。一輝という異端の好敵手を得ることが出来た。

彼女は、自身の行動によつて自身にプラスとなる「運命」を呼び込んだのだ。

或いは、自身と同じAランクでありながら自身を上回る實力を持った王馬と争い、敗れたことすら。

贗物とはいえ、英霊の資格有りとされた人類最高峰の剣士である小次郎との出会いすら、彼女が引き寄せた可能性もある。

「既に『果て』に至った英雄であれば見たことはあるが……『成りかけ』の英雄というのを見たのは皇女殿が初めてだ。あれは持っているのであるだろうな——天運、というべきものを」

一輝は気質こそ優れているが、生まれながらの英雄とは到底言えず。ステラと出会うまでの間は、彼に比するほどの実力者と相対する機会にも恵まれなかった。

だからこそ、この試合には小次郎も注目している。

何故なら。

「そして、あの『求道者』も持っているであろうな。皇女殿と同じものを……」

——王馬もまた、英雄の器。

その優れた血筋、Aランクの魔力量、強さを追い求める愚直なまでの信念はまさしくそれに相応しい。

ともすれば、純粹に能力的な面だけをみたならステラと並ぶことのできる唯一の学生騎士であるかもしれない。

「そういえば、貴様は黒鉄王馬ともやり合っていたな。はなから目をつけていたという訳か」

「何も、特別なことではあるまい。この世界の誰もがそうであるように、私もそうであったという訳だ」

「謙遜じゃのお。誰もがお前さんのように深くまで理解してはおる訳ではなからうて。ほとんどの者は、額面上の数値だけであの子らを見ておる」

南郷は自身が英傑であるが故に、小次郎と同じくそれを見抜いていた。

戦い合う両者は、強者であることを『目指す』者たちとはまた異なる存在であることを。

そして、二人の英雄が認めた通り、ステラと王馬の勝負は拮抗していた。

それは一撃一撃が、並の伐刀者であれば必殺になり得る強烈なエネルギーのぶつかり合い。若き英雄達は、物理的な衝撃が伴うほどの轟音を響かせながら、剣を合わせ続けていた。

寧音との修練を経て力を高めたステラは、今や上位者であったはずの王馬とまともに打ち合えるだけの地力を得ていた。

しかし、小次郎は知っている。

このまま戦っていたのではステラが勝利することは絶対に有り得

ないということ。仮にも王馬を斬り捨てた経験があるからこそ、それを理解している。

「剣武祭前と比べれば雲泥の差だが……よもや、これで打ち止めではなからう。王馬から見たなら、この程度は誤差に過ぎん」

その言葉通り。

初撃を貰ったのはステラであった。……いや、正確に言うならば、初めに決まったのはステラが放った一撃であった。

しかしそれは王馬を傷つけることが出来ず、袈裟斬りは攻撃としては成立しなかったために彼の斬り返しがオープニングヒットとなったのだ。

まさに、小次郎が想定していた展開そのままだ。

間も無くして、その肉体の真相は王馬自身の口から語られた。

彼の凄まじい肉体強度、膂力の真実……それは何ということもない。

——単にそれだけ、彼の肉体が優れているというだけだ。

「『求道者』とは、小次郎君も上手く言ったもんじゃ。莫大な大気圧を絶えず自身にかけ続け、その負荷に適応することで肉体そのものより強靱に作り変えるとは……。古の僧兵のように厳格な小僧じやの」

『勝利』を求める一輝とは違い、王馬はそれ以上に純粋な『強さ』を追い求めている。

それは勝つための『術』ではなく、一つの『道』である。

そして、その道を欠片も迷わず突き進み、異形とまで称されるに至ったのだから……ストイックの一言に尽きる。

「色男、あんたアレ斬ったんだろ？ 全くどういう剣筋してんだか……」

「私は刀を振る以外に能が無いのでな。斬れなければ話になるまいよ」

文字通り、真実『鋼』に匹敵する肉体を苦もなく斬り裂いてみせた剣技は流石の一言だが。しかし、いま彼の行った『剣帝殺し』は重要では無い。

興味があるのは——ステラ・ヴァーミリオンによる『剣帝殺し』。

「あるいは、その『逆』か。……西京殿、そなたは分かりやすいな。皇女殿の隠し球はそれほどのものか」

この期に及んで、西京寧音は余裕の表情を崩そうとはしなかった。それどころか、齒を剥いて笑い。この展開を待ち望んでいたかのようにも見える。

「そう急かさなくても、存分に見られるさね。王馬ちゃんが強かったおかげで、ステラちゃんもようやく『本気』が見せられる」

彼女は、ステラが勝利することを微塵も疑ってはいなかった。

「さあ、始まるぜえ。——こっからはワンサイドゲームさ」

《紅蓮の皇女》が《妃竜の罪剣》を——自らの腹へと突き立てる。

その時、眩いまでの光とともに、彼女を中心とした熱波が会場全体を覆い尽くした。

「——ッ!!!」

響き渡った咆哮は、少女の喉が奏でるような可憐なそれとは違い。それどころか、この世のどのような生物であれ、放てるはずもない轟音。

いつの間にか、その手に持っていたはずの大剣は消え失せており。

「《紅蓮の皇女》……貴様、その、声は……」

「守りなさい。死ぬわよ」

王馬はすぐさま、予感する。

ステラ・ヴァーミリオンの警告は妥当なものであり。

自身へ向けて振りかぶった拳は、十分に自身を破壊し尽くせる痛撃だ。

王馬は腕をクロスさせ、それに備えたが——次の瞬間、理解した。

「ぐ、は、ああつ、アアツ……!?!」

——肉体を如何に鍛えたところで所詮は人間よ。それを上回る強大な獣が相手であれば歯牙にもかけまい。

(ああ、そうか。これこそが……)

これこそが、かの侍が口にした獣なのだ。

人の世の強者など虫ケラに等しく。築き上げた叡智を蹂躪し。物語に綴られる英雄達ですら策を弄してようやく滅ぼすに至った力の権化。

まさしく、絶対強者の姿であると。

「これが……これが、貴様の正体か、《紅蓮の皇女》……!」

あるいは、小次郎の言が無ければ思い当たることも無かつただろ

う。

彼女の本来の力。それは炎熱を操る程度の生易しいものではなく。

「ええ、そうよ。『概念干渉系』——《ドラゴン》。神話の世界に住まう頂点捕食者の力をその身で体現する能力。それがアタシ、《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンの本当の力よ」

自然干渉系の能力だと誤解される理由であった炎は、単なる『吐息』に過ぎなかった。

彼女の本領は、『竜』という最強の幻想——その化身となり、圧倒的な暴力であらゆるモノを蹂躪し尽くすことにある。

欠片に過ぎない力ですら強大であった身体能力は、従来と比べたなら数十倍にまで高まっていた。

「アタシ自身、まだこの力をコントロール出来ていないの。間違いない、アンタを壊してしまう。もう二度と相まみえることはない。だから、最期にこれだけは言っておくわ。——アンタには感謝してる。アンタのおかげで、アタシはアタシを思い出せた」

既に、その力は自分の対応できるモノではないと……半ば確信にも近い予測を立てる。そして、それは実に正しく。

彼女の膂力、速力ともに王馬のそれを大きく超えており。

霊装である大剣を手放したことなどまるでハンデになっていない。

斬撃は見切られ、ステラの拳は刀の腹を正確に打ち払う。

その度に跳ね上げられそうになる《龍爪》をどうにか保持し、斬りつけはするものの、間合いは確実に詰められていく。

しかし、王馬も易々とは踏み込ませない。

地力で劣っていようと反撃の手段が無いわけではない。

いくら太刀筋を重ねようと、この小竜はものともしない。であるならば、そんなものは初めから捨て置けばいい。

一撃に限ったならば、ステラの膂力も速さも置き去りに出来る自身

が持つ剣戟の極地。

「旭日一心流・迅の極。——《天照》」

筋肉を限界まで絞り、たわめ、背骨の関節すら捻りに加え、半ば敵に背を向ける形から放たれる奥義。

旭日一心流が誇る、全身全霊をかけた最速の剣。

その刃は、音すら生じさせずにステラを斬り裂いた。

一刀に限るとはいえ、《比翼》の領域にまで至った王馬の一撃は、ステラの反応できる範囲を超えており、抵抗なくその身体に傷を付けた。

「——そこおー！」

「ぐっ、うー！」

それでもステラは止まらない。

微塵も退くことなく距離を詰めると、彼女は王馬の脛を蹴り碎いた。

そして気づけば、ステラの身体は傷一つない健常なものに戻っていた。

竜という怪物が秘める生命力は、半端な負傷など苦もなく治癒してみせる。

王馬の一撃など、ステラは初めから脅威とは捉えていなかった。

彼の渾身程度であれば……たとえ届こうとも、彼女にとつては致命傷足り得ない。だからこそステラは躊躇なく踏み込んでくる。

(……しかし、何故だ?)

王馬が訝しんだのは、ステラに対してではない。

同じAランクであっても自分とステラには決定的な差がある。それはさながら、砂金と金塊ほどに大きな違いだ。

たとえそうであっても打ち破る……その覚悟で挑んだ勝負であった。

しかしそれは、とんだ思い違いで。

現実には獅子に追い回される仔ウサギのような有り様だ。彼女と自分の「格」の違いを過小に見誤っていた。

かつて挑んだ世界の頂点……《暴君》と謳われる男に触れることから許されず打ちのめされたときのように、蹂躪されている。

——だというのに、不思議と身体は震えない。

《暴君》に刻まれた恐怖。痛み。この上ない無力感。それらは、さっぱりと消え失せていた。

あの日のトラウマを消し飛ばし、人外跋扈する天上の実力者達を超えるために鍛え抜いてきたというのに。

(……あの男、か)

あの侍もまた目の前の少女や《暴君》と同じ領域の存在であったのだろう。その本領を自身は引き出せなかったが、本来であれば初めの一太刀で自身を斬り捨てることも出来た埒外の剣鬼だ。

思えば自身は、「叱りつけられた」のだろう。

王馬はステラとは真逆の形で視界を狭めていた。

ステラは、力で劣るものの優れた技術を持つ人物に敬意を持てる謙遜さを持っていた代わりに、絶対強者としての傲慢さが足りなかった。

王馬はといえば、大きな才能を持っていたために、幼少の頃より高みを目指す強者としての視点で世界を睥睨していた。《暴君》に敗れても尚それは変わらず、「弱者」としての見方を捨てていた。

そして今、王馬はそんな弱者としてここに居る。

「……あの侍、余計な真似を」

伐刀者としての佐々木小次郎は、まさしく弱者に他ならない。

しかし、王馬はそんな彼に敗れた。思い返せば、傷一つつけられず、情けをかけられる形で見逃されたのだ。

手も足も出なかった。全くの無力だった。

——自身が見捨てた弱者の力が、自身の信じた強者の力を斬り伏せた。

認めない訳にはいかない。認めないのは現実を拒絶する、本当の弱者がする行いだ。

人間とは、そうして弱さを認めることで進歩してきたのだ。

いや、それは違う。正しくは、その弱さすらも加味して——。

「……そうか。そういうことか、あの妖怪め……」

「さつきから、ぶつぶつと。らしくないわね、オウマ」

彼の様子を怪しんだステラは、その豪腕をひと時だけ納めた。今の王馬には、そうさせるだけの雰囲気がある。

「大したことではない。ここに来る前に出会った……馬鹿げた名前の剣士のことを思い出したただけだ」

「……なにそれ、すっごい心当たりあるんだけど」

今ならば、あの魔剣士の真意が解る。

「何処まで言っても俺は人間でしかなかった……。貴様のような化物にはなれなかった」

しかし、そもそもそれが間違いであった。

化け物に勝つには、自分もまた化け物になる他ない。王馬はそう考えていたが、それこそが大きな勘違いだ。

「行くぞ、化け物。貴様には、“人間の力”というものを教えてやろう……！」

そもそも——人間が、化け物に勝てない道理はないのだから。

人のチカラ

「人間の力……ね。面白いじゃない、オウマ。アンタがそんな台詞を吐くなんて。でも、本気なの？」

それはまさしく絶対強者に相応しい傲慢さであり。しかし、確かな怒気を孕んでいた。

「——そんなちっぽけな力で、何ができるっていうの？」

少女は、信じられないとばかりに嘯いた。

かつて自身を破つてみせた一人の男は、王馬が口にした“人間の力を生涯に渡り磨き続けた”“修羅”である。

彼が強くなるためには、それ以外の道を許されなかった……。しかし、だからこそ“心の底から畏ろしい”。

ステラや王馬のような、魔導騎士として桁違いの才覚は言うに及ばず、平凡な一兵卒にすら数段劣る僅かばかりの素養だけしか持たなかった男が……。しかし自分自身を諦めずに、ひたすらに研ぎ続けた巨人殺しの刃。

彼が、この世でもっとも強い“人間”になろうとした証であり。

——彼は現実にその刃を形として、世界に刻みつけてきた。

それに比べれば、王馬の口から出た“力”の……。なんと軽やかで、か細いことか。

今更教えられるまでもない。そんなものは、とうの昔に教えられた。

最愛にして最強、好敵手たる修羅に。あるいは、その師である魔剣士に。身震いするほどの、自身では理解すら及ばない研鑽の数々を。

それらに刻まれた“恐怖心”は——いまだ消えてはいない。

「アンタ如きに、その力を語る資格があるとでも？」

「……どうだかな」

折れた脚、砕かれた腕に大気圧をかけ、即席のギプスで固定し戦力を一時的に回復させながら、王馬は答える。

明確な解を口にしないのは、王馬自身にも分からないためだ。

散々突き離し、一方的に嫌悪し、嘲笑し続けた弱者の力。それが今になって、自身の味方になってくれるものかどうか。

口で言うのは簡単だ。しかしだからこそ。

「それを、この場で証明する……！」

覚悟の言葉とともに。

万に一つ、あるいは億に一つの勝ち星を拾うべく、王馬は駆ける。

竜と化したステラの前で脚を止めることは、即ち敗北……ひいては死を意味する。

技に長けた一輝や小次郎であれば、もっと巧いやり口も思いついたのかもしれないが、少なくとも王馬にはこれしかできない。

攪乱しようなどとは考えていない。否、そんなことは王馬には不可能だ。

所詮、王馬は武骨者に過ぎない。

対策すら不要と断じ、学ぼうともしなかった戦術。この場で下手に複雑な罫を張るのは下策と言える。

生兵法では、目の前の竜は墜とせない。

故に、単純であつても、穴だらけであつてもいい。思いつく限りの手段を全て試す。元より有効かどうかなど、王馬の知識とこれまでの経験では判断できないのだから。

息吹を掻い潜り、爪をしのぎ、顎より生還し続け、その首を落とす機会を探り出す。

戦いの中で——勝利を手繰り寄せる。

「《無空結界》ッ！」

リング上全てを包み込む上昇気流。

その暴風は砂塵を巻き上げながら躍動し、内部の酸素を奪い取る。ステラがどれほど怪物であっても身体構造上は間違いなく人類だ。酸素なくしては生きてはいられない。

風は程なくして、人間の生活圏として不適當となるほどに酸素を上空へと打ち上げるだろう。

それ故にステラは――。

「…………ふざけているの?」

失望を、隠せずにいた。

先ほどまでの王馬であれば、このような“無駄”な技に労力を割くことはなかった。おかしくなったのは、あの戯言を口にし始めたときからだ。

確かにこの技であれば、いずれはステラを行動不能に追い込むことも可能だろう。

しかしそれは、あくまで彼女がこのまま何もしなかった場合に他ならない。

それが分からないほど血迷っているのなら、王馬のそれは口ばかりの悪足掻きでしかない。自身に一度は勝利してみせた、純粋な強さを求めるストイックなあの子であればともかく。

目の前のこの男に、自身の前に立つ資格などない。

「《暴竜の咆哮》」

爆風は、全てを容易く吹き飛ばした。

《暴竜の咆哮》は、魔力の瞬間出力量の上限一杯まで一気に放出するだけの簡単な魔術だ。

しかしそのため、発動は凄まじく早く、威力も高い。

これは、《煉獄竜の大顎》すら食い破る力を持つ《風王結界》であったならいざ知らず……主目的がそもそも防御ではない《無空結界》如

きには防ぎきれない火力であった。

それを理解していたからこそ使わなかったのだろう《無空結界》に、追い詰められたこの場面で頼ろうなどと。

浅ましいにも程がある。

土煙が吹き荒れ、一時的に視界が閉ざされるが、広範囲攻撃を得意とするステラに目くらましなど意味がない。

だからこそ、この策に意味を持たせようとするならば、王馬が襲いかかってくるタイミングは一つ。

「そこおー！」

それは即ち、彼女が広範囲攻撃を放つ直前。

リング上の全てを焼き払われる前に、ステラを斬り捨てるより他ない。

その証拠に、ステラは自身の背中に迫っていた確かな質量を持つ物体を蹴り碎き。

「——なっ!？」

それは、ちょうど人間大に碎かれた“リングの破片”であった。

しまった……とばかりに、ステラは自身の愚を悔やむ。目先の怒りに邪魔され、この策の本質を見誤った。

本来であれば、ステラが破片と王馬を誤認することなど有り得ない。彼女は魔力感知にも優れているのだから。

しかし今は、このリング内には王馬の魔力が不自然なほどに充満している。その上、王馬本人も魔力を隠しているため、居場所の判断が付かないのだ。

《無空結界》とは、そもそもこのための伏線。目くらましというステラの読み自体は当たっていたが、実際の効力はそれ以上。

ステラが放った《暴竜の咆哮》により掻き消され、破られた《無空結界》。しかしそれはそもそも、“初めから破らせるつもり”で張っ

ていたものであった。

王馬は、結界が破壊され魔力が四散するのに紛れるようにもう一つの結界を張ったのだ。

あまりに脆く、気にするのも愚かなほどに弱々しいそれは、しかし確かな効果を示していた。

視界の封鎖以上の目くらまし。それこそが王馬の策略だ。

こうなってはもはや、《暴竜の咆哮》を放つのは愚策である。《暴竜の咆哮》は王馬の結界と周囲に漂う砂煙を吹き飛ばすことは出来るが、彼自身となれば話は別。

他の魔術では間に合わず、咆哮程度では苦もなく突破され、王馬は《天照》で自身の首を取るだろう。

破片と王馬では空気を割く音が異なるため、それを頼りにしようとも考えたが、王馬は仮にも《風の剣帝》。空気抵抗を操るなど造作もないはずだ。

「案外小狡いじゃない、オウマ……！」

そうしている間にも、破片によるフェイントは続く。

王馬にステラの防御を突破できる技があり、尚且つ全てが不意打ちとなるこの状況では、フェイントと分かったとしても対処せざるを得ない。

まかり間違つて彼の間合いに収まったなら、手傷では済まない可能性もある。

しかし、《礫》も無限ではない。持久戦となれば、有利なのは地力で勝るステラの方。

そのことは王馬も分かっているはずだ。そうである以上、彼女が焦る必要はない。

王馬は近いうちに、勝負を仕掛けざるを得ない。それを待ち構え、噛み砕けばいいだけのことだ。

ステラは落ち着いて自身に向けて投げつけられる破片を処理していく。油断せず。スピーディに。円滑に。出来得る限り隙を排して。

その行動こそが、王馬の待ち望んでいたものと知らずに。

「——《紅蓮の皇女》。貴様のその慢心、突かせてもらう」

次々に飛来する破片。それらを隙無く破壊するために、作業的な迎撃となっていたことが仇となる。

別方向から飛んでくる破片に素早く対応するべく背を向けたそのとき。

——砕かれたソレの裏から音もなく襲い掛かる剣士の存在に気づけなかった。

そうして王馬の刃は、寸分変わらずステラの頭上に振り下ろされ。

「……この、化け物が……！」

あろう事か、防がれる。

ステラの魔力は、彼女の五体全てを余す事なく人外のそれへと変質させていた。

それは腕力、脚力に限らず——咬筋力に至るまで。

あまりに非現実的なステラの行動と、それを実現させる非人間的な彼女の能力に、王馬どころか会場中が絶句を余儀なくされた。

そも、凡俗であればその発想すら浮かばない。

そのうえ彼女は、受け止めるだけで収まるほど生易しくはない。

強化された膂力を存分に発揮し、《龍爪》を啞え込んだまま、〃体重400キロを超える〃王馬の身体を玩具のように振り回し、リングに叩きつける。

そうして彼の全身がボロ雑巾のように薄汚れた頃になって、ようやく刃を吐き捨てる。

最後まで刃を手放さなかった王馬は流石という他ないが……。

「その程度でアタシを落とせると思ったら、大間違いよ」

被害は甚大。その一言に尽きる。

両手両脚をへし折られ、肋骨は無事なものの方が少なく。頸椎は重
度の捻挫を引き起こしており、全身余す事なく内出血で赤黒く染まっ
ている。

初めの決意など何処へ行つたものか。

裏を返せば、たつた一つの策を終えることすら出来ないうちに満身
創痍と成り果てていた。

慢心とは、絶対な格差の元に生まれるものだ。

如何にそれを突こうとも、たつた一つでも誤れば、それだけでちっ
ぽけな人間など簡単に踏み潰されてしまう。

「アンタの負けよ、オウマ。もう指一本動かせは——」

しかし、それは屈して良い理由にはならない。

王馬はまたも立ち上がる。もはやこれまでと思われた、その瀬戸際
から。

再び骨格を固定するが、もはや風のギプス程度では収まらず。

《天龍具足》により自身を封印していた際にも等しいほどの圧力で、
全身を無理矢理押し留める。

それは平時ならいざ知らず。

今の王馬の身体では、地獄の苦しみ以上の痛みを伴うが。

その程度の苦しみは、とつくの昔に味わい尽くしている。

「俺の、限界を……貴様が決めるなッ!!」

必殺のための策は、まだ尽きてはいない。否、終わってはいない
”。

ズタボロの身体では既に埒外の筋力を発揮するには足りず。しか
しそれではステラには対抗できない。そして、たとえ普段通りの実力
を引き出せたとしても、彼女とは勝負にならない。

——自然、王馬の身体は求めた。足りない力を補うべく……最適な

太刀筋を、最適な足運びを。

臂力を以ってして可能としていた剣戟を、それなくして可能とし。尚且つ、より鋭利に研ぎ澄まし。

身体はそれを支えるべく、より有効な体捌きを追い求め、躍動する。

王馬という剣士はステラという天敵を得たことにより、此処に来て一層の飛躍を遂げつつあった。

「シィッ！」

斬りかかる王馬に、ステラは眼を見張る。

その太刀筋は先ほどまでの黒鉄王馬のモノではない。刀という武器の特性上、王馬の剣は初めから力任せのソレとは違っていたが、これはそもそも「質」が違う。

むしろそれは、彼の弟である《無冠の剣王》を彷彿とさせ。

「なかなか味な真似してくれるじゃないっ！」

王馬が成長したというなら、ステラもさらにギアを上げるだけだ。後に控える一輝へのリベンジマッチ。それは確かに、ステラにとつてもっとも大事な試合である。

しかし、それに気を取られて敗れたのでは本末転倒。足元を疎かにすれば、痛い目を見るのはステラの方だ。故に、改めて意識を切り替える。

やはり《風の剣帝》は、侮れない騎士である……と。

躲しながら思う。今の王馬の剣からは、試合が始まったときよりさらに隙が減っている。

既に、拳で弾くには少々荷が重い代物と化していた。

「傅きなさい。《妃竜の罪剣》」

腹に突き立てて消え失せたはずの大剣が、再び姿を現す。

これで、決勝戦のために残っていた伏線が無駄となった。これによりあの照魔鏡の如き洞察眼を持つ男にはバレたはずだ。彼は、それに気づかないほど甘い男ではない。

そもそも《竜神憑依》を発動させる際に、霊装を身体に突き立てるモーションなど必要ないことが。

《無冠の剣王》に対する必殺の一手。その一つが潰れることとなったが、構わない。

ステラは会場のどよめきを気にも留めず、王馬と剣を合わせる。

試合前の彼からは予想も出来ないことだが、彼の剣はステラの剣を逸らし、受け流しながら、間隙を突くように斬り返す。

そして、一太刀。また一太刀と合わせる度に彼の剣は洗練されていく。

それはあるいは——技の怪物たる、黒鉄一輝にすら追いつがる勢いで。

「——ッ」

全身が総毛立つのをステラは感じた。

彼女は、誰よりも一輝の力を知っている。そして、誰よりも彼の力を怖れている。

王馬は純粹な剣戟という点に限るとはいえ、そんな一輝に迫りつつある。

彼の技量がこのまま伸び続けたならば、果たして何処まで到達するのか。彼女にとってみても興味がないと言えば嘘になるが——それは恐らく叶わない。

惜しいことに、それを活かせるだけの体力が、王馬には残っていないのだ。

近いうちに、王馬は力尽きるだろう。

その証拠を示すかのように、技の冴えと比例して剣戟からは力が失われつつある。

進歩と衰弱が釣り合っているうちはまだいいが、王馬の体力は既に限界に近い。つまりは、このまま拮抗し続けたとしても、ステラの勝利は揺るがないのだ。

だが。しかしそれを——そんな無様な栄光を、この誇り高き皇女が認められるはずもない。

「アタシの全力を以って、叩き潰してあげるわ。消し飛びなさい、オウマ……!!」

天上にそびえる光の柱がそこにある。

それは、ステラ・ヴァーミリオンという竜が備える最強の一撃。

「《天壤焼き焦がす竜王の焰》——ツ!!!」

触れる物全てを灰燼と化し。空を突き破り、海原を割る灼熱の聖剣。

何人であれ、その規格外の暴力からは逃れられない。

だというのに——この騎士は。

「貴様なら、そうしてくれると信じていたぞ」

その相貌に、俄かに笑みをたたえていた。

それに初めに気づいたのは、観客達であった。

その正体を目の当たりにしたなら、リングにいるステラに気づけな
いのも無理はないと理解できる。

むしろ、ステラだからこそ気づけずにいるのだ。

全身に灼熱を纏い、今まさに天を突く超大な焔の剣を携えた彼女だからこそ、その予兆を見逃した。

——リングに疎らに注がれる程度の“雫”では、彼女に近づく前に蒸発してしまうのだから。

「平賀玲泉とて行ったことだ。よもや、反則とは言わないだろう」

諸君、忘れてはならない。

この剣帝は、人の身であるとはいえ、埒外の魔力を持つて生を受けた魔導騎士。比べる対象が怪物であるために過小に見えたが、それは間違いだ。

——同じ策略でも、その規模は個人の“戦術”の域を大きく超えている。

「叩き斬ることくらいは出来るだろうが、流星の貴様でも……“海”は消し飛ばせないだろう?」

「アンタ、まさかずっとこれを……!?!」

視界と魔力感知の封鎖による奇襲も。飛躍し続ける剣戟も。

王馬は真実、一つの策だけを完成すべく戦い続けていたのだ。

決して気取られることが無いよう……“傷ついたその身を囿”に、
《紅蓮の皇女》を食い止め続けたのだ。

「《月輪割り断つ天龍の大爪》」

ここに来て、二つの風は一つとなる。

王馬が手にする野太刀を基点として巻き起こる幾万の斬風が折り

重なった暴風の剣と、〃湾岸ドームと……そこから程近い大阪湾を結ぶホースの役割を果たす巨大な竜巻〃。

大量の海水を巻き上げ続けるソレと重なることにより、暴風の剣は——天を覆い尽くす〃海流〃の剣と化す。

「勝負だ——《紅蓮の皇女》」

もはや二の矢を継げるほどの余力は残ってはいない。如何にアラシクの魔力量でも、これほど大規模な力の行使である以上、消耗は避けられないだろう。

これこそを〃切り札〃とする。

本来尽くすはずだった策の数々。

それらを使うには、王馬はあまりに傷つき過ぎた。

だからこそ、これに全てをかけることを王馬は決めたのだ。

「受けて立つわ——《風の剣帝》」

そして、ステラは絶対にその勝負から逃げはしない。

解っていたからこそ出来た策、肝心なところで人任せとなる不安定な策略。運の要素が絡む不完全な強さ。

以前の王馬であれば、唾棄して然るべきものだったはずだが。

——今は何故だか。

(爽快感すらある……!)

海流の剣と光熱の剣。

二つのぶつかり合いはしばし続き、そして拮抗することなく。

——両者とも、消滅した。

残ったのは海水が蒸発して生まれた大量の水蒸気だけであり。

リング内の状況は全く見ることが出来ず。

その中央で、王馬とステラは向かい合っていた。

「……どういうつもり。撃ち終わりの隙を狙ったなら、アンタに勝ち目があったはずよ?」

王馬は応えず、ただ笑みを深める。

彼はただ、刀を構えるのみであった。

その様子に、ステラはようやく合点がいった。

そして、この男の筋金入りの馬鹿さ加減に呆れ果てたような顔を浮かべつつ——内心では、それでこそ……とも思ってしまう。

——黒鉄王馬は、この期に及んで小細工による勝利を放棄する。

しかしそれは、人間の力の否定ではない。

「ここで貴様に勝ったとしても、“この俺”では“愚弟”に勝つことはできないだろう」

王馬の予測。それは恐らく、現実のものとなっていただろう。

確かに王馬は策を以ってステラを追い込み、勝利寸前まで辿り着いた。

だが、相手がステラではなく。たったいま王馬が使った人間の力を、生涯磨き続けた男が相手だとすれば。

——敗北は必至となる。

王馬の経験値では、一輝の洞察眼を超えることは出来ないだろう。

彼も成長し続ける以上、その差は永久に埋まらないかもしれない。

しかし、いざその時が来てしまえば軌道修正など出来はしない。ここでステラに勝ってしまったならば、王馬は間違いなくその力に魅入られてしまっていた。

その力を、使わずにはいられなくなってしまうだろう。

「ああ、この力は偉大だ。認めるより他ない」

人の身で怪物を倒してしまうのも無理はない。

強く、誇らしく、輝かしい。その力は希望そのものであり、燻っていた王馬の「可能性」までも引き出してくれた。

どんな時でも、これさえあれば……と、頼ってしまう。だが。

「——これは、俺の目指す強さではない」

そう理解してしまった以上、王馬は掴みかけた勝利よりも信念を取る。世間であれば、馬鹿な男と笑うだろう。

しかし、こんな男だったからこそ、「強さ」を手に出来たのだ。

それに王馬は、何も人間の力を捨てた訳ではない。

ただ少し、考え方を変えたただけだ。

「『鍛え上げ、脅威に備える』のは人間だけだ。それが……俺の導き出したチカラだ」

神話の怪物は、身体を鍛えたりはしない。技を磨くこともない。魔術を磨くこともない。

彼らにとつて闘争とは突発的に引き起こるものであって、痛い目を見た経験を教訓にすることはあっても、鍛錬など行う訳がない。

ならば、来たる決戦のために己を高めへ押し上げるその行為は——まぎれもなく、人が持つ特性の一つである。

数多存在する物語の中には、そのような者も居たはずだ。生まれ持ったものか、鍛錬により後天的に手にしたものかの違いはあれど、確かに存在したはずだ。

剣を持ち、槍を携え、あるいはその拳によつて——竜をも打倒する英傑が。

人のまま、人智の及ばぬ怪物に真っ向から挑む大馬鹿者達の姿こそが、王馬の目指すべき英雄であり。

それを自覚してしまった王馬は、もう止まれない。

「――必ず、貴様を超えてみせる。このちっぽけな……人の身のまま
で！」

既にビジョンは見えている。

《月輪割り断つ天龍の大爪》と《天壤焼き焦がす竜王の焰》がぶつか
り合ったとき、一瞬とはいえ確かに垣間見た。

自身を地の底へ縛り付ける――黒い鎖の存在を。

七星剣武祭準決勝第一試合の結果は、ついに覆ることはなく。《紅
蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンの勝利に終わった。

終わってみれば、ステラは全くの無傷。

試合前と変わらぬ姿のまま、リングを後にした。

しかし、この結果を前にしても尚……彼女の完勝と言い切る者は少
ないはずだ。

「――まさか、オウマチちゃんがあそこまでやるとは……」

「ああ。どうやら以前、誰かさんにせっつかれたのが効いたようだ。

なあ、佐々木。……佐々木？」

「おいおい、どうしたんだよ色男。気分でも悪いのか？」

小次郎は頭を押さえたまま、リングを見据えていた。いや、まぶた
こそ開いているが、果たして目の前が見えているのかは怪しい様子
で。

彼女達が訝しむのも無理はない有り様だった。

「いや……。いや、どうということはない。ただ少し」

ステラの姿——竜となった彼女の姿を見たとき。閉じていたはずの記憶の蓋が、僅かばかりにこじ開けられ。

「——少し、昔のことを思い出していた」

偶然の女神

——復讐の聖女。

竜の魔女と化した聖処女による、祖国へ向けた正当なる報復。偽典でしかなく、現実には起こり得るはずもないそれが形を成したとき、人は揺らぐ。

数多のワイバーンが空を覆い尽くし、人を攫い。時に現れる竜が人を、街を、国を焼き払う。

邪竜の軍勢による絶対の蹂躪。

それすなわち——邪竜百年戦争である。

「結局、王馬ちゃんは最後まで王馬ちゃんだった訳か。勝てない勝負じゃなかったってのに……。確かにアレは「闘技者」ってより「求道者」だねえ」

目先の勝利など捨ててやると言わんばかりにステラと真正面からぶつかり合い、そして砕け散った。

一度は勝利の為に、自身の実弟である黒鉄一輝と同じ力に手を伸ばした。

それは彼の中では革命に近い変化であり。限界に近かった身体でステラを抑えるべく引き出された底力は、一時的とはいえ彼の「最終」に至らんばかりの勢いであった。

しかし彼は、それを自らふいにする。

強さに拘るあまり小さくなっていった視野を広げ、王馬は自身の力を押し上げたが、その本質はまるで変わりはしなかった。

見据える範囲は広がったとしても、その方向までは変えられなかった。

彼はこのまま王道を突き進むだろう。——その手が、頂へと届くまで。

「奴が筋金入りの頑固者なのはよく分かった。なんだかんだと言いつつも兄弟だな。少し方向性が違うだけで大差無いときている。どちらでも馬鹿者なのは確かだ」

「ああ、大馬鹿さね。ウチやジジイとおんなじさ。当然、その侍も」

フラツシユバツクから立ち直り、普段と変わらぬ佇まいを取り戻した容顔美麗なる剣士……佐々木小次郎は、肯定を示すように俄かに笑みを浮かべる。

「なあ、色男。アンタもステラちゃんには勝ち越してるんだろ。——アンタなら、今のステラちゃんをどう制するのか……興味があるんだけどねえ？」

成長を遂げたステラの力は、小次郎が破った中では最も格上である《隻腕の剣聖》ヴァレンシユタインすら力づくで叩き潰すだろう。ヴァレンシユタインに勝ち目が無い訳ではないが、ステラ有能力ならその程度はこなすはずだ。

そのステラを前にして、小次郎はどう動くのか……寧音だけではなく、黒乃や南郷にとってみても興味深いものであった。

「ふむ。皇女殿が相手であれば……そうだな」

別に勿体ぶる訳ではないが、その言葉が寧音の希望に沿ったものは無いと解っていたが故に言を濁す。

そして、少しばかり考えた後に出した答えは。

「——別に、どうともせぬよ」

確かに、彼女の期待したものではなかった。

小次郎は一輝と同じく伐刀者としての才を持たない、この世界でも稀有な強者だ。或いは、彼等以外には存在しない可能性も高い。

だからこそ、彼等の戦術は似通うはずだ。

小次郎がステラを攻略する所業はすなわち——一輝がステラとの試合をどのように戦うか、その予測であると考えたのだ。

そのため、小次郎の答えは期待外れでしかなく。

それどころか、すぐには理解の及ばないものであった。

「どうともしない……とは、どういうことだ、佐々木?」

「どういうことも何も、言った通りのことよ。確かに皇女殿は『竜』なのだろう。その臂力は並の怪物とは比べ物になるまい」

しかし。

「卵から孵ったばかりの雛では、たかが知れる。羽ばたき方も知らぬうちならどうとでもなるというだけの話だ。——ファヴニールほどでは無いであろうよ」

なるほど……と、納得できる部分もある。

ステラはまだ自身の力を目覚めさせたばかりで、完全に制御が出来ていない。その真価を發揮するにはさらなる研鑽や経験値が必要となるだろう。

あくまで、小次郎は正面から自身の技量を以って打倒する。

ステラの『暴力』は確かに驚異的だ。しかし、飛び抜けた『技』というものは度々『暴力』を駆逐する。

小次郎はまさに、その飛び抜けた『技』の使い手であった。

だが、どうしても聴きなれぬ名詞が一つ。小さな声ではあったが確かに。

「ファヴニール……ってのは、何のことだよ? もしくは誰のことだ

よ?」

「……確か、ニーベルンゲンの歌で英雄ジークフリートに退治される悪竜の名前だったか。どうしてその名が出てくる、まるで『戦ったことでもある』かのような言い方だったか……」

無論、本当に戦ったことなどあるはずはないが……と、黒乃。

まさか、この侍が事実として何処かの世界で悪竜を相手に立ち回った『記録』を持つとは知るはずもなく。

「いや何、聞き覚えのあった中で強大な竜の名を出したまでのこと。……しかし、竜種が居ないとも限らぬだろう。この世の全てを解き明かしたわけでもあるまい。人の世と化した現代においても居座り続ける物好きが居るやもしれぬぞ?」

小次郎が言うところの竜種が肉体を持って現存している可能性は限りなく低いが……ここが異世界である以上、断言はできない。

半ば本気で口にしたように思える小次郎の様子に、周囲としては真贋が怪しく思えてくる。

そもそもが正体不明であると言うのに、いちいち思わせ振りの態度や言動で掻き乱してくるため黒乃達からしてみると非常にたちが悪い。

小次郎はその様子に苦笑を漏らし。

「戯言故、気にすることはない。ただ……」

誰が意図した訳でもなく。伝承に記された史実、ましてや幻想ではないが、それは確かに現実として起こり得た結果である。

彼は、その剣戟によって偉業を成し遂げた。

「——竜殺しには、些か自信があるのでな」

「ふむ。やはり予測は正しかったか……」

「……改めて見ても末恐ろしいのお。以前立ち合った時より更に洗練されておる」

《凶運》紫乃宮天音。

彼の持つ《過剰なる女神の寵愛》は、自身に都合の良いヒューマンエラーを偶然に引き起こすことすら可能な強力な因果介入だ。

間合いを詰めようにも足を挫き、あるいは滑らせ。魔術を使おうにも演算が狂い、不発に終わる。

しかし、達人たる一輝には通用しない。

天音の攻撃を躲しつつ徐々にその距離を詰めていき、既に何度も彼の身体に傷をつけている。

天音のそれは、弘法に筆を誤らせ続けることの出来るもの。達人であつても人間である以上ミスを犯す。だが、それを苦しめないのが達人だ。

弘法大師が筆を投げつけることにより足りなかった「点」を付け加え、修正したように。

一輝もまた、エラーを修正し続けているのだ。

天音の幸運だけでは、一輝の必然を躲し切れない。

偶然は不確定だが、必然とはつまり……絶対に等しいのだから。

「幸運なだけで逃げ切れるほど、あやつ劍は鈍ではないぞ。悪童よ」

小次郎にしてみれば、この結果は当たり前でしかない。

一輝の刃はいずれ天音の身体に届き、斬り捨てる。幸運という以外に引き出しを持たない天音ではそれを覆すことは出来ない。

しかし小次郎もまた、天音の《凶運》を見誤っていた。

その直後に彼が「望んだ」願いは、凶悪そのもの。生命活動のエネルギー……強制的な心停止であった。

如何に一輝と言えど心臓が動いていないのではどうしようもない。天音の考えは実に正しく、一輝は地面に膝をついている。

勝利を確信した彼は余裕を持った足取りで一輝にトドメを刺しに向かった。

——それすらも、一輝は凌駕していたとは夢にも思わずに。

《比翼》の剣技を習得した一輝の身体操作のレベルは、もはや自力で心筋を動かせる領域に至っていた。一度動かしてしまえば、あとは心臓本来のセーフティによって機能は復元する。

《過剰なる女神の寵愛》は、この時点で無効となっていた。

命を奪うという究極の因果干渉が覆された時点で、女神は勝利を諦めた。どのような幸運が訪れたとしても、天音では一輝に勝つことは出来ない……と。

その証拠に、天音は一輝の一太刀で致命傷を受けていた。

因果の改変など既に無意味であり、勝敗はついに定まったのだ。程なくして一輝の勝利が宣言される。

試合は、あくまで小次郎に言わせればだが、順当な結果で幕を閉じた。

「心の臓を止めるか、行き過ぎた幸運というのも馬鹿に出来んな。そして、一輝も見事なものよ。止まったソレを再び動かすとは……やはり私は頭が硬い。そのような発想は浮かばなかった」

「普通は思いついたところで出来ないんじゃないやがのう。……お前さんは案外やってしまいそうじゃが」

身内の勝利である。気が緩むのも仕方ないだろう。

観客席という、戦いの舞台から離れた位置に居たことも要因の一つだろう。

四人の伐刀者は、その決定的瞬間を見逃した。

——天音から立ち上る「黒い炎」。それに初めに気づいたのは、選

手である《無冠の剣王》であった。

「——危ないッツ!!」

最初に標的となったのは主審であった。

幸いにも危機を察知した一輝の手で救い出されたが、依然として事態は緊迫している。

天音の身体から出現した、黒い炎の腕。

黒い腕が通り過ぎた場所は風化し、ボロボロに崩れ落ちていった。

それは留まることなく、緩やかな速度ではあるが確実に範囲を広げている。

天音は能力の使用法を切り替えたのだ。

今まで彼は、自身の能力……その副次効果のみを使っていたような状態に等しかった。それだけでも十分に強力であったために。

しかし、今の彼は違う。《過剰なる女神の寵愛》の力を集約し、強制力を最大限に高めたのだ。

黒い腕はまさに死神の手。——方法も過程も無視して、ただ“死”という結果だけを押し付ける代物だ。

「ちっ、最悪だ。対応が遅れた……!」

「ウチが行く、くーちゃん達は観客を守って——」

生徒を守るため、形振り構わないと二人は決めた。既に勝敗が決している以上、介入することに問題はない。

すぐさま寧音は観客席を飛び出そうとするが。

——それを、阻む者が一人。

「割つて入るといふなら……悪いが、通す気はない」

「なんの真似だ、色男！ 返答次第じゃこの場で潰すぞ……!!」

「なんの真似……とは、こちらの台詞だな。——弟子の喧嘩だ、無粋な横槍は無用に願おう」

「はあつ!? こんな時になに馬鹿なこと言つてんだい!？」

小次郎の言葉は、あまりに非常識であった。

寧音も黒乃も戦う者である以上、彼の言うことは理解できる。しかし、状況はそれを許さない。

いま一輝に迫っているものは“死”そのものだ。

試合に勝利した彼に、あれを止める義務など有りはしないというのに。

「馬鹿はそちらであろう。……見よ、あの面構えを。アレが勝負を投げた男の顔に見えると言ふなら、そなた達の目は節穴よ」

直後に巻き上がる魔力の奔流。

《一刀修羅》。自身の全てをたつた一分に委ねる伐刀絶技。

生命の発露と呼ぶべき蒼き燐光は、こちらの不安など全て消し飛ばすかのようで。

「あやつは最後まであの悪童に付き合うつもりだ。それならば、こちらに手を出す権利など無い」

「黒鉄……あの大馬鹿が……!」

黒乃が歯噛みする気持ちも分からないではない。一輝の行動はどう考えても愚か者のそれではしかないのだから。

ここで死ねば、魔導騎士になる夢どころか、人生そのものをドブに捨てることとなると言うのに。

「その大馬鹿者に余計な負担を掛けないために動くのがワシ等の役目

じやろうて。……小次郎くん、無論手伝ってくれるのだろう?」

「構わぬとも。私では、せいぜいアレが迫っている者達を背負って逃げることしか出来ぬがな」

「十分じゃ。お前さんに背負われたなら滅多なことでは死なぬじやろう」

男達二人には、通じ合うものがあつたようだ。

彼らは生粋の武人であり、魔導騎士——小次郎は正確に言えば騎士ではないが——としての色が女達二人とは少しばかり違つていた。

古めかしい……言うなれば、ホコリを被つた師弟の観念。

現代にもそれに通じるものはあるが、それを徹底する者は珍しい。

その少数派こそが、この二人であつた。

「……あー、つたくもう。なんかあつてもウチは知らねえからな!

行こうぜ、くーちゃん」

「今回ばかりはお前と同意見だ。ちつ、馬鹿男どもめ……」

この二人とて、彼らの言うことが分からない訳ではない。

干渉できないと言うのは全くもつてもどかしいことではあるが、そもそもそれを望んだのは一輝本人だ。

邪魔立てするわけにもいなくなつてしまった。

「やれやれ……しばらくはぐちぐち言われそうじゃなあ……。ワシらも行くか、小次郎くん」

「そうだな、ここで油を売つていても仕方なし。一働きするとしようか」

小次郎は、その場を離れた。観戦より、約束させられた観客の保護を優先するためだ。

既に小次郎の目はリングへは向いていない。

何故なら、彼は微塵も疑つてはいないからだ。

自身の弟子を名乗る騎士、《無冠の剣王》黒鉄一輝の勝利を。

夢舞台

《無冠の剣王》黒鉄一輝は、《凶運》紫乃宮天音に勝利した。天音の理不尽な因果介入を物ともせず、圧倒的な差を見せつけての快勝。

試合終了の宣言後に天音が起こした騒動すら、外部の手を借りることなく自らの手で幕を下ろした。

——しかし、その代償は大きかった。

……正確に言うなら、一輝が天音との延長戦に挑まなかったとしても結果は変わらなかつただろう。

天音の解き放った“死”の概念は、一輝が主審を助ける際にその身を掠めていたのだ。その後の戦いで死神には指一本触れられていない以上、それ以外には考えられなかつた。

《二刀修羅》が解けた直後、倒れた一輝の呼吸は停止していた。

すぐさま蘇生は行われたが、事態は難航していた。

心臓を治せば脳が、脳を治せばまた別の場所が。いくら蘇らせようとしても次から次へと症状が増え続けるのではキリがない。

なんとか一輝を死なせずに済んでいるだけで、終わりの無いイタチごっこが続いていた。

《白衣の騎士》薬師キリコは紫乃宮天音が彼女に試合を棄権させるために行った因果介入により、彼女が経営する薬師総合病院がある広島に戻っていた。否、戻らざるを得なかつた。

入院患者全員が危篤状態に陥るといふ、有り得ない事態に対応できるのは日本一の医師であるキリコだけだ。

彼女は魔導騎士である以上に、医者である。患者を優先させるのはやむを得ない判断だつた。

幸いにも、早期に帰還したキリコの奮闘により患者達の命は救われ

た。彼女が駆けつけた以上、その結果は当然のことである。

しかし、彼女も人だ。そのため、休息は必要不可欠。

無理を通して医者が倒れたのでは意味がない。そうなれば、誰が患者を治すのか。

医者の不養生という言葉すら、彼女には無縁のものであった。

束の間の平穩。——それは、唐突に終わりを告げた。

「——薬師殿、説明は後だ。私とともに来てもらおう」

「は？——つて、ちよ？！」

ソファで仮眠を取っていたキリコは、突然窓から現れた男に連れ去られる。来た時と同じく窓の外へと飛び出し、おそらく彼が乗って来たのであろうへりに乗り移った。

横になっていた体勢のまま抱え上げられたのには面を食らったが、キリコは男の険しい表情を目の当たりにして気構えを改める。

「……どうやら、急患のようね」

「ああ、我が弟子の危機だ。最早そなたに縋る他ない」

キリコを下ろし、彼女の正面に向き直ると、男は深々と頭を下げる。それ以外に、出来ることなど無いとばかりに。

「……頼む。私に出来ることなら何であれ叶えよう」

彼に提示出来る、最大限の報酬だというのがキリコには理解できた。

明確な理由など無いが、今この男が口にした言葉は紛れもなく真実であると直感した。

「たとえ救えずとも恨みは……」

「——あまり、舐めないでくれる？」

信念は理解した。真摯であることも直感した。

しかしだからこそ、その言葉は余計である。

それは《白衣の騎士》薬師キリコにしてみれば、侮辱にも等しい台詞だ。

「――死神との戦いに限ったなら、私は天下無双ですよ」

《白衣の騎士》の振るう“剣”は、敵対者を滅ぼすための物にあらず。

患者に仇をなす傷を、病を……彼ら彼女らを脅かすそれ等全てを斬り捨てるためにあるのだから。

一輝の心停止が確認された時点で、薬師総合病院への連絡は既に行われていた。

しかしそれは、“偶然”にも発生していた通信障害の影響で不通に終わる。ネットを介しての連絡を試みるも、“運悪く”薬師総合病院のPCと薬師キリコ本人とスタッフが持つ携帯端末全てが故障を起こしていたため、返事が返ってくることはなかった。

無論、“たまたま”で済む話ではない。

不測の事態はいま挙げただけではない。ありとあらゆる手段を試したが、ついに薬師キリコに一輝の危篤を伝えることは出来なかった。

やむを得ず大阪からヘリを飛ばすが、それも一筋縄ではいかず。機体の多くはトラブルにより発進が困難であり、ようやく飛ばせたのはマスコミの民間機であった。

この民間機にしても、道中に突然飛行能力を有した伐刀者に襲われ

るなど危険が相次いだが。

——行く手を阻む全てが、同乗を志願した佐々木小次郎の手によって斬り払われた。

そして、どうにか辿り着いた薬師総合病院から院長であるキリコを連れ出し、大阪上空へと到着するも。

《過剰なる女神の寵愛》は、依然として一輝の生存を認めてはいなかった。

一輝が運び込まれた医療施設に最も近いヘリポートは寸前に到着した緊急ヘリが使用しており、すぐに着陸できる状況にはなかった。

それ以外に着陸可能な場所と言えば、剣武祭会場のリング等が最寄りになるが、車両が出払っているため、どうしても到着が遅れてしまう。

しかし、それ以外に方法は無いと操縦士が判断した……その時だ。

いまこの場で誰よりも気の立っている男が、とんでもない真似を断りもなく実行に移した。

「薬師殿、しばし辛抱してもらおう。私に掴まれ」

「……ええ、やはりそれが一番速そうね。別に必要ないのだけど……せつかくなので、エスコートをお願いしますね」

彼はキリコを抱えると、ヘリの扉を開け放ち、機外へ躍り出た。

正気とは思えない行動に、操縦士は思わず顔を青くする。上空五百メートル近い高度からパラシュートも無しに飛び降りるといふ行為は、操縦士から見れば自殺以外の何物でもないのだから。

だが、それは常人にしか当て嵌まらない話だ。

小次郎は手近なビルの側壁に飛び移ると、三角飛びの逆の要領で周囲のビルを飛び交いながら勢いを殺し、何事も無かったかのように地面に生還してしまう。

尚、キリコもまた自身の肉体を気化させる能力によって自力で地上に降りることは可能であった。

「佐々木さん。降ろしてください、私も走りま——」
「少し、口を閉じた方がいい。でないと、舌を噛むぞ」

言うが早いのか、小次郎はギアを切り替える。

一般道を走る乗用車など言うに及ばず。およそ生物に似つかわしくない程の速力でキリコの目に移る全てを置き去りにした。

そもそもが数キロと離れていない場所である。

文字通り、瞬く間に一輝が処置を受けている医療施設へと到着した。

(この男、魔力による強化も無しに……?)

戦闘に重きを置いていないとはいえ、キリコは一流の魔導騎士だ。そうであるからこそ、彼女の魔力探知はこの至近距離で魔力の行使を見逃すほど甘くはない。

しかしだからこそその戦慄だ。

目の前の人物は果たして本当に、人間なのかどうか。

すぐそばにいる患者のことを一瞬忘却するほどに、キリコは小次郎に興味を向けてしまう。

「薬師殿、一輝は中にいる。……何としても、救って頂きたい」

「……ええ、もちろんです。誰であろうと、命を救うことこそが私の使命ですから」

それも束の間のこと。

キリコには患者の命以上に優先するものはない。故に彼女は偉大な医師であり、日本一とまで呼ばれているのだから。

——そして宣言通り、彼女は一輝を救ってみせた。

幾たびも迫る死神の手を振り払い。完膚なきまでに斬り伏せる。

《白衣の騎士》薬師キリコは、形はどうあれ紫乃宮天音に対する雪辱戦に勝利した。

未だ目覚めぬ天音に捨て台詞を一つ残し、彼女の意趣返しは完了したのである。

「かたじけない。礼を言わせてもらおう、《白衣の騎士》よ」

通常は親族や学校関係者しか入れない待合室に「あやつの師だ」の一言で医者や看護師を黙らせて、手術が終わるまで居座り続けた小次郎の最初の言葉だ。

普段は飄々としていても、その本質が武人である彼らしい……飾りがない感謝であった。

「いえ、結構ですよ。彼には借りがありましたし。……それに、報酬は頂けるのでしょうか？」

本来であればそんなものを取るつもりはなかったのだが。

「私、貴方に（生物学的に）興味があります。貴方との縁……それが報酬でどうかしら」

佐々木小次郎という存在は異質である。

単純に筋力が優れた人間であったなら、自重の影響であればほどの速度を出すことは困難だ。決して鈍重なわけでは無いが、黒鉄王馬などはその最たる例だろう。

研究者としての一面も持つキリコにとって小次郎は、専門とする分野から少々外れているとはいえ、知的好奇心をくすぐる人物であるのは間違いなかった。

「……ふむ。どういう思惑があるのか知らないが、そんなことで良いのか？」

「ええ、連絡さえ付けば。たまに『診察』させてくれるだけでいいですよ。都合はそちらに合わせますし、たっぷりサービスしますよ？」

冗談を忍ばせる程度には軽い雰囲気だが、その実逃がすつもりは毛頭ない。

そこまでの行為が必要とも思っていないキリコではあるが、最悪“ある程度”であれば“事”に及ぶのも辞さない構えである。

「おお、それは大いに助かる。何しろ身元不明なものでな。何かしらの傷病を負った際は医療費も馬鹿にならない」

しかし見た目は大人びていてもまだ学生でしかないキリコでは、見た目を遥かに超える“年季”を持つ小次郎を翻弄するには至らず。

彼女としても、まさか額面通りの意味で受け取ったとしても小次郎に得があるとは思っていなかったが。

「ふふ……。ええ、もちろん。格安で治療させて頂きます。死んでさえいなければ、どんな傷や病であつてもね」

どうあれ、小次郎の行動範囲に広島が加わったのは紛れも無い事実であつた。

「——ちくしょう………ツ！」

それは、本心から零れ落ちた叫び声であつた。

無人の湾岸ドーム。月明かりが照らすリングには、黒鉄一輝ともう一人……決勝で彼と戦うはずだった人物。ステラ・ヴァーミリオンの姿があつた。

日付は準決勝の翌日。時刻は夜の十一時近かつた。

生死の境にいた一輝が蘇り、目覚めた時には七星剣武祭決勝戦が予定されていた時刻はとうの昔に過ぎ去っており。

それでも尚、脇目も振らずに駆け出してきた会場には、最愛にして最強の好敵手が、ただ一人彼を待ち続けていた。

ただ一言、不甲斐ない。

それが彼の心情である。

自身の足りない力がどうしようもなく恨めしかった。待ち続けた彼女に応えられなかった自身を、殺してやりたいと思うほどに悔しかった。

——しかし、それこそが……ここにいる『全ての者達』が望んだものである。

「その言葉が聞きたかった。謝罪なんかじゃ無い。イツキの心を」

「ス、テラ……?」

「聞いたでしょう! みんなッ!」

彼女の呼びかけとともに、湾岸ドームを包んでいた夜闇が眩い光によって消し飛ばされ。

数万にも及ぶ大歓声と拍手が、一輝の五体を打ち付けた。

——彼の決勝戦は、夢は……まだ終わってはいなかったのだ。

不戦敗などという結果はこの場にいる誰一人として望んではおらず。

会場にいる全員が彼の帰還を待ち続けた。彼の闘志を信じていた。

七星剣武祭決勝戦は、選手両者のみならず。

それを見守る全ての人物の合意のもと、翌日午後七時の開始が宣言された。

学生騎士日本一。《七星剣王》。

期間としてみればほんの短い……しかし、それを思わせないほど濃密な時間が流れた七星剣武祭。

その頂点に相応しい人物が今、決まろうとしていた。

邂逅

湾岸ドームを一望できるホテルのテラス。

《無冠の剣王》と《紅蓮の皇女》の決戦を待ち望んだ、数え切れないほど多くの観客達を見下ろす影が三つ。

「ふははー。見ろ、人がゴミのようだ!」

「何をしている貴様」

どこかで聞いたような台詞を口にしたのは、西京寧音だ。

であるなら、もちろん。呆れた様子で彼女の隣に並んでいるのは新宮寺黒乃である。

「いやほら、高いところから人混み見ると言いたくならない?」

「知らん」

「マジかよ。くーちゃんホントに日本人? なあ、色男もそー思うよなあ?」

「国籍に関わるほどのことか……」

彼女達と向かい合うように立っているもう一つの影。

長髪を夜風になびかせる麗人。若々しい容姿とは裏腹に、老成した雰囲気をも併せ持つ男。

「さて……世間にはほとんど疎いのでな。ただ、日本人ではないが私の知っている男にその手の台詞を好んで使う者は居たな」

「へえ、どんなヤツなんだい?」

「傲岸不遜にして唯我独尊。この上なく傍若無人で、この世の全ては自分のものだと本気で思っている男だな」

「聞く限り最低な男だな……」

「ちよ、その可笑しな男とアタシを一緒にすんなよな!! アタシのは冗談だからな!」

堪らず否定する寧音。そこまで言われるほど酷い冗談を口にした訳ではないので、とぼつちりと言えよとぼつちりである。

しかし、小次郎としても嘘を言った覚えはなく。むしろ、高みから見下ろさずともゴミ扱いしそうであった。

「……まったく、アンタの知り合いってのもロクなのが居ないな」

「ははっ。そう言うな、西京殿。その男は特に人格に問題があったというだけのこと。他は……まあ、『それでもない』でござるよ」

……暗に、ある程度はロクでもないと認めているような物言いではあったが。

「で、わざわざテラスから『乙女の寝室』に侵入してきた理由が……まさか単なる雑談な訳ではないよな、佐々木？」

黒乃の視線の向こうには、紅毛の少女が一人。

明日の試合に備え、力を蓄えるかのように。穏やかに。しかし確かな存在感を放ちながら、ベッドに横たわっていた。

「大したことではない。——明日のお守りは御免被る。要件はそれだけだ」

その意味を、理解していない小次郎ではない。

彼は《連盟》……いや、世界でもトップクラスの伐刀者三人がかりでの監視が必要とされた無類の強者である。

そんな人物が、どの勢力にも属していない……言い換えれば手綱の付いていない状態で放置されている。それを危うく思ったからこそ、仮の手綱……武力によって形作られた『強者の檻』を以って彼を封じ込めた。

だというのに、いま小次郎の言った台詞はそれを真つ向から拒否す

るもの。——叛意あり、と見られても仕方がない。

「そなたらも一輝と皇女殿の勝負を見守るに際して、気にかけるものは多かろう。手間が一つ減ると思つて大目に見てはくれぬか？」

「無茶苦茶言いやがつて……一体なにが目的なんだよ？」

「なに、少々予感があつてな。……待ち人来たれり、といったところか。心配せずとも邪魔立てはせんよ、〃させもしない〃」

ほんの数日の付き合ひではあつたが、黒乃も寧音も小次郎の戦いに対する姿勢……武人としての堂々とした気質は感じ取つていた。

その男が無用な横槍を入れるなどはそもそも思つてもいなかつた。それに加えて警護まで任されてくれると言う。

「……チツ。今回は見逃してやる。後でどうなつても知らんからな」

「いや、かたじけない。言われずとも、これは某の我儘故。やったことのケジメは自分で付けよう」

それだけ言い残すと、小次郎はテラスの手すりに足を掛けて夜の湾岸に姿を消してしまつた。

「良いのかい、くーちゃん？」

「……良い訳あるか……」

これで何かあれば、責任を取らされるのは明白だ。

まかり間違つて剣武祭に影響でも出ようものなら、厳しい処分が下るだろう。

「〃待ち人〃、か……。私の予想通りで無ければいいのだが……」

心の底から忌避しつつも、それが有り得ないものだとは思えず。

もしも〃彼女〃が来るのだとしたら……そして、小次郎と遭遇して

しまったとしたら……そう思うだけで黒乃の胃は悲鳴を上げていた。

「まあ、今更どうしようもねーって。なるようになるさー！」
「……………」

気楽な友人が実に羨ましい黒乃であった。

小次郎は気配を殺し、誰にも気取らせないまま見守っていた。一輝と、彼のために集った学生騎士達を。

ステラ・ヴァーミリオンという竜を相手取るために一輝を選んだ下準備。強敵との立ち合いにより自身を研ぎ澄まし、最高潮のままで試合に上がる。

奇しくも、直前まで力を蓄えることを選んだステラとは真逆の戦法。

「——しかし、それでいい」

地力という意味では一輝はステラに決して敵わない。身体能力にしても、《一刀修羅》を用いてようやく速さで比肩できる程度。

一度きり、そのうえ一分間しか使えない切り札でその調子では話にならない。

だからこそその技術である。

傍目から見れば危うい……方に一つであるそれを、絶対と呼べる領域に持ち上げる作業。

幻想形態とはいえ、試合前日に彼らは本気の斬り合いを演じていた。まともな人間であればすぐにでも割って入るであろう無茶な調整”。危険は承知の上である。

それでも、この程度を超えられないなら今のステラには及ばない。

「……しかし、あの男が来るとはな。しかし『刃引き』も無しとは奴らしい」

駆けつけた騎士の中には、なんとあの王馬の姿まで。

ステラとの試合で高めた剣技。本領を發揮するには少しばかり調整不足のようだが。

彼が強者であることに変わりはない。ここにいる錚々たる面々の中でも抜きん出た実力者だ。

ステラ、一輝に続く強者は間違いなく王馬。つまり、これ以上無いほどに適した調整相手である。

「どうやら私が出る幕は無さそうだ」

テラスから去る時と同じように闇の中へ溶け込む侍。

もはや憂いはない。彼の弟子はその剣を以ってして全てを掴み取るだろう。

——これで、自分のことに集中できる。

七星剣武祭決勝当日。

会場へ向かう人混みから僅かに離れた場所にあるカフェ。

そこには、三人の少女と初老の男。サラ・ブラッドリリー、風祭凜奈、シャルロット・コルデー、月影漢牙。

暁学園が誇る伐刀者三名——シャルロットに関しては正確にはそれに当て嵌まらないが——と、その学園の理事長にして日本の総理大臣たる人物だ。

彼らがそこに集まっていたのは、ある人物を待っているためだ。その知名度故に民衆に見つかれば大騒ぎになる四人だが、サラの《色彩魔術》でその姿を隠蔽し、事なきを得ていた。しかしそれでは、彼らを探す人物もまた彼らを見る事が出来ないはず。

普通であれば、それは正しい認識だ。

だが、これから来る人物には当て嵌まらない。

継ぎ目すら見つけられないほどの群衆を、まるで霞の如く。掻き分けもせず、躲す事もなく。

まるで、無人の野を行くかのように横断する女性が一人。

人波の誰一人として彼女の存在に気づけず。悠然と突き進み、四人の前に辿り着こうとした——その時。

「——《比翼》のエーデルワイス殿とお見受けする」

その名は、世界の頂たる剣士のそれである。

天使のような……そう称するに相応しい、美しい女性であった。何もそれは、姿形に限った話ではない。

立ち振る舞い、その身体の動作一つ取ってみても驚くほど整っている。

そんな絶世の美貌も、認識出来なくては注目を集めることもなく。いま彼女を視界に収められるのは、彼女の許可を得た四人だけ。

——そのはずであった。

「……貴方は？」

「ふむ、些か礼に失していたか。——私は、佐々木小次郎。何のこともない、この身は単なる一介の剣士に過ぎぬよ」

美麗なる相貌。長髪を一纏めにした様は、さながら——否、まさに侍。《巖流》“佐々木小次郎”。

その名を持つ侍ともう一人……二刀と長刀の一騎打ちは、現代にお

いて余りにも有名だ。

《比翼》は動揺を隠すことに尽くした。仮にも『世界最強』と呼ばれる自身に、〃その力量を悟らせない〃この男は。

誰よりも強いと謳われた自身にも読めぬこの男は。

——一体、どれほどの剣士なのか。

「エーデルワイス殿。少し、そなたの時間をいただこうか」

未来

現在、小次郎とエーデルワイスを視認出来ている人物は、彼らを除けばカフェテラスでエーデルワイスを待っていた四人だけだ。

小次郎の気配遮断は正規のアサシン……山の翁のそれよりも劣つてはいるが、遙か格下の者達や一般人の感覚を誤魔化す程度は造作もないことであつた。

月影達四人にしても、武人としての色が強いシャルロットと優れた観察眼を持つサラはともかくとして、他の二名では自力で彼に気づくのは難しかっただろう。

自分と同じくエーデルワイスに用のある一団と判断したため、小次郎が敢えて見逃した……というのが正しい。

「……おい、その男。確かに中々に美しい容姿をしているが……粉をかける相手は選ばねば滅びを招くぞ？」

……しかしこの場合、風祭凜奈のようにその脅威を認識出来ない場合もある。

どうやら小次郎が話した言葉が聞こえていなかったようで。エーデルワイスの美しさに惹かれたナンパ男が、彼女の正体も知らずに声を掛けてきたのだと勘違いをしてしまったようだ。

少し冷静に考えたなら、姿を隠しているはずのエーデルワイスや自分達を認識出来ている彼の異常性に気づけるのだが。

小次郎が強者特有の「分かりやすい」威圧感をまるで発していないため、凜奈には彼を異常とは思えなかったのだ。

「……お嬢様。お下がりにください。その男、尋常ではない！」

気が気でない思いをしているのは当然、シャルロットだ。彼女は状況を正しく認識している。

故に、小次郎という中身の分からない異物に自分の主人が無防備に

近づいていくのを黙って見ていることなど出来なかった。

「そうですね、凜奈は下がっていた方がいいでしょう。……この方は、《比翼》としての私に用があるようだ」

エーデルワイスの言葉を受け、ようやく状況を把握した凜奈は急いでシャルロットの影に隠れる。

事態が緊迫するものと見て非戦闘系の伐刀者である月影もまた他の三人とともに距離を取ろうとするが。

「あつ、一輝のお師匠さま」

……などと、少々看過しがたい台詞が耳に入れば、動きも止まるといふものだ。

現職総理であり、《連盟》の日本支部にも当然影響力を持っている月影だが、彼が小次郎を知らないのも無理はない。実は、目下のところ佐々木小次郎という伐刀者の存在については黒乃の時点で差し止められている。

彼女としても小次郎のことをいつまでも隠し通すつもりは毛頭無かったのだが、剣武祭に影響が出るのを危惧して、報告を先送りになっていたのだ。

小次郎の人格次第ではその場で排除、もしくは拘束することすら視野に入れていた黒乃だが、その必要は無いと判断して彼への対処を監視に留めた。

さらに言えば、小次郎の実力が黒乃の予想を上回っていたため、迂闊に報告出来なかったというのもある。もし仮に《連盟》が敵対の意思を示したなら、剣武祭の続行がいよいよ危ぶまれた。

小次郎を仕留めるならばクロスレンジでは話にならない。大抵の伐刀者は一瞬で首を落とされる。市街地では狙撃も確実性に欠けるとなれば、残る手段は広範囲攻撃。……湾岸ドーム周辺の被害は免れなかっただろう。

「……サラ君。彼が一輝君の師匠というのは本当なのかい？」

「うん。一輝も師匠って呼んでたし」

「なんと……本当に《落第騎士》の師なのか！」

一輝の身辺調査は当然行っていたため、ここに来て新たな事実が明らかになるのは月影としても驚かざるを得ない。指導者が居ないために身についた技術、それが一輝の《模倣剣技》であったはず。それを根底から覆すような存在であれば尚のこと。

「イツキの師……ですか、なるほど。確かに貴方であれば、それも納得です」

エーデルワイスの瞳に映る小次郎は、他の四名のそれとは異なっていた。

彼女の“優れ過ぎた”才覚は、実力の読めない幽鬼の如き侍の実力を、視覚という形で表現した。

——まさに人外。彼女はその立ち姿に、鬼神の影を見た。

実力は測れずとも、魔力の大小は感じ取れる。その魔力量には何処か覚えがあった。

今日、ここに来たのはそもそもソレが目的だ。

「Fランク……そんなところまでイツキと同じなのですね」

一輝と同じく伐刀者としての最低ランク。

そこに位置しているにも関わらず、自身の第六感の小次郎を強者と認識した。一輝は確かに尋常ならざる実力の持ち主だが、今はまだ自身を脅かす程の剣士ではない。

であるなら。魔力に差が無い以上、小次郎は純粋な技量において《無冠の剣王》を上回り——。

「いいでしょう。お付き合います」

世界最強とされた、自身に——《比翼》に匹敵するやもしれない。人知れず、彼女の心はざわめいていた。

「しかし驚いた。噂には聞いていたが、まさかエーデルワイス殿がこれほどの器量良しとは思わなんだ」

——正直な話、拍子抜けも良いところであった。

約束を取り付けるや否や、急ぎではないから剣武祭の終了後に……などと申し出たのだ。

確かに小次郎にとっては愛弟子の試合、それも決勝である。後回しにするのも分からなくはないのだが。

その上、待つことを条件にエーデルワイス達一行に同行させると凶々しく提案してきた。

条件などというものの、彼には不利益のないものだ。無論、彼が何かしでかさない限りは自分達にもそれは無いのだが。

だからこそ、断りにくく。理由を付けようとするのらりくらりと躲かれて。

「そういう貴方は、見た目よりも軽薄な方そうですね」

無駄に身構えさせられたエーデルワイスからしてみれば、小次郎の態度が気に入らないのも仕方がなく。少しばかり辛辣な台詞が多い。それにしても、普段であれば軽く“いなす”程度は出来たはずだが……。

『おや、エーデルワイス殿は苦味は不得手であつたか。コーヒーに四杯も砂糖を入れて……』

『……いえ、そんなことは』

『いやいや、誰しも苦手なものはある。恥ずかしがることはない』

『いえ、断じてそのような事實は——』

『ええー？　ほんとにござるかあ？』

たとえ……。たとえ、ジョークの類だつたとしても実に腹立たしい煽り文句であつた。

これが他の人間に言われたのならそうでもないのかも知れないが、小次郎が言うとは何故だかとてもイラつと来る。表情から言葉運びに至るまで。

この小次郎という男は若々しい姿形でありながら、老練した……所謂“狸じじい”のような一面があるようで、やたらと人をおちよくるのが得意なのだ。

「やれやれ手厳しい。私はただ、可憐な花を愛でているだけだと言うのに……」

「は、花……いえ、そうですか」

このように、齒の浮くような台詞を平然と吐くところも気に食わなかつた。

エーデルワイスは恋愛経験が少ない。本人としては全く許容しがたい事實ではあるが。

本人の望む望まざるは別として、若くして剣士の頂点に君臨してしまつた彼女だ。並の男では釣り合わないどころか、彼女に声を掛けることすら叶わない。必然、経験値に欠ける彼女は魅力的と感じた男性に声を掛けることも出来ない。

もつとも“ある方面”においてはモテモテと言って過言でないのだが、あんなところに出会いを求める気にもなれなかつた。

要は、歳の割りに“ウブ”なのだ。

それが、突然現れた自身と仮定同格たる実力者の小次郎に……対等である男に美辞麗句を並べ立てられていた。

アニメや漫画のヒロインのように容易く恋に落ちるほどエーデルワイスは「チョロい」女ではない。が、それでも小次郎のような滅多に見ないほど美形の伊達男に口説かれるのは、さほど悪い気もなかった。

しかし、居心地の悪さを感じるのもまた事実で。

「……あまり、軽率に女性を褒めるものではありませんよ。薄っぺらに見えますから」

からかわれたことに対する意趣返しもあつてか……。

結果として、チクチクと小言という名の棘を刺すエーデルワイスと今何かしましたか？と言わんばかりに苦も無くそれを受け流す小次郎という、今のような関係に落ち着いた。

「軽率とは人聞きの悪い。女人に……それも美女に向ける言葉だ、偽りであろうはずもない」

「く、口の減らない方ですね……！」

尚、周囲にとつても中々に興味深い掛け合いだったため、その他四名——若干一名は紙と筆まで用意しているが——は静観する構えを取っている。

端的に言うなら、余計な口を出さずに外野席で二人を観察し続けていた。

とりあえず、この二人が口で争ったなら、エーデルワイスの大敗は間違いないだろう……と。

「……ササキ」

「おや。口を聞いてくれるのか、エーデルワイス殿？」

試合会場に赴くまでの間、からかわれたり口説かれたり口説かれたりしたせいで
「拗ねて」小次郎を無視し続けていたエーデルワイスが、ようやく口を開いた。

「ふざけないでください。真面目な話です」

「——どちらが勝つと思うか……そう、尋ねたかったのであろう？」

心中を読まれたことに関しては、さほど驚きはなかった。

小次郎はエーデルワイスとの果たし合いを差し押くほど、この試合に関心を持っている。

それはエーデルワイスも同じだ。通じる部分があったとしても、不思議とは思わない。

「……月並みだが、どちらが勝ってもおかしくはないだろう」

「そうですか。——私は《紅蓮の皇女》の勝利に終わると予想します。少々残酷ですが……定められた「運命」には抗えない」

それを聞いた小次郎は。

「気が変わった。この試合……勝者は一輝だ。『運命』などに屈する男を、弟子にとつた覚えはないのでな」

「……よく言いますね。初めからイツキが負けるなどと思っただけはいいなかつたくせに」

「師匠馬鹿」もいいところですよ、とエーデルワイスに吐き捨てられた言葉に、初めて小次郎が狼狽えた。

一瞬とはいえ小次郎の余裕ぶつた表情を崩せて密かにご満悦の

エーデルワイスは、晴れやかな気分で試合観戦に望むのであった。

「……このようなことが、起こり得るのだな」

ただ一人、誰の手によるものでも無く。真実、孤独のままに剣の頂に立った魔剣士は驚愕を隠せなかった。

他ならぬ、自身の弟子とその好敵手に対してだ。

《無冠の剣王》と《紅蓮の皇女》。

彼らはいま、凄まじい勢いで成長し続けていた。

一秒毎に、いや刹那の間に……その実力を高め合い、強くなり続けていた。

「……貴方は、知らないのですね。貴方ほどの剣士が、いまここで起きていることを知らないと言う……それは、酷く『歪』だ」

エーデルワイスは、試合が始まる以前からこの展開を読んでいた。

そして、小次郎もそれを読んでいるものと思っていた彼女から見れば、それを知らぬと言う小次郎が信じられなかった。

しかし、小次郎がそれを知らないのも無理はなく。

「……私はな、エーデルワイス殿。裕福な生まれではなかった。その日を暮らすので精一杯、『佐々木小次郎』という名を得るまでは呼び名すら持たなかった」

どのような気まぐれか。

矛盾が生じてしまうため、詳細はボカしたままだが……小次郎は自らの身の上を語っていた。

「たまさか山奥で、隠居した剣聖の太刀筋を見て心打たれ、弟子入りしたは良いが……素振りの一つもせぬまま、一月もしたらぽっくりと逝ってしまわれてな。競う相手にも不自由したが……どうにかここまで磨き上げた」

それが凄まじい難行であることが、エーデルワイスには容易く理解できた。

世界最強と呼ばれるエーデルワイスにすら、剣を教えてくれた恩師が居たのだから。

ただ一人で、超人の領域にまで上り詰めた彼は——どれほど極まった才覚を持ち、またどれほど妥協なき修練を積んだのだろう。

「……『好敵手』とは、これほどに素晴らしいものなのだな」

小次郎は今、弟子である一輝の成長を師として大いに喜び……戦士として、見ていて苦しくなるほどに羨んでいた。

しかし、ただただ何の感慨もなく。気がつけば頂に立っただけのエーデルワイスには、『その姿こそが羨ましい』。

武に対して、これほど真摯になれる佐々木小次郎という剣士が。

何の目的も持たず……ただ埒外に強いだけだったエーデルワイスには輝いて見えた。

老成しているなど言うのは甚だしい誤りで、一方ではそういう面を持つというだけ。

小次郎は、今まさに大舞台で雌雄を競っている彼らと何ら変わらな
い。

情熱に満ちた、素晴らしい武芸者の一人だ。

「……ええ。そうですね……」

……だからこそ、残念でならない。

恐らくは、エーデルワイスの感覚が確かならば……自覚もせぬうちに、小次郎は“この世界”を屈服させている。

そんな彼ならば、自分とは違う結果を知っているのではないか……そう思っていたのだが、それは見当違いもいいたころで。

エーデルワイスが予測した一輝の敗北という結果に、変わりはないかった。

——はず、だった。

「ふ……ふ、はは！ 見よ、わが弟子を！——あれはやはり、“運命”如きに膝をつく男ではなかったぞ！」

成長に次ぐ成長は、二人を飛躍させ続けた。

しかし、元より二人には絶望的なまでに差があった。才覚という……自身にはどうしようもない“運命”が。

上限一杯まで伸び代を消費してしまった一輝には、成長を続けるステラを追い切れず。

ついには、《天壤焼き焦がす竜王の焰》の直撃を受ける。

あわや決着か……そう思われたその時。

一輝は、あろうことか《一刀修羅》を使い果たした後にも関わらず、渾身の《一刀羅刹》を発動させたのだ。

それはもはや、魔力量を増加させたと思えない現象で。

そして放たれた、《無冠の剣王》が完成させた究極の斬撃。

自身の影すら置き去りにする神速の抜刀。“魔剣”の領域に限りなく近い一閃。

後に、終の秘剣《追影》と呼ばれるそれが——竜の命脈を断ち切ったのだ。

「…………ええ、賭けは私の負けのようですね。本当に、すごい少年だ」

素直に認めるより他なかった。

思えば、この師にしてあの弟子あり……ということなのだろう。

頂を見据え、現実に限界を淘汰している人物を、ずっと目標にしていたのだ。——運命などという無粋な代物に、負けるはずがない。

読みが浅かったのは自分の方か……と、エーデルワイスは微笑んだ。

「まさか、あの若さで《覚醒》に至るとは」

「…………《覚醒》？」

「貴方はそんな『些細なこと』に頓着しそうにありませんから、簡単に言わせてもらいますが……要するに、自分の限界を超えれば魔力を増やすことも可能なですよ」

エーデルワイスの言葉通り、小次郎にとってはさほど興味の湧く話ではない。漠然と、そういうこともあるのだな……程度にしか考えてはいなかった。

もつとも、あつけらかなと口にしたその言葉に冷や汗を流す者も居ただのだが。

「エーデ……一応それは機密なんだが……」

「問題ありませんよ、彼も《魔人》ですから。もつとも自覚は無いようですが」

「…………な、なるほど。頭の痛い話だ……」

会場に来る途中、黒乃に連絡を取り、小次郎の情報を得ていた月影としては中々に看過しがたい話であった。

少なくとも小次郎の存在が確認できる数年の間、日本国内で未登録の伐刀者が……しかも、《魔人》が野放しになっていたというのだから、偏頭痛程度は仕方のないことである。

「ふむ……そういうえば、そなたは総理大臣であったな。まあ、新宮寺殿に見つかった時点で《連盟》にバレるのは時間の問題、今更気になることでもない……か」

本当に、今更である。

数時間も一緒にいたくせにようやく月影の正体に気がついたのだ。どれだけエーデルワイスに関心を奪われていたのか……嫌が応にも察することが出来る。

「ですが、悪いことばかりではないですよ。彼も、そしてあの二人も……貴方が垣間見た『絶望の未来』を打破する力になってくれるかもしれない。——貴方の献身は、無駄ではなかった」

「そう、思えますか……エーデ？」

「ええ、私はもちろん、私以外の《魔人》たちも、間違いなく——」

この会場に居合わせた《魔人》は、エーデルワイスと小次郎だけではない。世界各国から、導かれるように大きな力を持つ者達が集まっていた。

「誰もが確信したはずです。今この世界に……新たな未来が生まれたと」

目の前に立つ、古の侍と同じ名を持つ男。そして、たった今希望を見せてくれた……彼の弟子である黒鉄家の少年。

ともに、《比翼》が認めた剣士。

「……佐々木さん。エーデとの用が終わり次第、貴方に話したいことがあります。お時間を頂きたい」

「それは構わぬが……確約は出来ぬ。——何せ、首が落ちては話など聞けんのでな」

この世界で……あるいは、史上初。佐々木小次郎という男が初めて放つ『剣気』。

亡霊ではなく、実体として現れた彼が放つそれは、『比翼』の放つそれと比べても何ら遜色がない。

ほんの一瞬だけ解放されたそれは、この会場に集った埒外の強者にもみ拾われた。

「さあ、『比翼』よ。若人ばかりにいい格好をされるのも癪であろう」

歓喜を隠し切れず、口元を歪ませた小次郎は、まさしく武人の貌を浮かべていた。彼と向かい合うエーデルワイス、彼女がそれに対して見せた表情は……果たして、小次郎にしか窺い知れなかった。

——今宵、決戦は一つにあらず。

劍神

佐々木小次郎は、この世界の人間ではない。

“理”すら違う異郷より迷い込んだ放浪者。言ってしまうえば、異物である。

それ故に、彼はこの世界における不利益を持たない代わりに、有益なものも与えられてはいなかった。

しかし、世界に組み込まれた以上は彼も因果の一部である。この星はイレギュラーを認めず、即座に小次郎を自らの流れに巻き込んだ。

——それこそが、佐々木小次郎という名の“伐刀者”の始まりだ。異邦人である彼に、この世界を僅かでも流転させる“運命”が与えられるはずもなく。そもそも彼は、“何の力も持つてはいなかった”。

それでも、世界はその無名の侍を……遂に無視することができなかった。

彼は、定められた運命を享受するような人物ではなかった。定められた“規格”に収まるような器ではなかった。

世界は、人の限界などとうの昔に踏み越えて……さらなる高みを目指すその男の手綱を掴み切れず。

——僅かな可能性すら持つてはいなかった、異端の《魔人》の誕生を許したのである。

「お、お兄様っ!?! その怪我でどこに行こうと言うのですか！ お願いですからやめてください!!」

満身創痍。それ以外に形容できないほど、少年は傷ついていた。そして、それは無理もないことで。

「ステラさんとの試合が終わったばかりなんですよ!？」

実妹である珠雫に引き止められ、擦り抜けることはおろか、振り払うことすらできない体たらく。

体技に優れた《無冠の剣王》が見る影もない。

——しかし、それでも尚。一輝は止まれなかった。

あの時放たれた尋常ならざる「剣気」。

間違はずもない。誰が間違えても、一輝だけは間違えない。

それに込められた「意」。——邪魔立てすれば、斬り捨てる。

常に飄々とした態度を崩さず、それでいて常に武人として振る舞う男。

その彼が、これほど明確な戦意を見せる相手。確認するまでもなく、すぐに見当はついた。

すなわち、《比翼》のエーデルワイス。

ステラとの試合に集中していた為ではあるが、よりにもよって彼女の気配を見落としたのは……一輝にしてみれば未熟という他ない。剣気が放たれるまで、師と《比翼》が並び立つ姿に気づけないとは。

おそらく、会場にいた一部の実力者は《比翼》の存在に気づいていただろう。

だからこそ小次郎は、剣気による警告を行った。割り込みには制裁が待っている……それを誰もが理解したはずだ。その際に相手取るのは《比翼》のエーデルワイスと、それに比する剣士だ、下手な真似は出来はしない。

しかし、それでも。強さを極めんとする闘技者達ならば、見るのは勝手と開き直るのが道理というもの。

一輝もまた、小次郎の弟子である前にそれらと同じ類であった。

自身が最も強いと認めた二人の剣客。両者が相まみえ、その神がかった太刀筋を合わせると……真なる「最強」を決めるといふのだ。のんきにベッドで寝ている場合ではない。

(見逃す馬鹿が何処にいる……!!)

情けなく震える膝に鞭を打ち、壁に身体を預けながら、前へ出る。何度も何度も倒れ、激痛に苛まれようとも一輝は止まらない。

いや——止まるわけには、いかないのだ。

——その立ち姿は、何処か似通っていた。

無構えに近いというのに、尋常でないほど隙が無く。一見すると無造作に見える“握り”だが、その実……秘めた牙の大きさは竜にも勝る。

だというのに、感じられる印象はまるで逆。

一方は苛烈で恐ろしく。それこそ、近づくことすら躊躇われるほどに。どれほど鈍い者であっても、その強さが理解できる。……見方によつては、“自らを危険だと予め教えてくれている”かのようだ。

それに対し、他方は波一つない湖面の如く静まり返っている。底が見えない深みがあるとも知らずに、穏やかな湖と思い足を踏み入れる者も多いだろう。

前者が、仮に警告であったとしたら……分からぬ者にとつてみれば、後者の如何に恐ろしいことか。

比較されることにより、両者の人柄の違いすら露わとなる。まさしく一対の存在。

出会うべくして出会った……そうとしか言い様がない何かを感じさせた。

「比翼殿、ここまで来れば心配もあるまい。力無き者を巻き込むのは私として本意ではない」

初めに口を開いたのは、*「静」*の劍鬼であった。

長髪的美丈夫、佐々木小次郎は既に戦意を隠せずにいた。劍武祭が生み出した活気が届かない工業地帯。そこには資材などが積まれている以外に大した特徴もなく、月明かり以外に光源もほとんど存在しない。

小次郎が口にした通り、周囲の被害を気にする必要のない場所であった。

「……ええ、ここなら文句はありません。そろそろ——口ばかりでないことを証明してもらいましょうか」

今この瞬間にも、曝されるだけで命を奪われそうな程の……否。事実として実力が伴わねば真実、殺しの刃となるほどの殺気を放つ*「動」*の劍神。

神話に語られる戦乙女の如く美しい女、エーデルワイスは霊装を顕現させて小次郎の戦意に応えた。

「そう来なくてはな。——落とせ。《物干し竿》」

常識外れに長大な太刀と一对の西洋劍。形状は違えど、どちらも膂力による破壊を目的とせず、鋭さを旨とする劍だ。

必然的にその斬り合いは、日本刀同士のそれに近くなる。

「」

意外にも、膠着は微塵も起きず。

互いに読み合いの上では有効打が奪えず、さりどてどちらも相手の一手に見切りをつけていた以上、不思議なことではない。読みは何処まで行っても読みでしかなく、実際に劍を合わせるまでは空想でしかないのだから。

両者ともに、相手を強者と認識していたが故に。仮想での打ち合い

では測りきれないと判断したのだ。

三振りの刃が織り成す閃光の嵐。傍目にはそう表現する他にない。並の戦士ではもはや体捌きすら追い切れず。

絶えず鳴り続ける金属音だけが、二人の手元に剣が握られていることの証明である。

初撃こそ加速を必要としないエーデルワイスの剣が先に届くかと思われたが、如何なる術理か……小次郎の長刀はそれを迎撃。

加速を済ませ、流れるように繋がれる剣戟の速度は、エーデルワイスのそれを上回り。二刀を以ってしてようやく互角に持ち込める超音速の速度域に達していた。

その間合い故、弧を描く軌道を取らざるを得ず、本来ならば初撃を除けば如何に速度で上回ろうとも後手に回らされる《物干し竿》だが、使い手の空恐ろしい技量によつて弱点は見事に消え失せており、槍にも等しい凶悪なリーチが存分に活かされていた。

エーデルワイスは《物干し竿》の間合いから脱出出来ず……正確には、留まらざるを得ず、前に出る形で二刀を振るい続けていた。

もし仮に間合いから逃げ出したなら、刃渡りの差が歴然であり、彼の技量に大きな開きがない以上消耗は必至。罅り殺しの目に合うのは時間の問題だ。

彼女に許されたのは、この間合いにおいて小次郎という剣士を打ち破ることだけだ。

しかし、エーデルワイスの勝利への道筋は果てしなく遠く。手数に勝るはずの彼女の二刀が、侍の長刀を弾くための盾として「使わされていた”。これでは如何にアドバンテージがあろうともそれを活かさない。

懐に潜り込もうとしても、その度に意外なほど重い剣戟が放たれ進軍を阻む。押し留められるばかりで両者の間合いは一切変化しなかった。

一見しただけなら互角の立ち合いに見えるが、本質的に言えばそれは語弊がある。

それは大きな差ではないが、それでも現状に明確な結果として表れ

ていた。

ほんの少しの……しかし、確実に存在する——埋めがたい実力差。エーデルワイスの技量は、僅かに小次郎のそれに劣っていたのだ。だからこそ、攻勢に移ることが出来ず、防戦一方を強いられていた。彼女の思惑は何一つとして上手くいっていない。

急加速により人間の動体視力を置き去りにする《比翼》の剣技。しかしそれも、この魔剣士の心眼を誤魔化し切ることは出来ず。

副次効果的に発生する真空波すら、剣をぶつけ合う際に抵抗なく斬り裂かれ、意味を成さなかった。

《無冠の剣王》の秘剣のように特殊な変化を加えた斬撃を織り交ぜたところで、容易く対応され、むしろ余計な動作は隙を生む結果に繋がった。

一輝のようなりスクのある「秘剣」を放つこともなく。無構えの邪道剣術であるとはいえ、小次郎のそれはただただ理解しがたいほどに高次元に纏まった「普通の剣技」であるため……いや、だからこそ付け入る隙がない。

何物も並び立つことが出来なかった自身を、さらに上回る無名の侍。

エーデルワイスの驚愕は計り知れなかった。

無論、「その程度」のことで平静を乱す彼女ではない。

実際のところ、劣っているといっても僅かな差であり、防戦に徹しているとはいえ拮抗しているのもまた事実。

殺し合いを始めたその時から忌避した膠着状態が、今まさに作り出されていた。

ラチがあかない。

このまま斬り合ったなら、丸一日程度なら苦もなく続くだろう。千日手とはまさにこのことだ。

「ふ、はは……素晴らしきかな、比翼の剣技。純然たる「技」のみで私と殺し合えるそなたは、古の「英雄」達と比べても何ら遜色がない……！」

あるいは、技量においては彼らを上回るかもしれない。

なにせ、《十二の試練》という不死性を持ち、能力的にも白兵戦において最強格である大英雄ヘラクレスならばともかく。正面からの戦闘は、同じく大英雄であるクー・フーリンですら避けたのだ。

神話すら超越した剣士である小次郎は——ともすれば、人類最強の一人に数えられる。

防戦とはいえ、その彼と同じ土俵で互角に持ち込めるエーデルワイスの技量がどれほど神がかっているかは言うまでもない。

「……貴方の弟子にかつて、世界の広さを知れと言った。今にして思えば、とんでもない傲りでしたね。彼は既に、頂の高さを知っていたのですから」

火の出る暇もないような、超速の殺人剣舞。それなり程度の使い手では、割って入ろうとするだけで細切れになるだろう。

ことも無さげに言葉を交わす二人だが、この嵐の中でそれを行える平常心は、常人の理解を超えていた。

「頂点は私ではなく、間違いなく貴方です。しかし、『最強』の称号まで易々と譲る気はありません」

ただの『剣士』として比べたなら、佐々木小次郎こそがこの世界の頂点である。

他ならぬ『現』頂点からのお墨付きだ。疑う余地はない。

少なくともエーデルワイスの見てきた中に、小次郎を上回る者は存在しない。そうでなければ、とつくの昔に彼女は頂点などでは無くなっていた。

「私達は『伐刀者』だ。——貴方には、その部分が欠けている」

堂々巡りは、突如破られた。

小次郎の身体は弾き飛ばされ、間合いは大きく開いた。その距離、10メートルはくだらない。

それでも小次郎にとつては一息で詰められる距離。間合いの外とは到底言い切れないが……それは、エーデルワイス以外の者に限られる。

「貴方の身体能力、技量……どちらも大凡人間のそれとは思えないほど優れている。しかし後者はともかく前者は並外れたものではありません」

エーデルワイスの身に魔力光が立ち上り。そして即座に収束を始め、ぼんやりと身体を覆う程度の薄つすらとしたものになる。

「その程度の身体能力であれば、魔力を用いたなら造作もなく再現……いいえ、上回ることは難しくない」

言うが早いか。間合いを詰めるエーデルワイスの速度は小次郎に匹敵し。

「技で勝てないなら力づくで……『闘争』とはそういうものでしょう？」

その一撃は、明らかに彼を超えていた。

「なるほど。……それは確かに真理だ。そなたの類稀な技量ばかりに目が行って、本質を見落としていた。伐刀者である前に剣士……そう思っていたが、その逆も然りか」

「別段、卑怯なことでは無いでしょう？」

「おうとも。仮に卑劣な技であったとしても、殺し合いに兵法は付き物だ。正々堂々などとは言ってられん」

暗に、脅威だと認めておきながら苦もなく回避した侍は薄い笑みを湛えた。

尋常な勝負を好む彼ではあったが、敵に正道を求めるほど甘つたれてはいない。

勝つために策を弄するのは当然のこと。それを卑怯と罵るなら、勝つために「事前」に行う鍛錬すら謀の類となる。

「早々に追い込めるとは思いませんが……ジリ貧ですよ。」

音速の域に足を踏み入れた体捌き。それに加えて剣速にはさらに磨きがかかり、最高速度においても小次郎のそれを上回った。

小次郎が追いつけないほどの速度で襲い来る神速の剣戟。神域の技量で対応するも、徐々に間合いを詰められ——ついに。

「——ようやく一太刀。これだけやってもかすり傷が精一杯ですが」

達人を超え、神の領域に足を踏み入れた二人の戦いに分かりやすい派手さはない。

剣筋を読ませない小次郎と、読まれてもなおお上をいくエーデルワイズ。余程決定的な何かが起こらない限りは、趨勢が極端に傾くことはなく。

しかしそれでも——世界「最巧」の剣士に届かせた一刀だ。

見た目には頬から血が一滴垂れる程度の軽傷であったが、悔ることなかれ。万全の彼に剣を届かせたのだ、その意味は非常に大きい。

不可視の剣すら紙一重で見切る男。間合いを読み違えることなど天地がひっくり返っても有り得ない。

——かすり傷であっても、その一撃は実力で彼を上回った証左なのだ。

「今ならば、イツキと《紅蓮の皇女》の放った「熱」を本当の意味で理解できます。——確かに、これは得難い感動です」

エーデルワイスの頬に、高揚からほのかな赤みが差す。

白い肌にのった紅はよく目立ち。穏やかな口調に似合わぬ、凄絶な笑み“は——ある意味では正しく——彼女を戦女神に幻視させた。

五分と五分……あるいは、それを上回る強敵。

強いというだけなら、小次郎以上の人物も居るだろう。だが、こうまで純粹に剣技を競い合える相手など……今までただの一人も居なかつた。

エーデルワイスは鬪争を愉しんだことは無かつたが——磨き上げた技量を存分に発揮出来る。解放できるというのは、快感にも等しい行為であつた。

小次郎の剣技はエーデルワイスが見当を付けた以上に、彼女を上回っており。故に、身体能力を補強しただけでは足りない……はずだつた。

——ミックスアップ。

ボクシングの世界には、そんな言葉がある。互いに実力が拮抗し、尚且つスタイルが非常に上手く、〝噛み合う〝選手同士が試合の中で成長を遂げる現象のことを指す。

一輝とステラが試合中に実力を高め合ったのもまた、それと同じ理屈だろう。

そう……エーデルワイスもまた、自身を成長させることにより実力差を縮めたのだ。

技術とは、進歩するに連れて高めるのが困難になる。実力に反比例して伸び幅は狭まるのである。エーデルワイスの領域であれば、実力を紙一重伸ばすだけでも、掛かる労力は計り知れない。

故に——平時ならともかく、極度の興奮状態も相まって——成長を実感出来ずにいたのだ。

「感謝します、ササキ。貴方のおかげで、私の〝剣〝にも意味が出来ました。貴方は私の初めての〝好敵手〝です」

エーデルワイスは、求めていた。

「でも」

エーデルワイスは、乾いていた。

「貴方はまだ、 “こんなもの” では無いのでしょうか？」

エーデルワイスは、飢えていた。

「無論だとも。夜はまだ長い……我らの逢瀬は、始まったばかりであろう？」

「——ああ、やはり貴方は素敵な方だ」

さしたる信念もなく最強の座に収まってしまった彼女は困難を……生きる理由を、意味を見失っていた。

故に、常にそれを求め、悩み、苦しんでいた。

——それをこの侍は、いとも容易く吹き飛ばしてくれた。

「さあ続けましょう、ササキ。貴方なら……私から離れたりしないでしよう？」

誰も彼も、彼女の才覚に置き去りにされた。誰も彼も、彼女を追いかけてはくれなかった。それは、修羅である一輝も同じだ。彼は強くなったが、彼女はそれ以上に強くなっている。

実力差は、今なお開き続けていた。

しかし、それはきつと——この男には当て嵌まらない。

ミックスアップとは……そもそも一方通行の現象では無い。それでも一方にだけ進化が起こったのだとしたら。

「こちらの台詞だ、比翼殿。私の深奥——力づくでこじ開けてみせる

がいい」

いまだ、侍の真価は発揮されておらず。

互角と思われていた勝負には、決定的に足りていない要素が存在した。

それすなわち——秘剣である。

剣鬼

果たし合いに一切の揺らぎ無し。

魔力放出によって底上げされた身体能力により、技量の差を埋め、攻め手に回ったエーデルワイスだが、いまだ小次郎を仕留めきれずにいた。

大きな差ではないが、形勢は確実に逆転しており。細かい傷を付けることもあつたが、それでも攻め切れずにいたのには理由がある。

謂わばそれは、攻撃的防御。

命は断てずとも一撃……あるいは深手を。そのような場面は幾つもあったが、それは食らいつくには少々リスクの大き過ぎる毒入りの餌でもあつた。

その一撃が決まれば、確かに勝負の明暗は分かれるだろう。

——引き換えに、自身の命が取られることになるが。

「貴方は本当に、恐ろしい人だ」

小次郎の反射速度は常軌を逸していたが、速度域そのものは——トップレベルに位置する伐刀者に限るが——比較的常識の範疇だ。

故に、如何に速く反応しようとも動作が追いつけない超速の剣の嵐によって攻防一体の檻を成していたエーデルワイスだが、決して余裕がある訳ではない。ほんの少しでも動作を誤れば、小次郎は即座に剣を翻し、彼女の首を落とすだろう。

僅かでも隙があつたなら、そこを突かざるを得ず——その一撃だけは、確実に小次郎に読まれてしまう。

そこに置かれているのは相打ち覚悟の必殺の太刀。そのため踏み込みを緩める他なく、有象無象の剣戟と成り果てる。

「二番煎じ故、風情には欠ける代物だが……中々、悪くはないであろう？」

「いえ、とんでもない。素敵ですよ」

一進一退。否、引くに引けず、出るに出来ない……といったところか。

一つ間違えただけで、文字通り首が飛ぶような斬雨の中。

二人はまるで睦み合うかのように語らった。

互いに……自身の土俵で互角の戦いが演じられる、ただ一人の人物だ。

終ぞ、誰とも競うことなく事切れた侍と。全てを置き去りにし、望まざる頂点に君臨した劍姫。

生い立ちの違い。時代の違いはあれど、どちらもその極まった才覚により、孤高となることは定められていた。

少なくとも、「劍」という分野において彼らに並び立てる者など、人類史全てを見渡しても数える程度にしか存在しないだろう。

——その稀有なる人材が、どのような偶然か……時代を超え、世界を超え、巡り合ったのだ。

たとえ殺し合いの中であっても、この短期間の内に二人の間には絆のようなものが芽吹いていた。あるいはそれは、血縁のそれよりも厚い信賴関係で。

一撃必殺の刃を突きつけながらも……殺意ではなく、憎しみではなく、互いに「情」で剣を振るっていた。

故に、ぐだぐだと、四の五のと。のんびんだらりと言葉を交わし。両者とも、歓喜の下に剣を振るっていた。

「——凄い」

ただ一言。

彼はその言葉以上の物は、口に出すことが出来なかった。

しかし、その言葉が出るだけでも彼の技量が凄まじいものであることが理解できる。

その感動は——《無冠の剣王》黒鉄一輝だからこそそのものと言える。ロングショットから見ても、並の伐刀者では捉えることの敵わない速度で振るわれる剣技。

だが見えたところで、理解できないという点に変わりはない。

七星剣武祭決勝戦……一輝とステラの試合であれば、極まった技術、極まった臂力のぶつかり合いとして、誰しもが美しいと感じることが出来た。

しかし——目の前の殺し合いは既に、そのような次元の話ではなかった。

未熟な者には何が優れているのか、何故勝負が成立しているのか理解できない。

やたらめったに斬り合っているだけのように見えて、その実嵐のような剣戟全てが並の相手なら一瞬でなます切りに出来るような代物。それが今なお進化し続けているのだ。

事実、自身の付き添いとして来た珠雫と、彼女のたつての願いでついて来てくれた《白衣の騎士》薬師キリコにはこの立ち合いの全容が測れなかった。

二人は伐刀者としてはともかく、武芸者としては達人の域には達していない。それではあまりに不足。

この戦いに戦慄するには、最低でも達人と呼ばれるレベルに居なくてはならないのだから。

傷のことなど、一輝の頭の中からはさっぱりと消え失せていた。もはや痛みも認識していない。

そして、思わず誇らしくなった。

何せ自身が定めた頂点は、世界が認めた頂点と真つ向から張り合っている。

目指す頂は——回り道などではなかったのだ。

勝負の行方は一輝にもまるで読みきれなかった。このままエーデルワイズが追い落とすようにも思えるが、それでいてふとした瞬間に

小次郎の刃が閃くのでは……。

それは根拠も何もない、所詮は想像に過ぎないもの。結局のところ、全くの予測不能であった。

(だけど……)

足りていない。この戦いの中には、一輝の持つ情報にある内、決定的に足りていないものがある。

以前、ステラが彼に語った「怪異」。

増える刀身の謎は、いまだに解けぬままである。

あまりに洗練されているという点を除けば、何処までも基本的な技術を以ってしてあの場に至ったのが、一輝の知る佐々木小次郎という剣士だ。

その彼が振るうとされる「魔剣」。——勝敗を決するとすれば、あ
るいは……。

「……………」

「どうしました?」

黙りこくりに、穏やかな表情のままエーデルワイスを見つめる小次郎に、彼女は訝しんだ。

これが単なる殺し合い、果たし合いでしか無いなら、むしろ今までのようにべちやくちやと馴れ合う方が不自然であったのだが、そもそも前提から異なっている。

「いや何……名残惜しいのだ、比翼よ」

この素晴らしい時間が、終わりを迎えようとしているのだから。

「……そう、ですね。それは私も同じです」

両者とも、体力に欠ける訳では無い。

しかし全力の戦闘は、彼らから容赦なくスタミナを奪っていく。戦況は五分、増してや超音速という、およそ人が存在できる限界を超えた領域での勝負だ。

おそらくは、互いに継戦能力を徐々に失い、失速していき……今すぐでは無いが、緩やかな決着を迎えるだろう。

どちらが先に力尽きるか……それは、もはや当事者たちにすら判断できない。

「——やめだ」

小次郎は、ふいに刃を納めた。

ギャラリーからしてみれば正気の沙汰とは思えなかったが……現実、エーデルワイスは小次郎を斬り捨てることなく二刀を停止させた。

実際のところ、二人の勝負は競い合いであり。相手を殺すことを最終目的とはしていない——死んでもやむなしとは思っていたが——以上、二人の間では当然のやり取りであった。

「どういうつもりか……聞かせてもらっても？」

とにかく、エーデルワイスが不機嫌になるのも仕方がない。

それは突然お預けを食らい、斬り合いを愉しんでいた彼女の意思を蔑ろにした形となったのだから無理もなく。

納得のいく理由が無ければ、到底許せるものではなかった。

「このまま、山も谷もなく雌雄を決するのは……あまりに無様である

う」

全力が出せなくなった相手を斬って何の意味がある。

小次郎は、暗にそう告げていた。

で、あるならば。

「次の一合——全身全霊をかけた刹那の決着を望む」

一瞬の……しかし、華々しいひと時こそを侍は提案した。

「——受けて立ちましょう」

決断は早かった。

戦乙女が紡いだ言葉には、一切の淀みなく。

納得いくか否か、その以前に。自身の前に立ちはだかる剣士の全身全霊が見られるというのだから、断る理由などありはしない。

もはや待てぬとばかりに、エーデルワイスは剣を構えた。

「そうこなくてはな……！」

同じく、それに応える形で小次郎もまた刀を構える。

両者とも、本来は無構えの剣士である。構えはその先にある太刀筋を読ませ、隙を生むことになる。

故に、神域の剣士たる二人にとって、平時は不要なものであった。

——しかし、今この時ばかりは話が違う。

全身全霊。全てをかけた剣戟。

必殺を放つ以上、如何に無構えでも選択肢は限られ、平時より遙かに読みやすくなる。自身と同格の人物が相手なら尚更だ。

故にエーデルワイスは小次郎の先読みを上回り、最高最速の太刀筋を以って斬り捨てる道を選択した。

漠然とした危機感。しかしそれは馬鹿にしたものではない。エー

デルワイスは直感していた。——あの一刀が放たれたなら、自身は必ず敗北することを。

対する小次郎は、至極真つ当にして単純明解。

「二刀にて証を示す。——いざ、覚悟は良いか」

「それは聞くだけ野暮というもの。——天地を裂く我が剣戟。超えられるものなら、超えてみなさい」

——最も信頼する技。それを放つのに、構えは必須であったというだけのこと。

踏み込みは完全に同時であった。

その差は一刹那にも満たず、更には同一の速度域。この瞬間に限つたなら、もはや体捌きすら超音速の領域に至っていた。

両者とも、極限の脱力からのスタートだ。

互角——ではない。

始まりが同じなら、加速を必要としない比翼の剣が先に当たるのは道理。

むしろ、そのハンデを抱えておきながら体捌きで彼女に並び立てたこと自体が偉業である。

これより放たれる一刀は、エーデルワイスが先んじることが決定している。

事実、彼女は自身の剣が届く半径に飛び込み、過去最高速度の二刀を振るった。

低い姿勢、腰だめに構えられた二刀を地面に滑らせ、擬似的な鞘とした。

そして放たれたのは前代未聞——二刀流の居合抜き。原理は一輝の《追影》と同じく、地面と刀が接する抵抗を利用し、“弾く”こと

で加速させたもの。

——その疾さは、もはや人智の及ぶものではなく。寸分違わず小次郎の肉体を両断した。

(——ッ!?)

しかし彼の身体は、その場で霧散する。そして、その後方。自身の刀が振り抜かれたすぐ向こう。

「秘剣——」

(これは、《蜃気狼》……!)

一輝の第四秘剣 《蜃気狼》。

奇しくも、頂点たる二人が用いた隠し球は、どちらも《無冠の剣王》が操るそれであった。

(しかし、それにしても速すぎる……!)

通常、たかが緩急を用いた幻影程度にここまでの際を見せるエーデルワイスではない。

それだけ、小次郎の見せた体捌きが常軌を逸していたのだ。

(……ああ、そうか)

そして気づく。小次郎が纏う、青く弱々しい魔力の奔流に。

酷く無様で、目も当てられないような魔力操作。一輝と同等程度の魔力量。

能力はおそらく、身体能力の倍加。それも効力はさほど長続きはしない。

しかし、たかだか二倍と言えども。たとえばほんの短い間であったとしても。——目の前の侍の、“佐々木小次郎”の二倍だとしたなら。

「——《燕返し》」

出させてはならない技が放たれてしまった。しかしもう遅過ぎる。今の彼からは——逃げることなど出来るわけがない。

それは、あり得ない現象であった。

縦軸、脳天から股下までを断つ一の太刀を、左の剣で受け。

そして、これを回避した者を襲うと思われる円の軌跡を描く二の太刀。これを右の剣で捌く。

しかしどうしたことか。

一の太刀、二の太刀を今なお抑え続けているにも関わらず、迫る三の太刀。

横一線、恐らくは左右への離脱を阻む払いである。

それは不可思議な……あり得ない現象だ。

連続剣とはそもそも、初めの太刀を殺した時点で止まるか……または二の太刀に繋がるものであり。

断じて——一の太刀、二の太刀、三の太刀を「全く同時」に繰り出すような怪現象では無いのだから。

『——私の、勝ちだ』

『ええ。——次は、負けませんよ』

声に出した訳ではなく。しかし正しく、意図を理解する。

天下分け目。現代にて再現された二刀と長刀の決戦は歴史を覆し、長刀使いの勝利で幕を下ろした。

そして……世界に激震を与える。

《比翼》を破ったFランクの長刀使い。

異端の《魔人》。古の剣豪の名を持つ正体不明の剣士、佐々木小次郎。

——今ここに《魔剣士》の称号とともに、『世界最強の剣士』として名乗りをあげる。

月夜

この戦い、最後まで理解し通した者が一人いた。

高い技量のため……ではない。無論低い訳ではないが、あの場に集った者達の中で言ったなら、純粋な体術の技量において最も格上は《無冠の剣王》黒鉄一輝であった。

彼女はその能力の性質故に、その《怪奇現象》の正体を察することが出来たのだ。

——《世界時計》新宮寺黒乃。

彼女は時間を操り、それ故に空間……ひいては次元にも通じる。

《世界》という、唯一無二の表現が当てはめられた彼女の能力は伊達ではない。《並行世界の運営》などという埒外の性能は無くとも、その歪みを見破る程度は出来る。

「なあ、くーちゃん。……あいつ、ほつといても良いのかよ」

消耗した今ならば……《夜叉姫》西京寧音は、暗にそう言っていた。

彼女もまた、世界の頂点に位置する《魔人》の一人。たとえエーデルワイズ以上の剣客であっても、黒乃と協力したなら捕らえることは可能と、彼女は判断したのだ。

小次郎は自らが斬ったエーデルワイズを抱え、何処かに姿を消したが、今ならば追いつけるだろう。

彼女とて、無粋は百も承知である。気が向かないというのも事実だ。

しかしそれ以上に、佐々木小次郎という剣士に脅威を感じていたのも確かだ。そのうえ、今ならエーデルワイズという大きなおまけが付いてくる。

「……手は、出すな。絶対にだ……」

「くーちゃん?」

黒乃は身体を小刻みに震わせ、顔を真っ青にしていた。

「お、おい……くーちゃん。どうしたんだよ?!」

全身にびっしりと冷たい汗を流し。

「剣技とは……『技』とは——極まると、こうまで理解し難いものになり得るのか……?」

《比翼》と名無しの剣士の決闘。その決め手となった《燕返し》。

誰もが『魔剣』のカラクリを見抜こうと頭を働かせたが、如何あつても見当がつかなかった。しかし、魔力も使わずに剣が三つに増えることなど有り得ない。

では、アレは一体……それこそが間違いであるとも知らず、知恵を巡らせた。

——この、新宮寺黒乃を除いて。

「あの刀は、『実際に増えていたんだ』」

「くーちゃん、さつきから何言つて……」

「増えていたんだよ、寧音!」

学生の折からの親友。元はライバルであつた騎士のあまりの剣幕に、寧音は狼狽えた。

一体黒乃は何を知ってしまったのか……尋ねるまでもなく、彼女は語り始める。

「……呼び込んだんだ……」

「はあ? 呼び込んだつて……何をだよ?」

「呼び込んだんだよ、あの男は!」

なんの能力も用いず。真実、自身の技量だけで。

「――『並行世界に存在する、自身の斬撃』をつ……!!」

《燕返し》が放たれた瞬間は、刀は本当に三つ存在していたのだ。だからこそ不可避。だからこそ必殺。あの剣技にカラクリなど、はなから存在しなかったのだ。

「……なんだそりや。意味、わかんねえんだけど……」

「私にだって分かるものか……!」

しかし、あの時起こった現象だけは理解できた。その過程はともかく、結果だけは。

「『多重次元屈折現象』……とても、呼べばいいのか……」

それは黒乃にとって単なる造語でしかなかったが、込められた意味に誤りはなかった。

「エーデルワイスがただ同時に見えるだけの連続剣に敗れたとは思っていなかったが……あの侍、怪物にも程があるぞ……」

「むつかしいことは分かんないけどさ……つまりアレか。あの色男、自力で刀を分裂させたってことかよ?」

「そうだと言っている」

ぶつきらぼうに応えた黒乃に、寧音は訝しげな視線を向ける。

ある意味、それも当然のこと。魔力の通わない神秘とは、この世界ではそれほどまでに受け入れ難い現象であった。

「……いや、ねーだろ。クーちゃんの勘違いじゃねえの?」

「私はその手のことで見誤ると思っっているのか、馬鹿者。……認めろ、あいつは私達の理解を超えている」

理解出来ないといえば、エーデルワイスや一輝の技術もどのようにして可能にしているか想像も付かないが、小次郎のそれとはまた違う。少なくとも、その理屈は看破できるのだから。

剣が三本に増えたことが問題なのでは無い。それを、魔力も使わずに成し遂げた事実こそが逸脱しているのだ。

「……なんつーか、生まれる世界間違っただら絶対……」

それはエーデルワイスにも言えることだが、人はそう簡単に音速で動いたりはしない。増してや、剣を分裂させたりはしない。

伐刀者としての能力を使ったなら可能かもしれないが。

「ともかく、あいつの正体はなんであれ——その真実を知ることには出来た。変に刺激して暴れられても敵わん」

「ただの剣技を以ってして『伐刀絶技』の域にまで至った《魔人》……か。まあ、今のところ無闇矢鱈と勝負をふっかけるでも無し。大人しくしてるとちやあ大人しくしてる訳か……」

そうでなければ今頃、死体の山が積み上げられていただろう。動きが知られやすい表の世界の強者ならば尚更だ。

アレを倒そうとするなら、相性にも依るが正攻法は無謀に近い。搦め手に優れた人物であつても、腕が釣り合わなければ《覚醒》に至っていることも後押ししてソレごと叩き斬られるだろう。

やるなら、小次郎のスピードでも逃げ切れない程広範囲の飽和攻撃。それも範囲から逃れる他に躲す手段が無い類のもので無ければ意味がない。

弾幕や超大剣の形態を取るものは掻い潜られる可能性が残るからだ。

「しかし、そうまでする必要は無い。実質的な被害はゼロ……どころ

か、《同盟》も《解放軍》も奴には煮え湯を飲まされている。連中とて、少なくとも今すぐ佐々木を仲間に取り入れようなどとは思わない。そして——今回の一件も、公になることはないだろう」

正真正銘、佐々木小次郎という人物はこの世界の頂点の一人となったが……《連盟》としては、それを知られる訳にはいかない。

何せ、自身の無能を晒すことになり、統治の不完全を疑われる。——あんな埒外の剣士を、今まで自国で首輪もつけずに放し飼いにしていたのか……と。

小次郎は、エーデルワイスに勝利してなお……無名の剣士のままであった。

どうあつても隠し切れない破壊活動の成果が、無名の伐刀者一人の首では世間は納得しない。

だからこそ、《連盟》がいま小次郎に手を出す可能性はあり得なかった。

「つつてもさあ……ただじゃあ済まねえだろ、あいつも」

しかし、何事も今まで通りとはいかないだろう。

有象無象にとつては単なる浪人でしか無くとも、世界最強の剣士達が放つ荒れ狂う剣気の嵐を物ともせず、あの場を訪れた者達……そして、その背後に君臨する支配者達にとつては違う。

あの決闘はまさに、彼らにしてみれば世紀の瞬間であった。

「……私はもう引退した身だ。この先は、お前に任せる」

「……あいよ。やれやれ、この歳で追っかけじみた真似をすることになるとはねえ……」

人の口に戸は立てられない。漠然としたものであつても、《比翼》の敗北はいずれ広まる。そして、彼女を上回る何かが居ること。

噂の域は出ず無名のままであつても、かの《魔剣士》の存在は知れ

渡る。

それにより、この先の世界がどのように動くのか。

「——見定めて、やろうじゃねえか」

「なにそれ!! イツキずるいわよなんで起こしてくれなかったのよ!!」

小次郎とエーデルワイスの決闘の後。興奮覚めやらぬといった状態の一輝ではあったが、戦いが終わるとともに気力を使い果たして倒れた珠雫のために、すぐにその場を後にした。

本来あの場に居られるのは、一部の強者のみ。《白衣の騎士》は流石というべきか、平然と剣気を受け流していたが、珠雫はその基準に満たなかった。それでも傷だらけの一輝のことを想い、尋常ならざる覚悟で耐えていたのだ。

しかし、それも限界であったようで。

キリコとともに珠雫を連れ帰った一輝は、治療を受け。隣に寝ていたステラが目を覚ますと、事のあらましを話したのだ。

結果、非難轟々。胸ぐらを掴まれ前後に激しく揺らされている。

「で、でも……ステラは大怪我してたし……!」

「自分で斬り倒したくせに何言ってるのよ!! だいたい知ってたら内臓飛び出したって行くわよ!! カロリーメイト食べながら!!」

流石に無茶だと思った一輝だが、目の前の少女は竜。案外、やっつのけるような気もした。

回復に使うカロリーを摂取したなら、多少の大怪我——矛盾する言

葉だが——は苦もなく治癒してのけるだろう。

「く、悔しいわ悔しいわ！　なんだってその瞬間に私はのんきに寝こけてたのよ!!」

剣客として、ステラの気持ちはよく理解できた。

少しばかり首の骨が折れそうなほど力が強くなってきたが、問題ない。最悪、再生槽にとんぼ返りする程度で済む話だ。

「……あの侍。本当に世界最強になったのね……」

騒いでいたステラの動きが、ピタリと止まり。

憂うような……しかし、確かな闘争の香りが匂い立つ複雑な顔を浮かべていた。

「アタシは間違いなく強くなった……今度こそ、あの男を驚かせてやる。そう……思ってたんだけどなあ」

頂点は、いまだ遥か彼方にあり。

「……それは、僕も同じだよ」

いや、あるいは小次郎を目標としていた一輝の方が。

《比翼》の剣技を我が物とし、《七星剣王》にまで登り詰め——驕っていた。つけ上がっていた。

仮にこの独白を他者が聞いたなら、何を言うかと否定するであろう。しかし少なくとも、一輝自身はそう思っていた。

「僕たちはまだまだ弱い……。これでは、あの『魔剣』には届かない」

「……秘剣《燕返し》。イツキでも解らないの?」

「解らないさ、僕が簡単に見破れる程度ならエーデルワイズさん相手

に必殺はあり得ない」

エーデルワイスは一輝を超える剣士だ。一輝もまた超人ではあるが、彼女の域にはいまだ及ばない。

実力も経験も、何をとつても劣るといなのが現状だ。

「……でも、そうなるに分からないわよね……。イツキの話だと純粋な技量においてはコジロウが先を行くとはいえ、決定的な差はないのでしょうか？」

「うん、だから小手先の技は通用しない……はずなんだ」

「だったら……アレは単純に剣技ということになるのよね。——案外、タネなんて無かったりして」

ステラとて、不完全とはいえ《燕返し》を目撃した一人だ。頭を巡らせたのは彼女とて同じ。当然、答えは出なかったのだが。

そして、彼女に遅れたとはいえ完全な《燕返し》を見た一輝とソレで敗れ去ったエーデルワイス。体技という面では間違いなく世界最強クラスの二人の目を欺ける技などあるのか……ステラにはそれが信じられなかった。

であるなら、実際に三本に増えていたと言われる方が余程解りやすく。

「目の前で受けた《比翼》はともかく、全体図を見通した一輝にも見抜けなかったのなら……そりゃあアタシだって本当に分裂してるとは思わないけど、増えてるも同じじゃない？」

何のヒントも無しに限りなく核心に迫るステラ。

これは竜たる彼女の本能が導き出した答えであり、理性で戦う一輝のような騎士には計り知れない感性であった。

「……なるほど。タネなんて関係ないってことか。はなから三本ある

ものと考えて挑めば、何ということもない」

無論、口にしたほど簡単な所業ではない。大半は、強がりにも似た台詞。——しかし、不可能とまで思っていないのも事実。

魔剣に如何なる仕掛けがあつたとしても。それは一輝が小次郎に追いつけないという証左ではない。

小次郎の《燕返し》は、彼の間合いで放たれたなら確実にこちらの命を刈り取る必殺剣だ。少なくとも、今の一輝には破れない。しかし、技である以上対策は取れる。

理性で考え過ぎるあまり。神がかつた剣技に気を取られるあまり、その単純な“解”を見失っていた。

未熟は百も承知であつたはずだ。

それでも……今はまだ遠くとも。遠いという理由だけで諦めるのは黒鉄一輝を、自身を否定することに他ならない。

彼はいつだって、自身の可能性を諦めず、信じ続けてきたのだから。険しく歪めていた眉間に、柔和なものが戻る。

「その通りだ、ステラ。確かに師匠の秘剣は見切れなかった。けどだからって、必ずしも勝てないわけじゃない。こんなことも失念してしまうだなんて……まだまだ僕も未熟ってことかな」

「別に、大したことじゃないのよ。私にとってはイツキの剣だって、理屈は分かっても実行するのは不可能な魔術みたいなものだから」

視点が違っていたのだとステラは語ったが、それでも一輝は改めて目の前の少女に敬意を抱き。そして、彼女と戦い勝利したことを改めて思い出した。

「光栄だよ、君にそう言ってもらえて」

「当然でしょ。アタシに勝った騎士なんだから。——イツキはアタシの、“一番”なんだから」

はにかみながら告げられた言葉に、一輝の思考はショートした。今の一輝の頭からは、魔剣がどうか小次郎がどうかは綺麗に消失している。

いま彼の頭の中にあるのは、目の前の少女のことだけであり。

——その後、長い夜が訪れた。

「——は？」

月明かりに照らされた一室。清潔感の漂う内装、真っ白なシーツが掛けられたベッドが、この場が病室であることを理解させる。

彼女もまた、隣に並ぶのと同じようなベッドに寝かされていた。

頭は然程寝ぼけていない。それほど長い間、昏睡していた訳でもないのだろう。

壁がけの時計を見れば、日付が変わり深夜を迎えた程度の時刻……あれから数時間と言ったところか。

「存外……優しい方なのでね、彼は」

斬ったなら、そのまま打ち捨てられるもの……と。そのまま、人生を終えるのだと思っていた。

「——別に、そなたでないなら捨て置いたとも」

「！」

窓枠に腰掛けるように佇み、彼は盃を傾けていた。

「……居たの、ですか」

「おうさ。居たとも」

無名の剣士、佐々木小次郎。

彼は、エーデルワイスの知るものと同じ、
趣きある笑みを浮かべていた。

刀傷

「あの後、月影殿を頼つてな。そなたをそこらの病院には入れられまいて」

エーデルワイスは、捕えることを放棄されたとはいえ犯罪者とされる人物であり。そのような彼女を一般の病院に連れて行くのは、少々思慮の浅い行為と言える。

故に小次郎は彼女と親交があると思しき月影のもとを訪れた。結果として、それは功を奏する形となり。

彼女はつつがなく再生槽により治癒を受けることが出来、一命を取り留める。

「小次郎が信頼する医師」の診断でも、魔力と体力の消耗以外は健康そのものとされた。

——ただ一つ。

「……傷」

ただ一つ、左肩から右脇腹に抜ける形で残された刀傷。《燕返し》の三の太刀。本来ならソレは左右への離脱を阻む払いだ、エーデルワイスが最後まで回避すべく動いた結果、袈裟がけの軌跡を描いている。

再生槽を以つてしても消すことが出来ず、日本最高の医師の診断でも自然治癒は絶望的とされた爪痕。

「……迷信ですが。何かしらの強い情念を込めて付けられた傷は……消えないと聞きます」

「すまぬ。そのような傷を、女人の肌に残すつもりはなかったのだが……それは間違いなく私が付けたもの。言い逃れはせぬよ」

沈痛な面持ち……とは言い難い。自身がそれを悼むのは筋違いで

あと、小次郎は小さく頭を下げるだけであった。

それ以上は必要ないとも思っていた。未婚の若い女性に対して、醜い傷を刻むなど彼の流儀には反することだが、エーデルワイスとて戦いに生きる者。ある程度は覚悟しているはずだ。

そんな彼の考えを知ってか知らずか。ぶつきらぼうな謝罪を受け取ると、エーデルワイスは病衣から覗く傷跡に手を伸ばし、指でなぞる。

「……なぜ、そなたは微笑む。気分の良いものではなからう」

「いえ、そうでもありませんよ。ただの傷であったならともかく——それほどに、貴方が私を想って付けた傷なのでしょう？」

そう思うと、不思議と悪い気分はしなかった。肌に傷……というのは、女性としての目で見ると確かに忌々しい。しかしエーデルワイスはただの女性ではなく、剣客である。

今の今まで彼女に傷をつけられる者が居なかつただけで、いざ付いたとなればそれもやむなし。増してや、それが彼の手で付けられたのなら尚のこと。

「——好敵手の刃。この身に留めておくのも悪くありません」

付け加えて、絆めいたものを感じている……などとは、奥手な彼女からは言い出せず。本心は濁して伝えてしまう。

しかし、それで良いのだろうか。

「貴方が私を救ったのは……そういうことでしょう？」

無論。とばかりに彼は頷き。

「——そなたは、無くすには惜しい難敵故。命を拾ったなら、この先も……そう、望んでしまったのだ。剣士としては、少々未練がましい話

だが」

剣士とは一瞬の命のやり取りに心血を注ぐもの。それを二度三度と求めるのは、潔しなどと言える訳もなく。

それでも世界が変われば、時代が変われば、道理もまた変わるもの。そう、自身に言い訳をして主義を曲げてでも生かしたくなかった。

「一輝と皇女殿のような関係に、年甲斐もなく憧れたのだよ」

互いに切磋琢磨し、より高みへと駆け上がるその姿の……なんと輝かしきことか。

アレこそは剣客が、闘争に身を置く者が望む最高の果たし合い。求めて止まない、理想像。

そしてそれは、拮抗し、尊重し合える相手が居てようやく成立するもの。

「そなたであれば。そなたとなら、高め合えると心底から理解したのだ。ふっ……儘ならぬものよ、最も斬りたい相手が最も殺したくない相手であるとは……」

一輝とステラもまた、このような心持ちで戦って居たのだろうか……と感慨に浸る。

倒したい相手ではあるが、打倒してしまえばそこまでだ。あの素晴らしい時間を分かち合った相手は消え去り、二度と会えない。

終生の好敵手と呼べる人物になどそう何度も出会えるものではないのだから、その虚無感は計り知れないだろう。

「それでも斬ろうというのだから、我ら剣客のなんと業の深いことか」

小次郎の口にしたそれは、自身のみを当て嵌めたものではなく。

「……そう、ですね。私も貴方と巡り会い、初めてソレを知りました。私もまた、罪深い者であると」

如何に慈悲深く、情け容赦を持ち合わせていようとも、エーデルワイスもまた剣士であった。

並び立つ存在を得た彼女は、やはり心根までも剣客で。

小次郎が口にした言葉に、ただただ同意する他なかった。

人斬りは悪である……それを自覚しながら、自身にとってかけがえの無い者すら剣の道として斬り捨てる。

その生き方は辛く儂く、そしてやはり正しいもの……所謂、王道ではないのかもしれない。

——しかし、それでも我らはその道に魅せられ、選んだのだ。

エーデルワイスは居住まいを正し、小次郎に向き直る。

「貴方の剣の深奥、確かにこの身で堪能させていただきました。その上で、改めて」

それは、決闘の折に声なくして交わされた言葉。彼女の確固たる思い。

「——次こそは、私が勝ちます」

その台詞に小次郎は思わず破顔する。

雅さを取り繕うことすら出来ず、彼は声を上げて笑ってしまうが

……それも仕方がない。

彼女の発した決意は、まさしく彼の望んでいたものそのものであり。

「——出来るものなら、な」

我慢など、出来るはずもなかった。

一輝とステラののような関係……という言葉に、高鳴った胸を悟らせなかったことは、自分でも良くやったと褒めてやりたい気分だった。エーデルワイスは知っている。

あの二人は最強の好敵手であるとともに——最愛の伴侶でもあるのだ。

彼らのような関係を望む……それは、否応なく後者の関係を合わせて夢想させた。

初めて出会う、同等の男性。

剣士であると同時に、「女性らしく料理を嗜み、女性らしく甘い物を好み、女性らしく素敵な異性との出会いに憧れる」——一人の、女でもあった。

世界最強の称号……それは、彼女が望んで手にしたものではない。望まずとも、その手に収まったガラクタだ。

しかしこの度、そのガラクタが宝石となった。

それが誰のおかげであつたか……言うまでもない。

(ササキコジロウ……)

自身を仕留めた秘剣の極意は、いまだはつきりと理解できない。剣が増えていたと思えず、しかし理性はそれを否定する。

ともあれ、それが一撃必殺の剣であることは明らかだ。

——彼と自分の勝負を決定的に分けた、「趣深い」奥義である。

(いずれ、必ず——)

必ずそれを突破する。そう、決意を新たにした。

この「熱」を彼に伝えたい。しかしそのための言葉が浮かばない。それでも、彼を繋ぎとめたい。彼の一番は、自分でなければならぬ。彼の全ては、自身に向けられなければ気が済まない。

この想いをどうにか伝えようと、エーデルワイスは口を開き。

「ササキ」

「——佐々木さん」

然して、それは阻まれる。

「貴方だって重傷だったのよ。魔力欠乏の症状も見られる。アルコールなんて以ての外です」

そう言つて、小次郎の手から盃を取り上げる。

少女と言うには熟しており、女性と言うには物足りない。そんな、開花する寸前の花のような美しさを持つ彼女。

《白衣の騎士》薬師キリコ。

「薬師殿。今夜はすこぶる気分が良いのだ、多少の不養生は大目に見てはもらえぬか……？」

「ダメですよ。貴方が寿命寸前の老人か、末期ガンの入院患者なら考えなくもありませんが、健康優良児なら話は別」

病室には限りがあり、キリコの手は二本しかなく、彼女は一人しか居ない。

さつきと治る患者にいつまでもそれらを占領されては堪らない……と、彼女の目は雄弁に語っていた。

さしもの小次郎も、医師として在るキリコには逆らえず、なすがままといった風体であり。——エーデルワイスには、それが面白くなかった。

「……あの」

「ああ、エーデルワイスさん。貴方も目を覚ましたのね。今日のところは安静にしてください。心配しなくとも、通報などしませんから」

何か一言。そう思いはしたが、素気無くあしらわれる。

「さあ、佐々木さんも病室に戻ってください。明日は一輝くんの祝勝会ですよ。貴方が行かなくてどうするんですか」

「そう心配せずとも、傷なら治って——」

「治っていると言ってもそれは傷だけ。体力の消耗までは回復できません」

深手こそ負わなかったものの、傷そのものの数で言えば圧倒的に小次郎の方が多かったのだ。

細かな傷ではあったが、数が揃えば侮れない。失血の量を考えれば重傷とも言える。なにせ、エーデルワイスとの戦闘に加えて、その後は彼女を担いで月影のもとに走り。その脚で取って返してキリコのところへ向かったのだから血も噴き出すというもの。

全力運動の繰り返しに出血多量では、英雄に匹敵する体力も流石に底をつく。神代の英雄や怪物に類する反英雄などとは違い、肉体を持つ純正の人類でしかない彼は、そこまでの消耗には耐えられない。

涼しい顔はしていたが、余裕があるというほどでは無かった。その結果、彼は当然。

「私をここに連れ去ってすぐに倒れたのを、忘れたとは言わせませんよ。」

ぶっ倒れた。それはもう見事に。抱えていたキリコを下敷きに床に突っ伏した。

「分かったらさっさと病室に戻って横になって下さい。それと、いちいちお姫様抱っこで誘拐するのはやめて欲しいのだけど。どこの王子様です貴方は？」

「お姫様抱っこ……!?」

突然声を上げたエーデルワイスに二人は思わず彼女の方を振り向いた。

「あ、い……いえ、なんでも」

「……へえ、〴〵そうですか」

クスツと笑みを浮かべたキリコの「そうですか」に込められた二つの意味——当事者たるエーデルワイスには手に取るように理解できた。

「とりあえず……佐々木さんは病室に戻ってください。明日の祝勝会で会いましょう」

ぐうの音も出ず、遙か年下の少女に言い負かされた侍は無言のまますげすごと退散する。盃を奪われ、少々恨めしげな視線を向ける程度が唯一の反撃とはなんとも情けない。

どこか超然とした雰囲気醸し出していた彼は何処へやら。受肉して欲を出すのも、そういう意味では考えものである。

「さて……貴方も胸の刀傷以外は常識的な範囲の消耗ですから明日には退院できます」

キリコは根っからの医者であり、相手が彼女の患者である以上、彼女にとっては皆平等——病状による優先順位はあれど——である。

たとえそれが——たったいま見つけた面白そうなオモチヤの類であつてもだ。

「その後は、どうぞエストニアの霊峰へお帰りください」

どこか棘のある言葉ではあったが、それでいて微塵も不愉快そうでない辺りにキリコの本音は存在する。

「私は『彼』と、明日の祝勝会を楽しむので」

「……さ、ササキは貴女のような子供に粉をかけたりは……」

「あれ、私佐々木さんのことだなんて言ったかしら？」

「なっ!？」

「まあ、その通りなんですけどね。ほら、彼はあれで見目麗しいですか
ら」

「くくッ!？」

青くなったり、赤くなったり、終いには膨れてみたり。

何かしら言ってやろうという気概は感じるのだが、如何せん興奮のあまりボキャブラリーどころか言語が死んでいる。

浮世離れた美貌を持ちながら、いちいち表情を大きく変えるエーデルワイスは端的に言ってかなり……。

(面白いわね)

かなり、面白かったのである。

表情には微塵も出さず、心の中で密かに思うキリコ。その内心をどうやら読めていない様子の頭に血が上ったエーデルワイス。

キリコとてそれほど色恋沙汰を得意としている訳ではないが、エーデルワイスは年齢の割りに輪をかけて苦手としている様子。そしてキリコ自身は、小次郎に対して今のところ観察対象という以外の興味もサラサラ無い。

——となれば、ぜひ手伝ってやらねば。

「意地の悪いことを言うのはこの辺にして……どうですか、エーデルワイスさん。貴女も明日の祝勝会、来てみませんか？」

「え……？」

「貴女が居ることに不愉快を感じるような人は居ませんし、問題ないですよ。私の方から紹介しますから」

エーデルワイスにとっては正直言つて渡りに船。捨てる神あれば拾う神あり。

しかし、話が美味すぎるのではないかという疑いも。

「私は医者ですよ。患者の精神面のケアも怠りません。心の持ちようは身体の回復にも影響しますから」

尤もらしい台詞ではあったが、エーデルワイスはこれを信じた。――否、信じてしまった。

「……あの、それではその……よろしく願います」

「ええ、任せてください。悪いようにはしませんから」

彼女はただ単に、面白いオモチャをそう簡単に手放したくなかっただけであり。

(さて、一輝くんの良いお土産が出来たわね)

――綺麗な笑顔の裏には、より一層素晴らしい^{えがお}愉悦顔を浮かべていた。

《七星劍王》

「先輩、おめでとーっ!」

「「オメデトーツ!!」」

《無冠の劍王》……並びにこの度、《七星劍王》と呼ばれるに至った騎士、黒鉄一輝を祝うべく、彼の友人知人たちはお好み焼き屋『一番星』に集まった。

誰もが一輝を労い、祝福し。彼に敗れたステラの奮闘を讃える。

「……あ、ありがとうございます」

普段の彼ならば、恐らくは祝辞に対して照れ笑いの一つでも浮かべるのだろう。

しかし、今ばかりはそうもいかず。滝のような汗を流しながら、引きつった笑顔を浮かべるのが精一杯であった。

そして、それもやむを得ないことで。

「おめでとうございます、イツキ」

「よくやったな、一輝よ。私も……師として鼻が高い」

——何もかも、目の前に並ぶ剣士二人が悪いのだ。

「何をやってるんですか、エーデ——」

「いやですね、私は雪ですよ。忘れたんですか?」

そういえば、と一輝は思い出す。そもそも現れたこと自体がクレイジー過ぎて一切頭に入っていなかったのだが。

『彼女は私の姉で、佐々木さんと一輝くんの知人なの。一輝くんの祝勝会に参加したいって言うから連れてきたんだけど良いかしら?』

『え、お姉さんって……どう見ても日本人じゃな——』

『義理の姉なの』

『初めまして、薬師雪です。よろしくお願いします』

——ヤツもグルか。一輝はハツとしたようにキリコの方を振り返る。

するとまあ、彼女は実に素敵な笑顔を見せてくれて。心底から愉しんでいることが理解できた。サラツと一輝のことも巻き込む辺りに彼女の質の悪さが透けて見える。

サングラスに、カツラであると思われる黒髪のボブヘア。——余談ではあるが、本来はもつと……戦乙女とまで讃えられるエーデルワイスの美貌が曇るくらいに野暮つたい格好を予定していたのだが。誰かさんの前でそんな格好をすることに深い抵抗を感じた彼女が却下したのである。

しかしどちらにしても。元の特徴とは確かに違っているが、そんなものはなから一輝には関係ない。

なにせ、体捌き一つで個人を特定するくらい朝飯前。意図的に拙い動作を演じているようだが、一輝の目は誤魔化せない。……もつとも、知リたかつたかと言われれば間違いなく否だろう。

しかも薬師雪とはまた単純な。エーデルワイス……薄雪草だから雪。

その場しのぎにも程がある。

そして、彼女の素性を知っている暁学園の三人。この祝勝会に参加していたサラ、凜奈、シャルロットはと言えば。

「傷は浅いぞ、《血塗れのダヴィンチ》……！」

「きゆう〜」

真っ先に彼女の名前を口にしようとしたサラは、恐らくは小次郎と一輝以外の誰の目にも止まらない速さで、誰にも悟らせないまま意識を奪われ。

それを察したと思われる他の二名は、すぐさま口を噤んだ。

「いや、あの……本当に何やってるんですか？」

小次郎はともかく、彼女が居るのはどういう了見なのか。

そして、なぜ昨日殺し合ったばかりの二人が一緒なのか……と、尋ねるのは盛大なブーメランとなるため控えたが。それを無視しても、ここに彼女が——《比翼》のエーデルワイスが現れることは、あまりにも異常。

「……それは、当然。貴方の勝利を祝福しに来ただけです」

嘘だ、少なくとも真実ではない。一輝は瞬時に判断した。彼の照魔鏡の如き洞察眼は、エーデルワイスの動揺を見逃さなかった。

……実際のところ。一輝ほどの洞察力が無くとも、ちよつと察しが良い人間であればすぐ気づく程度には動揺していたのだが。

「まあ、そう疑ぐることもあるまい。目的は分からぬが、祝う気持ちに偽りはなからうて」

それは一輝にも理解できる。

エーデルワイスは犯罪者であり、必要とあらば人斬りも厭わない剣士だが、同時に高潔な人格者でもある。人殺しは等しく悪しき行いだが、彼女の本質は善性にあった。

「その理性はお主の確かな長所だが、時には投げ捨てるのも一興であろうよ」

「……解りました。とりあえずは、納得しておこうかと思えます」

エーデルワイスが何を考えているかは解らないが、一輝の不利益になる様な真似をするとも考えにくい。真意はともかく、一輝を祝いに

来たというのなら、彼女はそうのように振る舞うはずだ。

故に、一輝の心配事は別件にシフトする。

すなわち——彼女の正体を気取られずに、この祝勝会を終えること。

「さあ、お師匠さんもそんなところで駄弁つとらんで飲んだ飲んだ！」

(さっそく厄介そうなのが来たか……)

なんで自分の祝勝会なのに一番気を遣う羽目になっっているんだろう？

ご機嫌でジョッキを受け取る小次郎を眺めつつ。そんな思いが無かったかと言えば嘘になるが、今更なに言っても現実は変わらない。大丈夫、理不尽には慣れている……そう、自身に言い聞かせながら一輝は。

「——そう言えば、諸星さんは師匠と試合の約束をしましたよね」

一先ず、自身の敬愛する師を二束三文で売り払った。

「あつ、そうやった!! いかんいかん忘れるとこやったわ!」

「む。いや……拙者今日のところは酒と粉物に溺れると心を決め——」

「いやいやいや、それやったらいつでもウエルカムやさかい。祝勝会の後にでも……闘りまへんか?」

心は痛まなかった。半分くらいは小次郎が悪い。もう半分は、店の隅っこで酒をかつ食らいながら中々にカオスな様相を呈してきた『一番星』の店内を愉しげに睥睨している女医が悪い。

乾坤一擲の秘策……というには些か地味ではあるが、効果はてきめんに出る。社交場においても『無冠の剣王』の絶技は冴え渡っていた。

あの剣士に釣られる戦闘馬鹿は、何も諸星だけではない。

「――貴方が、黒鉄くんの師ですか。お噂はかねがね」

大阪勢はもちろんのこと、破軍学園が誇る学生騎士達も彼の存在を放ってはおかない。その筆頭格である東堂刀華が、一步前に入る。

学生騎士……それも剣武祭の代表クラスになれば、半分くらいは諸星の同類項。程度の差はあれど、ベクトルは変わらないのだ。

「何やら面白そうな話をしていますね、私も混ぜて頂いてもいいですか?」

「直接顔を合わせるのは初めてだな、《雷切》よ。悪いが今日の私はビールの虜故……」

「お師匠さん、往生際が悪うございまっせ?」

「怪しい関西弁で迫られても嫌なものは嫌でござる」

「あつ、逃げた!」

「逃がさんでえ、ござる侍!!」

ジョッキとお好み焼きを抱えて、血気盛んな学生騎士達から逃げ惑う師匠を尻目に、一輝は次なる標的。時折やたらと行動的で、何かと好奇心旺盛な自身の恋人、ステラに狙いを定める。

「――豚玉、もう十枚追加で!!」

……否。この場に彼女は居なかった。あそこに居るのは腹を空かせたドラゴンであり、ステラ・ヴァーミリオンという可憐で誇り高い少女では無いのだから。

(……となれば)

同じく薬師雪の正体に勘付いたらしい有栖院は、危険を察してかそ

れを指摘しなかった。

そして、混乱を避けるためだろう。珠雫とその周囲の目が極力エーデルワイスに向かないように誘導している。

空気の読めるおと……乙女。流星に頼れる存在だ。

彼女の尽力もあって、主要なところはほぼほぼ完封した。

余計な好奇心は猫を殺す。数名の「犠牲者」は出たものの、概ね問題なく薬師雪としてエーデルワイスは受け入れられた。諸星の家族では彼女の正体に気づけないのを考えれば、不測の事態さえ起こらなければ秘密がバレることもない。

ほっと一息つき、騒がしい一団から少し離れたところに座り込む。

主役としては褒められたものではないが、先ほどまでの気苦労を考えると彼を責められないだろう。然程時間は掛からなかったが、事態の收拾に費やした精神力は、中々にヘビーなものであった。

「隣、よろしいですか」

「エーデ……いえ、雪さん。構いませんけど、どうしたんですか」

了承を得るなり、エーデルワイスは一輝の隣に腰を下ろした。

「……申し訳ありません。貴方を祝う気持ちは本物ですが、ダシにしてしまったのも事実です……」

「ええ、分かっています。貴女が僕の勝利を喜んでくれていることは、ちゃんと。でも、ダシに使った……というのは？」

「……もう少し、彼と居たかったんです。いえ、見ていただけでも良かった」

それが誰を指すのか、それを問うほど一輝は鈍くはなかった。

「対等の相手……それが、これほど素晴らしい存在だったなんて思わなくて」

「……気持ちは分かります。僕にとってのステラがそれだ」

出会うべくして出会い、戦うべくして戦った。

生涯で一度、交わるかどうかという確率で遭遇した好敵手。それが一輝にとつてのステラであり、エーデルワイスにとつての小次郎であつた。

「イツキ、貴方は強くなった。キツカケは私かも知れませんが、その理由は間違いなく彼女にある」

「……はい、間違いなく。でもまだまだですよ、貴女や師匠には及ばない」

それは、確かに事実なのだろう。一輝ではまだエーデルワイスや小次郎には勝ち目がない。

しかし……あくまで、今は“だ”。

彼は、彼が思っているほど未熟ではない。

単純な技量に関して言えば、一輝もまた超越者の一人。技術だけでエーデルワイスや小次郎と打ち合える数少ない例外の一人だ。劣っているとはいえ、その階梯は頂点たる両者と同じ場所にある。

精神的な到達点もまた、十代半ばという……ともすれば、子供とすら言える年齢でありながら超人と言つて差し支えない。

加えて一輝には、ある意味において《模倣剣技》や《一刀修羅》以上に厄介な《完全掌握》がある。敵を知れば知るほど、その効力は高くなり。

戦う術でありながら、その実近しい者にこそ最大の効果を発揮する魔技。

エーデルワイスは、まだ彼に多くを知られてはいない。それ故に有利だが。——彼の師は、それに大いに当て嵌まる。

一見したなら太刀筋を読ませない小次郎の剣技は、《模倣剣技》の天敵。よつて一輝の不利とも思える。

しかし、《完全掌握》に注視したなら話は別。小次郎の剣はエーデルワイスにさえ読めない真なる神技。

だが、剣技は読めずとも——「佐々木小次郎」自身は、その限りではない。

剣筋ではなく、小次郎を……彼自身を読み切ったなら。もはや剣そのものを見切る必要はなく、一輝は小次郎の剣が到達するであろう場所だけを見定めればいい。

如何な明鏡止水と言えど、同様に曇りなき水面であれば見通せよう。

その速度を、その角度を……その鋭さを。照魔鏡は、全てを照らし出す。

「いいえ、貴方は強いですよ。自身が思っている以上に」

原因と結果が解るのならば、自ずと過程が絞られる。

《魔剣士》は、《無冠の剣王》の前だけでは対等の戦いを余儀なくされるのだ。

そしてそれは、剣技に限った話ではなく。《魔剣士》の全てを、彼のその眼で解き明かす。そうでなくては、誰より敬愛する師を超えることなど出来ないのだから。

弟子であり、それ故に彼を誰より知る。——黒鉄一輝は、佐々木小次郎の天敵であった。

今はまだ、力及ばずとも。今はまだ、技が浅くとも。今はまだ、気づいていなかったとしても。《魔剣士》への憧憬は、彼を高めへと押し上げるだろう。

そう遠くない将来……彼は必ず、佐々木小次郎と渡り合える剣士となる。

(……………)

——しかし、認めない。

(……………)

——どうしても、許せない。

(……………)

——たとえば、誰であろうと。

(彼の一番は、譲らない)

——そこは、自身の指定席でなければならないのだから。

諸行無常

「——ぐはっ!？」

「碎城! みんな、碎城が死んだっ!」

死んでない。

「くっ……おのれあのインチキ侍……!」

「流石に、洒落ににやらない強さね……!」

挑み掛かる学生騎士達、その誰もが一角の実力者であったが……なんにせよ、相手が悪かった。

《浪速の星》と《雷切》に加え。彼らには一步劣るものの、やはり強者である破軍学園生徒会役員と武曲学園代表の二人。その他、野次馬の日下部加々美。

彼ら全員を相手に大立ち回りを繰り広げる男とは当然……。

「ふっ、砂利どもめ……。拙者の拳は今宵、血に飢えてござるよ」

——非常に残念なことに、佐々木小次郎その人であった。

「やい、大人気ないぞおっ!!」

「そうやそうや! 真っ先に《観測不能》を始末して勝ち目を削るなんて本気過ぎるやろ!!」

非難の声もどこ吹く風。

その手には、物干し竿の代わりにビール瓶が握られていた。

ちなみに、御祓泡沫も別に殺されてない。

「……どうして、こうなっちゃったのかな……」

一人、店の前で争う彼らを死んだ目で見つめる少年。
馬鹿騒ぎは馬鹿騒ぎであったのだが、乱闘騒ぎではなかったはず……それを、諦観の混じった瞳で訝しんでいた。
時は、さほど遡らない。

「いい加減、諦めて私達と戦ってくらはいよく！」

「せやで！ 往生際が悪いんやおまへんか？」

じりじりと小次郎を追い詰めるのは、東堂刀華と諸星雄大……だけでは無かった。

「ちっ、数に頼るとは……騎士の風上にもおけぬ奴らよ」

この狭い店内で刀華と諸星を加えた総勢九名。店を荒らさずに逃げるには少々手間であった。

飲んで逃げ、食べては逃げ。……しかし、それにも限界は来る。

学生騎士達はアルコールを大量に摂取し、中には呂律の回らない者も居るにも関わらず、平時のそれと大して変わらぬ動きを見せたのだ。

常在戦場と言えば聞こえはいいが、遺憾ながら……この状況では無駄という他ない技量の高さ、隙の無さ。

これこそは、後の悲劇の伏線である。

小次郎含めた全員が常に動き回っていた。そう、アルコールを摂取した状態で……いや、むしろ過剰なほどに摂取しながら、やたらめつたら右往左往していたのである。

当然ながら——酔いは、加速度的に深くなっていく。

「ええいつ、鬱陶しい」

袋小路に追い詰められた小次郎は、いよいよ店の外へと逃げ出した。

「追ええ！ 絶対逃すんやないぞ！」

「あははははは！ 大捕物れすね、武曲に負けてられまへんよ、みなはん！」

これまで一度の反撃も無かったことから、無警戒に小次郎を追いかけて、店外へ続く。それが、悪手とも知らずに。

——そこに、地獄があるとも知らずに。

「あれ……?」

「……どこ行きよった？」

ばたり、と倒れる影が一つ。

「ウタくん!?!」

「——《観測不能》。因果干渉系は油断ならぬからなあ……」

ゆらり。ゆらり。

不穏な空気を纏った男が姿を見せる。どうしてか、彼を追っていたはずの一同の背後から。

「い、いつの間に……」

「お前達は、お好み焼き屋という地の利を自ら捨てた。この佐々木小次郎を甘く見たな」

店の外に出て走り抜けた後。

追いかけてきた者達の目を置き去りにする超速のバックステップ

で背後に回り込んだ小次郎は、万が一を起こし得る御被泡沫を葬った。……いや、まあ息はあるのだが、数時間は目覚めないだろう。

「お前達は、このような場で戯れに霊装を抜けぬであろう。故に、合わせる。某も徒手空拳で相手をしてやろう」

小次郎が赤ら顔で笑みを浮かべる中、ほぼ全員の酔いが醒めた。――こいつはやばい、そう……本能で察したのである。

「さあ、暇潰しに強敵との記憶を頼って覚えた八極拳と燕青拳……その最初の犠牲者となるがいい。我が拳の錆となれ……！」

当然ながら両者の足元にも及ばぬが。手本が手本だけにその辺の拳法家など及びもつかない次元で習得していたソレは、もはや凶器。打たれ弱いとはいえ一応は英雄クラスの身体、部位鍛錬とか必要なかった。

剣武祭を終えてようやく一息……そんな矢先。学生騎士達は、呆れ返るほど馬鹿らしい脅威に晒される羽目に陥る。そしてやはり、最も割りを食っているのは。

「何なんだろうなあ……これ……」

……主役たる、彼なのだろう。

話は再び、砕城が張つ倒された辺りに戻る。

素手という土俵において、兎丸恋々以外は敵味方ともに不慣れであつたが、なんだかんだ誰も彼も達人であつたので加々美以外は戦え

ていた。

真つ先にやられた碎城は不運という他ない。

「この酔いちくれめ……碎城のカタキだあつ！」

「馬鹿かキミは、あまり先行すると——！」

《速度中毒》の名に恥じぬ、見事な特攻であつた。

「ふはは、遅いな。出鼻を抑えたならば如何にそなたとてノロマな亀よ」

待つてましたとばかりに彼女を直撃する崩拳。

不幸中の幸いというべきか、加速が足りていなかったおかげで強烈なカウンターとは成り得なかった。とはいえ威力は十分。見事な縦二回転を決めて後頭部での着地フィニッシュ。

点数をつけるなら、十点中八点といったところか。

「あいたたた……って、うつぶ……」

忘れてはならないが、ここに居る連中はどいつもこいつも酔っ払い。先ほど小次郎を罵った恋々もまた、同じ穴のムジナであった。

多少正気に戻ったとはいえ、いまだアルコールは体内に残っている。縦回転など決めて無事で済むはずがない。

顔を青くして口元を押さえた彼女は『一番星』へと駆け込んでいった。

「……あいつ……もう戻ってこんやろうな……」

「……そうれすね……」

「なんて言ってる場合じゃないから!? 早くあの人なんとかしないと!?!」

悪ノリして小次郎を追いかけ回していた加々美だが、いまはとても後悔していた。戦闘能力の乏しい彼女にしてみれば、この状況では周りに継る他ないのだから無理もないが。

「くそ……東堂！　ワイらが引き付ける……お前がやれや！」

「ひゃい、まかへてくらはい！　カナちゃんも諸星さんに協力を！」

刀華と諸星は互いに競い合うように飲んでいたばかりに、酒気も群を抜いていたが、それでも他の者達より頭一つ抜いた実力者。しかも、破軍と武曲……それぞれのまとめ役。

すぐさまリーダーシップを発揮し、小次郎打倒のために手を組んだ。

刀を持つているならいざ知らず。

素手の小次郎など、金棒を持たぬ鬼。薙刀のない弁慶。ヌンチャクを忘れたブルース・リー。

——つまり、恐るるに足らず。

「いくで皆の衆！　あのごぎる侍にここで引導を渡すんやあああああ
あ!!!」

「んな……アホな……」

結果は見ての通り。もはや立っている者は諸星と刀華の二人だけ。後者が泥酔状態で、そろそろ意識の危ういことを考えれば実質一人と行ったところか。

それでもよく保った方で、一時間は経過している。チームワークの賜物であった。

しかし、金棒は無くても鬼は鬼。薙刀は持たずとも武蔵坊。ヌンチヤクが無くとも燃えるドラゴン。

刀を用いずとも、小次郎は小次郎。山育ちの農民であった。

「残るは一人……よく粘ったが、未熟は未熟。拙者に及ぶには、少々年月が足りなかったな」

六つの屍を積み上げて君臨する頂点剣士、佐々木小次郎は不敵な笑みを隠そうともしない。

まさに、先達たる強者の様相。その立ち姿は、この場が酔った末の乱痴気騒ぎで無ければ最高に格好良かったのだが。

無駄に才覚を發揮して素手での立ち回りまで覚えてしまう辺り、本当に天才なのだろう。一生涯かかったとはいえ、実戦無しで魔法の領域に辿り着くだけのことはある。

「さて——辞世の句は読んだか」

こういう悪ふざけさえしなければ、イメージは保たれたはずなのだが、もはや諸星その他に彼への尊敬はそんなに無い。

酒の力とは恐ろしい。耽美なる《魔剣士》を、単なる愉快な兄ちゃんに変えてしまうのだから。

「へっ、ただでは死なへんで……！」

「刺し違へても、みんなのカタキはとりまふ……！」

「やってみるがいい、若人よ。その悉くを凌駕してしんぜよう！」

くどいようだが、死者は別に居ない。

同時に駆け出した三人の伐刀者たち。既に、酔いは限界を超過していた。倒れ伏した連中もダメージで起き上がれないというよりは酒が回りすぎて起きたく無いというのが正しい。御祓泡沫と碎城雷は除くが。

肉体はとうに限界を超えており、テンションだけで保たせていた。最高潮に達したボルテージが霧散した瞬間、彼らは一様に最後を迎えるだろう。

いずれにせよ、長くは続かない……のだが。それよりも早く、*「彼女」*の我慢こそが限界を迎えていた。

——パリインツ！

「!？」

小次郎は地面に突っ伏したまま、ピクリとも動かなくなった。

その背後には——*「カツラを脱ぎ捨て、右手に割れた一升瓶を、左手に中身の入った『二升瓶』を持った薬師雪」*の姿が。

美しい白銀の髪をなびかせ、白い肌を真っ赤に染めた彼女。幾ら酔って居ても間違えるはずはなく。

「ひひ、《比翼》のエーデルワイス……!?!？」

「ははっ、もうどうにでもなればいい」

だが、周囲の驚愕などまるで無視。否、気づいてすらいない。

彼女は倒れた小次郎を見下ろしつつ、二升瓶をラツパ飲みして酒気を吐く。

「——貴方は、私を放っておいて何を遊んでいるのですか？」

二升瓶の中身が既に四分の一以下になっている辺り、かなり不機嫌でやけ酒した様子が窺い知れる。

小次郎を目的として来た彼女から見れば、視界のうちで騒いでいるならいざ知らず。

店外に逃げるわ子供達と戯れて自分を放置するわで……怒りのボルテージを上げるには十分な理由があった。もはや、彼女に自制心はさほど残っていない。

エーデルワイスは、倒れた小次郎の首根つこを引つ掴んでズルズルと引きずり、夜の大阪の街へと消えていった。

「お、おい……黒鉄、お前のお師匠さん……《比翼》にどっか連れていかれ——」

「いいですよ、もう……放っておきましょう。知りませんよ、もう……何なんですか、もう……」

この際、これまでの珍事は脇に置いておくとして。

今日もつとも正しい怒りを露わにしているのは、間違いなくこの少年だろうと、断言しておこう。

やけ酒の一つくらい、許して然るべきでは無かろうか——。

情

「——ああ、愉しかったわあ。あんな顛末になるとは思ってたなかったけど」

——その者、諸悪の根源なり。

「でも、一輝くんには悪いことしちゃったかしらねえ……」

混沌とした黒鉄一輝の祝勝会。エーデルワイスの正体を隠すべく、師たる侍を迷わず売り払った彼の手際は見事であったが、如何せん悪手となる。

結果として、荒れ狂った酔っ払いどもにより收拾のつかない事態となり、果てはエーデルワイスの正体もバレるという有様で。

一輝の自業自得。——と言うのは、事情を理解していない者のみだ。彼は最善を目指し……そして、選択を誤っただけ。

付いてくると言い出したエーデルワイスを止めなかった小次郎。自身の身の上を理解しているにも関わらず、魔が差したように同行を決意したエーデルワイス。

そして——。

「巻き込まれる前に逃げたけど、今頃一輝くんどうしてるかしらあ。

……やけ酒？ まあ、そうよねえ。ふふっ」

そもそも——エーデルワイスをそそのかし、祝勝会に潜り込ませた少女こそが。

「さあて、何処にいるのかしら、あの二人。そう遠くには……ああ、やっぱり居るじゃない」

殴り倒した後、衝動的に引張っていったのだろうか……短時間で

アレだけのアルコールを摂取して、まともでいられるはずがなく。見た限りでは、さほど強くもなさそうだったことを加味したならば。恐らくは……と、少女は——薬師キリコは半ば確信を持っていて。

「……結局どこに行くつもりだったのかな……。やっぱりラブホテル？」

道端で酔い潰れて、傍らで伸びている小次郎と二升瓶を抱きしめながら寝こけている、エーデルワイスの姿があった。

「引っ掻き回した責任もあるし……連れて帰りましょうか」

電話でタクシーを呼び、二人のそばに座り込むキリコ。

エーデルワイスの頬を突つついて、呻く彼女で遊び、小次郎の方も……と思い、やめた。

「あんまり悪戯心満載でちよっかい掛けると、反射的に斬られたりしそうよね……」

エーデルワイスの方は悪意が無ければ大丈夫そうだが、小次郎の許容範囲は予想が出来ないため、少々危うい賭けになる。

気体に変じれば一度や二度斬られても問題はないが、避けるに越したことはない。

そんなことを考えながら、ふと……。

「あ、一緒のベッドに放り込んだら面白そう」

気に入ったオモチャは長いこと手放さず、大事に大事に遊ぶのが、薬師キリコという少女であった。

「……は……？」

目覚めた小次郎は、見慣れぬ部屋のベッドに寝かされていた。見れば、何処かのホテルの一室のように思える。

「やれやれ……酔い潰れでもしたか。不覚よな……」

昨夜の記憶はどうにも朧げで、よく覚えていなかった。

諸星ら学生騎士に追われていたことは覚えているのだが、その後のことはハッキリしない。

「ずいぶん飲み過ぎたらしいな……少しばかり、頭が痛い……」

後頭部に俄かに鈍痛を感じて頭に手を当てるために、身体を起こす際に使った左手とは逆の手……右手を毛布から出しそうとしたのだが。

「……む？」

——右手が、動かない。

「……はて？」

正確に言えば、何かに固定されているような感覚で。毛布を、めくってみると——。

「……これは」

すやすやと寝息を立てて小次郎の腕を抱き締める、エーデルワイスの姿があつた。

「いやはや、勿体無い。全く覚えておらぬとは……フェルグス殿なら号泣ものだぞ……」

すぐさま当たりを付ける。おそらくは酔った勢いで「致して」しまったのだろう……と。

小次郎は老年まで生き抜いた人格を持っているが、肉体は全盛時のもの。そういう事態とて起こりうるだろう。

ここに居ない性豪の話はともかくとして……霊体の頃ならいざ知らず、今の小次郎にはその手の欲求も人並みに存在するのだから。

「ん……？」

「おや、目を覚ましたようだな、エーデルワイス殿」

小次郎が動いた気配で目覚めたのだろう。

彼女は可愛らしく目をこすり、年齢の割りにあどけない表情を浮かべながら小次郎を見やり。

「ササ、キ……？　なぜ貴方が私の家に……家？　いや……私の家じゃ、ない……？」

寝ぼけているのか、なかなか状況を把握できないエーデルワイスであつたが、それでも徐々に意識はハッキリとしていき……。

「……なんで、私と、貴方が……」

一緒に寝ているのですか？……とまでは言葉に出来ず。

「おお。——どうやら、そういふことらしいな」

などと、目の前の男がのたまうものだから。エーデルワイスも〴〵そのように〴〵思ってしまった。

「ん？ どうした、エーデルワイス殿？」

「……………」

「エーデルワイス殿？」

瞬き一つせず、寝起きのままの半眼で固まっている。

流石におかしいと思つた小次郎が呼びかけるが、一向に反応がなく。

「う」

「う？..」

みるみるうちに茹で上がったタコのように真っ赤に染まり。

「うああああ……………っ！」

なんとも情けない、絞り出すような細かい声を上げながら布団の中に籠ってしまった。

全身に毛布を被つて完全防御体勢を取つたエーデルワイスは、ゴロリと転がつてベッドから逃げ出すと、壁とベッドの隙間に身を隠した。

「なんだ、そなた……………生娘であつたのか？」

「……………っ!？」

ズバリであつた。

この時代の人間であつたなら余程抜けていない限りは口にしない台詞だが、そこは安土桃山。現代におけるデリカシーの概念などある

うはずもない。

現代知識はともかく、その辺りのモラルまでは授からなかったようだ。

「いや、それは知らなんだ。だとすれば、覚えていないというのも些か具合が悪いか」

どうだ、と気安い声で。

「——これから改めて……というのも、一興であろう？」

生娘には少々……刺激の強い一言であった。

「なっ……な、な……っ!？」

ガバツと布団から飛び出して、様々な感情がないまぜになった……説明しづらい表情を浮かべたエーデルワイス。

真っ赤だった顔は、動揺のあまり青くなったり土色になったり忙しい。

「そ、そんなこと……できる、わけ……!？」

「おや。それは残念だ。——もつとも、流石に余人を交えてというのは私も忍びない。……薬師殿、居るのだろう。随分と上手く気配を隠していたが……今の一瞬、漏れていたぞ？」

「えっ……あっ!」

無論、それはエーデルワイスに向けた小次郎の言葉のせいだ。

予想外の展開と、エーデルワイスの動揺した姿を愉しみ過ぎたためにバレてしまったのだ。

「——あら、バレてしまいましたね」

「ここは、そなたの部屋か？」

「ええ、そうですよ。お二人とも酔い潰れてしまったので、私が」

真実ではないものの、二人にそれを知る術はなく。言われたままを受け入れる他なかった。

「なるほど。ふっ……エーデルワイス殿、どうやらそなたの貞操は無事なようだぞ？」

「……。あ、あまりそういうことを気安く口にしないでください！」

キリコは見逃さなかった。エーデルワイスが、一瞬だけ残念そうに顔をしかめたのを。

「今からでも遅くはないと思いますよ？ まあ、この部屋では遠慮して欲しいけれど」

その展開自体は美味しいものだが、彼女として男性経験は無いのだから、エーデルワイスのことは言えない。

もつとも年齢的な差異が存在するため、二人が同等とも言いがが。

とはいえ事後の部屋など使う気にもならないし、流石に倒錯し過ぎている。

「し、しません！ 私は……もう帰ります！」

居たたまれなくなっただのか……エーデルワイスは窓を開けて飛び出してしまった。純情な彼女らしいといえれば彼女らしい。

普通であれば自殺だが、彼女にしてみれば逃走経路。問題なく逃げおおせるだろう。

「エーデルワイス殿！」

彼女を呼ぶその声は、佐々木小次郎その人。宙に身を躍らせながら、エーデルワイスは思わず振り返った。

「また会おう、次は落ち着けるところでな！——良い酒を、土産に持つていく！」

「——はいっ！」

今度こそ、エーデルワイスは街の中へと消えていった。距離が離れてしまえば、もはや小次郎ですらその姿を追うことは出来ない。

「……決めるところは、綺麗に決めるのね。デリカシーは足りないけれど」

「ははっ、許せ許せ。今まで人とさして関わらず生きてきたのだ、修行不足故な。その分、機は逃さぬよう徹しておるだけのこと」

「……まあ、素敵だと思いますよ。生娘を籠絡できる程度には？」

それは少しだけ、嫌みの混じった言葉であり。

「ふむ……やはりアレは、そうなのか」

「佐々木さんって、微妙に女心分かってませんよね」

「そこはほれ、難解だからこそ魅力を感じるのだろうよ」

伊達男は気取っていても、現代社会でそれを活かすにはまだまだ学ぶことが多いようだ。

小次郎は、剣士であるとともに風流人。

どちらかが隠れ蓑という訳でもなく、TPOに応じて使い分けているに過ぎない。軽薄な言動も、武人としてのそれも……全て、彼の本性であることに変わりないのだ。

「生娘を籠絡できる程度には……と、言っていたが。そなたはどうだ

「？」

「暗に、お前も生娘だろう？と言っている辺り、学習が足りていないように思える。」

「デリカシーの無さを再び咎めるべきか、あちこちで女に粉をかけていることを咎めるべきか……。キリコは頭を抱えなくなったが、とりあえず真面目に答えてやることにした。」

「説教などより、そちらの方が余程聞くはずだ……と。」

「……私は、不養生な人は嫌いです」

「なんとも彼女らしい……。医者らしい断り文句で。小次郎も苦笑を漏らした。」

「それはいかんな……。病はともかく、傷の方は約束できそうもない」「ええ、知ってます」

「普段の飄々とした小次郎は、一風変わった男であれど、魅力のある人物だ。キリコとしても、口説かれたなら満更でもない。」

「しかし剣士としての小次郎は、恐らくはこの先……。気にかけるのも馬鹿らしくなるほど傷を負うだろう。彼は紛れもなく強者だが、それは剣士としてだけで……。伐刀者としては限りなく底辺に近い。それこそ、《落第騎士》以下だろう。」

「弱点を突くのは、勝負の常。彼は不利を強いられることとなる。勝ち負けはともかく、無傷で済む戦いばかりではない。」

「そんな男に四六時中気を取られている暇など、キリコには無い。その時間を有効に使えば、何人もの患者を救えるのだから。」

「これは、キリコ一人の問題ではなく、《白衣の騎士》の戦力を減ずるというのは、日本医学会にとっての損失であり。」

「私、それほど安い女では無いので」

と、いうことらしい。

高慢ちきに聞こえるが、彼女に関しては確かな真実で。

それを理解できるほど小次郎は事情通ではないが……理性はともかく、直感できるものはあつたようだ。

「ふっ。どうやら、そのようだな。いや、昨日は世話になつたな。またそのうち……」

小次郎はそう言って笑い、部屋を後にする。

実際、残念だとは思っているのだろうが……それはその他大勢に対するものと同じ。

その程度の執着では、キリコとしても。

(身体を預ける気には、ねえ……?)

彼女にとって、やはり小次郎は観察対象でしかなく。

「まあ、患者としては貴方は興味深い方ですから。いつでも、我が医院にお越し下さい。——うちに来る限りは、何があつても死なせませんから」

扉を出る直前の背中に、その声を掛ける。

聞こえたかどうかは分からないが、キリコにとってはそれでいい。どちらでも構わないからだ。

しかし、もし縁があつたなら……そう思つてしまう辺り。

「ま、私も十分絆されてるってことよね……」

——浪漫も何もあつたものじゃないが、自分はあの侍が気に入つて
いるらしい。

《魔人》

時は、一輝の祝勝会の前日に遡る。

本来祝勝会が行われる予定だったのは、表彰式当日。

それを延期した理由は、主役である一輝にとある用向きが出来たからに他ならない。

——現職総理、月影獏牙からの呼び出しである。

場所は夜の湾岸ドーム。彼と優勝を争ったステラも同行することになってる。

一輝たちからすれば、月影には良い印象はなく。不穏なものを感じながらも、虎穴に飛び込むつもりでそれを受け入れた。

そして、彼らとは別口でそこに呼ばれたものがもう一人……。

「幸いにも、首は落ちずに済んだ。故に、約束を果たしに来た……のだが、これは一体どういう見か」

一足先に約束の場所へ来ていた小次郎。

表彰式が終了し、舞台が引き払った後の湾岸ドームには……恐らくは月影がそう仕向けたのだろうが、人っ子ひとり存在しなかった。

——ただ一人、この騎士を除いては。

「……アスカリッド殿。何が目的かは解ったが、それ故に殺気が薄い。

……いい加減、茶番はやめにせぬか？」

目の前には、片膝をついた黒の全身鎧。

現世界ランキング四位——フランスが誇るA級騎士、《黒騎士》アスカリッド。《夜叉姫》西京寧音に次ぐ実力者。メディアにも露出があるこの騎士のことを、小次郎は知っていた。

それ故に、突然斬りかかってきたアスカリッドを、小次郎は驚きと……半ば歓喜で迎えたのだが。

——小次郎とアスカリッドでは、勝負にすらならなかった。思っ

いた以上に。

「私とそなたでは、決着がつかん」

膝をついていたアスカリッドは何事も無かったように立ち上がる。そも、小次郎はアスカリッドの体勢を体捌きで崩し、足払いで転倒させただけであり、かの騎士はダメージで倒れた訳ではない。

もつとも、転倒といつても生半な鎧武者であれば死亡するほどの勢いであつたのだが……アスカリッドには何の効果もなかつたようだ。

——《不屈》の概念。それこそがアスカリッドの能力。

使用者の肉体を無限に回復し続ける……文字通り屈せぬための力、決して碎けぬ無敵の城塞。

それに加えて、霊装《無敵甲冑》を備えるアスカリッドを小次郎が倒すのは不可能であつた。

全身鎧故に小次郎の斬撃は決して通らず。一輝の《毒蛾の太刀》のような……浸透勁、通しと呼ばれる類の剣戟も決定打に至らず。

転倒による負傷は、実のところ頸椎が損傷する程の深手であつたのだが、苦もなく回復してみせた。

そして——よしんば、刀が通つて首を断ち切れたとしても……殺せるとは断言できなかつた。

とはいえ、打つ手が無いのはアスカリッドとて同じこと。

アスカリッドの技量と膂力は、ともに超越者の域にある。しかし、それでも小次郎を追いきれず。体力を削ろうにも、肝心の部分で彼に転がされ、或いは自身の突撃の勢いを利用して遙か向こうに投げ飛ばされる。

消耗と言えるほどの疲れは小次郎には無く、仮に体力的に危うくなつたとしても、いつでも逃げ果せる状態を維持していた。

既に何度も同じような場面を繰り返し——お互いに、何の痛手も与えることが出来ずにいた。

「これは、互角といって良いものか……。まあ、決め手があるぶん……

そなたの方が優位といったところだろう」

「……決め手は無い。貴方には、追いつける気がしない」

返事がかえってくるとは思っていなかった小次郎は、俄かに目を見開いた。

今の今まで小次郎の軽口に一切反応を示さなかったのもあるが……その声色が、思っていたものと違ったのもまた、理由の一つである。

「そなた……女子であったのか。いや失敬、鎧姿故に気づかなかった」

「別にいい。……それより、姿を消して。次が来る」

「次？……ああ、なるほどな。そなた、あの二人も試す気か」

途中から、アスカリッドが小次郎の実力を試すつもりだということ
は理解していた。本気ではあったのだろうが……さりとして、殺意とい
うほどの気迫はなかったが故に。

ならば、今から来る二人に対しても同じような真似をするのだら
う。気づけば、覚えのある気配が三つ。

「……彼奴らも、片棒を担いでいるようだな。良かろう」

闇夜に紛れ、気配を遮断し……文字通り、姿を消した小次郎。

そして成り行きを不安なく見守ることにした。

アスカリッドは相性の関係もあるが、小次郎と伍する実力者。しか
し、その彼女が相手であっても。

「まあ、死ぬことはあるまい。だろう、一輝よ？」

「つまり……師匠も途中からグルだったんですね」

「ははっ。そう言うな、アスカリッド殿ほどの強者と立ち合える良い機会だと思っつてな。おそらくは、新宮寺殿と西京殿も同じ考えのはず」

仕掛け人は、前述の二人。三人を試したいと希望したのはアスカリッド。

月影は止めたらしいが……如何せん、許可を出さねば闇討ちを強行する可能性もあり得たため、監視のもと渋々……といったところだ。

「まあ、どう考えても殺し合いになるから色男には仕掛けんなつつてただけどき」

「……西京殿。それは初耳だが？」

ともあれ、結果的に両者とも無傷——正確にはアスカリッドは即座に回復したためだが——で済んだのだから、今更どうこう言ったところで栓なきこと。

「アタシ一応……国宝なんですけど、その辺どう思ってるんですか現職総理大臣さん？」

「ま、まあ……私としては大変申し訳ないと思っっているんだが……彼女達がね……。と、ともかく。今日は君たちに話さなければならぬことと、聞いてもらいたいことがあつて呼んだんだ。……まずは、前者から」

このままでは話が進まない……と、半ば強引に月影は話題を修正した。

「話さなければならぬことは他でもない。一輝君、君の身に起きた出来事についてだ」

「やはり……ですか」

「察しはついていたみたいだね」

このタイミングで、この問いが飛んできたのなら……一輝としても用件は一つしか思い浮かばない。

「ステラとの試合で僕が使った、二度目の《一刀羅刹》のことではないかと」

「その通りだ。——魔力とは、伐刀者が生まれながらに持つ世界へ向けた影響力。だからこそ、その総量は運命として定められている」

しかし。

「この世には、その前提を覆す例外が存在する。自らの強固な意志で運命の鎖を断ち切った者。魂の限界を超え、運命の外側に至った例外達……我々はそれらを、《魔人》と呼んでいる」

運命に従ったなら一輝は敗れていたが、彼はそれを振り切った。

常識では考えられない……魔力上限を引き上げるといふ奇跡を引き起こし、運命を覆したのだ。

一輝の魂は既に通常の伐刀者の領域にはなく。星が定めた運命の転輪から外れ、訓練次第で魔力上限すら引き上げられる存在となったのだと月影は語った。

結果としてそれは、魔力上限が生まれつきのものであり、死ぬまで変化することが無いとする世間一般の常識を覆すもので。月影はそれを知っていたことになり、本人もそれを認めた。

あまつさえ……連盟本部は《魔人》の存在を把握しており、《覚醒》に至った人物にそれを伝えるのは国家元首としての義務だとも。

政治中枢に身を置くステラとしては、とても無視できないものがあった。

彼女は父からそのような話を聞いたことなどなく、魔力上限は取り

払えないものと信じていた。つまり、彼女の父——ヴァーミリオン皇国の現皇帝すら知り得ないものであり。

連盟は、自国に対して隠し事をしていたことになるのだから。

「ステラ姫が憤られるのも無理はない。——しかしこれは、必要なことなのです」

連盟が一部の国家間で《魔人》に至るノウハウを独占しているというのは、大きな誤解であった。

「《魔人》に至るには、〴〵自分自身の可能性を極め尽くし、尚且つそれ以上の高みを望む本人の意志が必要〴〵なのです。それが覚醒の絶対条件。……しかし、どれほどの人間がそこまで自分に厳しくあれるでしょうか?」

「それは……」

「もうお分かりでしょう。これが欲深い指導者に知られたなら、どのような悲劇が起こるかを」

強大な力を持つ伐刀者の存在は、国にとって非常に重要なものであり。それを増やせるとしたなら……。

——間違いなく、非人道的な訓練を強制する者が現れるはずだ。

自分自身の意志という絶対条件が欠けた状態では不可能な目覚め。無理矢理にそれを起こそうとしたところで、悲劇しか生まれず。世論が傾いたなら、絶対数の少ない伐刀者の人権すらも危ぶまれる。

「それ故に《魔人》を排出した国家のみに伝えている……ご理解、頂けたでしょうか」

「……ええ。納得したわ」

ステラとて伐刀者であり、その危険を理解できないほど無能ではない。

月影に対する反感はあれど、道理を違えることはしなかった。

「……つまり、総理がそれを知っているということとは……」

「その通りだ。既に、君以外にも《魔人》は三人存在する。一人は《大英雄》黒鉄龍馬と同じ時代を生きた伝説の騎士《闘神》南郷寅次郎氏。そして、ここにいる《闘神》の愛弟子、《夜叉姫》西京寧音君。それと、国外の話になるがアスカリッド氏も《魔人》の一人だ」

最後に。

「大取りは、君もよく知る彼……やれやれ、戸籍すら無かった彼を連盟の伐刀者としてねじ込むのは苦勞したよ。身分もでっち上げた……」

言わずもがな。とつくに察しはついていたが。

「《比翼》を下し、世界最強の剣士となった騎士——《魔剣士》佐々木小次郎君もまた、この度把握できた新しい《魔人》だよ。それも……とんだ変わり種だ」

佐々木小次郎は、異端の《魔人》。それを知ることが出来たのは、ひとえにエーデルワイスとの決戦を観た者達がいたためだ。

「佐々木君は伐刀者としては未熟過ぎる。とても『可能性の全てを極め尽くした』とは思えない。そこから導き出される結論は、信じ難い一つしかない」

「ちよつと、それってまさか……」

佐々木小次郎の、そもそもの始まりは——。

「彼は、非伐刀者の身でありながら運命を覆した超人——あまりにも、異端な《魔人》なのだろう。……そうではないかな、佐々木君？」

今まで口を開かなかつた小次郎だが、月影の問いかけに対して……
楽しげに口端を歪ませた。

「いや、全くその通り……なのだろうよ。私は伐刀者などでは無かつたはずだ。《魔人》とやらについても先日まで知ら無かつたが故……あまりに弱々しすぎて、気づかなかつたものと思つていたのでがな」

この世界に流れ着いた小次郎は、その瞬間に星を巡る運命の輪から叩き出されていた。

故に、ここに存在し始めた頃には伐刀者であつたのだが、それ以前は間違いなく違つたはずで。

詳細を語るのは、荒唐無稽すぎて憚られたが……そういう意味でも、月影が言つた言葉は小次郎の細やかな疑問の答えとして、満足のいくものであつた。

「変わつてる変わつてるとは思つていましたけど……師匠がそこまでびっくり人間だとは思いませんでしたよ……」

「そうよね。なに考えて生きてきたのよアンタ……。本当に考えて生きてきたのよアンタ……」

理解の及ばない程に極まつた剣術のルーツを感じられた気がして、ステラは思わずげっそりとした表情で小次郎を睨んだ。

それでも楽しげな顔を崩さない辺り、小次郎も良い性格をしてい

る。
「——実際問題、びっくり人間も良いところだ。ただの剣術で、剣を増やす」男だぞ。化け物にも程がある」

もう我慢が出来ないといった風情で口を挟んだのは黒乃だ。

「あの……それってもしかして」

「例の秘剣だ、ふざけている……！ 地獄に落ちろ……！ どういう理屈か知らんがこの化け物はな、並行世界に存在する自身の斬撃を呼び込んで、三点同時の斬撃を成したんだよ……！」

あまりに理解できない発言に、思わず口が半開きになる一輝だが。

「は……ははっ。なんだ、本当に増えてたのか。ますます僕に可能な攻略法は限られるな……出させない以外に無いんじゃないか……？」

即座にそれを口にする辺りが、彼の修羅たる所以なのだろう。

極まった技量を「神業」と称することは多々あるが、あれは間違いだと一輝には理解できた。

それらは、あくまで人の手で成した現象でしかない。

——神の領域があるならば、まさしくあの秘剣こそがそれを体現している。

「まだまだだな、僕は……。『技』に限りなんてそもそも存在しないのか。なるほど——流石は師匠だ、勉強になる」

彼と、彼の言葉を聞いて満足げに頷く師を除き……啞然とする一同の心持ちは。

「なんなんだ全くこの気狂い師弟は……!!」

黒乃のこの悲鳴にも似たボヤキが、もつとも正しく表していただろう。

焼却

「——では、二つ目の用件に移らせてもらおう。私が《解放軍》と手を組んだ理由でもある」

月影が突き出した両手。そこに月明かりの如き光が生まれ……。

「万象照らせ——《月天宝珠》」

この内、親しい間柄であるはずの元教え子……黒乃と寧音ですら目にしたことの無かった固有霊装。人の拳程度の大きさの、水晶球。

月影の前に滞空するそれは、非戦闘系と称された彼の能力を示すような武力の欠片も感じさせないもので。

しかし、剣や槍とは比べようも無い……神妙な佇まいで鎮座していた。

「これが……先生の霊装……」

「ああ、私の霊装《月天宝珠》だ。その能力故に発現した時から日本の国家機密に指定されたため、君と寧音君にも見せるのは初めてだね。当然連盟にも詳細は伏せてある。……人前で見せるのは、私も久しぶりだよ」

月影は、疲れたような笑みを浮かべながら、続ける。

「細かい説明は後にして……まずは、これを見てもらいたい」

月影が滞空する水晶球を指で弾くと、その鏡面に俄かに波が立つ。そして、球体下部から一滴の雫が、床にこぼれ落ちた時。

現出したのは——地獄であった。

「な、なによこれ……子供が……」

「ステラ……！」

死体の山、臓物の川、亡者の叫び……この世のものとは思えない光景であった。ステラが動揺を示すのも無理はなく……戦場であっても、まだ大人しいだろう。

単なる映像ではなく、嗅覚や聴覚……果ては温度すらも感じさせるそれは、まさしく地獄の再現である。

誰もが人の残骸に目を奪われた……しかし、小次郎の——彼の目を、それ以上に引きつけたのは。

「——人理、焼却」

絶えることのない業火に包まれた、人の世の終焉。

補完された英霊ではなく、単なる亡霊であつたが故……否。たとえ正しく英霊の身であつたとしても、忘れることのできない鮮烈さ。

思わず脳裏に過つてしまったのも、無理はない。

しかし、連想されたそれも……既にその有り体を失っているとはいえ、ヒトが生きているという事実によつて打ち消された。

災厄の存在を頭の片隅に追いやり、小次郎は周囲を見渡すと。

「……日本、か。月影殿——これは、起こるのだな？」

この場に居る誰彼の思考……その全てを置き去りにして、小次郎は月影を問いたです。

「君が今、口にした言葉……その意味はひとまず置いておこう」

聞かれていたか……と、少しばかり迂闊を呟った。

小次郎自身、素性を知られることに何ら問題はないのだが……それは、あまりに非現実的な話になる。

誰一人として、まともに取り合おうとはしないだろう。

「これは、少なくとも起こりうる未来だ。《月天寶珠》は一定範囲内の人や場所の過去を覗き見る力を持つ。しかし、この因果を読み取る力は時折、予知夢という形で——未来を見せてくるのだよ。その夢を、私という人間の過去から再生した。……今のまま星の運命が進み続けたなら、この地獄はいずれ現実となる」

一同は言葉を失った。

「私の力はただ、視るだけだ。理由は分からない……だが、今の世界情勢から推測することは出来る」

月影は霊装を消して映像を閉じると、話を先に進める。

「ステラ姫は知っているだろうと思うが、この世界は三つの勢力が拮抗することで仮初めの平和を保っている。……だが、それはもう長くは続かない」

日本の所属する《国際騎士連盟》。アメリカやロシア、中国といった大国が結んだ《大同盟》。そして、闇の世界に巣食う超巨大犯罪結社《解放軍》。

この三竦みこそが、世界の均衡をかりうじて維持していた。

「それは……」

「——寿命、だよ。どれほど強力な力を持っていても、生物である以上は避けられない。三勢力にはそれぞれ一人ずつ非常に大きな力を持つ《魔人》が存在する」

「軍事力の中核を担う伐刀者——その、真なる頂点に立つ者達。覆されることのない、無差別級の君臨者。」

「《連盟》の現世界ランキング一位にして、連盟本部長——《白髭公》アーサー・ブライト。《同盟》には、若くして米国が誇る《超能力部隊》の長を務める男——《超人》エイブラハム・カーター。そして、第二次世界大戦以前より闇の世界に君臨し続けている《解放軍》の盟主——《暴君》。彼らの力は拮抗しているが……《暴君》は既にかんりの高齢。いつ、天寿を全うしてもおかしくない」

もし《暴君》が死去したなら、次に始まるのは《解放軍》の残党を自勢力に引き込む囲い込み競争だ。

しかし、《解放軍》に対して表向き明確に敵対姿勢を取っている《連盟》は間違いなく《同盟》に出遅れる。

そしてそれは、既に——。

「戦力が傾いたその時、それは間違いなく……必然的に生じてしまう」

即ち——第三次世界大戦。

「つまり先生は……《連盟》に組したままではあの未来は避けられない
と思い、《同盟》に鞍替えしようかと？」

「エイブラハム・カーターはまだ二十代……年齢的なりスクも少ない。
《同盟》が《解放軍》と強く繋がっていることを考えれば、多少不利な
条件を飲んででも《同盟》の側に付くことが最善だと考えた。そのた
めの……暁学園だった」

暁学園の力を示し、脱連盟の気運を高めることこそが目的であつた。脱退には、国民投票の過半数を超える賛成票が必要だからだ。

「しかしもう、叶わぬ夢だ。世論は《連盟》の方針を再評価する方向に傾いている。過半数など不可能に等しい……」

そうして溜息をつく月影だったが……。

「だが、後悔はないよ……。知ってしまったからね——新たな、可能性を」

十年……たった十年で一国家の政治権力の頂点に昇りつめることがどれほど難しいかは、想像するまでもない。

それでも尚、月影の言葉に嘘はなかった。悔いなど微塵もなかった。

「私の力は、星を巡る運命を視る力。運命から外れた《魔人》の過去や未来を視ることは出来ない。不確定要素……なんだよ」

弱者の立場に生まれながら、自らの可能性を諦めずに運命の鎖を引きちぎった少年。あるいは、無名でありながら頂に上り詰めた異端の男。

……どうして悔いることなどあるだろうか。希望は、自身の知らぬ間に……遅しく根付いていたのだから。

「私は、君たちが作る未来に賭けることにした。——この国を、世界を……よろしく頼むよ」

「……さて、ここにはもう私と君しか居ない。教えてもらおうか、君の言った言葉の意味を」

月影は、座して待つだけの男ではない。そうであれば、滅びの未来に絶望し、とつくの昔に足掻くのをやめていただろう。

一切の失敗が許されない十年間……成し遂げられたのは彼だった

からこそ。余人では到底真似することなど出来なかった。
そんな彼だからこそ、小次郎が口にした些細な違和感を無視することとは出来なかった。

「〃人理焼却〃……随分と、物騒な言葉だ。物騒というだけで、済まされない言葉だ。——君は一体何者なんだ？ 何を知っているんだ、佐々木小次郎君」

それを白状するのは簡単なことであつたが……。

「ふっ……こんな話、誰が信じるものかよ」

まさしく荒唐無稽、与太話以外の何者でもないそれを、口にするのは憚られた。

同じ世界の人間だつたとしても、それを信じる者など滅多に居ない。仮に証拠を見せつけたとして、その証拠を真実だと認識出来る者が、一体どれほど居るといふのか。

真面目に話して聞かせる義理も無し……小次郎は、月影に背を向けた。

「——信じよう」

「……何？」

「信じる、と言つたんだ。君がどれほど奇々怪々な物語を語つたとしても、私はそれを真実だと受け入れる。——なに、狂人扱いされるのは慣れてる。今更それが一つや二つ増えたところで、問題などある訳がない」

振り向けば、月影は人好きのする笑みを浮かべていた。

疲れ切つたあの笑顔とは違う。笑いながら泣いていたような、不安に駆られた貌とは違う。

それを見て、思わず納得した。

これが月影獏牙という男の本来の姿なのだろう。今のこの男ならば……黒乃が、寧音が慕うのも理解できる。

エーデルワイスが懇意にするのも頷ける。

「ほざいたな、月影殿。知ったところで、そなたには何の得もない話だぞ?。」

「得かどうかは私が決めることだ。それに……少なくとも、君の正体を知ることができる」

一寸のブレも見せない月影の言葉に——小次郎は、応えることに決めた。

「ならば、聞かせよう。しかと耳を傾けよ。——焼き尽くされた人類史……その悉くを修復した、ただの“人間”の英雄譚だ」

それは……死を憎み、終わりを蔑み、定命を憐れんだヒトならざる災厄。哀しみの歴史を憂うあまり、最期の最期までヒトの全てを理解できなかった魔神の王の物語でもある。

愛故に人を滅ぼす、人に作られし悪魔……憐憫の理を司る者。

ヒトの王たり得る素質をもちながら、全能であったが故にヒトの不完全を許容できなかった獣。

ピーストI——人理焼却式・ゲートイア。

「どうだ、中々に妄言じみていただろう? 信じるなどと酔狂なことを口にしていたが、さて——これでもまだ、信じられるか?。」

その言葉に、困ったような笑みを浮かべる月影であったが。

「そういう約束だからね。……しかし、実に壮大だ。その全てを証明することは私には出来そうもないが、少なくとも貴方については仮説が立てられる」

「ほう……っ」

真偽のほどはそもそも論ずるに値しないとばかりに月影は話を進めた。

これは彼個人の問題であって、誰一人として巻き込まないな寝物語に等しいもの……信じると決めただけには、現実として彼は受け入れる。そうでなければ、起こらない可能性もあり得る予知夢のために、自分を殺し、十年もの歳月を国へ捧げることなど出来はしない。

「貴方が世界に保存された英雄の魂……それが実体を得たものならば、この世界に流れ着いた時点で《魔人》となるのも頷ける。なにせ、既に人生の最果てを知っているのだから、可能性を極め尽くすという意味ではこれ以上のものは無い」

真実という前提のもとに理論を組み立てねば辿り着けない結論を、月影はいとも容易く手繰り寄せた。

口だけではなく、本当に小次郎の語った英雄譚を信じている証拠であった。

「それに、聖杯というのは元々万能の願望機なのだろう？ 貴方自身覚えてない何処かで、強者との立ち合いを願ったなら……それを聖杯が、まだ見ぬ異世界へ送り、肉体を与えることで叶えたとしたら……ここに貴方が居るのは、あり得ない話じゃない」

無論。真相は定かでは無く、月影は知らないことだが聖杯とて限界はある。そのため、達成できるとは断言できないが……。

それでも、可能性としてあり得る話を一つ一つ紐解いていく。

「妄想だと笑うのは簡単だが、貴方の話に筋道を立てるのだって出来ないことじゃ無いんだ。少なくとも一部のことはね。なら、信じられるとも」

一国の党首に収まる器としては、あまりに穏やかな男であった。

「君の語った『歴史』は、どれも希望があった。絶望に染まることなく輝き続け、しかし何の変哲もない……ヒトがヒトとして抱く希望だ。最期までそれを語れる君は……恐らくはずっと、その若者に付き従ったのだろうか？」

恐らくは、この世界には関わりのない話であったが。

「妙な勘繰りをしてすまなかつたね。……同時に、よく話してくれた。それは私の選択の正しさを証明してくれる」

「おや、やけに楽観的だな。とても、絶望に沈んでいた男の言葉とは思えぬが？」

そうでもない、と月影は前置き。

「——若者が世界を救うのは、いつだってお約束だからね」

鶴

「しかし……貴方が本当に、あの『佐々木小次郎』だったとはね。巖流島の真相も、貴方に聞けば解ってしまうわけか」

成り行きではあるが、お互いに腹を曝け出した仲……小次郎にしても、肉体の若さに引つ張られている部分はあるとはいえ、その精神は老成に達していた。

精神的な年齢で言えば、月影と小次郎は実によく噛み合う仲で。それ故に、踏み込んだ話へ移るのも自然な流れではあるのだが。ここで月影の大いなる勘違いに気づき、小次郎は苦笑を漏らす。とはいえ、小次郎の存在した世界で起きた事情を説明する中でも、彼の存在は一際異端であった。月影が間違えたのも無理はない。

「月影殿。語って聞かせたいのは山々なのだが……。そも、かの二刀流とまみえた記憶が私には無いのだ」

「それは……やはり、あの戦いは偽りだったということですか？」

月影の認識は間違っではない。しかし、そもその前提が異なっている。

「この世界のこととは知らぬよ。ただ……私という男は違う。確かに『佐々木小次郎』という剣客は居たのだろう、『物干し竿』という長刀を操る剣士も居たのだろう」

しかし、それらは同一の人物ではなく。

「所詮は、『宮本武蔵』という大剣豪を讃えるために生み出された架空の剣士。私はただ、伝承に残る『秘剣』を放てるという理由だけで呼び出された亡霊に過ぎぬ男よ」

即ち、「燕返し」。それこそが、この無名の剣士を「佐々木小次郎」足らしめる、唯一の妙技。

神の領域に踏み込んだ魔剣を以ってして、この剣士は英雄の殻を纏っていたのだ。

裏切りの魔女による反則が生んだイレギュラー。それが無かったなら、冬木の聖杯戦争は元より……カルデアが用いる曖昧な召喚方式ですら、彼を呼び出せたかどうか怪しいもので。

ただ一度の例外が、彼という剣士が召喚される因果を確立させ。ひいては、この世界に流れ着く可能性を作り出した。

「本来であれば、この場所に私という男が立つことは有り得なかった」

些か腹に据えかねる部分もあるが、それでもやはりメディアには感謝していた。おそらく、それを彼女が聞いたなら……鼻で笑い、決して受け取るうとはしないとかが。

「偶然生まれた我が身では、月影殿の期待には応えられぬよ。少なくとも私の世界で、その戦いは起こらなかったということしか……な」

「佐々木小次郎と宮本武蔵の果たし合い自体は、あつたのかもしれない。巖流島の全てが嘘だと誰が言えよう。」

しかしそれは、誰もが知る宮本武蔵の英雄譚とは異なり。

——「物干し竿という長刀にて、秘剣を振るう美剣士」と、二天一流の兵法者の決戦では無かつたはずだ。

「なるほど……。しかし、それは惜しい。別世界であれど、歴史に名を残す剣士の話が聞けるのでは……と、年甲斐もなくはしゃいでいたのだが……」

「……そも、疑問なのだが……月影殿の能力を用いたなら、私に聞く必要はないのではないか？」

それこそ、伐刀者の存在しない世界の存在である小次郎に聞くよりも——この世界の住人にとっては——遥かに正確な情報を得ることが出来るだろう。

月影の能力は、一定範囲内の人や場所の過去を視るもの。

知りたいのであれば、自身の力で幾らでも調べられるはず。神代は流石に無理があるとしても、中世ならば何とかなるのでは……と、小次郎は尋ねたのだ。

「まあ、そう思うのも無理はない……か。しかし、この力は余り私事に使えるものではなくてね。総理となった今ならば、多少融通も効くのもかもしれないが……代わりに、安易に旅行など出来る立場ではなくなってしまうたのでね」

残念だ、と言いたげに月影は肩を竦めた。

「世知辛いものよな、今の世の権力者というのは……。私の知る王や皇帝の中では、生真面目な者の方がむしろ珍しかったのだが……」

「おや、それはそれで興味深い話だ。思えば貴方は、あらゆる時代の英雄達と顔を合わせているのだったね」

古今東西。その全てが大英雄とはいかないが、それでも強力で個性的な英雄達と、小次郎は轡を並べていた。

月影の好奇心を刺激するには十分すぎる素材であった。

「ふっ……では、酒でも飲みながら語るとしよう」

「ははっ、それは楽しみだ。——久しぶりに、美味しい酒が飲めそうだよ」

月影という男の、絶望に対するたった一人の痛切な抵抗は終わりを告げた。しかしそれは、彼という男の物語の終わりではない。

彼は今後も未来のために戦い続けるだろう。それが表舞台である

とは限らないが……十年間に渡り挑み続けた、悲壮な戦いではないはずだ。

今の月影獏牙が見据える未来には、確かな光が宿っているのだから。

「……ふむ。よくは覚えておらぬのだが……つまり、お前達は私に襲いかかり、敗れたと？」

「くっ、嫌な部分だけ要約しおって……！　ま、まあ、概ねその通りや！」

「ですが。あのような場で、しかもあの結果で、私達が納得できるはずがありません！」

正直なところ、刀華はべろんべろんに酔っ払っていたので記憶は曖昧なのだが、それはそれ。結果だけ聞いても気に入らなかったのだから、こうして諸星に同調していた。

——要するに、彼らの用件は。

「リベンジマッチや（です）！」

二人とも、単独で相手になるとは思っていない。實力試しという面が強い試合だが、試す間も無く斬られてはその意味も薄いだろう。

ライバル同士、相手の動きは嫌というほど理解しているし、即興でもそれなりのコンビが組めると判断して、徒党を組んで小次郎に挑んだのだ。

「なるほど——いいだろう。まとめて掛かってくるがいい」

それを聞いて、断る小次郎ではなく。そもそも、諸星には既に挑むことを許している。望んでいたといつてもいい。

とはいえ、いくら小次郎が現職総理による反則技で一応魔導騎士としての体裁を保っているとはいえ、刀華と諸星は学生騎士。

なあなあで済ませている部分もあったが、その辺の公園で戦ったりしたなら当然違法行為として処罰される。今更処罰など恐れているとは思えない面々だが、邪魔に入られるのはいただけない。

そうすると、おのずと場所は限られてきて。

「武曲の闘技場……か。破軍のものとそれほど変わらないんですね」

「なんや、黒鉄。お前らも見学か？」

一輝とステラも、小次郎と彼らの試合には興味があった。有栖院と……ぶつくさと文句を言いながらも付いてきた珠雫もまた、同じであろう。

しかし、見れば多くの先客の姿がある。

破軍学園の生徒会。武曲に限らず、剣武祭に出場した代表選手達。

そして、《浪速の星》と《雷切》がコンビを組んで戦うという情報を何処かで得たらしい、武曲の生徒や教師達。果ては、大会関係者まで……。

片やは、無名の男。

一体あの男は何者だ……と。果たして、あの二人が同時に掛かるほどの価値がある者なのか……と。

口にする言葉は、一輝の耳に入る言葉はどれも似通ったものばかりで。

満員御礼とはいかないが、それでも観客と呼ぶに相応しい人数が集まっていた。

「やれやれ、人前で戦るのはいつぶりか……」

「すみません、こんな騒ぎになるとは……。しかし、ご経験があるとは思いませんでした。貴方のような人物が観衆の前で剣を振るつたな

ら、何処かで噂になりそうなものなの……」

「そこはほれ、遠い異国の地であったのでな。映像も残っておらぬ故、無理もあるまい」

なんだつたら年代も遠いのだが、そこは割愛する。

「お前達を知りたいのは、そのような些事ではあるまい。血気に逸つた眼光がまるで隠せておらぬわ」

侍はなにも間違つてはいない。

駆けつけた者……特に、見知った顔に声もかけないのは不義理と思ひ、客席に寄つていた諸星も。彼を待ち、小次郎と向かい合つていた刀華も、既に溢れんばかりの闘志を燃やしていた。

周りの者達もそれに気づき、諸星を送り出し。また、邪魔にならぬよう闘技場から客席へと上がる。

「ほんなら、始めようやないか」

「合図が必要なら、お願いしましょうか?」

先陣を切り、二人を伴つて闘技場の中央へと向かう小次郎は。

「要らぬとも。好きな時に、かかってくるがいい」

稲妻が猛る。

「——ッ!!」

開幕直後——否。小次郎が幕を開くこと自体求めなかったが故……完全なる不意打ちで放たれた必殺。

東堂刀華の代名詞ともなった伐刀絶技——《雷切》。音速を遙かに超えた速度で放たれるそれを破つた者は、数える程しかない。まし

てや、背後からなど……余人からすれば、想像もできない領域だ。

一部の者達を除き、観客が《雷切》の使用に気づいたのは、既に抜刀を終えた後。砂煙に覆われた闘技場中央一步手前……彼らの脳裏には、真つ二つに両断されて息絶えた小次郎の姿が浮かんでいた。

「——なかなか良い不意打ちであったぞ、東堂殿」

しかし、それもかの《魔劍士》を知らぬからこそその愚考。

闘技場に立つ二人の学生騎士は、あの程度で決着が着くなどとは微塵も思っただけではなかった。

その動作を正確に見極めることは、やはり出来なかった。刀華も諸星も話には聞いていたが、小次郎の剣閃は見切れない。

刀華の伐刀絶技《閃理眼》は相手の身体に流れる微細な伝達信号を感じ取り、その心理と行動を暴く能力を持つのだが。

読んだ上で、理解不可能。心理は元より、何故その動作がこの結果に繋がるのか……まるで理解が及ばず。

「未熟っ……!」

「——止まんや、東堂っ!!」

その通り。恥じ入る暇など有りはしない。既に《魔劍士》の剣戟はその身を狙い澄ましている。

牽制ながら全力の《三連星》。一輝ですら苦戦を強いられる超速の三連突きは、連打を想定しておらず、間合いを広げるために放たれたもの。それ故に、一輝との模擬戦で見せた驟雨の如き無数の刺突よりもさらに速い。

「ぼーっとしとる暇があったら手え動かせや!」

「くっ……すみません!」

通常、剣士が相手であればこれで間合いを制することが出来るのだ

が、小次郎の《物干し竿》が相手となると勝手が違う。その余りにも長いリーチは、もはや槍に等しい。

遠距離攻撃手段を持たない諸星では、これ以上の牽制は不可能。気を抜けば一瞬で両断される危険地帯に身を置き続けることとなる。

「《雷鷗》ッ！」

閃く雷の刃。幾度となく放たれるそれにより、小次郎を間合いの外に追い返した。

クロスレンジの斬り合いは刀華の得意とするところだが、小次郎が相手では、間合いの不利も相まって勝ち目は薄い。故に諸星に前線を任せるのは道理なのだが、彼の伐刀絶技は攻撃力を持つものではないため、体技で小次郎を抑える必要があった。

「一人じゃ流石に手に負えんわ、このバケモン」

「ええ……躲すならまだしも、《雷切》をいなす」なんて……」

《暴喰》を発動させた諸星は小次郎の間合いへと飛び込み、刺突の雨を降らせる。狙いは小次郎本人ではなくその手にある長刀だ。しかし、刀など狙ったところで当てられるはずもなく。読めぬ剣戟にカウンターを狙うのは、余りに無謀。

受けるにしろ流すにしろ、刀を防御に使わせなければならぬのだが……諸星の技量はいまだその領域にはない。

だからこそ、刀華がそれを補佐する。

《閃理眼》による先読みも、《魔剣士》の太刀筋を見切れるほどではなく、またその心理を読み取ることも出来ない。しかし、単純に彼がどう動くかを知ることが出来る。その動作にどのような意図があるかは理解できないため、確実性には欠けるものの、アドバンテージとなるのは確かだ。

要所に《雷鷗》を放ち、小次郎の動作を妨害することで諸星を守り。そして——彼の一撃を届かせる。

「どうや、即興の割りにはまあまあイケとるやろー！」
「ああ、どうやらそのようだ。舐めてかかると、痛い目を見るやもしれんな」

自らの不利を口にしながら、その相貌に浮かぶのは紛れもない喜色。

二対一とはいえ、対応を考えさせられるほど手を焼かされているのだから、それは無理もない。この剣士もまた、剣武祭で競い合った学生騎士達と同じく、強敵との立ち合いを望む者なのだ。

苦戦こそ勝負の醍醐味。圧倒的な果たし合いなど何が面白い。

「まだまだこんなもんや無いからなあ——期待しとけや、侍いつ!!」

格上たる小次郎をも飲み込みかねない《八方睨み》。

尋常にして、必勝ならざる勝負の予感に小次郎は……俄かに闘志を震わせていた。

進境

「そおらああああ!!」

途切れることのない刺槍の嵐。それは、さながら流星群の如く。

《浪速の星》諸星雄大の槍捌きは、剣武祭の最中にあつた時よりも冴え渡っていた。《無冠の剣王》と《紅蓮の皇女》の戦いは、彼に対して大きな影響を与えたようだ。

そして、彼女もまた。

「——シィッ！」

当初、《雷鷗》による遠距離支援に徹していた刀華だが、それだけでは不足と判断し、間合いを詰めていた。

これもまた、試合前に諸星が提示していた策の一つである。格上を相手に様子見などするつもりは毛頭無いが、慎重さは必要だ。

一輝から聞き出した小次郎の剣技……その最大の特徴は、見切りという行為を無にする特異な技法にあつた。もし真実であれば、達人と言われる類の人間にとって、これほどやり辛いものはない。

こちらは手の内を知ることが出来ず、逆に相手は一方的に情報を引き出し続けるというのだから悪夢でしかないだろう。優れた武人の中には先読みを重視する者も多い。《完全掌握》を身につけた一輝などは、その究極系の一つと言えるよう。

初めは半信半疑であつた《魔剣士》の邪剣も、今は真実だと理解できている。しかしそうになると、如何にフォローが入るとはいえ、諸星一人で前線を維持出来るとは言い難い。

この状況を想定していた諸星と事前に示し合わせていた通り、刀華は彼の僅か後方に立ち位置を移していた。

佐々木小次郎という稀代の剣士を前にして諸星は良くやっているが……それでもまだ足りない。リーチにおいても同等に近いこともあつて、時折閃く人外の剣が諸星の身を捉えんと迫る。

「——《雷切》」

後出しであれ、《一刀羅刹》という集中の極地を以ってしてようやく対応できた超速の居合は、音速を上回る小次郎の剣を見事に払いのけてみせた。

斬れ味こそ、《魔劍士》の斬撃は神がかっていたが、肉は斬れてもBランクである刀華の霊装を斬ることは、小次郎の貧弱な魔力量では不可能。

そして——単純な威力、衝撃力を比べたなら《雷切》がその上をいく。

居合抜きである以上、連発は利かず。そのうえ角度や立ち位置を間違えたなら、《雷切》が大気を切り裂く際に起きる衝撃波に諸星が巻き込まれてしまう。タイミングは一切誤れない。

それを見極める力は、やはり以前の刀華には無かったものだ。もつとも、刀華としては甚だ不服である。

自身が放つ必殺の威力程度、苦もなく捌いてみせると言わんばかりの侍に、より一層……凍えるほどの殺気を放っていた。

「ふ、はは。やはり若人は侮れん……!」

「そういう余裕がっ!」

「気に食わんのやあああああッ!!」

弾かれたように飛び出す諸星。それに追従する刀華。雷光を纏った猛虎は、《物干し竿》が形作る剣戟の結界を食い破らんとしていた。

しかしもし仮に、純粋な体技のみで相對していたなら二人はとつくの昔に斬り伏せられている。

それを支えるのは、ひとえに伐刀者としての力量。諸星が《暴喰》を一瞬でも解いたなら、彼の槍はそれこそ瞬く間に攻略されるだろう。刀華が遠近両方の戦闘で適切な伐刀絶技を、適切なタイミングで発動させていなければ、《暴喰》があつたところで長くは保たなかつたは

ず。

——それは、小次郎には無い強さだ。

次の瞬間には、目まぐるしく前衛を入れ替える多段特攻の型へと切り替わる。前衛に居たはずの諸星は刀華の背後に陣取り、上下左右へ牽制の刺突を放ち、彼女の間合いの不利を補った。刀華は《雷切》からスタートし、特殊な磁場を形成することで肉体限界を超えた斬り返しを可能とする伐刀絶技《稲妻》により小次郎に肉薄する。

本来であれば《稲妻》は手首へ凄まじい負荷を掛けるもので、連発は悪手なのだが、今はそうも言っていられない。見切れぬ剣閃に対して長期戦はそれ以上の悪手となるのだから。

初めから二人は、短期戦に主眼を置いていた。

刀華の負担が限界に至る直前には諸星にスイツチ。刀華は《雷鷗》による支援に戻りつつ手首を休め、諸星は形振り構わぬ魔力放出で小次郎との力量差を縮め、虎の大牙を振りかざす。

——若き血潮が、老練たる無名の達人へ迫る大活劇。闘技場に集まった者たちの目にはそう移っていた。

事実、小次郎の表皮の一部は雷の余波で焼かれ。そのところどころには槍と刀による細かな傷が目立っていた。

「——実に、震えるな」

身震い。しかし、無論のこと恐怖から生じたものではなく。正真正

銘——飽くなき、闘争心そのもの。

達人が老練だなどと誰が決めた。そもそもが、彼らをストイックに走らせる原因とは、類稀なる闘う心。恵まれたのは才能だけでは無い——闘争心こそが、彼らを達人足らしめる極意。

あの《比翼》のエーデルワイスでさえ、その本能を隠し持っていた。ならば……ならば、この男は。

「——せえあつー！」

——どれほどの戦意けものを、その身に宿しているのか。

諸星の《虎王》に触れたなら剣を溶かされ、刀華の《鳴神》は一度弾いた程度では《稲妻》の効力によりすぐさま復帰してしまう。

そのうえで小次郎がとった手段は奇策も奇策。

大きく弾いた《鳴神》を、《虎王》の餌食にするというものであった。

「ちっ、しまった——！」

警戒していた展開ではあった。しかしそれを帳消しにするほど刀華との擦り合わせを行い、刀華を前衛とした際には《稲妻》による起動制御で事故を防止する予定だったのだが。

「くっつ!？」

「東堂、お前……！」

辛うじて刀の柄は握っていたが、その手はひどく痙攣を起こしており、鬱血した手首は実に痛々しい。《稲妻》による負荷は大きなものだが、短時間でこれほどのダメージは無いはず……。

「——そろそろ、決めさせてもらおうとしよう」

至近距離から突き出された掌底に、刀華は顎を正確に撃ち抜かれ、後頭部を叩きつけられる形で地面に追突。

抵抗する術を失っていた刀華は、呆気なく意識を奪われた。

しかしそれで怯む諸星では無い。

彼は小次郎が刀華にトドメを刺す隙を見逃さず、全力の刺突を叩き込んだ。

残る魔力を全て注ぎ込んだ一撃。魔力喰いの獣を纏った槍は、この後に及んでこの日一番の冴えを見せつける。

「悪いが私は、これ以上の槍を知っている。——まだまだ、お前達には

負けてやれぬよ」

《暴喰》は固有霊装と、そこから放たれる伐刀絶技に対して絶対的な優位性を持つ技ではあるが、それ自体には何の破壊力も秘めてはいない。肉を突く際には、単なる槍と変わらないのだ。

しかしそれを操るのは、諸星雄大という一流の槍使い。

——柄とはいえ、素手で掴み取るような男は……彼を置いて他には居まい。

無防備な姿を晒した諸星の胴を一薙ぎ。啞然とする観客を他所に、勝者はつつがなく定まった。

直前に幻想形態へ切り替えた一撃であったため、それに伴う血光が飛び散るだけで外傷は見当たらず。

諸星本人もまた、打撃により物理的に昏倒させられた刀華とは違い、精神ダメージを受けた以外に心身に支障はなく、強靱な意志力により何とか意識を留めていた。

「……わかったで。《毒蛾の太刀》とおんなじ原理やな……」

「おうとも、その通りだ。よく気がついたな」

浸透勁による内部破壊。ここに来て、太刀筋が読まれないという点がさらなるアドバンテージとなる。

そうで無ければ、太刀筋の違和感に気づけた可能性もあったのだから。

「東堂の奴は知らず知らずのうちに、毒入りの餌を食わされとった……っていうわけか」

手首への負担だと思い込んでいたそれは、小次郎が仕込んだ毒の効果が混じったもので。

刀華自身も《稻妻》を連発するのはほとんど初めての試みであったため、単なる負担の積み重ねだと思い込んでいたのだ。

「意外と頭つかうやないか……てつきり、ゴリ押しで叩き潰されるもんやと思つとつたんやけどなあ？」

確かにそんな回りくどい真似をするまでもなく、身体能力と技量により押し切ることも出来ただろう。積み重ねた年月と戦闘の純度を比べたならば、伐刀者としての実力差を引いたとしても小次郎に分があつた。

それをしなかつた理由は他でもない。

「私は、伐刀者としては半人前にも及ばぬ男だ。それ故に弱点も多い」

正攻法。向かい合い、真正面からの戦いであれば、こう言つては何だが——佐々木小次郎という剣士を破れる存在は限られる。

この世界でそれを成す可能性があるとすれば……現時点で小次郎が剣を合わせた中では、彼に比する剣士であるエーデルワイス、そして無限回復によりおよそ通常の物理攻撃では倒すことができないアスカリツドくらいのものだ。

しかし、形振り構わぬ殺し合いとなれば話は別だ。

隕石を斬り捨てることなど、今の自分には不可能であり。空間を破壊する一撃には及ぶべくもなく。気体と化した「彼女ら」が待ち伏せなど仕掛けようものなら、その場で息の根を止められかねない。

これまで小次郎がそれらの天敵と相対せずに済んでいたのは、運が良かっただけに他ならないのだ。

「ああ、認めるとも……しかしな——私には、それが酷く気に食わん」
さらなる高み。まだ見ぬ領域。小次郎はそれを求めていた。

「天下無双……些か、青臭い憧憬よな」

「……青臭いんは青臭い。けど馬鹿らしい話でもないなあ？ なん

せ、ワイもそこで寝とる東堂も——」

「寝てません、起きました！ ええ、そうですとも。私だって目指します」

頂点を目指すのは、小次郎一人ではない。

「ったく……手エ抜いたなんてぬかしよったら今は無理でもそのうちブチ殺したろう思っとったんやけどな」

手抜きとはまた違う。強さを求めるが故の制限。……枷を外すほどに追い詰められなかったのは、諸星にしろ刀華にしろ、悔いるに足る事実であつたが。

「ちつ、まあ今回は負けや負け！ こないな大勢の前で言い訳なんぞ出来へんわ！」

気づけば、周囲は歓声に包まれていた。

四方八方から叩きつける音の衝撃には、覚えがある。思い返すは遙か古代、浪漫の国——ローマ帝国のコロッセオ。

いつの時代においても、勇士達の戦いは讃えられるのだろう。

「なるほど——いや、成り行きとはいえ……せつかく魔導騎士になったのだ。そのうち、リーグ参戦というのも面白いやもしれぬなあ」

今はまだ、小さな噂程度。

ネットの海に落とされた一雫。それは奇しくも、弟子である黒鉄一輝と同じ流れを辿る。

《魔剣士》の名は、俄かな広がりを見せ始めていた。

其々の……

「ここに帰るのも、随分と久しい気がするな……」

そこは、およそ人里とは呼べぬ山奥。そこに……ともすれば、寂れたようにも見える小屋がある。

中天に浮かぶ月の明かりを除けば、星々の輝き以外には照らすものもなく。聞こえてくる音は、木々のざわめき、川のせせらぎ、虫の声、鳥の囀りに限られ。青々と生い茂った緑が、豊かな土が、濃厚な自然を香らせていた。

男は一人、小屋の程近くにある……あつらえたような高さの石に腰掛け、杯を傾ける。

月を見据え、風流に耳を澄ませるその姿は、和装も相まって時代を錯覚しそうになる。信条を体现するかのような風体……あるいはそれは、花鳥風月。

風情がある……といえば、聞こえの良いほったて小屋。緑が豊か……といえば、長所にも思えるヒトの住まわぬ深山。

男がそれらに囲まれた風景を絵画に閉じ込めたなら、一見の価値あるものに仕上がるだろう。

全て、男自身が望み、そして叶えたこと。故に不満などあろうはずもない。……そう、不満は無いのだ。

——だというのに。

「ここは、こつとも静かであったらどうか……」

虫の声、鳥の囀りが酷く小さなものに思える。

価値が落ちた……という訳ではない。この“世界”は儂くはあるが美しく、そして……この現代においては貴重なものだ。男が生きた時代を感じられる場所など、この時代においてどれほど残っているものか。

男は、この場所を好んでいる。その気持ちに、一切の翳りはない。

しかし。

「——狭い、な」

ここには男が愛でるに足る花も、鳥も、風も、月もあつたが……思
い返せば、それしかない。

いつも、男を心底楽しませてくれるものは外から来る。外にこそ
……男を満たしてくれる歓喜がある。

この山には——修羅が。竜が。劍聖が。不屈が。比翼が、居ないの
だ。

変わりのない箱庭は、いつの日も変わらぬ美しさを誇っているが
……歓びを知ってしまった男には、酷く退屈なものであつた。欲深な
人の身は、どうしてもそれらに固執してしまう。

人が……美味しい食い物を、美味しい酒を、上等な暮らしを、優れた異
性を求めるのと同じく、劍士たる男は好敵手を求めていた。

「……それが解つただけでも、戻ってきた意味はあつたのだろうか
……」

空になつた盃に、なみなみと注がれる美酒。それを、再びあおる。
たとえ自身の大欲を知つてしまおうとも、今はこの酒を……この鳴
りを……この匂いを……この、月を。

楽しもう。存分に、十二分に酔いしれよう。

「次は、いつになるのやら……」

山奥での隠棲が、今の我が身にどれほど不向きなものを彼は理解
した。そして……闘いの中に身を置く彼は、都合よく次があるなど
は確信でしなかつた。

男は間違つても無敵の戦士ではない。……死ぬ時は、それはもう呆
気なく命を落とすだろう。

——来世になるやもしれぬ“次”を待つのは、些か徒労に過ぎる。故にいま、この刹那の彩りに重きを置くのだ。ひと時の休息の後には……新たな闘争を、強者を求めて世界を流浪するのも悪くはない。

「……そういえば、久方ぶりに仕事に来ていたな」

世界というワードで思い起こしたのは、珍しい人物から届いた国外での“仕事”の依頼だ。

以前、一度だけ警護の依頼を受けたのだが、その気持ちの良い人柄とあけすけな態度は好ましく。道中偶然に遭遇したテロリストを成り行きで制圧した際に腕を買われ、いたく気に入られたので記憶に残っている。

熊か獅子のような出で立ちが印象的な大男で、それなりの技量を持つ戦士であることも見て取れた。

どうやらお忍びの旅らしく、娘であろう小柄な女性の他には子飼いの護衛は数人しか連れていなかったのだが、立ち振る舞いから貴人であることは間違いない。

偽名を使っていたため正体は不明だが、変装は比較のお粗末なものであったこともあり、調べようと思えばそれほど難しくはないだろう。まあ、調べようと思えば……ではあるが。

「まあ、明日で良からう」

所縁の薄い人物からの依頼だ。内容は気になるが、急ぎの用ではないだろう。

少なくとも、晩酌を中断してまで見る価値はない。

夜空の月を盃に写し、それを飲み干した男は気を取り直すように酒気の混じったため息を一つ吐き。空になったそれを満たすと、また月を眺めるのであった。

ズタボロの身体は、とてもでは無いが五体満足とは言えなかった。青年の四肢は人知を超えた膂力を誇り、魔力を計算に入れなければ、恐らくは純人類の中では最上位のものと思われ……彼自身も、そう自負していた。

「くっ……ふ、はは……これが、『奴』の言っていた、獣の力——人間の、限界かッ!!」

まるで小山のような、そう評する他には無かった。

眉唾ものの噂を頼りに未開の地へ脚を踏み入れた青年。彼の期待は、まさしくその小山にこそあった。

驚くべきことに、この小山の主食は……本来であれば密林において最上位に位置する虎や象、熊だと言う。小山の食性を考えれば、偏食とも言えるが、巨躯を維持することを考えたならば無理もあるまい。そして、敵など有り得なかったのだろう。如何に猛獣、巨獣いえど勝負にはなり得ないことが解る。

——その身から放たれる、濃密な魔力の気配によって。

木の実や果実、野菜を漁るよりは……滅多に襲われることのない君臨者達を仕留める方が余程栄養を得られる。この異常なまでの巨大化も、それが少なからず関係しているはずだ。

目測ながら、体高は5メートルを優に超えている。体重に至っては、青年の異形の体躯を以ってしても勝負にすらならないだろう。

膂力など語るべくもない、たった一撃……片手間のような、その場から飛び出ただけの突進で重傷を負わされた。

「これは、英雄どもが殺されるのも無理はないか……!」

神話において、「彼ら」に殺された英雄もそれほど珍しくはない。殺されはせずとも、強敵として登場することは数多ある。

原初、力の象徴とされた「彼ら」は人知れず生き残っていた。今ここに、青年の目の前にその存在を示していた。

一線級の伐刀者ですらこの小山には劣るだろう。青年が持つ嵐の剣を純粹な力のみで易々と突破し、生半な攻撃など苦もなく弾く異形の身体を数十メートルに渡り吹き飛ばし、蹂躪した。

単純な膂力に関していえば、目覚めたばかりとはいえ——ステラ^童をも超越していた。

「だが、俺はこれを……これを、求めていたッ!!」

ヒトの域を遥かに上回る大暴力。

青年が追い求める純然たる強さには、このような埒外の獣を上回らなければ辿り着くことなど決して出来やしないのだから。

他人は青年を馬鹿だと嘲笑うだろう。そのようなことなどせずとも、青年は強くなれるのだ。いたずらに身体を傷つけ続ける青年の姿は、常識人^{頭の良}どもにはどれほど滑稽に映るものか。

——しかし、それがどうしたと言うのだ。

大馬鹿で結構だ。青年の家系は、その系譜を正しく受け継いだ者たちはどいつもそんな大馬鹿ばかりだ。

弱き者に生まれたにも関わらず、自らの可能性を何一つとして諦めなかつた弟。誰よりも深い愛を持ち、才媛たるその身をさらに研ぎ澄ます妹。弱き者たちを守るべく、誰より厳しく努め、一時は息子すらも切り捨てた父。

融通の一切利かない、とびきりの頑固者ばかりだ。

思考を、想いを巡らせる青年に、然して……小山は容赦などしない。最強の野性は、目の前の小さな生き物を既に獲物としか見ていないのだ。単なる、たんぱく質の塊としか。

どこの世界にも、獲物の前で座して待ち続ける獣は居ないだろう。体格に似合わぬ……否、その体格では有り得ない速度で青年に迫

る。純粋な筋力だけでは不可能に近い。本能で魔力を使いこなしている証拠だ。

感じられるその魔力量は、驚異のAランク。

魔力とは、この星に対する影響力。その総量は、即ち是れ……運命の大きさに他ならない。

ならばこの小山は、恐らくはこの密林だけに収まる存在ではない。放っておけば、〃何か〃しでかすはずだ。この凶暴性を見るに、良いことではないのは確かだろう。

辛うじて突進を躲す青年、その背後の山脈が小山の一撃で大きく揺らいだ。

「このつ、バケモノが……！」

青年は横つ腹を捌くように斬りつけるが、特異な成長を遂げた小山の毛皮は固有霊装をも寄せ付けなかった。しかしこれにより青年は理解した。

この小山の能力は《防御》の概念、故に自重と巨体の運動を邪魔する空気抵抗や重力から〃身を守る〃ことによりズバ抜けたスピードを確立し、伐刀絶技による嵐や直接的な剣戟を弾き返すことが出来たのだ。

身体能力でこの小山を超える生き物など存在し得ないことを考えれば、攻撃力に不足することもない。それも含めて、完全な能力体系だ

「ふん、超え甲斐がある……！」

元より圧倒的な存在を求めていた青年は、歓喜を露わに小山へ躍り掛かった。

「さあ、いくぞバケモノ——神話の狩猟を再現してやるツ!!」

黒々とした毛皮。隆々とした筋骨。強靱な牙。猛々しい魔力。神話の先達にも劣らぬ威容——正しく小山は、魔猪の一角であった。

「——その程度か？」

男は自らに襲いかかってきた者達を易々と退けると、そう吐き捨てた。

息のある者は憎悪の籠った目で、呪い殺さんばかりに男を睨みつけていたが、瀕死の身体は意志を反映してはくれなかった。

「殺してやる……殺してやる……!!」

「貴様には、無理だ」

逆転の目など一つもなく。男は、刺客達を処断した。——自らに、枷を掛けたまま。

そうして男は修練に戻る。

ひたすらに剣を振るい、身体を駆動させる。その繰り返し。ただただ、日がな一日それを続けるだけ。特別なことなど有りはしなかった。

「——まだ、足りん」

なまじ、強力な力を持っているが故に疎かにしてきた剣技。磨き始めるのが遅すぎたとは思わない。ヒトの一生は短い……短い、だからこそ凝縮される。

何物をも退け、何物をも断つ。凡そ物理法則に則った戦いにおいて無敵に近かった己が能力。それを……あろうことか、力の信奉である

はずの男が、封じたのだ。

——ただ一心に、強くなるために。

不自由を強いられる戦闘、単なる雑魚を相手にしても命の危機を感じねばならない非充実感。

男が力を封じたという噂はすぐに広まった。

すると、有象無象が押し寄せた。恨みを持つ者、男を倒して名を上げようとする者、時には同じ組織に属する者すらも。

男本来の実力であれば歯牙にも掛けない連中であっても、能力を封じた自身には、気に食わないことに相応しい相手であった。

それでも羽虫が如き相手であれば、苦戦することなどないのだが。

——時折、上物が訪れる。

ハンデを負った自分では殺されかねない相手、能力の相性で勝ちを拾っただけの強者。しかしそんな相手だからこそ、男が斬り結ぶ価値がある。

鍛錬だけで大成できるほど、男は才に恵まれてはいない。

——かの《魔剣士》に及ぶには、数多の死線をくぐるより他なかった。

そう、噂が広まるキツカケを作ったのは……そもそも男自身である。

「もつと……もつと強き者を……!」

ほんの一時だけ立ち戻れた、純粋な剣士としての自分。腐り果てる前の、精気に溢れていた自分。

《魔剣士》との死合が呼び起こした、とうの昔に消え失せたはずの自身の正体。

——取り戻さねば、ならない。

漠然と……男の本能が、それを求めた。力の信奉者としての自分よりも、ただの剣士としての自分こそを。

あの悪意の塊に救われた命。その場で投げ捨ててしまおうかとも思ったが、どうせ捨てるのなら……と、開き直った。

死んだ気になって、磨き上げようと。身体を。技量を。何よりも、心を。

ここに居るのは勇名を馳せる《剣聖》ではない。——一人の、名もなき《剣士》である。

しゆら

「——ッシ!!」

上段から振り下ろされる超速の一刀。その一“刹那”のち、同様の疾さを以って斬りあげた。目前へ刃を振り下ろすことで相手を一瞬怯ませ、二の太刀でトドメとする。

現代剣術において、《虎切り》。あるいは——《燕返し》と呼ばれる代物だ。

より厳密に言うなら、ある方向に打ち込んだ刀を真逆に斬り返す技だが、伝承において《巖流》と呼ばれる剣士が用いたのは上下の変化であったとされていた。

極めたなら、確かに必殺の威力を発揮する剣技ではある。

しかしこれは——彼の知る《燕返し》ではない。

頭上から股下までを断つ縦軸の一の太刀、一の太刀を回避する対象の逃げ道を塞ぐ円の軌跡である二の太刀、左右への離脱を阻む払い三の太刀。

本人は連続剣であるかのように語っていたが、それは偽りだ。ほぼ同時ではなく、“全く同時”に駆り出される三つの軌跡。人の身では回避不可能の……まさしく必殺剣であった。

「……理屈で再現できるものでもない、か……」

その《魔剣》は、今の黒鉄一輝には不可能だ。

「——せえあ!!」

独特の構えから、一息のうちに放たれる三太刀の連続剣。《比翼》の剣技によって放たれたその斬撃は、加速を必要としないアドバンテージのおかげで、傍目には同時に放たれたモノにも見える。

ともあれ、所詮は連続剣という他ないだろう。《神速反射》を持つ倉

敷藏人のそれと比べても劣った……言わば、出来損ないのモノマネだ。

そもそもが、佐々木小次郎の《燕返し》という技は、三点同時というだけでは成立しない。彼自身の神速と技量、《物干し竿》という奇怪な刀があつて初めて形になる限定奥義だ。

全ての条件を満たすことで、必中の魔剣は完成する。

唯一その理合を読み取ることの出来た師の剣は、《比翼》の剣技すら篡奪した黒鉄一輝の技量を以つてしても再現不可能な代物であつた。

世の理を覆すほどの凄絶な深みを、今の黒鉄一輝は持ち合わせていない。

仮に同じ現象を再現できたとしても、師の《燕返し》には及ぶべくもない。それは、師の望むところではないだろう。

佐々木小次郎が黒鉄一輝に求めているもの。それは、自身に匹敵する——否。自身をも上回る技量を持つ剣士に一輝が成長を遂げることに他ならない。

そうして初めて、師の望む強者との果たし合い……その地金が出るのだ。

「……全く。無茶な要望だ」

その域に達するには、エーデルワイスと同じ程度の才覚。或いは、天賦の才に加えて……生涯をかけた修練、もしくは修羅場すら生温い死闘の繰り返し。思いつく限りでもそれだけの凶事を乗り越える必要があるだろう。

一輝が持つ才覚は——無論、伐刀者としての資質を除けばだが——常人と比べたなら破格のものだろう。

それでも、エーデルワイスはもちろん……小次郎の持つ鬼才とは比べられない。

——しかし、黒鉄一輝は何としてもその領域に辿り着かねばならない。

そうでなければ、申し訳が立たない。これは目標である以上に、義

務であり責任だ。そう、自分で定めたのだ。

如何に人々に穏やかと、温厚と称されようとも、自身は剣に生きる破綻者だ。だが、最低限……報いねばならないという思い^{執念}がある。

「誰にも見捨てられたこの身を。無理矢理押し入っただけの自分を。技一つ盗めぬ若輩を、教え子と認めてくれた」あの侍に。

その大恩に何としてでも報いねば、黒鉄一輝に先は無いらぬ。

最強という目標——そして、師を超えてみせるという……ある種当然の気概は、一輝の中で強固な信念へと変貌していた。

それは、ともすれば……場合によっては強迫観念のようにも聞こえるが、それは違う。身体を蝕むための「呪い」ではなく、燃料として注がれた「願い」というのが正しい。

佐々木小次郎という剣士を辿る道筋は、少年にとって、決して間違った道では無いのだから。

「……いけないな、鍛錬の最中に余計な思考は」

今はただ、剣を振る。

やれることをやり残してきたつもりは無いが、それでも完璧であったかと問われれば疑問符が残る。

初心にかえり、日がな一日剣を振り回し、基礎を磨くのも良いだろう。それこそが、全ての剣士の原点だ。

——修羅は、静かに牙を研ぎ澄ませている。

夕刻……というには、やや語弊のある……既に日が沈み切り、間もなく夜を迎えようという時。

黒鉄一輝は、師の影を追い続けていた。

全ての刃が読み切れず、気づけば目の前へと迫っている。《比翼》の

剣技を得た今でこそ形になっているが、初めの頃はそれはもう酷いもので、微動だに出来ぬまま一日が終わることも珍しくはなかった。

技量を伸ばした今でも対応するのがやつと。容易には踏み込ませないが、反撃にも出られない。故に、幾度も首を落とされた。

そしてそれは、どれほど完全にトレースしたとしても、幻影にすぎない。現実はずその上を行くだろう。《一刀修羅》を、《一刀羅刹》を用いたとしても、多少追い継れる程度……敗北という結果は変わらない。

——自身の全てが、通用しない。

「イツキ」

ふと、後ろから声が掛かった。

「ステラ？」

「アタシにも気づけないなんて、根を詰め過ぎなんじゃない？」

実際その通りだ。普段の一輝であれば、鍛錬中であっても人の接近に気づけない筈がない。嫌でも察知してしまう。

つまりは……それほどの疲労、それほどの集中。意識の全てを傾けていたのだ。

「……そうだね。そろそろ切り上げようか」

「らしくないわね、イツキ。『常在戦場』……そうでしょう？」

痛いところを突かれた……とばかりに、苦笑を漏らした。

「二度、改めて自分を追い込んでみたかったんだ」

七星剣武祭優勝という、ある種の節目。学生騎士の誰もが一度は夢見る、一つの終着点。

《七星劍王》の称号。それは、黒鉄一輝にとってはもう一つの異なる意味を持つ。

黒鉄一輝の“魔導騎士”としての人生は、ようやく始まった。

その達成感に僅かでも溺れてしまうのは、非才な自身には致命的な損失である……と、彼は考えたのだ。

幸いにも、凶に乗る暇もなく、頂点たる技量のぶつかり合いに叩き折られた鼻っ柱。一輝にとっては、この上なく都合が良い。しかしやはり、それ以上に。

——血湧き、肉踊った。

「ふーん……なるほどねえ？ アタシを置いてけぼりにして見た『例の決闘』がそんなに刺激になったと？」

「い、いやな言い方しないでよ」

この件に関して、ステラはかなり根に持っているらしく、事あるごとにチクチクと嫌味を言ってくる。

一輝としても、逆の立場ならと考えれば、分からなくもない。嫌味くらいはあつて然るべき……というのもおかしいが、納得していた。

「……ふふ。でも、イツキがそんなだから、アタシは一緒に居られる」
「ステラ……」

「アタシたちなら、ずっとそんな関係が続けられるわよね」

「ああ、もちろんだよ」

ステラ・ヴァーミリオンという少女は、本心から黒鉄一輝と波長を合わせられる数少ない女性の一人だ。それは、闘争においても恋愛においても変わらない。

彼女の存在は、一輝を強くする大きな要因の一つであり、事実……彼女が居なければ乗り越えられなかったこともある。

辿り着けるかどうか分からない目標を愚直に目指せるのも、彼女のおかげだ。

「だから、そのためにも。今度の『お父様への挨拶』、成功させないかね?」

「ああ……そうだね……」

今だけは忘れていられたのに……と、一輝は思わず項垂れた。正直、そう繋がるのかという思いもある。他意は無いのかもしれないが、毘に嵌められた気分だ。

そもそも、鍛錬により一層の熱を入れたキツカケはそのイベントにある。頭の中のスイッチを戦闘用に切り替えてからはすっかり頭から忘却し——または封印、もしくはは逃避し——真剣に腕を磨いていたのだが……。

まあ何がどうあっても無くなるイベントではないし、ここで避けたとしてもいずれは訪れる難所である。

せめて延期したいと申し出たところ、詳細は省くがとりあえず戦争になるとまで脅されたので、どうしようもない。

「飛行機は明後日よ。挨拶、ちゃんと考えておいてね♡」

じゃあ、先にシャワー使わせてもらうわね、と言いながら去っていくステラを笑顔で見送った一輝は。

「……これってもしかして……釘、打たれたのかなあ」

遠く、彼方にあるヴァーミリオン皇国に馳せる思いは、恋人の期待とは裏腹に……不安でいっぱいの子供の生暖かいものであった。

「……で、何故ここに来た黒鉄？」

「僕の周りの大人で一番マトモな恋愛をして結婚に至っている大人が貴女しか思い当たらなかったからです、理事長閣下」

いつになく腰の低い一輝の様も、黒乃の不安を煽っていた。が、しかし。

「正論と言わざるを得んか……まず、大人は寧音やお前の師匠のような輩ばかりでは無いと弁明しておこう。アレは少数派だ。あんな類の大人ばかりでお前の周りを固めてしまったことに罪悪感も無くは無いが」

黒乃も結構おかしい方なのだが、家庭を成立させる程度には良識があり、学園運営を滞り無く行える程度には常識的な大人だ。

そういった理由で黒乃に相談を持ちかけた一輝ではあったが、一番の理由は学園で仕事をしていた黒乃が一番近くに居た大人だったというだけの話で。一刻も早く不安を解消させたかったのだ。

そうでなければ、性別以外は非常に出来た人間である有栖院にでも相談していただろう。彼女が帰郷していたことがタイミング的に悔やまれる。

「しかしだな、私は貰われる側だぞ？ 娘の恋愛事情如何で戦争を仕掛けるような親馬鹿のことなぞますます専門外だ」

まさか、理事長なら息子さんを私に下さいとご両親に挨拶しに行っているも違和感がない……などという曖昧な理由で来たとは間違っても口には出さず。

「それでも既婚者の意見は貴重ですよ」

「む……そういうものか？」

「はい、そういうものですよ」

若干納得の行っていない様子の黒乃であったが、それでも教育者として生徒の相談は断れないようだ。

「とりあえず土下座はやめろ」

「あ、はい」

いきなり手持ちの切り札を捨てられてしまった。

「雑すぎるし、憎いお前の気持ちの押し付けなんぞヴァーミリオン国王も聞きたくないだろうしな」

「憎い……ですかあ」

「今頃ワラ人形に釘でも刺してるんじゃないか」

冗談のようにには聞こえなかったので、本当にあるのかもしれない。……ともあれ、土下座禁止は納得できた。

確かに悪手にしかならないのだろう、と。

「月並みだが……相手の趣味嗜好に合わせた会話から切り口を見つけるのが望ましいだろう。遠回りだが、正攻法だ。こちらには娘の協力もあるんだ、情報はいくらでも手に入るだろう?」

「なるほど……」

その通りだと言わざるを得ない。

相手に合わせた会話を振るというのは、ある意味では気遣いや誠意に繋がる。少なくとも土下座より遥かにマシだろう。

「大変だろうが、相手はあのステラ・ヴァーミリオンの父親だぞ? 見込まれたなら……絶対にお前を裏切らないさ」

「——それは、すごく説得力がありますね」

あの少女を育てた人間ならば、それは揺るがないだろう。あれほど誇り高く、純粹に育つたのは周囲から大きな愛を注がれたからに違いない。

「……どうだ、多少は楽になったか？」

「はい、ありがとうございます。これなら、何とかいけそうです」

「まあ、楽なことではないだろうが……思い一つで《魔人》にまでなつたお前のことだ、心配はしていない」

黒乃の浮かべた表情は、その言葉に嘘がないことを教えてくれた。

一輝は彼女のことを信頼している。彼女に言われたならば、不安も軽くなってしまう。

「頑張れよ、黒鉄」

何故なら彼女は——黒鉄一輝を認めてくれた、数少ない大人の一人なのだから。

謎の……

「——くっ、このクソガキがあ！ さつきまでの三番勝負はぜーんぶ予選じゃけえ！ 力試しじゃけえ!!」

みつともなくわめき散らし、自ら挑んだ決闘の結果を不服とするのは——あろう事か、時のヴァーミリオン国王……シリウス・ヴァーミリオンであった。

一番勝負の模擬戦では、ほんの一瞬で斬り伏せられ。二番目の腕相撲においては、体格差を易々と覆す黒鉄一輝の技量の前に完敗し。

最後の最後に挑んだマラソン勝負では、ショートカットしようとして裏路地に入った挙句迷子で保護される始末……。

「パパったら……そんなにまで……」

「お父様、いい加減惨めだからこの辺でやめておかない……?」

愛する妻と娘の表情は、もはや怒るだの呆れるだのという次元ではなく……憐れみに等しかった。

後ろに居並ぶメイド達に至っては、主人の痴態に若干の泣きが入っているほどだ。

「否あ!! ワシより強いステラちゃんに勝つ男を相手にワシでは力不足、そんなことは始めから承知しておったわ!!」

当然、嘘だ。始めから、必ずや我が手で仕留めてみせると、闘志を燃やしていた。

しかしそんなことを口にできる筈もなく。

結局のところ隠していた秘密兵器に頼らざるを得なくなったのだ。

国を扇動して、さらには軍隊まで動員。そこまでなら、ヴァーミリオン皇国の国民性である高い忠誠心を鑑みれば無い話でもない。普

通の国家であれば有り得ないほどの忠誠心に、襲われた当の本人が敬意を抱いてしまうほどである。

それにしたって、要は、我らが姫をどこの馬の骨とも知れん男に黙ってかれてやれるものか……という憤りなのだから、素晴らしいと言えは素晴らしいもの。

……しかし、よりにもよってソレを国家元首本人が主導し、あまつさえ国庫から多額の賞金を出してまで一輝を排除しようとし——改めて文面に起こすと凄まじい暴挙である——その上で大失敗したのだから、家族からの……特に、ステラからの信頼はガタ落ちだ。

シリウスは、一輝を負かすことでそれを取り戻そうとしていたのだが、それは叶わぬ願いであるとはつきり思い知った。

——ならば、せめて目の前に立つ憎つくき日本人の婿入りを阻止せねば。

「クロガネイツキ！ おどれがどれほど強かろうがこの方にはぜえつたいに勝てん!!」

一輝がステラと正式に婚約する条件として出されたのは、今度行われる隣国クレードルラントとの戦争において、ヴァーミリオンを勝利に導くこと。

もともと、戦争とは言っても、どちらも《連盟》に属する国家……その内容は、互いの国の代表選手五名による、ルールのある試合形式のものなのだが。

これを、不服ながらも自身の家庭内地位——実際のところ、家庭における父親という存在そのものの有る無しを問われるほど重大な事態であった——を存続させるために受け入れざるを得なかったシリウスは……しかし最後の抵抗として、この腕試しを思いついたのだ。

「ええかあ、この方はなあ……この日の為にわざわざ遠い異郷の地からご足労くださったんじゃない！」

本来は、ヴァーミリオンを訪れた一輝に対する最後の砦と呼んでいたのだが、あちらも忙しかったようで依頼の確認が遅れ、その場には間に合わなかったのだ。

尚、原因の一つとして依頼文に期限を書いてなかったシリウスのドジも挙げられる。

「——先生!! 先生、あの不埒な小僧をいともうたつてくださえ!!!」

シリウス・ヴァーミリオンは、もはや勝利を確信していた。

何故ならば、《先生》は自身の知る限り——最強の剣士。その評価は、達人たる一輝と戦った後でも一切変わってはいない。

先日も、日本の有名な学生騎士を二対一で下した無名の^{プレイヤー}伐刀者としてネットで騒がれていたが、シリウスから見ればその程度は当然のこと。

絶対というに相応しい信頼を、シリウスは彼に寄せていた。

「やれやれ……いきなり天守閣に招かれたかと思えば——どういう因果であろうな、これは」

そう言つて独りごちた侍を尻目に、シリウスはこれ以上ないほどのドヤ顔を浮かべていた。

——話は、少し遡る。

「失礼、緑茶をいただきたいのだが？」

「緑茶ですね。かしこまりました、少々お待ちください」

優雅に足を伸ばせるだけのスペースが完備されたそこは、地上から

一万メートル離れた空のオアシス。

場合によっては下手なホテルより整ったサービスを提供する——
所謂、ファーストクラスである。

依頼文を確認した小次郎は、然程急ぐこともなくジェット機に乗り込んだ。

雑多なエコノミーは以ての外。ビジネスクラスもいまいちパツとしない。であればと、意外に小金持ちな小次郎は、迷わずファーストクラスを選択した。

そんな彼の行き先は……。

「ヴァーミリオン皇国か……まさか、一輝達の後を追うことになるとは」

よもや、会うことはないであろうが……奇縁と言う他ない。

「あの御仁も貴人のようだが、まさか国主と接点があるとは思えぬしな」

一応、仕事で来ているのだから、そちらを優先しなければならない。
内容としては、ある男を百分の九十九殺しくらいでぶちのめして欲しい……とのことであった。

強者と出会えるかは分からないが、そこはそれ……仕事である以上、自身の望みは後回しだ。

正式な素性を得るに至った今となつては、この稼業も畳む頃合いだ。故に、これは最後の仕事になるだろう。

となれば、きっちりと締めなければ格好がつかない。

「さて、出るのは鬼か蛇か、はたまた……まあ、成り行きに任せてみる
としよう」

——結果、鬼でも蛇でもないよく分からない状況に出くわしたわけ

だが。

「ササキコジロウ様ですね、国王がお待ちです。ご足労願います」
「……国王？」

ヴァーミリオン皇国に到着した小次郎を出迎えたのは、その一声であつた。

まさか……と思いつつ、どこか疲れたような態度の案内人に車へ乗せられた小次郎。

やはりと言うべきか、行く先は……このヴァーミリオン皇国で最も有名と言つて過言ではない建造物。

——すなわち、王城である。

「おお、よう来てくれたのお、先生!! さきつ、早くこちらへ!!」

「いや、それは良いのだが。そなた、もしやヴァーミリオン国王……」
「そんな細かいことは後でええんじゃ!! 今は憎つくきあのクソガキをぶち食らわせるのが大先決!! なあに心配はいらんわ、相手は達人じゃが先生には遠く及ばないとみている!! 楽勝じゃけえのお!!」

まったくもって話を聞かない男であつた。この強引さというか突っ走る気質は娘とそっくりだ。

「……して、シリウス殿。その『ぶちくらわせて』ほしい者というのは、何者なのだ？」

「奴は……奴は……!! ワシの世界一可愛い娘を誑かしよつた希代の不埒者じゃあ!!」

「……なるほど」

だんだんと小次郎にも状況が読めてきた。

くだらない……と、片付けるのは簡単なことだが、シリウスの心情を考えれば、そうもいかない。小次郎には子供など居なかつたが、そ

れでも予想することぐらいは出来る。

無下に切り捨てるのは、少々酷というものだ。

しかし、ここで問題となるのは——小次郎自身が、その希代の不埒者と世界一可愛い娘の仲を祝福していることだ。

「シリウス殿。そなたは、その者を本当に俗物であると思っておられるのか？」

「そんなもん思つとるに決まつとろうが!!」

「では、そなたの娘はどのような者を選ぶ愚か者……というわけだな？」

「そんなわけないじゃろうが!! ステラちゃんはワシに似て直情的でちよつぴり単純でドジっ子ちゃんじゃがそれでも決してお馬鹿では……」

「——ならば、それが答えであろう?」

「うぐっ……!!!」

シリウスはその獅子のような相貌を、苦虫を噛み潰してそれを苦汁と辛酸で喉の奥へ流し込んだかのような顔で唸った。

「……確かに先生の言う通りじゃ。あの小僧はステラちゃんのことを抜きにして考えたなら、前途ある素晴らしい若者と言える。——じやがのう、どんなに理性がそう諭しても父親としての本能がそれを軽々と踏み潰す……」

シリウスは、それが自身のワガママでしかないことを自覚していた。

「だからもうワシは決めた!! 命ある限り邪魔しちやる……!!!」

「それは……なんとまあ」

全くもって呆れた執念であった。

身勝手で、誰一人として幸せにならない選択肢ではあったが……そこには、確かな父性が、愛情がある。

「——よかろう。その依頼、引き受けた」

「おおっ、では……!!」

「無論のこと、但し書きは付けさせてもらうがな」
「へっ?」

「——少年よ、我が名はヴァーミリオン仮面。ヴァーミリオン国王の頼みで参上した、謎の用心棒だ」

その者、友の仮面を纏い獅子王の矢面に立ちて——!!

「何やってるんですか貴方は?」

なお、一輝とステラの瞳は死に絶えていた。

逆にステラの母である王妃アストレアと側仕えのメイドたちはちよつと楽しそうである。何か面白そうなことが始まったぞやんややんや、といった具合だ。

「師匠ですよね?」

「ヴァーミリオン仮面」

「いや師匠——」

「ヴァーミリオン仮面だ!」

「……ヴァーミリオン仮面さんは、どういったご用件で?」

諦めた一輝は、渋々といった様子でヴァーミリオン仮面に尋ねた。

「よくぞ聞いた、少年。お前にはこの場で私と戦ってもらおう」
「なっ……!!?」

一輝にとつては、青天の霹靂と言う他ない。なにせ、相手が一輝の想像通りの人物なら——まあ九割九分九厘間違いないのだが——今の一輝では勝ち目が無い。

否。もし勝利することを条件にしたなら、一輝でなくとも勝てる者は極めて限られてくるだろう。

「……ステラ、これはどういう状況だ?」

「お、なんか面白そうなことになってんなあ」

「なにになにい? また王様がひと騒動おこしたのお?」

現れたのは、ステラの姉である第1皇女ルナアイズと、一輝が城に辿り着くまでの間に妨害を仕掛けてきた伐刀者ブレイザーのうちの二人……ティルミット・グレイシーとミリアリア・レイジーだ。

ティルミットとミリアリアはともかく、ルナアイズは大まかな事情ぐらいいは知っているのだろうが、ヴァーミリオン仮面の登場は予想外だったようだ。

「全く、父上も面倒なことをしてくれる。あんな男どこから連れてきたんだか……」

「面倒なんてもんじやないわよ!!」

「ス、ステラ?」

「なんだって父上とあのゴザル侍が知り合いなのよお!!」

「……あの男、知り合いなのか?」

「知り合いなんてもんじやないわ——アレは、イツキの師匠よ」

「なっ……おい、ちよつと待ってくれ。イツキくんの師匠といえば、お前の話によるとあの《比翼》を負かしたとかいう……!」

しきりに頷くステラに、ルナアイズは呆然としながらヴァーミリオ
ン仮面の方を見た。

「父上の馬鹿に付き合わされた国の者かと思っていたら……なんてこ
とだ……」

「低いハードルだと思ってたのに最後の最後で……お父様ったら……
!!」

これ以上ないほどに無駄な高さを誇る壁が、一輝とステラの前に立
ちはだかっていた。

「ねえ、《比翼》を倒したとか今聞こえたんだけどお？」

「ほっとけよ、ヨタだろヨタ。ま、楽しそうだから見物しようぜ」

……立ちはだかっていた。

眼

降って湧いたヴァーミリオン仮面との決闘。

国王が最後に見せた抵抗は、呆れ返った皇族たちの大方の予測を遙かに上回る凄まじいジョーカーであった。

——目の前に立つ仮面の侍。正体はバレバレであったが、この場では敢えてヴァーミリオン仮面と呼称しておく。

魔力量に関しては下手をすると一輝をも下回るこの男。しかしその身体能力はまさしく超人と言う他なく、生半可な伐刀者^{ブレイザー}ではそれだけで押し切られ兼ねないレベルに達している。

然して、彼の真髄はそこには無く。

もはや理解不能……否、認識不能の領域にある剣技こそが、彼の最大最強にして、唯一の武器であった。

神技などという言葉は、彼を知っていたなら軽々しく口に出来るものではない。ヴァーミリオン仮面こそが、神話の領域にある無二の剣士と言えよう。

(そしてそんな男が、唐突に僕の前に立ちはだかつたわけだけ……)

既に斬り合いは始まっている。実力差はあれど、どちらもが人智を逸した達人級の剣士だ。斬撃の軌跡、飛び散る火花……伐刀者^{ブレイザー}同士の試合としては地味な方だが、それでもギャラリーもそこそこに盛り上がっている。

しかし、果たして何処まで理解できているものか……。

「先生えー!! さっさとそのクソガキぶつ飛ばしてくださいせえ!!」

「確かに速いけど、なんてゆるーか、めったくそに斬り合ってるだけってかんじい? つか王様興奮しすぎ、血管切れるよ?」

「実際すげーし、オレらにはよく見えねえくらいだけどな」

シリウスは長年の経験からある程度察することも出来ているだろ

うが、銃士であるミリアリアには理解が及ばず、経験の足りないティルミットにはシリウス以下の判断しか出来なかった。

「……で、実際どうなんだ、ステラ？」

「相当厳しいわよ……まったく何考えてるのかしら……」

正しく戦況を認識しているのは恐らくステラと。

「いやはや。ホホ、これほどの剣技には初めてお目にかかりますな。少々失礼な物言いかもしれませんが、一輝君が何故なます斬りにならずに済んでいるのか……。どちらにせよ、私には理解の及ばぬ領域です」

ヴァーミリオン皇国剣技指南役たる老剣士ダンダリオンだけだろう。

そして、厳しいと濁したステラより、ダンダリオンの物言いが状況をより酷薄に、より正確に物語っていた。

(でも、希望はある)

ヴァーミリオン仮面は、一輝にこう告げた。——一太刀でも入れることが出来たならば、お前の勝ちで良い、と。

シリウスは非常に不服そうな表情を浮かべていたが、最終的には渋々ながらもヴァーミリオン仮面の言葉を是とした。

一輝自身、一太刀などとふざけるな……という気持ちはある。おそらくは、一輝と同じく本気で最強を目指す者であれば、誰であれ持つてしまはずだ。

しかし同時に、一輝はヴァーミリオン仮面との実力差を知っている。それがどれほど大きな隔たりかは分からないが、現在の自分では一太刀でもギリギリであるというのは理解できた。

“力”を旨とする戦士、あるいは素人には分かりにくい話だが、業

師同士の戦闘とは、僅かな差が戦局に大きく影響するものだ。あと一歩及ばない、あと数ミリ届かない……そんな小さな力量差がどうしようもないほど覆し難いのだ。

それでも創意工夫による逆転の目が無いわけではないが、今回のように師と弟子に値するほどの力量差があれば、結果は言うまでも無い。

などと、本来なら悠長に考えている余裕も無いだろう。

ヴァーミリオン仮面の持つ長刀の切っ先が一輝の喉元に突きつけられる。あわやと言ったところでそれを跳ね上げて事なきを得るが、これが殺し合いなら既に勝負はついていた。

これは余興であり、ゲームであり、単なるお遊びに過ぎない。少なくとも、真剣勝負というわけではない。

だからきつと、今のはちよつとした注意でしかないのだ。余所見をしてないで集中しろ……と、師が弟子にするような、当たり前の諫言。勝負の最中ということを考えたら、*「舐めている」*と言ひ換えてもいい。

(でもこれは、正しい評価だ)

過少でも過大でもない、実力相応の対応だ。これが生死のやり取り……死合であったなら、侮辱にも等しい憤慨ものの行為であっただろうが、この場には相応しい行動だろう。

もつとも目の前の侍なら、敢えてこちらが力を出し切るまで仕留めずにいる可能性は高いのだが、それはまた別の話。

(これが殺し合いでないなら、ゲームだというのなら……)

——勝機はそこにある。

まずどうにかするべきは、間合い。つい先ほど、一輝は喉に切っ先を突きつけられた……それは、物干し竿の槍が如き広大な制空権を一切侵すことが出来ていないという事実を表す。

踏み込みも加味すれば、ヴァーミリオン仮面の間合いはこの数倍に及ぶ広さを誇るだろう。この間合いの内に居座るなら、次の瞬間には何処から斬り付けられていてもおかしくはない。それをさせないだけでも一輝の実力は並外れていると言える。

しかし、このままでは防戦一方。すなわち、敗北は必至。

故に、一步……否、半歩前へ。途端に、幻想形態の霊装が織り成す血光が周囲に舞い散った。

だが、これは予定通り。この半歩は致命傷を避けられるギリギリの距離。斬撃を如何に躲そうとも皮膚を掠め、如何に防ごうとも肉を抉られる。痛みは然程でもないが、幻想形態でも無ければ、遠からず出血により死に至る間合いだ。

王馬がこの勝負を見ていたなら、また苦言の一つも言われそうだ。

しかし、これ以外に勝ち筋が無い。これが、今の自分の精一杯。

この戦いにおける敗北条件は特に指定されていない。どちらにせよ突破出来なければ斬り伏せられ、勝利条件を達成することが出来なくなるからだ。

いくら傷をつけられようとも、ヴァーミリオン仮面の身体に一太刀でも入れられたなら、その時点で勝利なのだ。何処を斬らなければならぬでもない、どの程度のダメージを与えなければならぬとも言われてはいない。

ただ一太刀……それだけだ。

(チャンスは限られる……)

エーデルワイスのようにこの位置に留まり続け、尚且つ膠着状態に持ち込めるほどの技量を、一輝はまだ持ち合わせてはいないのだ。《二刀修羅》、あるいは《一刀羅刹》を用いたなら話は別だが、無策で使うにはあまりにリスクが勝ちすぎる。

如何に幻想形態といえども、このまま傷つけられ続けなければいずれば倒されてしまう。

しかしそれでも、今は耐え忍ぶより他に無い。

(思考……推測……予測……いや、それだけじゃダメだ……！)

座して待つ……わけではない。勝機は、ただ待っているだけで掴めるものではないのだから。

(突破口……何処かにあるはずだ。無いなら作れ……その道筋を。可能性を……！)

「——それでいい。が、まだ足りぬな」

突き放すかのような斬り払いとともに、ヴァーミリオン仮面は口を開いた。

「観るだけでは足りぬ。観通せ。お主が目指すべきはただ一点のみ……そこに全てを乗せるのだ」

それは間違いなく、教授の言葉。

一輝は、彼の真意を読み兼ねていた。ふざけた仮面をつけ、戯れのようなものとはいえ、敵として立ちはだかつておきながら……と。

「婚約の前祝いだと思って聞いておけ。お主なら、今のだけでいずれ答えに行き着くはず……無駄にしてくれるなよ」

……思わず、手が止まりそうになった。

危ういところで持ち直したが、動揺は禁じ得なかった。まさか、あの《魔剣士》からそのような言葉が聞けるとは思ってもみなかったからだ。

(変わっているのは……僕たちだけじゃ無いってことか……)

会ったばかりの頃は、ここまで世話を焼くような男ではなかったは

ず。この変化が彼にとって良いものなのか悪いものなのか……それは定かではない。

だが、一輝にとってみれば。

「そう言われてしまったら、やるしかないじゃないですか……！」

——闘志を揺さぶるには、十分すぎる代物で。

一輝はヴァーミリオン仮面の言葉を改めて反芻。必要ない感覚をカットし、余剰出力全てを思考へと回す。

観る……という行為。その点に関して自分は怠ったことがないという自負があった。教わることの出来なかった自分には、それしか道はなかったのだから。

しかし、それでもなおお不足であると。足りない、彼は言った。それはつまり……。

(まだ、僕の知らない『先』があるということだ)

これ以上ないと言うほど鍛えたはずの『観の目』に、まだ伸び代が残っている……それは、一輝の胸中に望外の喜びをもたらした。

それだけではない。自分ならば——黒鉄一輝ならば、そこに辿り着けると、目の前の男は言ったのだ。

ならば……それならば——応えなくては嘘というもの！

(もっと深く。もっと遠く。もっと広く……広、く?)

全てを見透す……その事のみを重視してきた。それは間違いではないはずだ。何か一つでも見逃したなら、何も持たない自分など瞬きする間に消し炭となる。

伐刀者の闘いブレイザーというのは、そういうものだ。

だから、決して間違いなどではない……が。

(最適解……ではない?)

見切ることには、こだわり過ぎていた。動きを見切るのは何のためだ……勝利のため、自らの強みを押し付けられるためだ。

全てが解らずとも、望む結果に辿り着けるならばそれで良いはずだ。

(僕が観るべきは、ただ一点……)

必要なのはただ一つ。そう、『可能性』は、たった一つでいい。それを見据えたなら、後は成し遂げるだけだ。

(僕が観るべきは他人の思考でも、剣術でもない。——僕の『勝ち筋』のみだ)

それ以外の全てが意味を成さない。意味の無いものは、剪定しなければならぬ。

自らの望む可能性以外の全てを斬り捨て、勝利を掴み取る。

(疑うな……!)

僅かな躊躇いすら許されない。

そもそもが、今の自分には過ぎた領域。天上の位階と呼ぶべきその地点を、一度きりでも手繰り寄せようと言うのなら、心底まで信じ切らなければならない。

(それは僕の十八番だろうっ!)

非才すぎる自分を、それでも決して諦めず。自らの可能性を信じてここまで辿り着いたのが黒鉄一輝という剣士だ。

故に、やれない道理は何処にもない。

己が全存在を賭して、ただ一点を、めざすべきただ一つを凝視める。その視線が目指す先に剣を重ね、重ね、重ね、重ね続ける。

疑わず、ただ一つの可能性を目指し、全霊を込めて剣を振り続ける。

——ただひたすら、*“天”*へ向けて。

「」

観えたのは、ほんの一瞬。

だが、この場はそれで十分。これ以上を望むのは、今の黒鉄一輝にとっては荷が重すぎる。

「何処であれ、一太刀は一太刀。……僕の勝ち、ですよね」

「お主らしい……と言うべきだろうな。確かにこの勝負、お主の勝利と言う他あるまい」

一房、ほんのそれだけ。ヴァーミリオン仮面の長髪が地に落ちる。

「悔しいですけど、いまの僕にはこれが限界。——ですが、ご教授ありがとうございます」

「なに……たまには、先達らしいこともしなくてはな」

言葉は二人の間だけで交わされた。周囲の馬鹿騒ぎも、今の二人には関係ない。

「その境地……至れるかは、お主次第だ」

気づけば、役目を終えたヴァーミリオン仮面は姿を消していた。

ただ、その一言だけを一輝に残して。